

たった一人のマスター  
へ

蟹のふんどし

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人理修復の旅。

先頭を歩むのは容姿端麗、性格美人、行動力の塊、数多の英霊を束ねる藤丸立花。彼女に集うは医師に天才に後輩に。

人との距離感に聡い彼女が唯一コミュニケーションを取れないのは実の弟で…  
弟の為に戦う姉と姉の為に戦う弟のすれ違い話

P i x i v にも投稿。

# 目次

姉弟マスター	1
カウンセリング	13
カウンセリング・カルデア	26
私は知ってます	47
食堂前線(1)	65
食堂前線(2)	92
食堂前線(3)	122
侵入	150
不振	172
戦闘	195
浮上	221

半分の真実	248
召喚	282
再召喚	319
援軍	345
殲滅	365
妄執の夢	391
会合	422
君が知っていたはずの物語	
演習	459
部下	482
予定調和	524
ひび	550
なけなしの	579

電報	614
潜む影	639
不和	663
泥海	695
手遅れ	721
虐殺	755
崩壊の足音	783
絶望の淵	801
死の意味	826
特攻	842
正義の果てで	870
君の知らない物語	896
君の知らない物語(2)	921

君の知らない物語(3)	943
君の知らない物語(4)	979

# 姉弟マスター

物心ついたころから変わらないうちにあるのは姉さんの笑顔だった。

僕より2年早く生まれた姉さん。

姉さんはいっただって何事もそつなくこなして、最後にはとびつきりの笑顔でこう言うのだ。

「ね？なんとかなったでしょ」

姉さんは常に僕の前に立ち、いっただって気丈に進む。

それは僕らを取り巻く環境が変わっても、何も変わらなかった。

僕らを守ってくれる人が居なくなっても、僕らを利用しようとする人が何度現れても。

変わったのはただ僕の気持ちだけだ。

いつからだろうか。

僕を守るその背中が、はるか高くまでそびえ立つ壁に見えるようになってしまったのは。

「小賢しい」

神々しい声音で僕らを見下ろした彼女は、自身の持つ槍を高く掲げた。

「あの光は……！」

聖槍が強烈な光と共に膨大な魔力を感じさせ始めた。

左耳につけたインカムからドクタールの声が響く。

「立花ちゃん！達海くん！魔力反応が不自然に増大してる！何が起こっているんだい！！」

キンキンと耳に響くほどに声に対して、姉さんもまた大きな声で叫ぶ。

「獅子王の持つてる槍が光ってる！魔力も多分そこから！宝具かも……！」

姉さんの声に食い気味にドクターは反応した。

「宝具だつて!? 今打たれたら存在証明が……レオナルド!」

「わかつてるさ! 今やつてる!」

インカムの向こうからもものすごいスピードで機材の入力音が響いてくる。

「まずいぞ、まずいまずいまずい!」

インカムから聞こえる焦った声につられたのか、僕の前で盾を構えているマシユが声を張り上げた。

「ドクター! 何がまずいのか説明して下さい!」

「女神の持つ宝具なんて撃たれたら、周辺の数値変動が大きすぎる! 君たちを見失う!」  
確かに。

あんな物を最大出力で放たれたら観測機器に異常が出ることぐらいは僕でも分かる。

「ネロ! 英雄王!」

姉さんの手の令呪が光り輝く。

どうやら自身のサーヴァントに魔力を譲渡したらしい。

「任せるが良い!」

「業腹だが仕方あるまい!」

二騎のサーヴァントはそれぞれ宝具を起動する。

けど……

「抑えられるのか……？」

劣勢を理解しているのか姉さんも、ローマの皇帝もウルクの王も焦燥を顔に浮かべている。

これがもし抑えきれなければ……

いや、もしを考える意味なんてない。

抑えきれなければ人類が終わる、結果は常に一つだ。

だったら……

「マシユ！」

「はい！」

僕は右手の令呪を起動する。

「令呪をもって命ず。藤丸立花とその二騎のサーヴァントを宝具をもって守れ！」

「先輩……？」

戸惑うマシユを尻目に走り出す。

なけなしでも魔力はあったほうがいいだろう。姉さんとそのサーヴァントさえ守れば勝機はある。

そしてインカムに向けて叫ぶ。



「ドクター！この礼装のガンドは原理上いかなる存在でも通じるって言ってたよね！」  
獅子王の宝具が魔力を放つためなのか暴風が待っていて、インカムが音を拾ってくれ  
るか心配だったがその心配は杞憂なようだ。

僕の質問にドクターは戸惑った声で応じる。

「こんな時に何を…」

「いいから！」

ドクターの言葉に声を被せて確認を乞う。

確かに生死の間際にいるのに礼装がどうのなんて言われたら、そう反応するよなあ。

「そうだよ！その礼装に付与された魔術は根元事象への介入だ！だから英霊どころか神  
にだって防げない！レオナルドにも太鼓判を貰ってる！でもそんなこと…」

ドクターの声には若干の苛立ちがのっけていたが予想通りの答えに安心する。

しかし恐ろしい。神にも有効な術式って。

一体どうやってそんな術式を組み上げたのか。

天才というのはいつだって僕に及びつかないところにいるらしい。

でも良かった。それだけ聞ければ後はどうにかなる。

僕らと共に戦う唯一の円卓の騎士に叫ぶ。

「ベデイヴィエール！一瞬で良い！宝具の余波を相殺してくれ！」

彼の目を見る。

何も聞かずに指示に従ってくれ。

そう目でお願ひする。

「……了解です、達海」

ありがとう。目で分かるのはやはり騎士ゆえか。

ああ、これからやろうとしてることを考えると気が滅入る。

視界の端で捉えた姉さんの顔に驚愕の色が写る。

「何をしてるの！下がりなさい！達海！」

姉の怒声が聞こえる。

彼女の言はおそらく正しいのだろう。実際僕が動いたところでこの状況を防ぎきる  
ことができるかは甚だ疑わしい。

だけれどもだからっていつも盾の後ろに立たされる僕の気持ちを分かってない。

そりや危険だろうけど、だからといって僕に何もさせないのは傲慢じゃないのか？

下がるも何もここで踏ん張らなきや僕らの旅は終わりじゃないか。

姉の声を聞いた途端、鈍かった足取りは怒りの燃焼とともに走り出した。

姉の声に何の反応もせず、右腕を構え、獅子王に向ける。

かの王は近づくと僕に見向きもしない。

確かに蟻が近づいた時に一々反応する人間はいないか。

でもよ、その蟻が持っている毒は天才仕込みなんだぜ。

僕は右手で獅子王を見据えながら、高らかに叫んだ。

「ガンドツ!!?」

§

「達海! あんたどういいうつもりよっ!」

カルデアに戻ってきた僕に真っ先に突っかかってきたのはやはり姉だった。

予想はしていたが首元を掴むのはやめて欲しい。

「何が?」

襟を掴まれて、壁にぶつけられれば怒りぐらいは湧いてくる。

ポンコツにだって感情があるんだって事を姉は無視しすぎなのだ。

「分かっているでしょ！あんたがあんなことしなかつたって勝てたわよっ！」

「勝てた？どうみても姉さんのサーヴァントより奴の宝具の発動の方が早かつたじゃないか。誰かが奴を足止めしなかつたら、僕らは負けていたよ」

結局僕が放ったガンドは獅子王の動きを封じることが成功した。

奴が怯んでいる間に、姉の2騎のサーヴァントが宝具で仕留めた。

完璧には程遠いが、勝ちも勝ちだ。

まあ、2騎の宝具の余波で右腕が折れて、右半身がすごい火傷を負ってるんだけど。

主戦力である姉さえ無事ならば勝利条件は満たすのだ。ならこれは誤差だ。

めっちゃ痛いけど。

「負けていた？マシユの宝具があれば獅子王の宝具を防ぐことはできたでしょ！！？」

「いいや。彼女の宝具を持ってしてもロンゴミニアドは防ぎきれなかった。姉さんのサーヴァントを負傷させたらそれこそこっちの勝機はゼロだ。」

ドクターがあとここまで慌てるぐらいの魔力規模だ。デミサーヴァントの宝具で防ぎきれぬわけ無い。

「僕の行動はあの時可能な最善策だった筈だ。事実、僕らはこうして特異点の修正に成功した」

サーヴァントを一騎も失なわず、聖杯も回収した。

これ以上は望むべくもないだろう。

「そのぎまで最善策ですつて？ 全く笑えないわ」

しつこいな。

「何が言いたいんだよ」

姉さんはめんどくさそうな顔をする僕を睨むと、襟を掴んで僕の顔を引き寄せ、凄んだ声を出した。

「役割を考えろつていつてんのよ。あんたはマシユのマスターでしょ？ だったら敵に突つ込む事じゃなくてマシユのサポートがあんたのやるべき事でしょうがッ！」

「あ？」

言うに事欠いて僕がマスターだつて？

召喚に失敗して、使い物にならなくて、ただのお情けで契約してもらつただけの僕を彼女のマスターだつて？

「悪かったね。英霊にサポートしてもらわないとマスターもまともに務まらないポンコツ魔術師で」

いくら僕がポンコツでも、これくらい嫌味ぐらい許されるだろう。

僕の嫌味を聞いた姉さんはなにかを言い返したそうだったが口を開く前に言ってや

る。

「だけど、僕が動かなきゃ獅子王に宝具を撃たれていたことも、宝具を食らったら勝機が遠のいたであろう事も確実だった。役割を考えろっていつてたよね？できてないのは姉さんの方じゃないのか？」

僕の言葉を聞いて姉さんの目の端が釣り上がる。

「何ですって？」

「僕らは最後のマスターなんだよ。人類史最後の。その役割を全く分かっていない」

「分かっているからこそ無駄なリスクを踏むなっていうてるんじゃないの！」

「いいや。ああなったらリスクを踏んでも宝具を止めなきゃ僕らは負けていたかもしれない。」

「だから何よ！死んだら元も子もないでしょ！？」

「一度負けたら全てが終わる。特異点の修正は全てが初めからラストチャンスだ。僕らが一度でも敗北したらその時点で人類が終わるんだよ。勝たなきゃ意味がないんだよッ！」

僕の襟を掴む姉さんの手を振り払い、言ってやった。

姉さんを睨みつけたその時、保管室の扉が開いた。

「はいはい、二人ともそこまで！帰ってきたらまずバイタルチェックって言ったよね！！」

保管室に入ってきたのはドクターだった。

怒りを叩きつけようとした瞬間に止められて、僕はどうにも消化不良になる。

ドクターめ、ドアの前でタイミングを測ってたな。

「帰還後にコフィンで目覚めたら真っ先に医務室にきてって言ったじゃないか」

ドクターが呆れ顔で僕らを見る。

と思ったら僕を見て目を丸くした。

ん？

「達海くん！ひどい怪我じゃないかッ！報告と全然違うよ！」

あれ？少し怪我したってちゃんと聞いたけど…

「いや怪我をしたって言ったじゃないですか」

「そういう怪我は大怪我って言うんだ！もうなんだって君はそうやっていつも…」

ドクターが額を手で押さえながらため息をこぼす。

いつも下手打ってばかりで申し訳ない。

「達海くんは僕と一緒に治療室に来てくれ。立花ちゃんは医務室のスタッフにバイタル

チェックをしてもらって」

僕の手首を掴んで引っ張るドクター。

いや、別に逃げたりしないんですが……

部屋を出る際にふと振り返って見たのは姉さんの悲しそうな顔だった。



## カウンセリング

「シャルロットさ〜ん。またやつちやつたよ〜」

「ちよつと！治療中だから動かないの」

医務室で帰ってきた藤丸立花ちゃんの手当てをしていると半ベそで私に泣きついてきた。

「ごめんなさい」

頭を垂れてしゆんとする立花ちゃん。

はあ、と溜息が出てしまう。

「また弟くんと喧嘩したの？」

彼女の頭を撫でながら問いかける。

彼女は私の胸に顔を沈めながらくぐもった声でうんと返してきた。

あ、ちよつと、鼻水をかむならティッシュをつかいなさい。

鼻水をたらす彼女にちり紙を渡し、擦り傷を消毒する。

「詳しく話してみなさいよ」

「…」

「ほら」

「実は……」

カルデアの姉弟マスターの仲が悪いのは今に始まったことじゃない。

常に明るく前向き、成績も良く、人と関わることに積極的な姉、藤丸立花。

レイシフト適正が100%、数々の英霊を召喚し、適正な指示を下すことで戦局を変え、えるエース。加えて私たち職員に英霊、誰とでも円滑な人間関係を築く外交屋。

かたや暗く後ろ向き、成績は並、人と関わることに消極的な弟、藤丸達海。

レイシフト適正は芳しくなく、英霊を呼び出すことも出来ない。人手不足の為、デミスーヴァントであるマッシュと契約し、常に姉の援護として立ち回る補佐役。人間関係が悪い訳ではないが姉へのコンプレックスか、自虐的な言動が多いきらいがある。

まあ、これで仲良くやれっていうのも難しい。

姉という立場上、弟である達海くんに強く当たってしまうのは当然であるし、戦績を立てられない達海くんが立花ちゃんに対し劣等感を抱いてしまうのも人として当然であると言える。

「強く言いすぎたかも…。」

立花ちゃんは私が渡したちり紙で鼻をかみ、鼻をすすりながら呟く。

「でもきみは弟くんを心配していつているんでしょう？ならいいじゃない」

「それはそうなんですけど…」

机に肘を立てながら呆れ気味に溜息をはく。

そもそも弟である達海くんはカルデアに呼ばれるはずではなかった人材だ。レイシフト適正はとびつきり高いわけでもなく、英霊も呼べない。加えて魔術も素人に毛が生えた程度。

このレベルでスカウトされるなら私でもカルデアのマスター候補になれるのではないだろうか？

そんな達海くんをカルデアに呼んだのは、ひとえに姉である立花ちゃんが「弟を同行させるのがマスター候補になる条件」といったからだ。

レイシフト適正が異例な数値を叩き出した彼女は一般人であろうと無視するわけにはいかなかった。

当時のトップと二倍差だ。

いくら魔術がからつきしの素人でも手に入れておきたい人材だった。

だからオルガマリー所長もその条件を飲んだのだろう。

おかげでマスターの大半を失った私たちでも、彼女を軸に特異点修復を何とか行えているのだから所長様様である。

今は亡き所長へ、合掌。

「でも達海とはちゃんと話したいんですよ」

「とはいってもあの状態じゃあねえ」

正直なところ、私には弟くんが何もできなくて拗ねてるようにしか感じられない。姉である彼女が世界を背負って戦っているのにあの態度ではまだまだ甘いお子様だと感じざるを得ない。

確かにまだ10代の子供だが、お姉さんの立花ちゃんがここまでしっかりしているのだから見習ってほしいものである。

「ほっときなさいよ。一々構ってたら、どんどん甘えるわよ、あういうのは」

わかってはいるんですけどねと言いなながら立花ちゃんは頭をかく。

「それでも唯一の家族ですよ。」

家族と言う時、なぜか彼女の面持ちはいつも悲痛に満ちている。

「……今はそうでしょうけど、取り戻す為に私たちは戦ってるんですよ」

私の言葉を聞くと彼女は悲しそうに笑った。

「あんまり詳しく言ったことなかったんですけど、人理が戻っても私の家族は達海だけなんですよ」

「え？」

私は包帯を巻く手を止めた。

「少し長くなるんですけど、いいですか？」

「え、ええ」

そういえば長いこと交友しているのに彼女の身の上話はあまり聞いたことがない。

「私達の両親って魔術師だった、らしいんですよ」

魔術師？

「でもあなた一般枠だったじゃない。魔術も全く知らなかったし。」

いやーと彼女は笑う。

「私、男じゃないからって家督を譲られないどころか、魔術のまの字も教えてもらえなかったんです。そもそも両親が魔術師だったって知ったのも最近ですし」

「あー、なるほど」

前時代的だが魔術の世界ではままだことだ。

最近まで両親の素性を知らなかったのは彼女の大らかさ故な気もするが。

「だからあまり詳しくないんですけど、私たちの両親はどうも時計塔の皆さんの颯感を買っていたようなんですよね。」

「時計塔の？」

「ええ。1代の成り上がりだったらしいので色々な所で嫌がらせを受けていたらしいです。それでも研究が上手くいつてなにかの勲章？だったかな？を貰えるってことになつたらいいんですよ。」

「すごいじゃない。勲章っていうと開位かしら。優秀なご両親だったのね」

開位は一代で進める最高階級と言われるほどであるから、彼女の両親はよほど優秀だったのだろう。

「ありがとうございますと笑いながら続けた言葉に私は固まった。」

「授与の前日、両親揃って亡くなりました」

笑いながら彼女は言う。その瞳には暗い何かが混じっていた。

「飛行機が落ちたんですよ。イギリス行きのが。前のりしようとした2人が乗っていたんですよね。」

「それは…」

「事故、って言われたんですよ。私も全く疑ってませんでした。現実感なくニュース見て、電話が来て、遺体がきて、マスコミが来て、葬儀になつて。」

悲しそうにそれでいて笑みは保ちながら彼女は言う。

「でお墓をまえに途方に暮れていたら、ふと達海がやつれているのに気がついたんです」  
「弟くんもシヨックだったんでしようね……」

両親をなくしたのだ。当たり前だ。

「私もそう思っていたんですが日に日にやつれていくので怖くなって、達海までいなくなるんじゃないかって不安になって眠れなくなりました。」

彼女は強く手を握りしめていた。

「その日でしたね。夜中に物音がするので外に出てみたら血だらけの達海がいて、慌てました。なにか事件に巻き込まれたんじゃないかって。聞いただけでも何も教えてくれなくて、転んだの一点張りでした。」

私は苦笑した。

「言い訳が雑ね」

「ホントですよ。転んであんななるかって話です」

でも両親が亡くなって、弟くんが血だらけ、それはおそろく……

「ええ、御察しの通りです。研究引き継いだ達海を始末しに来たんです」

まあ、そうなるわよね。

「あいつの部屋に父の遺書があつてそれで知りました。あ、血濡れで帰ってきた次の日

にあいつの部屋に扉壊して入ったんですよ。」

「扉壊したって、あなた」

今は反省してますと悪気のない顔で舌を出す立花ちゃん。

「それで両親が暗殺されていたことも、達海がそれを引き継いだことも、そのせいで毎晩襲われていることも、全部知りました。人知れず私を守ってくれてたことも」

「あなたが無事だったってことはそう言うことよね」

最初は魔術があるってこと自体受け入れるのに苦労しましたが、といいながらちよつと嬉しそうに彼女は笑った。だけれどもその笑顔はすぐに曇った。

「知って、焦りました。達海が魔術の世界でどの程度実力を持っているかは分からなかったんですけど、あの調子じゃ、父と母の後を追うのも時間の問題だと思って。それで魔術に関係ありそうな団体に片っ端から連絡していったんです。父の手帳とか、母のメモとか疑わしい連絡先はかけまくりました。カルデアに出会ったのはその時です」

「呆れた。よく詐欺に引つかからなかったわね。」

「運だけは良いんですよ。私」

へへへと笑う彼女。何かの間違い詐欺に引つかかって彼女がここに来なかったと思うとゾツとする。



「両親が先代の所長と見識があったみたいで、事情を伝えたら魔術的な素養があったらスカウトしても良いって話になったんですよ。」

「よく話を通じたわね。」

アニムスファイア家の先代は確かに情を解せる人間ではあったが、それ以前に魔術師だった。利益なく動く人間には思えない。

「母にレイシフト適正があつたそうなんです。マスターの話は自分の研究に集中していたって母が断つたみたいなんですが」

「あー、なるほどねえ」

たしかに魔術的な素養は遺伝しやすいので調べる価値はある。ダイヤの原石が自ら懐に飛び込んでくるなら儲け物だ。

「ん？でもだつたら弟くんが先に連絡を受けてたんじゃない？」

言い方は悪いが利用価値がありそうな人間が親を亡くして無防備になっているなら、身の安全と引き換えに引き取りそうなものだが。実際そう言う人種が魔術師であろう。

私の言葉に彼女は苦笑い。

「まさしくその通りなんです。けどご存知の通り、達海にはレイシフトの適正があまりなかったので断られたらしいです。そうとは知らず、テストで見事、好成績を叩き出した私は自分と弟の後ろ盾になってくれることを条件にここへと来たわけです。」

彼女の言に罪悪感と言いつらさが混じっている事を感じていたので続きを引き継いだあげた。

「なるほどね。じゃあ後ろ盾を得たと同時に弟くんのプライドもズタズタに引き裂いちやっただけじゃあ」

またまた彼女は苦笑い。

「ええ。父の遺志を継いで何とか私を巻き込まないよう守っていたら、まさか私に守られるようになるなんて夢にも思わなかったでしょうね。加えて自分にはない才能で偉いさんに認められて、とまで来たらもうズタボロです」

また悲しそうに立花ちゃんは笑った。

確かにその通りかも知れない。何も知らない弟子が知らないところで世間に認められて、自分にはない才能を持つてましたなんて聞いたら、私もプライドが傷つくし、嫉妬してしまうかも知れない。

でも…

「それでも家族じゃない。家族を守ろうと必死になつて何が悪いのよ。確かにご両親が亡くなつてからあんたを守り続けたのは弟くんだし、そこには斟酌が必要だったのかも知れない。けれども結局守りきれなかった。だから立花ちゃんが助けた。家族で支えあつただけじゃないの」

私の暴言ともとれる言葉を書いて立花ちゃんが目を丸くした。

「確かにそうなんですが…」

彼女の肩を軽く叩く。

「あなたは胸を張って良いのよ。結局あなたと弟くん二人を助けたのはあなた自身なんだから」

「あ、ありがとうございます」

結果論ではあるが彼女ら二人を救ったのだからもう少し誇ってもいいだろう。少なくともその事を気に病むのは家族を死に物狂いで救おうとした報酬というにはあまりに酷だ。

「全く、男はこれだから面倒くさいのよ。プライドに生きてるって言うか、なんとというか。」

本当に面倒だわ。結局他人でも家族でも男のプライドって変わらないのね。

「それは、確かにそうかもですね…」

ん？というか…

「今思えば弟くん何にも変わってないじゃない。一人で突っ走って、怪我して、周りに助けられて…一度プライドを粉々に砕いてやったほうがいいんじゃない？」

目をそらす立花ちゃん。

「達海も達海なりに人理修復に貢献しようとは頑張っているんですよ。いつも今日みたいになっちゃうんですけど。それを見てるとですね、つつい」

てへへと立花ちゃんは笑う。

私は何度目かのため息を吐く。

「犠牲なき献身こそが最大の奉仕」

「へ？」

「ナイチンゲール女史が仰った言葉よ。自己犠牲を続けてるようじゃ、誰のためにもならないのよ。自己満足で終わってるってビシッと言ってやりなさい」

彼女の顔を両手で挟む。

彼女がびっくりして目を見開く。

「あの、シャルロットさん…」

「ん？」

「ナイチンゲールさんなら後ろに…」

え？ちよつと待って私今いいこと言ってたよね。流れ変わっちゃやうじゃない。

「ミス・ミハエル」

「はい！」

後ろの冷え冷えとした声に直立不動になる。

ちなみに私の本名はシャルロット・ミハエル。カルデア医療部門所属です。

「患者の治療を放置して、世間話とはなにごとですか」

冷や汗が額に一筋流れる。

「い、いえ。これはですね」

「あなたにはどうやら救急処置の重要性を説く必要がありそうですね」

私の肩をナイチンゲール女史の手が、獲物引き込むかのごとく掴む。

はわわ。

流石に見かねたのか、苦笑いしながら立花ちゃんが助けてくれる。

「あのー、ナイチンゲールさん。シャルロットさんは私のカウンセリング？みたいなことをしてくれていたのので勘弁してあげてください」

「ほう」

立花ちゃん、ナイスフォロー！

親指をぐつと立てる。

「なるほど。ではあなたには臨床心理学を教えて差し上げます。こちらに来なさい」  
うそやん。

## カウンセリング・カルデア

「ふう、これで大丈夫だ」

ドクター・ロマンがほっと息を吐き出した。

その姿に僕も少し安堵の息をこぼした。

レイシフトからの帰還後、怪我を負った僕はドクターから治療を受けていた。

右腕は添え木で固定されて包帯が巻かれ、右半身の火傷の重傷部分に貼り薬をはってある。

見た目がえらく物々しい。

怪我を負った時はあんまり気にならないんだけど、こうやって冷静になると怖くなってくるんだよね、いつものことながら。

「それでは私はマスターのバイタルチェックを手伝ってきますので」

「助かりました。ミス・ナイチンゲール」

「礼には及びません。重傷の患者から治療するのは当たり前のことです。」

僕の治療の手伝いを終えるとナイチンゲールさんはすぐに治療室を出て行った。

優先順位を決めて、すぐ動く。

誰もがやっている事だけれど彼女は速度が尋常じゃない。常にやるべき事を見据えているのだらう。

僕は彼女が仕事をしていない瞬間を見たことがない。

自分ではない誰かの為に動き続けることができる。これは一種の狂気ではなからうか。

「ふう。彼女は優秀だけど、周りの空気が常に張り詰めるのは如何ともしがたいね」

治療器具をしまいながらドクターは苦笑気味に話す。

「優秀な人間は周りにも同じだけの才能を期待してしまう、というやつなんですかね？」  
僕の言葉を聞いて、ドクターは顎に手を当てて少し考えた。

「うーん、彼女の場合は環境によるところが大きかったんじゃないかな。生前は看護師として医療現場で働いていたわけだから。特に戦場で医療に従事していたら時間も人手も足りないだらうからね」

布に薬、ハサミなどをテキパキとしまいながらドクターは言う。

「怪我人は多く、人も物資も足りない中、人命がかかっているからミスも許されない。そんな環境にいれば、誰だつてあんならざるを得ないと思うよ。それに耐えられる人間は誰でも、とはならないだらうけどね」

僕は自分が動き続けなければ目の前で人間が死に続ける状況を想像した。

「…僕には耐えられそうにないです。」

その場は乗り切れても後から心が壊れる気がする。

「誰だつてそうさ。だから彼女は偉人と呼ばれているんだと思うよ」

器具しまい終わるとドクターは流しに向かつていった。

「達海くん、コーヒー飲むかい？インスタントだけど」

「あ、はい。頂きます。」

「了解」

カップに粉末を入れて、ポットからお湯を注ぐとドクターは「はいこれ」と渡してくれた。

猫舌なので息を吹きかけて湯気の出るコーヒーを冷ます。

「まあ、ミス・ナイチンゲールが現場で働いた期間自体は2年ぐらいらしいから、彼女の生来の気質って可能性もあるけどね」

彼はカップを持ちながらデスクに軽く腰掛ける。

「確かに、ピシつとしてないナイチンゲールさんって想像つきませんね。」

雰囲気がふんわりしているナイチンゲールさんを想像したら、いつのまにかマリー・アントワネットに人物が変わってしまう。

あんまりにイメージが固まっている彼女のアイデンティティについて笑みがこぼれる。



「何とかナイチンゲールさんはきつちりしすぎです」

ドクターはコーヒーを飲みながら同意する。

「確かに彼女は他人にも自分にも厳しいよね」

僕も貰ったコーヒーに口をつける。

「でも彼女は誰に対しても真摯に向かい合っているよ。それが自分の中の感情であつてもね」

僕は顔を上げた。

彼の言葉の中にはくすぶっている僕に対して、遠回しに何かを言っているように聞こえたのだ。

「ごめん、ごめん。僕が悪かったからそんなに睨まないでくれよ」

彼が破顔した。

僕もハツとして顔を緩めた。

いつのまにか彼を睨んでいたようだった。

「お説教をするつもりじゃないんだ。今見る限りじゃ無意識にとはいえ、自覚しているようだから」

「それは僕の今日の行動について言っているんですか？」

自然と体を固くする。

「それもある。だけどそれ以外の事もだ。例えば君のお姉さんに対する態度とか」

「それは：：問題がない、とは断言出来ませんが、特異点の修正には何ら関係がない事だと思えます」

反射的に口から形式的な言葉が出てくる。

分かっているが他人にそれを触れられるとどうにも嫌なのだ。

ささくれのように厄介で、だけれど消えてくれない問題なのだ。

「関係ないとも言えない」

僕の願いも虚しく、ドクターは放っておいてくれないようだった。

彼は軽く息を吐くとコーヒーをデスクに置いて僕に向き直る。

「例えば今日、君がガンドを敵に放ってくれなければ僕はサーヴァントを何基ばかりか失っていたかもしれない。それが綻びとなつて僕らの旅が失敗に終わっている可能性もあった」

でもその可能性は僕が阻止したものだ。

「でもっ！」

「そう。君のおかげで危険は回避されて、僕らは無事今回の特異点を修復することができた。でもそれはただの結果論なんだよ」

「結果論：：」

「うん、結果論。一歩間違えれば君はあそこで宝具に巻き込まれて命を失っていたかもしれない。下手すれば敵を足止めする事も叶わず、君だけが犬死ということすらあり得たわけだ」

ドクターの顔にはいつも浮かべている頼りなさげな笑顔はどこにもなかった。

「君はお姉さんさえいれば特異点の修正は可能だつて思っているかもしれないけど、そうじゃないんだよ。お姉さんが持つている力は君がいて、君に支えてもらつて初めて成り立つんだ」

「…」

「お姉さんが戦おうとしている理由は何だろうか？世界のため？人類のため？確かにそれも含まれるかもしれない。でも一番は身近な、守りたい家族の為に戦っているんじゃないかい？」

「それは…」

「君も分かっているんだろう？だったら君自身が何で戦っているかにもちゃんと目を向けてあげないと」

彼は座っている僕の視線に合わせて腰を落とす。

「自分に嘘をつき続けると、いつか自分自身を見失ってしまうよ」

僕が戦う理由。そんなもの無理やりここに連れてこられて、人理が消えて、しょうが

なくやっているだけだ。

人がいないから、仕方なくマスターをやっているだけで他に理由なんてない。

元々ここに来るのは僕の意味ではないのだから、そこに理由なんて存在するはずもない。そのはずだ。

手元のコーヒーを無理やり喉に流し込む。

「……姉さんが僕の為にというなら、姉さんの動機にはなり続けます。でも僕に戦う理由なんてありません。コーヒーありがとうございました」

言うや否や僕は席を立ち、治療室を後にした。早くこの空間から逃げ出したかった。

## S

廊下の方へ達海くんの足音が去っていく。

僕はため息をついてデスクの前の椅子に座った。

「難しいなあ」

何事も思い描いた通りにはならないもんだ。

黄昏そうになったとき、ノックする音が聞こえた。

「はい、今開けるよー」

治療室は重症の怪我人に対する外科手術も施せるような作りになっていて、扉には内側からロックがかけられる。僕が今いる部屋は簡易治療室。奥には本格的な手術や魔術による治療ができる高度治療室がある。そこにもさらに鍵がかけられる。

僕は扉の横のパネルに手を置いて鍵を開ける。

「やあ、ロマニ」

「なんだ、レオナルドか」

万能人の姿を見て僕はため息を吐く。

「なんだとは失礼な。こんな美人を目の前にため息を吐く男がいるかい？もっとモジモジしたまえよ」

「モジモジって。君、男じゃないか」

僕は男性に性的欲求は持たない人間なんだ。

まあ、人間っていうには僕は少しばかり未熟かもしれないけど。

「ノン、体を見たまえよ。美しい女性だろう」

「僕が言っているのは心の問題だよ。どうか近い、近いよ、レオナルド」

後頭部を手で押さええないでくれないか。怖いから。

「愛に性別は関係ないのさ」

顔を近づけないでくれ！

あ、ちよ、ま、アツーーーーー！！

「というのは冗談として」

舌を軽く出してウイंकするダヴィンチちゃん。

「怖いから、ほんと、こういうのやめて」

レオナルドには本気でやりかねない恐ろしさがあるから困る。

「どうだったんだい達海くんは……ってその様子を見る限りじゃ、あまり上手くないかなかったみたいだね」

「ははは…… やっぱ難しいね、年頃の子は」

「おじさんみたいなこと言うなよ」

「年齢的には僕も十分おじさんさ」

「年は数えるものじゃない。重ねるものだけ。君が積み重ねてきたものを思えば、人間関係ではまだまだ子供さ。少なくとも私から見たらね」

やはりこの万能人には敵わない。本当の天才ってのは本質を見抜く目が備わっているらしい。

「僕が息子や娘たちともつと触れ合えていたら、こんな気持ちになったんだろうか」

「むす、ぶっ！」

僕のつぶやきを聞いてレオナルドはお腹を抱えて大爆笑した。

ひどいなあ。

「そこまで笑うことはないだろう」

レオナルドは涙を拭い、つつかえながら返事を返した。

「い、いや、ごめん、ごめん。こんなときに父親面かと思うと面白くなっちゃってね」

父親面って…

まあ僕は子供達に父親らしいことはできなかつたけど。

不甲斐なさが顔に出してしまったのか、レオナルドは思いつきり背中を叩いてきた。

「痛っ」

まだ残ってる笑い涙をぬぐいつつ彼女は言う。

「そんな顔するなよ。為政者の業つてやつだ。君が昔、父親らしいことができなかったのは君のせいじゃない。」

そして彼女は腕を僕の肩にかけて笑った。

「年は積み重ねるものつて言つたろ。今から積み重ねればいい。何事も始めるのに遅いなんてことはないさ。あの姉弟のためにできることが父の役だとするなら、昔できなかった父を今から始めればいい」

彼女の美しい笑いには何事にも異才を持つて結果を出してきた凄みがあった。

「レオナルド……」

「父親の気持ちが分かったロマニ君。今ならダビデとも一杯酒を酌み交わすなんて事も……」

「それはない」

それだけは未来永劫ありえないだろう。うん。

## §

カルデア地下3階、発電室の隣にある空き部屋。元は冷却水のタンクを取り付ける予定だったらしい。ここがカルデアという事もあり、魔術による冷却で間に合った結果できた空白地帯。

ドクターに治療してもらい、逃げるようにして部屋を出た後ここへ来た。

一人になりたかったが、自室にこもると自分が逃げてることが妙に頭をよぎりそうでした。怖かった。

そういう時、ここは都合が良かった。



自分で持ってきた簡易イスに座り、ドクターの言っていた言葉を反芻する。  
「自分自身に嘘をつくな、つていわれても」

僕はいったい何に嘘をついているんだろうか。

ドクターは姉さんは僕の為に戦っていると言った。  
どうだろうか。

姉さんが僕の為に戦う理由なんてあるのだろうか。

僕は一体なんのために戦っているんだろうか？

姉さんのことを考えると頭が色んな感情にまみれてごちゃごちゃするのだ。まったく考えがまとまらない。

目を閉じて考えていると予想外の声が聞こえてきた。

「やっぱりここにいらつしやっただね、先輩」

「あれ？キリエライトさん」

振り向くとなぜかいつも僕を先輩と呼称する旅仲間がいた。

「えっと、何かありましたか？というか何でここが分かったんですか？」

部屋に入ってくるまで気づかなかったものだから、混乱して質問を2回もしてしまった。

僕の質問にキリエライトさんは微笑んで、腕に抱えてる子を見せてくれた。

「フオウさんが教えてくれました」

彼女の腕に抱かれたまま「フオウ」となく小動物。

「フオウくん…」

あの小動物はカルデアで変な気を使わずに僕に接してくれる数少ない存在で、僕が引け目を感じず接することが出来る唯一の存在でもあった。

たまに隠れてここで一緒にご飯を食べたりしていたから、覚えたのかな。

フオウくんはキリエライトさんの腕から降りると、テツテツと音がなりそうな歩きで僕の足元まで来てから膝に飛び乗った。

そこで少しごそごそしてから、丸くなった。

「えーっと」

「フオウさんは先輩のお膝がお気に入りに入り場所なんですわね」

ここに居る時に何度もお腹に乘ろうとしてくるから、ふざけて膝で挟んだらそのまま居座るようになってしまったのだ。

って今はそうではなくて。

「それでキリエライトさんは？」

僕が彼女に視線を戻すとさっと逸らされてしまった。

カルデアに来てから大抵の職員は不出来な弟を腫れ物を扱いしてくるのでこういう

のは慣れているのだが…

「えっと…」

彼女は目を合わせてくれていたのだ。

それが最近急によそよそしくなってしまった。

唯一のサーヴァントにまで腫れ物扱いされるのは少し悲しい。人に嫌われ始める最初はやはり慣れない。

「あ、いえ、違うんです！急に目を合わせてしまうとびっくりしてしまうと言いますが、恥ずかしいといえますか…」

顔に出ているのだろうか。

彼女が気を使ってくれた。

まあでも、いつかはこうなることがわかっていたから彼女とも一定の距離を保っていたのだ。必要以上に悲しむ事もない。

彼女は短めの深呼吸をしてから目を開いた。

「先輩にお見舞いと謝罪がしたくてバイタルチェックが終わってすぐ治療室に向かったのですがドクターが先輩はもう帰ったと言っていたので、先輩の部屋を訪ねたんです。それでノックしたらですね、中からフォウさんが…」

「ちよ、ちよっと待って」

気になる言葉が聞こえたが、あまりに早く喋るので少し落ち着いてもらいたかった。僕の静止を受けて、キリエライトさんが手で口を押さえて少し赤くなる。

「あ、すいません。ちよつと今緊張しててですね」

「いや、ごめん。こつちも話遮つちやつて」

「い、いえ。大丈夫です」

「その、とりあえず座ったら?」

僕は膝の上で眠り始めたフオウくんを掲げあげて座っていた席を立ち、彼女に勧めた。

「いえー先輩がお使い下さい!」

彼女は大仰に手を振って辞退した。

いや、女の子を立たせたまま、座つて話を続けるなんて姉さんに知られたら間違ひなく殴られる。

「使つてくれないと僕が死んじゃうんだよ…」

「そ、そうですね」

僕の一言で彼女も察したようだった。

と思つたらパツと顔を上げて謎の提案をしてきた。

「だったら先輩と私、2人で座つたらどうでしょう☒これなら先輩は死にませんし、私も

座れますし、ええつと、それに先輩と…」

目を回しながらアワアワしているキリエライトさん。

そんなに困ってるなら僕に気を使ってくれなくてもいいんだけどなあ。

「椅子は一つなんだけれど、どうやって？」

「椅子を半分ずつ使えばできるのではないのでしょうか」

無理しなくても2人とも立って話せばいいのではないだろうか。

「椅子はたたむから立って話せば…」

キリエライトさんは顔を近づけてきた。

「背もたれっ！ないですし！背を合わせれば座れます！ほら！座りましょう！」

「あ、うん」

すごい形相だ。そんなに座りたかったのか、彼女は。

彼女の剣幕に流されて、キリエライトさんと背を合わせるように僕も座ってしまった。  
た。

これ、どういう状況？

あ、フオウくん。

フオウくんは僕の腕から這い上がると、膝の上にポンスと着地し、また寝てしまった。

君はマイペースだね。

まあいつか。

「キリエライトさん？」

「は、はい！なんでしょうかつ！」

僕の手握ってるんだけど、気づいてないのだろうか。それとも何かあつたらすぐに無力化するようだろうか。まあいいや。

気を使ってくれてる彼女にこれ以上恥をかかせるのも心苦しい。

指摘しないでおこう。

「これは事故です、そう事故なんですだから故意によるものではなくて」

小声で何か呟いてるキリエライトさんに話しかける。

「キリエライトさん」

「はいっ！」

彼女がピンツと背を張って、僕の背に少しぶつかる。

「さっきお見舞いと謝罪って言ってたけど」

「そ、そうでした」

彼女は軽く息を吐いてから、力を抜いたようだった。軽く背を曲げたからか、僕の背に軽く彼女の背が当たった。

「先輩、お体は大丈夫ですか？ロンゴミニアドの余波でお怪我をなさったので」

僕がガンドを放ったのは獅子王が宝具を放つ寸前だった。だから発動直前の魔力放出に巻き込まれて、右半身が焼けた。

さらに体を飛ばされたのに受け身をとれず、右手を骨折した。振り返ってみると情けないほどボロボロだ。

「あー、うん。大丈夫。ドクターとナイチンゲールがすぐ手当してくれただけだから後遺症はほとんどないって。右腕の火傷痕は残るかもって言ってたけど、まあこの怪我でそれだけなら不幸中の幸いだよ」

「そう、ですか」

彼女の表情に影が落ちた。

責任感の強い彼女のことだから、少し責任みたいなのを感じているのかもしれない。

うーん、そんなもの感じなくてもいいんだけど。

彼女の暗さを飛ばそうと赤い声で話しかける。

「そんなことより、さっき言ってた謝罪って？ 今回のレイシフト、終始迷惑かけっぱなしだったのは僕で、キリエライトさんに謝られることなんて思いつかないんだ」

砂漠でスフィックスに食べられそうになったりとか、円卓の一人を後ろからフライパンで殴ってしまったりとたくさんやらかして、その度に彼女にフォローして貰って

た。

「いい、いえ、そんなことは」

僕の言葉に彼女は首を横に振った。

「今回も先輩には、スフィンクスから庇っていただいたり、ロクデナシにお灸を据えていただいたりと私こそお世話になりました。それなのに最終的に私は先輩をお守りできなくて。だから先輩に申し訳なくて…」

キリエライトさんの手が僕の手を少し強く握った

やっぱり彼女は責任感が強すぎる。

「それはキリエライトさんが気に病むことじゃない」

僕は彼女の手を軽く握り返す。

「そもそも最後に宝具を使って姉さんを守って貰ったのは僕の令呪のせいなわけで、今回の怪我は自業自得。完全に責任は僕にある。自分を責めるのは間違いだよ」

「それでも… 私は先輩のサーヴァントなんです。どんな状況であつても先輩をお守りしたいんです。」

真面目すぎる。そこまですて職務をこなさなくてもいいよ。

守ることではなく、守る対象に目を向けてほしい。

この旅において、戦略的に価値がある人材は姉さんだ。ついで姉さんのサーヴァン



ト。

僕を守るのはこの旅においてメリットが限りなくゼロに近い。

でも彼女の性格じゃこれを言っても納得しないだろうし。

僕はフオウくんを床に下ろすと、彼女の前に周り混んだ。

そして腰を下ろして、彼女の目を見た。

「ありがとう。キリエライトさんがそうやって僕を守ろうとしてくれるのはとても嬉しいし、僕もキリエライトさんに守ってもらえると安心できる。もしキリエライトさんが今回のことを気に病んでいるのなら、今から僕の心を守るために一緒に悩んでくれないかな？」

キリエライトさんは僕の話聞いてキョトンとした。

「心を守る、ですか？」

「うん。実は悩んでいる事があって、これがずっと頭を痛めつけてくるんだ。だから出来ればキリエライトさんに相談して解決したいんだけど、手を貸してくれない？」

「私でいいんですか？」

「キリエライトさんだからいいんだよ。」

僕の言葉に彼女は顔を紅潮させ、僕の手を引き寄せた。

「やります！先輩の心、私に守らせてください！」

「そっか、ありがとう」

ここまで言っておけば彼女も負う必要のない責任を背負わずに済むだろう。

僕のせいでも彼女のようない優秀な人間に足枷が付けられるところなんて見たくない。

それに彼女ならもしかしたらドクターの言っていた言葉の意味がわかるかもしれない。

「さつきドクターに言われた事なんだけれども……」

# 私は知ってます

「自分に嘘をつくな、ですか？」

僕の説明に彼女は首をかしげながら復唱した。

こちらに顔を合わせて傾げたせいで、パーカーのフードが左肩に垂れる。

「うん」

僕らは空き部屋の壁に寄りかかって、並んで床に座っていた。

簡易椅子はたたんで立てかけてある。

相談をするのに背を向け合って話すのは流石に気乗りしない。キリエライトさんを地べたに座らせるのもどうかと思つたので、ハンカチを渡してお尻の下にひいてもらった。

もともと人の出入りがほとんどない部屋なので気にしすぎといわれたらそれまでだが。

僕は背を丸めていて疲れてきたので組んでいた膝を休めて、胡坐に直した。

「僕がなんのために戦っているかを考えろって言われても、よくわかんなくてさ」

ここにきて何回目かもわからないため息を吐く。

理由も何も、半ば強制的に連れてこられて戦う理由なんてあるわけがない。

しいて言えば後ろ盾を得て、死なないようにするため。だけどこんな言葉を引き出すために僕の心をかき乱してまでドクターが諫言をくれたとは思いたくない。

彼はカルデアの中では比較的僕を慮ってくれてきた人間であるので、ただ不満を発散するために説教する人間ではないことぐらいはわかっている。

だからこそキリエライトさんに頼んでまで考えているというのもある。

「僕はなすがまま、姉さんの手にひかれてここに来ただけだからさ」

「そうだったんですか？」

彼女は少し驚いたようだった。

そう言えば僕らがどうしてカルデアに来たかって話したことなかったっけ。

まあ、たいして面白くもない話だから話そうとも思わないけれど。

自分じゃ手に負えなくて逃げ出してきただけだ。

「うん。だから恥ずかしい話、このカルデアで唯一僕だけが、志も持たずに流されている人間ってことに……」

ほとんど言い終えてから慌てて口を閉じた。

失言だった。

少なくとも彼女の前で言うべき言葉ではなかった。

カルデアに戦力を常駐させるために人間にサーヴァントを宿す計画。彼女はその中で作られたデザインーズベイビーだ。

記憶を何度も消され、調整され、隔離施設でほとんどの人生を過ごししてきたのだ。彼女の夢にその時の恐怖が表れるほどに。

さっきの僕の言葉は、人生の多くをカルデアに捧げさせられてきた彼女を前に言う言葉ではない。

「ごめん。無神経だった」

僕は彼女に頭を下げた。

「い、いえ。私は気にしてませんので」

こういうところが人をいら立たせてしまう原因ではないのだろうか。

本当にどうしようもない。

どうしようもない奴だな、僕は。

「フオウ！」

僕が頭を下げながら後悔にまみれていると、僕の膝で寝ていたフオウくんが鳴いた。

いや、鳴いたというよりは吼えたというぐらいのやや低めの声を出すと、僕の膝を飛び降りた。

「フオウさん？」

キリエライトさんの声に耳も傾けず、フオウくんは開きっぱなしの扉から部屋を走り出ていった。

急に飛び出るなんて珍しい。

僕の膝で寝ているときは僕が下すまで、いつもずっと寝ているのに。

あつげにとられて僕はキリエライトさんを見た。

そしたら彼女も同じように僕を見ていた。

同じことを思っていたらしい。僕と彼女は目を見合わせてから少し笑った。

フオウくんのおかげで重い空気は取り払われていた。

そしたらキリエライトさんがある提案をしてきた。

「これまでの旅を思い返して考えてみるというのはどうでしょう」

「これまでの?」

「はい。考えても分からないのであれば、実際に私たちが歩いてきた旅路を思い返せば何かヒントが得られるのではないでしょうか」

「なるほど」

作れないならあるところから探す。確かに道理だ。

「例えば、印象に残ったり、強い感情のブレがあったことなどはありますか?」

印象に残ったこと…

顎に手を当て、少し考える。

アンケートで聞かれる質問みたいだなと思ったことは秘密だ。

初めから考えてみよう。

僕らが最初に行った冬木市。そこであつたことというと…

「冬木大橋の下で姉さんが所長を泣かせてたこと、かな」

まだ何もわからずに右往左往してた時だった。急にレイシフトに巻き込まれて状況が理解できなかつた。

理解できた後はレイシフト適性が高くないせいか、あまり魔力が回らなくて足手まといになつた。

あんまりに僕が何もできないことを所長が怒つて僕を怒鳴りつけた。

所長の言葉は正論だったから何も言い返さなかつただけど、そのあとも罵倒が何回か続いてとうとう僕の悪口になつた時、姉さんが言つたんだ。「所長だつて何もできてないじゃないですか」つて。

現場で陣頭指揮を執つてくれてたから何もしていないつてことはないだろうけど、所長もマスターとして動けなかつたことには悔しきみたいなものを持つていたのかもしれない。何も言い返せずになまつちやつたんだな。

それをいいことに姉さんがサポートをやつてくれているのはドクターだとか、戦闘を

してくれているのはマシユとキャスターだとか、それとも私の代わりに所長がマスターやってくれますか、とか追い詰めるものだから、所長もついには泣いちゃって。

姉さんが人を泣かせるぐらいに口論をするってあまり見たことがなかったので印象的だった。

僕の発言にキリエライトさんは苦笑した。

「あの時はびつくりしました。直前まで緊張感があつても常に朗らかだった立花さんが急に怒り出したので」

あのときは所長を泣き止ませるのが大変だった。ドクターと一緒に慰めの言葉をかけて、拳句の果てには所長のいいところを挙げ合ったりして。

ほんの数分前まで自分の罵倒をしていた上司の美点を挙げ合うって、今考えてもよく分からない状況だな。

「他にはなにかありますか?」

他に：順番で言うつらフランスのときか。

あの時は結構な強行軍で大変だったけど、その中で印象に残ったことというところ……

「戦場のど真ん中でアントワネットさんと姉さんがお茶会を始めたこと……とか」

町を占拠した敵サーヴァントたちを這う這うの体で撃退したとき、あのお嬢様が「お茶会をしましょ」って言い出したときは何事かと驚いた。



みんながあっけにとられる中、姉さんが笑顔で「いいですね〜」って言いながらお茶の準備を手伝いだした時にはあきれたけど。

そのあとモジャンヌダルクさんがあの二人を諫めようとしたら逆に諫められたり、かの有名なモーツァルトが演奏しだしたり、竜の娘が音痴な歌で演奏をぶち壊したり、あんなに大人数が喧々囂々としていたのに煩わしく思わなかったのは初めてだったので不思議だった。

「あとは、ローマで皇帝と竜の娘と姉さんが3人でコーラスしたらあまりにも下手である国の人たちが気絶したこと……これは感情を強く揺さぶられたっていうのかな？」

何かちよつと違う気がする。

「船の上で酒宴を始めたと思っただら姉さんがサーヴァントたちと相撲を始めたこと……」

あの船長までならよかったのにアステリオスと始めたときにはさすがにひやひやした。あの子が優しい性格で助かった。

でもこれは姉さんが、ひいてはカルデア主戦力がくだらないことで怪我をしないかって注意してたから気疲れしただけかもしれない。

「ロンドンで姉さんにビートルズのジャケットの真似写真を撮らされたこと？でもあれはイラつとしただけのようない……」

モードレットさんもノリノリで、正直ジキルさんがいて助かった。

「アメリカでキャンプ中の夜中にあの三人がまたコーラスをしだしたこと？これは寝れなくてイライラしただけだしなあ」

なんか振り返ってみるとろくな思い出がない気がする。

あれだけ戦って、修羅場を潜り抜けてきたつもりだったんだけど。

やっぱり前に出て戦っているのが僕ではないからなのだろうか。

自分で考えて、勝手に意気消沈していると隣でキリエライトさんがクスリと笑った。

「先輩は立花さんが大好きなのですね」

「大好き？なんでさ？」

今振り返ってみたこと全部、僕や周りの人間が姉さんに振り回されたことだけだった気がするんだけど。

この状況を思い出して好きというのは何か明後日の方向に思考が飛んでいる。

僕の訝しげな視線を見てまたクスリと笑うと僕の顔を指さしてこう言った。

「好きな人の話じゃなければ人はそんなに笑顔で話せないと思います」

笑顔…

僕は右手を自分の口元まで持ってきて頬を触った。

僕の頬の筋肉は少しえくぼを作っていて、口角が上がっているのが感じられた。

どうやら本当に笑っているらしい。

全く気付かなかつた。

僕の唾然とした顔が露骨だったからか、彼女は微笑んだままだったがそのあと急に笑みを崩して驚いた表情をした。

「もしかしたらドクターが言おうとしていたことはこれだったのではないのでしょうか？」

「これって？」

「先輩は立花さんが好きということですよ」

彼女はその後と「あ、もちろん親愛の意味ですよ」と付け加えた。

僕が姉さんを好きということには異論を挟みたいところだけど、相談に付き合ってくれている彼女の意見を頭ごなしに否定するような失礼な人間にはなりたくなかつたので、口から出そうな言葉を飲み込んで続きを促した。

「というところ？」

彼女は言いづらそうだったが軽い上目遣いで僕を見てこう言った。

「今から私が話すことは少し先輩のお気に障るかもしれませんが……。でもあくまで私個人の意見なので理にかなってはいないとお考えになったら私に言っただければすぐに」「いや、僕から頼んでるのにそんな失礼なことしないよ。むしろ思ったことを素直に言ってくれた方が僕としてはありがたい」

また気を使わせてしまった。

抑え込んだ言葉が態度に出てしまっていただろうか？

姉さんのことだとすぐにこうなるな、僕は。直さないよ。

大人気なさを自省して続きを促した。

彼女は少し申し訳なさそうにしていたが、僕の顔を見て口を開いた。

「ドクターが言いたかったことは、先輩は立花さんが好きで、立花さんの為に戦っているのに、周りの環境や心の中の葛藤からその事実を受け入れられずにいる、ということではないでしょうか」

「僕が姉さんの為に戦っている？」

「はい。先ほどのお話を聞く限りでは先輩はいつも立花さんの身を案じていたり、立花さんのやりたいことにできるだけ協力しようとしているように感じました。」

彼女は真つすぐに僕の目を見て言う。

「そしてそれは立花さんを無意識にでも心配して、ではないでしょうか？」

心配？ 姉さんは職員ともうまくやっているし、英霊とも良好な協力関係を築けている。一部に至っては姉さんのファンになるぐらいだ。

そんな姉さんのどこを心配するというのか。

「姉さんに心配が必要かな？」

「確かに立花さんはとても優秀な方です。指示は的確で、人との距離感をつかむことがとても上手な方です。でも無意識的に気を張っているのではないのでしょうか。先輩と話す時の立花さんはもつとのびのびしているように感じます」

「いつも僕の文句を言っただけだよ、姉さんは。リラックスとは正反対の位置にいる」  
あそこまで怒鳴り散らしてくるののびのびも何もないだろう。

そう思うのだがキリエライトさんにはどうやら違つて見えるらしい。

「ご存知かもしれませんが、立花さんは人に自分の意見を言うときはもつと相手を慮つたり、より意見を受け入れやすいようにとても気を使つて言います。私やドクターの前であつてもそれは変わりません。あそこまで正面衝突するのは先輩の前でだけでした。それは立花さんが先輩の前だけでは気を張っていないからではないでしょうか？」

「あんなに怒鳴っているのに？」

僕のつぶやきにキリエライトさんはお判りでしょうと言いたげな笑みを浮かべた。

「それは先輩を心から案じておられるからですよ」

「どうだか」

僕の反応を見てキリエライトさんはまた笑う。

「そして立花さんが色々なプレッシャーを受けながらも笑つて立っていることが分かるからこそ、先輩もできるだけ立花さんのストレスを減らそうと気を配つて先程おつ

しゃっていた行動をとられているのだと私は思います」

「僕の行動を無理矢理よく解釈しようとすればそういった見方ができなくはないかもしれない。

でも、と彼女は言う。

「先輩のお力はレイシフトでは十全に出すことが難しいですし、カルデア内ではそのことを、その、あまりよくないように感じておられる方が一部いらつしやるのでそう言ったことから先輩はストレスを抱えていらつしやると思います」

彼女はオブラートに包んでくれたが一部というより、ほぼ全員だろう。

僕を見て明るい声で話しかけてくる職員なんてまずいない。

でも彼らだって世界を救おうと必死で働いているのだ。

なんとかしようとして自分でできうるすべてのことをしているのだ。

それなのに人理修復のための要をこんな才能もやる気もない人間が担うのだから不満の一つも言いたくなるだろう。

みんなで頑張っているときに一人がミスを続けたら、どんな聖人だってそいつが疎ましくなる。

善かれ悪しかれ、出る杭を打つのは人間の性だ。彼らが悪いというわけでもない。

「そういった環境でお姉さんの方が、立花さんの方が優秀だと比較して表立って言われ

ればどうしても立花さんのほうに、あまりよくない感情が向いてしまっているのかもしれないません」

「…」

「そうして知らず知らずのうちに、立花さんが自分にストレスを与える原因そのものと無意識的に考えてしまい、立花さんを嫌ってしまふ。もちろんこれは極論ですし、先輩がそんなことを意識的に思うなんてことはないと思います」

キリエライトさんは少し心配そうに僕の顔色を見ながらも続ける。

「そういった結果、先輩は立花さんが好きという感情を嫌いという感情で塗り固めている、ドクターはそう言いたかったのではないかと…」

…それで自分自身に嘘をつく、か。

彼女が言ったことはあまりに突飛で僕には考え付かないものだったが、それと同時にとても明瞭で、簡潔であった。

要は自分じゃ何もできないのに、それで言われた悪口を姉さんに責任転嫁することで憂さを晴らしてたつてことだ。

もしこれが僕の心だとしたらはてしなく幼稚で、あまりにも恥ずべきものだ。

でもしようがないじゃないか。

僕だつてできる事ならレイシフト適性が高く生まれしてきたかつたさ。

ちやんと英霊を呼び出して、姉さんと肩を並べて戦いたかつたさ。

カルデアのみんなの期待にこたえたかつたさ。

ああなると分かつていたらあんな研究なんてしなかつたさ。

気持ち溢れそうになる。

格好悪いからこれだけは言うまいと心にとどめておいたことが口から飛び出そうになる。

このカルデアで唯一、僕に背を預けてくれている彼女の前でこんなことは言いたくない。

沈黙してしまった僕を見て、キリエライトさんはすこし慌てた。

「で、でも、だとしても、そうなるってしまうのは周りの環境が良くなかつたせいだし、先輩が悪いわけではないですし、それにそもそも私の考えが的外れな可能性のほうが高いですし…」

彼女は僕がこんなになつてもそれでもフォローしてくれる。

そんな彼女に比べて今の僕はと思うと、恥ずかしくて、情けなくて、矮小で。

どうしようもなく涙が出てきた。

「…っ」



「先輩？」

出すな！泣くな！

これだけは言わないって決めただろ。

みんなが頑張っているのだから、志は持てなくたって僕も最低限の意地だけは持つて決めたじゃないか。

「……」

涙が目からこぼれそうになる。

出てくるな、引っ込んでろよ。

お前の出番はないって言ってるだろ。

「……」

頼むよ。出てこないでくれよ。

何を言われたって、白い目で見られたって、この意地だけは通すって、そう決めたから今まで生きてこれたんじゃないか。

僕がもってるこんなちっぽけな意地くらい守らせてくれよ。

頼むから。

「先輩」

顔を下に向けてこらえていたら、体が包まれた。

彼女が僕の背に手を回したらしかった。

「大丈夫ですよ。私は先輩のサーヴァントですから」

限界だった。その言葉で何かが壊れたような気がした。

勝手に口が動き出す。

「僕だって、僕だって、みんなの期待にこたえたかったさ」

「はい」

目から涙がぽとぽと落ちる。

彼女に背をさすつてもらっていた。あやされていた。

格好悪い。だというのに涙が止まらない。

「僕だって、姉さんのようにちゃんと戦いたかったさ。ちゃんと英霊を呼び出して、みんなと正しい関係築いて、笑いあって、そうしたかったさ！」

「はい」

「だれがこんな役に立たないお荷物になりたいなんて思うんだよ！なりたくてこんなものになったわけじゃないのに……」

「はい、わかっています」

「みんなして僕を馬鹿にして、白い目を向けて、僕だって望んでこうなったわけじゃない！」

「はい」

「頑張ったさ！シミュレーションだって夜中に何度もやった！何度も！何度も！降霊魔術の勉強だつてしたさ！テキストが擦り切れるまで何度も読んだ！術式の組み立てだつて何度もやった！それでも適性は変わらなかった！誰も呼び出せなかった！どうしようもなかったんだよ！」

「はい、先輩はとても頑張りました」

「これ以上僕に何をやれつていうのさ！もう、どうしろつていうのさ……」

「大丈夫です」

どうしようもなく言葉が溢れて止まらなかつた。涙があふれて止まらなかつた。

とても格好悪くて、絶対に言いたくないと、これだけは言うまいと思つていたことだつたのに。

嗚咽が喉から出続ける。

「大丈夫ですよ、先輩」

嗚咽で震える僕の体を抱きしめながら、彼女は何度も僕に言葉を投げかけてくれた。

「先輩が頑張つてきたことは私が誰よりも知っています」

何度も背をさすつてくれた。

「だから大丈夫です」

こんなに泣き崩れているのに僕はこの地に来てなんだか一番安心している気がした。

## 食堂前線（1）

空調が息は吐き出す音が聞こえる。

その音を聞きながら、自室のベッドでうつ伏せのままただじつとする。

ゴウン…ゴウン…

部屋の外から低い音が響く。

発電室のモーターか。いや、この音はウォーターハンマーか。

ウォーターハンマーとは、勢いよく水を出している際などに急に水を締め切ると水の圧力に逃げ場がなくなり、水道管内に高水圧と衝撃を発生させてしまう現象のことである。

水撃作用などともいわれる。

これを何度も繰り返すと水道管が破損し、漏水などの原因となる。

大きな施設の地下室などでは天井裏に水道管が通っているケースなどがあり、よく聞こえたりする。

防止対策としては急激な締め切り動作を行わないようにするほか、水栓に節水コマという水流を抑える部品をつけることが有効である。

ってダ・ヴィンチさんが言ってた。

ベッドの上で頭を抱え、毛布の下に頭を突っ込む。

…現実逃避してもしようがないんだけど。

昨日、ある女の子の前でぼろ泣きしてしまった。

———だれがこんな役に立たないお荷物になりたいと思うんだよ！

「なぜ俺はあんな恥ずかしいことを…」

同僚である女の子の前で愚痴、言い訳、泣き言を叫んだ挙句、ぼろ泣きして彼女に慰められる。

建前で相談に乗ってもらったはずが、まさか取り乱してあんなことをしてしまうなんて。

あああああ！恥ずかしい！

なんであんなことやっちゃうわけ！馬鹿なんじゃないの！マジでお馬鹿か！

大丈夫か頭！

「…穴があつたら入りたい…」

ぐう。

ベッドの上で暴れていたら、お腹が鳴った。

昨日、夕飯食べなかつたからかな。

ついでに尿意も催してきた。

こんなに感情を取り乱していても、腹は減るし、出すもんは出すらしい。

人間の体ってたくましい。

ため息を一つついて毛布から頭を出す。

しようがない。やってしまったものはしようがない。

とりあえず顔を洗おう。いや、シャワーあびよう。

僕は寝間着を脱ぎ、骨折した右腕をかけていた三角巾を外すと自室のユニットバスで体を洗う。

塗り薬の上のガーゼや右腕の包帯に水が被らないように気を付けながら洗う。

あ、無理だわ。普通に濡れる。

出たら包帯を巻きなおしておこう。

水滴が跳ね、湯気で曇る鏡を見る。

…なんか最近すこしだけどひげが伸びてくなあ。

ジェルを顎に塗り、かみそりでひげをそるとシャワーで顔を洗い流す。

慣れない左手でやったので少し切ってしまった。

左手だけでやるのって難しい。

ユニットバスの手すりにかけてあったバスタオルで体を拭き、ユニットバスも濡れた個所を軽くふいておく。

そのあと用を足して、置いておいた下着を着た。

いつも怪我ばかりするので自室の棚に置いてある包帯とはさみとテープを取り出す。濡れた包帯をとり、ギプス代わりに腕にかけてある固定化の術式を見ながら腕に包帯を巻く。

固定化してあるんだから包帯なんていらなと思うんだが、ドクターによるとこの魔術は骨の整復と固定の兼用なので念を入れて包帯と三角巾をするのだそうだ。

三角巾はずれてない骨の固定とか、この包帯にも固定化がどのくらいの言つてたけどなんだったかな。

結局左手だけでやったらものすごい汚くなってしまった。

まあ、いいや。

道具を棚にしまうと制服を着る。

この服のつくりって面倒だよなあ。

この胸にあるベルト？みたいのにはどんな役割があるのだろうか。  
魔術的意味合いがあるのだろうか。

というか右の三角巾が邪魔で着れくないか、これ。



羽織るだけでいいか。

雑に制服を羽織ってから、鏡を見て身だしなみを整える。

鼻よし、眉毛よし、制汗剤は塗った。肌が荒れたところには保湿クリームも塗った。髪を軽く整えて、完了。

よしっ！

「行きたくない…」

考えたくないことがあると身だしなみとか服とか、別のことが妙に気になり始めるんだよね。

ちなみにこういうのは獲得的セルフハンドキャッピングと言って、目的のための作業に邪魔となることをあえて行うことによつて…

やめよう。

この思考こそ目的の邪魔になることだ。

頭の中のダ・ヴィンチさんは休んでください。

よし状況を整理しよう。

僕は昨日、同僚の女の子の前でとても恥ずかしいこと（控えめな表現）をしてしまった。

それによつて僕は今日、彼女と顔を合わせたくない。

しかし今日はモニターテストと戦闘訓練があり、彼女とは少なくとも一度、顔を合わせなくてはいけない。

ゆえに部屋から出ることがためらわれる。

うん。なるほど。

よくわかった。

じゃあ、この状況の打開策はなんだろうか。

：

こういうのはどうだろう。

僕を部屋に閉じ込めている心理的圧力は、彼女と顔を合わせたときの気まずさと恥ずかしさと恥ずかしさ（意味重複）による羞恥心（意味重複）が原因だ。

だが部屋を出れば彼女と確実に顔を合わすことになるので、心のダメージは避けられない。

ならば彼女と顔を合わせる回数を戦闘訓練の一回のみに限定することにより、まず羞恥心によるダメージを減らす。

さらに戦闘訓練は仕事と割り切ることによって心のダメージを減らす。  
プライベートと仕事は分けるタイプなんでつてやつ。

これにより僕の心が守られる。

よし。なんて完璧な作戦なんだ。  
穴が全くない。

なんか論理が斜め上に跳んでいる気がするが多分気のせいだ。

左手で頬をたたき、自分に活を入れるとドアを開き、僕は冒険へと躍り出た。

廊下を出て左右を確認する。いたのは離れたところで背を向けて歩いている男女職

員二人組だけだった。

僕は彼らに気付かれないように右に曲がると、早歩きで食堂に向かった。

今の時間帯なら食堂の人たちは食事が食べ終わる寸前のところだろう。

そこで僕が食事をとりに行き、彼らが席を立ち始めてから座り、食べ始める。

早めに食事を済ませ、モニターテストへ向かう。

こうすればほぼすべての人間とすれ違いになり、キリエライトさんと顔を合わせるこ

ともない。

いけるぞ。

食堂の前にたどり着く。

中からはいつもよりも少し大きめの喧騒が聞こえる。

若干人が多いようだがこの程度は想定内。

よし。ミッションスタートだ。

僕は食堂に足を一步踏み入れた。

まず視界に入ったのがいまだに大半の席が埋まっている食堂。

やはりいつもより人が多く席に座っているみたいだった。

がしかし、誤算だったのが、食事が半分くらい残っている人が多いということだった。馬鹿な。僕の計画が。

少し遅めに来たのに、なぜみんなこんなにゆっくり食べているんだ。

鼻白んでいたら、僕が入ってきたことに気付いた人たちがみんな一瞬だけ僕のことを見た。

なんだ？いつもの冷え冷えとした視線となにか違う気がする。

からかい、というか好奇心というか、そんな感情が目につけているような……そこで我に返る。

いかん。足を止めるな。

上手くすれ違いになるように、食事をとりに行かなくては。

あまり周りに視線を合わせないようにして……

ああ、人間というのはどうもやらないよう意識するとかえってダメみたいだ。僕は眼鏡をかけて灰色のパーカーを着た例の彼女を見つけてしまった。

まずい、目を合わせたら、僕が死ぬ……ん？

なんだ、あれ？

何故かキリエライトさんの周りに職員がすごい集まっている、というか囲んでいる。まるで質問攻めにでもあっているかのような。

呆然としたらこちらに気付いた彼女と目が合ってしまった。

目が合った瞬間、彼女は顔を少し赤くした。

それに気付いた周りの職員が一斉にこちらを見た。

あまりの強烈な視線たちに僕はすぐに視線を逸らした。

え？なにあれ？怖い。

何があったの、キリエライトさん。

って、しまった！これでは気づきませんでしたアピールができないじゃないか！

もし僕が席に着いたときに彼女がいても、近くに座らなかつた言い訳として用意していたプランBが！

あ、そういうえばプランBのBってB a c k U pの頭文字で、A B Cの順番って意味じゃないらしいですよ。

プランAがなくてもプランBは存在するとか。

って、だから余計なことは考えるな。

まずい事態だ。

食堂の人は多く、キリエライトさんはまだ食事中、さらにはプランBの頓挫。どう打開すべきだ？

…そうだ！

食事に難癖をつけて、なんとか食事を運ぶまでの時間を稼ごう。

それで彼女が食事を終えるまで席につかないようにしよう。

僕はトレレーをとり、厨房が見えるカウンターにトレレーをおくとスライドさせながら料理をとっていく。

今日は和食のA定食一択だ。

僕は日本人だからそれを理由にいちやもんが付けられるかもしれない。

左手でトレレーをスライドさせながらカウンターの上的お皿を取っていく。

味噌汁、漬物、納豆、サンマの塩焼き、なんというか朝の和食って言ったたらこんな感じかなっていうイメージ通りの食事だ。

どれも具材、量、焼き加減、素晴らしい出来。

…くそっ！料理が完璧すぎて、難癖が付けられない！

というか冷静になって考えれば、調理してる人に日本人いるじゃん！

いちやもんをつけ始めたら、むしろ口論で言い負かされる可能性すらあるぞ。

これでは…

焦燥感を抱いた僕が主食を取ろうとしたその時、チャンスはやってきた。米が並んでいない！

まだ来てない人たちがいるのかぼつぼつと具材のお皿は残っていたのに、お米のお皿だけが残っていないかった。

材料が切れたのだろうか？

よしっ！ほかの炭水化物ではやだと駄々をこねればいける！

これからやることに若干の申し訳なきを感じながら奥の厨房に呼びかける。

「すいませーんー！」

3秒ほど待つと、奥から返事が返ってきた。

「んー？」

奥から現れたのはタマモキヤットさんだった。

相変わらず和洋折衷のよくわからない格好をしている。

彼女は戦闘職にしては、僕に当たりが強くない人だった。

マスターである姉さんにしか興味ないのか、あんまり気にしていないのか。

いずれにせよコミュニケーションがとりやすい人だったので安心した。

「あのお米がカウンターにないんですが、新しいのをもらってもよろしいですか？」

よし、なんとかこれで時間を引き延ばして…

「おー！ やつと来たかご主人弟！」

と思つたら彼女は僕を見てすぐに駆け寄つてきた。

尻尾がピンと立っている。

つて、え？

「待ちくたびれたぞ！ 遅すぎてキャットの方から部屋に突入しようかと思つたのだ」

「え、お、お待たせしてすみません…」

「しようがにやい。許してやろう」

腕を組んで神妙にうなずくタマモキャットさん。

なんで僕は謝っているんだろう。

「だが、こいつが許すかなー」

決め台詞とともに彼女は大きな猫の手の肉球を僕の顔に押し付けた。

なんなんだ、これは。何の意味が…

さつきからいろいろありすぎて対応しきれない。

今日の食堂はおかしい。

押し付けられた肉球のぷにぷにした感触に恐れおののきながら、僕はもう一度お米を

要求した。

「それで、お米は…」



「む、任せろ。今持つてくるぞ」

言うのと一瞬で厨房の奥へ消えていった。

速い。

ん？　そういえば彼女、さつき待っていたと言つてなかつたか？

僕に用事でもあつたんだらうか。厨房の仕事？　それとも調理器具の修理？

なんであれ、僕以上に適任な人はいっぱいいるが。

「持つてきたぞー！」主人弟！

少し考えているとタママモキヤツトさんが帰つてきた。

大きな米びつを抱えて。

あ、お米あつたんだ…

「お祝いだぞ。これ全部食べてけ。」

「え」

彼女が米びつのふたを開けると熱い湯気とともに顔を出したのは炊き立てのお赤飯だった。

なぜ赤飯？　それに量が多すぎませんか？　5合ぐらいありますよ。

「いや、全部はちよつと…」

「なんと！！」

タマモキヤットさんが崩れ落ちた。

無理です。それは気づいてほしかった。

「だから言ったでしょ。あんなにいっぱい炊いてもしょうがないって」

「まったくだ。食材は1ミリたりとも無駄にしてはならないのに」

驚くタマモキヤットさんの後ろから声を出したのは、ブーディカさんとエミヤさんだった。

二人ともYシャツの上にエプロンを着けている姿がすごい堂に入っている。

タマモキヤットさんは厨房じゃなくてもエプロンをつけているからわかるけど、二人はいつも着けているわけではない。だというのにこの違和感のなさ、なぜだろうか。

「あ、おはようございます」

現れた2人に頭を下げる。

「うん、おはよう」

「おはよう」

ブーディカさんは笑って、エミヤさんはあきれ顔で僕に挨拶を返してくれる。

少し嬉しかった。

厨房の人たちはいつもととても朗らかに挨拶を返してくれる。

他の人たちでも僕が挨拶をすると誰であれ一応、返事は返ってくる。

でもいい感情が伴っていないってことは、言葉に出ていなくてもわかるんだよね。顔とか声の硬さとかで。

そうするとやつぱりさ、挨拶する回数が減ってくるんだよ。

そんなだったから厨房にいる人たちとのあいさつはひそかな僕の楽しみだった。

彼らは誰であれ、笑って返事をくれる。

どれだけ冷たい対応になれていても、やつぱり明るく返してくれた方が僕もうれしい。

料理ができることに加え、こうやって人と向き合って接してくれるから彼らの姿は堂に入るのかもしれないな、と最近は思う。

「えっと、それでこのお赤飯はいつたい……?」

僕の疑問を聞いてブーディカさんは笑って返事をくれた。

「ああ、驚いた? 君とマシユのお祝いだよ」

「僕とキリエライトさんのお祝い?」

ん? 何かお祝いされることがあっただろうか?

キヤメロットの戦勝祝いかな?

でも昨日の夕餉にそれはやっただろうし。僕は行ってないけど。

あ、キヤメロットでキリエライトさんの霊基を強化できたことか。

昨日までの旅で、キリエライトさんは自分に宿る英霊の真名を知り、とても強くなつた。

法具もスキルもとても大幅にパワーアップされたし、何より彼女の心に芯ができた気がする。

彼女のお祝い事だけど、気を遣つて一応マスターである僕も祝つてくれたのか。

「うん。今朝聞いたばかりだったから、これしか用意できなかったんだけど。君もいろいろ大変だろうからさ。いいことがあつたらお祝いしたいじゃない？」

「前もって知らせてくれれば、ケーキくらいは用意しておいたものを」

他の人なら皮肉かと疑うが、彼らは純粹に僕を祝つてくれるのがわかるから安心できる。

流石の僕も、彼らの行為を素直に受け取らないほどひねくれていない。

「ありがとうございます」

僕は再度頭を下げてお礼を言った。

「どういたしまして」

「これくらいなんともないさ」

二人は笑つてそんなことを言ってくれた。

「でも前もって言うのは流石にできませんよ。まさかあの特異点でああなるなんてわか

りませんでしたし」

僕が苦笑すると二人は驚いた顔をした。

「ええっ!! 君、あつちでマシユに言ったのかい!! てつきり帰ってきてからだと思つてたよ。すごいね」

「命からがらの旅途中で、とは余裕だな。もしかすると君は大物なんじゃないか?」

いや、命からがら旅だったからこそ、そして縁にゆかりある土地だったからこそ、彼女は自分自身を知ることができたのではないだろうか。

というか、キリエライトさんに言った?

ん?

なにか話が食い違っている気が…

「あの、これってキリエライトさんの霊基が強くなったことの…」

僕が何か変なことに気付いて疑問を口にしようとしたとき、背中を思いつきり叩かれた。

あまりに強かったので前のカウンターに頭をぶつける。

痛い…

「よお! 坊主! やったな!」

ぶつけたおでこの部分をさすりながら左を見ると、ケルトの英雄であるクーフリーン

さんがいた。

痛みで涙目になりながらも、少し驚いた。

彼の方から話しかけてくるのが珍しかったから。

彼はガチガチの戦闘職で、さつき言つたみたいとうじうじしている僕を好ましく思つていないうちの一人だった。

「まさか、お前があゝの盾の嬢ちゃんを落とすとはな！めそれそ女々しい野郎だと思つたが、やるときはやるじゃねえか！」

そう言つて大声で笑つた。

「ちよつと、つよく叩きすぎだよ」

僕のおでこが赤くなつていたのか、呆れ顔でブーディカさんがクーフリーンさんを注意した。

「男なんだからこれぐらい大丈夫だろ。なあ」

そう言つてさらにバシバシと背を叩く。

肩が外れるんじゃないかという衝撃が何度も背中に響く。

いや、痛いですから。サーヴァント基準で話進めないで下さい。

というか今何か変なことを言つてなかつたか？

「…僕がキリエライトさんを落としました？」

そんな僕のつぶやきを聞いているわけもなかったクーパーリンさんは、にやつと笑うと僕の肩に手を回した。

「だがな、坊主。これで安心したらそこでしめえだぞ。釣っただけで満足すんな。エサをやらなきや、魚も女も逃げてくぜ」

そしてエミヤさんに視線を向けた。

彼の顔はまるでいたずらを思いついた子供のように笑みを浮かべていた。

「なあ、アーチャー。こいつもいつぱしの男になったんだからお前からアドバイスしてやったらどうだ？そういうの得意だろ？」

エミヤさんは不機嫌そうに鼻を鳴らす。

「…何の話だ」

それを見てクーパーリンさんの顔がにやけた。

「ああ、悪い悪い。この場合はこう呼んだ方がいいか？坊主？」

「…いいだろう。貴様の安い挑発に乗るのは癪だがその喧嘩、買ってやる。表に出ろ、ランサー」

その言葉を聞いてクーパーリンさんはまた笑った。

「ぶっはっはっは！冗談だよ！本気にすんな！」

彼は腹を抑えて、僕の肩を何度か叩いた。

「まあ、せいぜい頑張れよ」

言いたいことだけ言うと、クーパーリンさんは肩を震わせながら食堂を出ていった。  
あの人が、何がしたかったんだ…

「あの犬め、奴の昼飯はホットドッグにしてやろう」

エミヤさんは眉間をぴくぴくさせ、聞いたこともないほど低い声でそう言った。  
哀れ、克蘭の猛犬。

というか、ゲツシユ的にそれは洒落にならないのではないのだろうか。

ああでもホットドッグは豚肉というか、ソーセージだから大丈夫なのか？

って違うそんな話はどうでもいいのだ。

「あの、さっきクーパーリンさんが言ってた話って」

エミヤさんがすぐに僕の言葉に反応した。

「いや、あれは若気の至りというか…とにかく、君は知らなくていいことだ」

クーパーリンさんがからかっていたのはエミヤさんの過去の話だったのか。

すごい気になる、って今はそうじゃなくてっ！

「いや、あの、僕がキリエライトさんを落としかねんとかおっしゃってましたけど、  
どういう意味ですか？」

僕が言葉を発してもすぐに返事は返ってこなかった。



ブーディカさんとエミヤさんは目をしばたかせていたからだ。

と思つたら先ほど崩れ落ちたタマモキヤットさんが復活して、カウンターに手をのせた。

「それはご主人弟とマシユが付き合い始めたという意味だぞ。もつと言えば、体の関係をもつふぐ」

タマモキヤットさんが言い終える前に、ブーディカさんが彼女の口を両手でふさいだ。

かと思うと慌てて質問してきた。

「ちよ！ちよつと待って！君、マシユと付き合い始めたんじゃないの？」

「え。なんですかそれ？」

何の話だ、それ。

付き合う？え、何、どういう事？

僕の戸惑いっぷりを見て、ブーディカさんはタマモキヤットさんを抱えておくに引つ込んだ。

「ちよつと、どういうこと？」

「いや、キヤットもよく分らないのだぞ」

「でも今朝あの子とマシユが、って言ってたでしょ」

「キャットだつてそう聞いたぞ」

「…誰に？」

「技巧部のムニエルなのだ」

「なんて言つてたの？」

「昨日の夕方、発電室の点検をしようとしたら地下でただならぬ空気を漂わせた二人が隣の部屋から出てきた。まるでもう世界に二人しかいないようなそんな空気だった、と聞いた、ワン」

「…はあ。あのね、あの噂大好き君がそういうことを大げさに言わないわけないでしょ。ただでさえみんな娯楽に飢えてるんだから」

「でも服が少し濡れていたとも言つてたぞ」

「…ああ、そういうことか。これはソースを確認しなかった私も悪いかなあ」

「なんだ？どうしたのだ？」

「あんまり触れちゃいけない話題だったってこと。やつちやつたかな、これは」

奥でひそひそ話している。

いや、僕にも状況説明してほしいのですが…

だんまりしていたエミヤさんをみると、彼はなぜか達観した表情で腕を組んで目をつむっていた。

「あの…」

「誤解してほしくないのだが、彼女たちは良かれと思つてやつたんだ。どうかあまり責めないでやつてくれ」

「え、ええ。それは疑つてません。エミヤさんも含めて。ただちよつと状況が…」

何を祝つてくれたのかよく分からないが、彼らの善意は確かだと思う。

ただ、先ほどからなにかよく分からない状況が、勝手に進行している気がしてならない。

「いかがいたしましたか、達海」

トレーと米びつとエミヤさんの前でおろおろとしていたら、長身のイケメンが声をかけてきた。

「あ、ランスロットさん」

円卓の騎士の一人、理想の騎士とまで評された素晴らしい人物だったらしい。

正直、アーサー王伝説をあまり知らなかった僕にはよく分からない。

今は鎧を着ておらず、ワイシャツにスキニーパンツというラフな格好をしていた。

それにしても今日はよくサーヴァントの人に話しかけられるなあ。

いつもはこんなことあまりないのに。

「いえ、実は状況がよくわからなかったといえますか、この大量の赤飯に困つてたと言

ますか」

状況が複雑すぎて説明できない。

うーん、とうなっていると大きな米びつを見て、彼はなるほどつぶやいた。

「では私がこのお赤飯をお運びいたしますので一緒にお食事をいたしませんか？」

彼の声はなんだかわざとらしすぎるほど明るかった。

円卓の人たちはなぜか親切にしてくれるんだよな。

僕がマスターの弟だからだろうか。

なんにせよ、この前の旅の縁で、彼が協力してくれることになったのはありがたい。

あの砂漠で、後頭部をフライパン片手に殴りかかった僕に対しても崩れない優しい人

格。

キリエライトさんがあんなに反対していたのはなぜだったのだろうか？

うーむ。

「ちよつと待ってくれ！ランスロット卿！あなたは致命的な誤解をしている可能性が……」

「いえ、マスター、エミヤ。私はただマスターの弟君とお話がしたいだけです。決して娘と付き合うなんていい度胸だ、などとは思っておりませんとも」

「いや！やはり致命的な誤解をしているぞ！」

まあ、いつか。

そもそも僕はキリエライトさんと顔を合わせずに食事をするのが最優先だったはずだ。

彼女がなぜランスロットさんを毛嫌いしているか僕には分からないけど、逆に言えば彼が一緒にいてくれれば、キリエライトさんと顔を合わせることはないんじゃないか？  
おお、ここにきて幸運が。

僕はなにか言い合っていたエミヤさんとランスロットさんに顔を向けると笑顔で彼にこういった。

「じゃあ、お願いします。ランスロットさん」

「ま、待て！この状態で行ったら…」

「承りました、達海。では行きましょう」

ランスロットさんは軽々と片手で大きな米びつを抱えると僕の食事のトレイまで持ってくれた。

右手を気遣ってくれたのだろうか、紳士だ。

そういうえば今、エミヤさんが何か言いかけていたような。

「エミヤさん？なにが言いましたか？」

僕はエミヤさんに質問したが、彼が答えるより先にランスロットさんが答えた。

「彼はお赤飯をよそうためのお皿がないと聞いたかったです。安心してください。私が持つてきました」

そう言ったランスロットさんのトレイの上には2つ茶碗がのっていた。

すごい。

「なるほど。ありがとうございます」

「いえ、この程度のことではミスター。エミヤ、失礼します」

「ありがとうございます、エミヤさん」

「まっ……」

僕はエミヤさんに頭を下げるとランスロットさんについて行った。

§

「私としたことが……」

まさかここでランスロット卿があらわれるとは。  
なんてタイミングの悪い。

「ごめんねー！待たせちゃって！ってあれ？弟君は？」

「どこへ行ったのだ？」

先ほど奥で話し合っていた二人が戻ってきた。

私はため息をついて指をさした。

「あそこだ」

彼女ら二人は私の指のさす方向をみた。

彼女らの目も、ランスロット卿の背とそれを追うマスターの弟をとらえたのだろう。

口角がひくひくし出す。

「…もしかしなくても結構ピンチ？」

「ああ、おそらく」

「ヴェルダン？それともレア？」

それは洒落になってない。

## 食堂前線（2）

「こちらの席でよろしいですか？達海」

ランスロットさんはトレーと米びつを両手に比較的空いている机まで来ると、振り返ってそう言った。

「あ、はい。構いません」

本当はもう少し奥の席まで行ってほしかったが、彼に食事まで持つてもらっている状態でそれを言える図々しさは持ち合わせていなかった。

彼は流れるような所作で僕の食事が載ったトレーを机に置くと、向かい側に米びつを置いた。

そしてまるでエスコートするウェイターのように椅子を引き、着席を促した。

「こちらにどうぞ」

「あ、すいません」



所作の一つ一つが洗練されていたので、ついつい見入ってしまった。まるで一流のホテルマンみたいであった。

いけない、いけない。

騎士に召使の真似事をさせてしまうなんて。

恐縮しながら座る。

彼は向かい側に座った。

「食事、運んでくださってありがとうございます。右手がこの通りなので、助かりました」

「いえいえ、マスターの弟君なのでですから。この程度、して当たり前です。」

すごい。これが本物の紳士というやつか。

「…」

「…」

そう言えばサーヴァントの人と一対一で食事をするって初めてだ。

何を話せばいいんだろう。

うーん、英霊も人だしここは無難にお互いの共有点とかを話す、なんてのでいいだろ

うか？

ふむ。

共有点、と考えて真つ先に出てきたのは彼の後頭部にフライパン片手に殴りかかった記憶であった。

この前はフライパンで殴りかかってごめんなさい、とかだろうか？

：どう考えても喧嘩売ってるようにしか聞こえない。

彼がいくら人格者であつても、失礼をしていい理由にはならない。

却下だ。

他に僕が分かることというのと、キリエライトさんが彼を嫌つていふこととかだろうか。

だとすると：

なんでキリエライトさんに嫌われているんですか？

ない。

開口一番に人に嫌われている理由を聞くやつがあるか。

どんな無神経だ、僕は。

困った。

食事の同席を承諾したのはいいけど、その先を全く考えていなかった。

話すことがない。王の話でもするかい。知らんけど。

席に着いてから黙り込んでしまったからか、はたまた肩の力が入っていたか、ランス

ロットさんは僕を見て苦笑した。

「そこまで固くならずとも大丈夫ですよ」

そう言つて彼は米びつからしやもじを使つてお赤飯をよそうと、僕に渡してくれた。

「あ、さつきからすいません」

少し慌てて受け取つてから頭を下げた。

さつきからやろうとしていることが先回りされてやられてしまう。

「流石に達海一人ではきびしいでしょうし、私もいただいてよろしいですか？」

よそつた後を持つてきていたもう一個の茶碗を片手に、彼が言った。

「実は先ほど食事は頂いたのですが少々量が足らなくて、よろしければ私もご相伴にあずかりたいなと」

はい、もうわかります。

これ気を遣つてくれてるやつでしょ。

食事終わつて帰ろうとしたら、僕がこの大量赤飯を前に困つていたのでから手伝いに来てくれたやつでしょ。

ほんとに　なんなのこのイケメン。

ばない。

ほとんど会話をしていないのに彼の人格に感動してしまった。

こんなにいい人なのにキリエライトさんはなぜあそこまで毛嫌いしているのだろうか。

「ええ、もちろん。むしろ食べていただいた方が助かります」

妙にテンションが高い内心はおくびにも出さずに、笑ってお赤飯を彼に勧めた。

ちよつと安心してしまった。

誰かと対面して食事なんて機会がめつきりなかったものだから意識してからは緊張してしまつたが、ランスロットさんなら大丈夫そうだ。

よかつた。

下手なことをしゃべって不快な思いをさせてしまつたりしたら、申し訳ないから。

彼が茶碗によそい終わつたのを見て、僕は「いただきます」と言った。

じゃあ、食べますか。

あ、どうしよ。右腕使えないから左手で食べるしかないのか。

左手で箸が持てるだろうか。

「ときに達海。あなたは今、おいくつですか？」

なんとか左手で箸を使おうとあくせくしている僕に、ランスロットさんはそんなことを聞いてきた。

歳？

「えっと、ここでの生活日数を含めると、17ですね」

人理が存在しないのに僕個人の歴史を数えるというのもおかしな話だが、ここに来る前は高校に通っているときだったから、そこから数えると17だ。

「そうですか」

彼はよそつた赤飯には目もくれず、眉間にしわを寄せて目を閉じていた。

先ほどの笑顔とは打って変わった表情に少し戸惑う。

僕の歳に何かあっただろうか。

特に外見が幼いわけでも老けているわけでもないのです、おおよそ予測できると思うのだけれど。

しばらくすると彼は目を閉じたまま、もう一度質問をした。

「達海はマスターと同じく極東の国である日本出身なのですよね？」

「え、ええ」

僕は姉さんの異父弟でも異母弟でもないし、帰化しているわけでもないのです、出身も国籍も姉さんと同じ日本だ。

「それがどうかしましたか？」

なぜ急に歳や出身なんて。

今、僕の頭の上ではてなが3個ほど踊っている。

ランスロットさんは目を見開くと、そのはてなを吹き飛ばすかのごとき眼圧で僕を見た。

あ、あれ？何か気に障ることを言ってしまっただろうか。

「日本では男性が満18歳、女性が満16歳からでないと法律上、結婚ができないと聞きました」

「は、はい。そのはずです」

「ということはつまり……マシユとは結婚を前提としたお付き合いをしたいということですか!!」

え？

「え？」

「とぼけなくてもよろしい。朝からカルデア中で噂に上がっていることなのです」

え？

「あなたがマシユに愛の告白をした事実は私も今朝聞きました」

え？僕聞いてない。当の本人が知らない。

「貴方も、マシユも、とても若い。だからそう言った気持ちをごなたかに抱くこともあるでしょう」

え？そうなの？

「ましてマスターとサーヴァントとして四六時中一緒にいれば否が応でも接する機会が増えますから、関係が発展することもあるかと存じます」

いや、え？発展するの？

「ですが！そう言ったことをするのならば！まずは！マシユの父である私に相談していただくというのが筋というものではありませんか！」

筋なの？

「確かに達海。あなたはかの騎士が認めるほどの人間です。あなたの何事も耐え抜く忍耐力

、その意志の力には目を見張るものがある。それは私も認めています」

忍耐力ないね。昨日崩壊したばかりだね。

「しかし！私があなたを認めていようと物事には順序というものがあるのです！すなわち今回の場合、マシユに愛をささやく前に！父である私にも一言伝えるといった…」

「ほう？」

横合いから挑発的な声が飛んできた。

今度はなんだよう。

もうお腹いっぱいだよお。

「面白いことを言う。貴公の名は何と言ったかな？」

あ、ペンドラゴンさんだ。黒い方の。

横にいたのはまがまがしき雰囲気纏う黒いアルトリア・ペンドラゴンさんだった。相変わらずの迫力。

そして左手にはハンバーガー。

相変わらずの暴食。

「<sup>ワ</sup>!!」

彼女を見て、今まさに僕を問い詰めていた彼がぴしりと固まった。

あー、そういえば生前の上司だっけ。

「その振る舞い、醸し出すオーラ、さぞや名高い騎士であろう」

「あ、あの…」

彼女を前に、ランスロットさんはなぜかたじたじになっっている。

あ、あれ？

「もしか、円卓の騎士だったりしないだろうか？」

「い、いえ。私は、東洋の騎士でありまして、円卓の騎士など全く関係ありませんとも…」

「なるほど。貴公は東洋の騎士であったか」

ペンドラゴンさんはバーガーを一口で食べきると油の付いた指を舐め、包み紙を丸めた。



そして腰に下げた紙袋から新たなバーガーを取り出すとかぶりついた。ハンバーガーって腰に装備できるものだったのか…

「つまり、私と面識はないというのだな？」

「ええ。私は剣に生きる身。あなたのような麗人にお会いする機会などありませんと  
も」

目が泳ぎまわっている。

修羅場？

「そうか、そうか。ところで貴公、先ほど何やら面白い話をしていたな」

バーガーをさらに一口かじる。

ゆっくりと咀嚼し、飲み込む。

たじろぐ相手を前に食べながら威圧、あつち系の人かな？

「確か、愛をささやく前に、私に一言…だったか」

「いえ、それは…」

「素晴らしいな、貴公は。そうだな。人間関係とは筋を通してこそだな」

「は、はい」

そしてもう一つのバーガーも食べきると、包み紙を丸めて彼の目の前でクシャッと潰した。

「ああ、そういえば私も過去に嫁を友に寝取られた、なんてことがあってな」

「……」

「こういう時は友である私に一言くらいほしいものだった」

「それが筋というものだと思うのだが、どう思う？ 貴公は」

「わ、私は……」

「ん？ どうした？ 貴公。額の汗がすごいぞ」

「す、すこし暑いですかね」

彼女は冷や汗掻きまくりの最強の騎士の肩に手を置く。

そして底冷えする声を吐いた。

「……貴様、何スロットだ」

「ひ、達海」

彼が助けを懇願するような目で僕を見る。

いや、助けに入ることはやぶさかでないのだけれど。

今の話の流れを聞く限り、この人とってもすごいことをやらかしているようだ。

略奪愛という背徳に理解を示すのはいかがなものか。

つていうかランスロットさん、さつきまで追い詰めていた人間に助けを求めるって……

先ほどまで抱いていた彼へのイメージは跡形もなく崩れ去り、ダメ男にしか見えなく

なつてきた。

人間は、悲しい生き物だね…

「あ、あの、ペンドラゴンさ…」

僕はそれでもかわいそうな彼の為に声を上げようとした。

瞬間、ペンドラゴンさんの視線がこちらに向いてやめた。

え、怖い。

視線で穴開くよあれ。

ランスロットさん。僕ではどうしようもなかったよ。

許せ。

二人して黙り込んでしまった男の前に、彼女は腰に掛けた紙袋を目の前に置いた。

机に置かれた紙袋はカシュツと音を立てて潰れた。

「私の携帯バーガーがなくなつてしまったのだが、誰かもらつてきてくれるものはいないものか」

「はい！私にお任せください！」

ランスロットさんは目の前の紙袋をとるとライダーのごとき速さで厨房にすつ飛んでいった。

えええ。

ここに置いていかないで。

彼の敗走を目にしながら、ペンドラゴンさんはため息をついた。

「あやつも変わらん。開き直って私に逆切れしてくるぐらいであれば、面白いのだが」

おそらくそれができる人間は騎士になれないのではなからうか。

彼女はもう一度溜息を吐き、僕の向かいの席に座った。

「あ、ありがとうございます。でいいんですよね？」

状況を見るにランスロットさんに詰め寄られているのを見て、彼女は助けくれたのだと思う。

多分、おそらく、割と。

…いや、だって最後の方、ただの意趣返しというか仕返しだったやん。

僕の言葉を聞くと、彼女は両足を机の上のせてふんぞり返った。

「礼はいらん。私はランスロット卿を貴様から離して、厨房に連れてこいとあの赤いアーチャーに言われただけだ」

ああ。

エミヤさん気づいてくれてたのか。

ありがとう。説明して置いてくれて。

「そういえば貴様、マシユと結婚するそうだな」

エミヤさん、そこは説明していないんですか。

しかもさつきよりも盛大な尾ひれがついているんですけど。

「ええつとエミヤさんは他に何か言ってますませんでしたか?」

ほおがひくひくするのを感じながらペンドラゴンさんに聞く。

「知らん。貴様を助けてくれと言われて、すぐに来たからな」

そっかー。すぐ来てくれちゃったかー。

「すぐ行けばハンバーガーを大量に作るとあのアーチャーがほざくから来てやったのだ」

ああ。納得。

「えつと誤解なんですけど、僕とキリエライトさんはそういう関係ではなくてですね」

「恥ずかしがるな。男なら堂々としろ」

「いえ、そういうわけではなく」

「だが女を娶ったのだ。ならば腹を決めて生涯愛せ。でなければ殺せ。異性関係はこじらすとろくなことにならん」

なんでみんな話を聞いてくれないのだろうか。

思い込み強くありませんか。英霊の皆さん。

「はあ」

僕がキリエライトさんに告白したってこと、カルデア中の噂になっていて言うってよな。

まるで意味が分からない。

何がどうやったらそんな噂になるのか。

だけど、それを知ったうえで思い返してみると食堂に入ってからあった違和感が全部説明ついてしまう。なんてこつたい。

どうしよう。

詰んでない？これ。

昨日あんなに迷惑をかけてしまったのに、今日になってこんなことになってしまおうとは。

キリエライトさんに申し訳ない。

カルデアの噂とか解決しようがないよ。

「どうしようよ」

頭を抱えて、溜息を吐く。

僕の頭にポンと何か当たった。

ん？

僕が顔を上げるとペンドラゴンさんがこつちを見ていた。

「どうやら、ペンドラゴンさんは手に持っていたクシャクシャの包み紙を僕の頭に投げたらしい。」

「なにをうじうじしているかは知らんが、貴様はもう少し胸を張れ」

「そう言い放つ彼女の表情は、極めて不機嫌であることを示していた。」

「周りをよく見ろ。貴様は客観的評価が下手すぎる」

客観的評価？

「自分で自分を駄目な奴と思うのは勝手だが、貴様を認める人間が少なからずいることを考えろ」

僕を認めている人間？

何を言っているんだ？彼女は。

「そんな人……」

「認めてない奴を夫にするほどマシユの目は曇っていないし、実力で人を判断できないマスターに仕えるほど私は愚かではない」

「だからそれは誤解で……って、マスター？」

「それに貴様はマスターを何度も守っている。確かにやり方は低レベルで、貴様自身は何度もけがを負っている。それにいちやもんをつける輩もいるが……」

彼女は包帯の巻かれた僕の右腕を見た。

そして鼻を鳴らした。

「そんなことは知らん。魔術師らしきだの、自らの信念だの、そんなことは結果の前には粗末なことだ。結果こそがすべてだ。少なくとも私はそこに信を置く」

彼女は顎で僕の背をさした。

「私以外にも結果を見ている奴がいるみたいだぞ」

振り返ってみると、何人かの職員が心配そうにこちらを見ていた。

僕が見た瞬間、彼らは全員、顔を食事の方へ戻ってしまった。

「まったく、私が貴様をいじめているみたいにみえるようだな。まあ、あながちまちがいでもないが」

彼女は僕の背から視線を戻した。

それにだ、と彼女は続ける。

「貴様はギャラハッドほどの騎士が認めた人間だ。貴様がマスターのように戦えずとも、貴様には貴様の戦い方がある」

彼女は僕に指をさす。

「例えば貴様の体を受け継がれた刻印」

僕は瞳孔が自然に広がっていくのを感じた。

「なんで…」



「確かに巧妙に隠蔽されている。おそらく魔術を極めたキャスタークラスですら見破れまい。だがどうも見覚えのあるやり方だな、ろくでなしのにおいがプンプンするのだ」  
彼女は不機嫌そうにしかめながら指を下す。

「なぜ貴様がその魔術刻印を使わないのか、私にはわからんし、興味もないが」

「これは、諸悪の根源です。これさえなければ僕は、僕たちはこんなことにならなかつた」

「これさえなければ…」

「……はっ。貴様にはそれが忌々しい過去の遺物に見えるようだな」

「ええ」

「だがな。そんなことを気にしている余裕があるのか？いつもはなりふり構わない貴様のそこだけが気に食わん」

彼女は腕を組んで、僕をにらむ。

これはもう使つていいものではない。

これは僕だけの問題じゃない。

僕の沈黙をどう受け取ったのか彼女はにらむのをやめた。

「まあいい。それを使わずともやっていけるのなら文句は言わん」

「そうですか」

ひそかに安堵の息を吐く。

「しかしな、自分の妄執にばかり固執して、周りの人間に目を向けなければ、いつか滅びを呼び込むぞ」

滅び…

そう言えばアーサー王伝説の最後は内部が分裂して、内戦で滅びを迎えると聞いたな。

「私と同じ轍は踏むな」

もしかしてこれは、彼女なりの励ましなのだろうか。

僕は高圧的な彼女の、憂いを帯びた視線を見てふとそう思った。

「…ありがとうございます。ペンドラゴンさん」

だからお礼を言った。

彼女は不機嫌そうにまた鼻を鳴らした。

「礼はいらんと言った」

周りの人間に目を向ける、僕は殻にこもりすぎているのだろうか。

…なんにせよ、このままではだめなのだ。

僕も変わらなければいけない。

「それはそれとして」

彼女は机から足を下すと、ちらちら横に目を向けた。

「はい、なんですか?」

何を見て…米びつ?

あつ。

「この赤飯は食べないのか?」

「…」

「どっちなんだ」

「食べます?」

僕は自分のお茶碗としやもじを渡した。

彼女は黙って受け取るとしやもじで食べ始めた。

S

朝、食堂でムニエルさんが「弟が革命を起こしたぞー！」なんて言うから、何かと思っただが、まさか達海がマシユに告白するなんてね。

「マシユ、達海くんにはなんていわれたの？」

「い、いえ。ですからそういうわけではなくてですね…」

あの弟に告白するほどの甲斐性があるとは驚きである。

というかそもそも、マシユに惚れていたという事実が驚きである。

「じゃあ、発電室の隣で何してたの？」

「それは、その…」

しかし、あいつが彼女を作るとはねー。

……

「ほら、凶星なんだろ。言っちゃえって。発電室の隣で何を発電してたんだ。なんて…」

「うわ。あんた最低ね」

「女の敵」

「下ネタ野郎」

「このムニエルがつ、ぺっ」

「いや！最後！俺の名前を罵倒として扱うのやめてくれませんか!!」

なんか悔しいぞ。

私はまだ彼氏いないのに。ぐぬぬぬ。

心の中にもやもやがふわふわ漂う。

くっ、帰れ。

彼氏できないミストどもめ！

納豆で成敗してくれるっ！

私は納豆をまぜまぜしながら、煩惱を退散させる。

「マシユは立花ちゃんのことお義姉さんって呼ばなきゃいけないね」

「いや！ですから…」

お義姉ちゃん…おお、なんと甘美な響きよ。

脳内のマシユが私を「お義姉ちゃん」と呼んでくる。

羽をはやしなから、何人ものマシユが私にすり寄ってくる。  
めっちゃ可愛い。

マシユ天使説、あるね。

はっ！我を失うな！わたし！

煩惱よ、去り給え。

くっ来るな。

あ、煩惱ずるいぞっ！

マシユの姿で近寄ってくるんじゃないっ！

振り払えないじゃないかっ！

くそう。

「で立花ちゃんとしてはどうなの？弟君とマシユが付き合うの？」

VRマシユ（脳内天使Ver）と戯れていたら、マシユの周りにたむろしていた職員  
の一人が私に聞いてきた。

まったく、朝にマシユと向かい合って朝食をとるのが私の癒しだというのに。

はしゃぐな、ものどもよ。

良いかね、きみたち。

マシユはね、誰にも邪魔されず、自由で、なんとというか、救われてなきやあ、ダメな

んだ。

朝のマシユは拝むもの、異論は認める。

だがしかし、たしかにマシユの可愛さは一人で独占できるレベルを超えている。

ならば、皆がともにマシユを愛でられるよう、マシユ独占禁止法案を私は打ち出した  
い（錯乱）。

という考えを心に秘めて、私は答えるのである、まる。

「まあ、そうなたらおもしろいんですけどね。おそらく何かの間違いでしょう。達  
海にそんな度胸ありませんよ」

苦笑しながら、彼女に返す。

色々盛り上がったが、実際のところ何かの間違いだろう。

達海は色恋沙汰に興味がないわけではないが、あいつの好きなタイプはもつとガンガ  
ン言ってくるタイプだった気がする。

あ、でもマシユが好奇心旺盛なときは意外と言ってくるし、ワンチャン有り得ないこ  
とでもないか。

しかし、この情報を持ってきたのがムニエルさんという事実。

これで、あ、（察し）、状態にならぬものにマスターはできない。

他のみんなはあまり気づいてないかもしれないけど、レイシフト中彼の発言に振り回

されてきたものならわかると思う。

彼の発言は話半分に聞いておかないと無駄に疲れると。

てな訳で私は皆さんのように振り回されない。

決して達海に先を越されたのが悔しくて認めないわけじゃないんだからねっ！（殺気）

とみんなして勝手に盛り上げっていると、マシユが「あっ」と声を出した。

そして頬が朱に染まる。

その反応を見て、みんなしてマシユの視線を追った。

グルっ！つて効果音が鳴りそうなほど一斉にその方向を見た。

そこにいたのは案の定、呆けた顔をした我が弟、達海だった。

達海はみんなの視線が合った後、すぐに目をそらしカウンターの方へ歩いて行った。

馬鹿野郎！そんな軟弱でマシユが守れるかってんでえ！

俺の嫁に触れるんじゃない（キリッ）、ぐらいやってみせんかい！オラア！

と私は思ったのだが、彼らにはどうやら違った様子。

目を一瞬合わせたあとに顔を赤らめてそらす。

そんな初々しい雰囲気を目の当たりにした職員たちはさらに盛り上がってしまった。

「今の見た？ポツと顔赤くして二人で見つめ合ってたわよ」



「見せつけてくれんな〜」

「私も恋したくなってきたわ」

「俺も〜」

「というか弟くん、意外と初心？」

「彼、貰つていいですか？お義姉さん！」

今の盛り上がりすぎじゃないですかねえ。

というか最後！誰がお義姉さんか！

私は年上の義妹なんて持ちたくないよ！

「駄目でーす」

「えー」

職員の一部が文句をぶーぶーたれる。

そんな周りを見てマシユは少し驚いているようだった。

「マシユ？どうかした？」

「いい、いえ。皆さんが、その、先輩について話しているところはあまり見たことなかった  
ので」

ああ、そっか。

そう言えばマシユはあまり技巧部に来たことがなかったっけ。

彼女はレイシフトに関してとバイタルチェックで忙しいからあまり彼らと接点がないのか。

「うーん、そうだなー」

なんていうべきか

悩んでいるとムニエルさんが聞いていたのか、マシユに話してくれた。

「うちでは達海、わりと受けいいよ」

「そうなんですか？」

マシユが驚く。

「で、ですが、冬木から帰ったところ、先輩と礼装の説明をしてもらいに来た時はあんまり良い空気ではなかった覚えがあります」

「あーあの頃はね」

ムニエルさんは頭をかきながら苦笑い。

「俺たちもさ、一応カルデアに選ばれた面子で仕事するつて聞いたからここに来たわけで。最初は抵抗があった。立花の場合、わかりやすく活躍してきたからあまりそういうのはなかったんだけど」

確かに割とすぐ受け入れられた気がする。

「だけど達海のやつはさ、律義なんだよ。作った礼装の使い勝手とか、その改訂理論とか

をわざわざ報告書べつにして俺たちに届けてくれるんだよ。立花は全くそういうのしてくれないからな」

「いや、だってそういうの分からないし」

ガンドがドンツツて飛んだら相手がビリビリって痺れた、つて報告書書いたらすごい怒られた。

分からないのに怒られてもなー。

納得いかんばい。

「俺たちも素人考えって思ったんだが、読んでみるとすげえんだよこれが。あいつの理論、面白いんだよ」

これを聞いたときは私もびっくりした。

でも家の達海の部屋に、難しい論文みたいなものが散乱していたのを思い出して納得した。

「それでさ、あいつと魔術理論を話してみるとこれまた面白い答えが返ってくるからさ。飽きないんだよな。愛想は相変わらず悪いけど」

マシユは心底驚いているようだった。

「先輩にそんな特技が…」

「あいつ自分から理論の話、絶対にしないからな。もったいないよなー。今からでも技

巧部に来てくれないかなー」

ムニエルさんが嘆く。

「なんで人事変更とおして…」

ムニエルさんが何か言いかけたときだった。

「あれ、ランスロット卿じゃない？」

職員の一人がカウンターを指さしながらつぶやいた。

カウンターを見てみると、何やらあたふたしているエミヤとなぜか米びつを持っているランスロットが達海の前にいた。

あー、あれはあかんかも。

達海とランスロットは何やらつぶやくと、制止していそうなエミヤを背に歩いて行つてしまった。

「あの穀粒し…」

般若の形相でマシユが言いかけたとき、職員の一人が言った。

「あれ、まずくね？」

「いや、でもランスロット卿だし」

「何を話すか聞いてみたい」

「よし、弟君の周りの席に座って聞いてみましょう」

「いくか」

彼らはそんなことを話すと達海たちの後を追って行ってしまった。  
君たちは修学旅行中の学生か。

せわしなく去ってしまった彼らを見て、マシユは啞然としていた。  
「まあ、そんなわけで技巧部ではあんな感じ、らしいよ？」

## 食堂前線（3）

「ほら、この席に座って！」

先走った技巧部の職員たちに連れられて座ったのは、達海とランスロットが座った席から遠く離れた席だった。

「話を聞きに行くくんじやなかったんですか？」

野次馬根性で。

「そうなんだけど、近くに行くと感じづかれちゃうでしょ？ランスロットなんてそういうところ目敏いし」

「あゝ」

確かに、彼は平時でも周りをよく見ていそうだ。

「でもなんでこんな隅の席に？」

気づかれないようにするのはいいとして、ここじゃあ離れすぎて声を聞くどころではないのでは？

そんな私の疑問をよそに、技巧部のみんなはニヤニヤしながら机に集まり、机の上のある物体に視線を注いでいた。

黒い色のU字の何か。

光沢があり、それなりの硬度がありそうだ。

「何ですか？、これ」

この物体がなんであるか、見ているだけではてんでわからない。

隣のマシユも不思議そうに見ている。

「でも、何か……そう、動物の顎？の骨に似ているような……」

マシユの発言をきき、目の前にいたミスター・ムニエルは目を光らせた。

「その通りだ！これは人の顎を模して作ったからね！」

言われてみれば確かにそう見えなくもない。

でもなぜ顎？

というか、そもそもこれは何？

私の疑問はムニエルがすぐに解いてくれた。

「これは魔術と科学、両方の最新技術を惜しみなく注いで作った盗聴器だ！この顎はターゲットの口の動きを正確に再現し、声の高さ、大きさ、果てはイントネーションまでも真似して発声できる。さらにおおよそ半径50mまでならどんな会話も聞き取ることが可能だ！」

などと宣いながら輝いた顔で両手を広げるムニエル氏。  
すごいだろ？

いやさ、そりやすごいけどさ。

毎日マシユの声を真似して欲しいけどさ。

……盗聴器って言ったよね。

あかんくない？

犯罪臭がすごいんだけど。

「ムニエルさん……」

ほら隣のマシユも形容しがたい顔になってるじゃん。

「まあまあ」

苦笑いで私達を宥める技巧部の皆さん。

ここはみんなでドン引きするシーンじゃないんですか。

「そんな顔しないでって。悪用目的で作ったわけじゃないんだから」



「そうなんですか？」

嘘をつくな。

私だったら絶対に悪用する。

技巧部は訝しげな私の視線にたじろぐことなく、スラスラとこの盗聴器を説明する。

「マスターの仕事は戦うだけじゃないからね。レイシフト先で情報収集が必要になった時に、こういう道具があれば立花ちゃん達が楽できるでしょ？」

言われて私は、今までの旅を振り返る。

……確かに。

戦闘になるのはレイシフトしても状況が見えてくるまでは控えるし、特異点で一番やったことは今までも情報収集だった。

もちろん戦闘も重要だけれど。

「……なるほど」

… そっか。

やっぱりみんな私達の事を考えてくれてるんだ。

みんなが私達を気遣ってやってくれた事なのに、邪推をした事がなんだか恥ずかしくなってきた。

「……ごめんなさい。みんなが私達の事を考えて作ってくれたのに、失礼な事言つて」  
そう言つて私は頭を下げた。

「いやいや、頭下げなくつていいつて。なあ？」

ムニエルさんは照れ臭そうに頭をかいた。

「そうだぞ。こいつはこんな綺麗な事言いながら、この前廊下で話してたアストルフォとデオンの会話盗み聞いてたからな」

話を振つたら、あらぬ方向から背中を刺されてムニエル氏は慌てた。

「おい！ここはいい話で流すところだつたらろ！？」

彼の弁明虚しく、みんなの目は彼に向けられた。

「ムニエルさん……」

「ムニエルさん……」

「ムニエル……」

「あんた最低ね……」

「変態」

みんなの声は一つになった。

やっぱりか。

「そうじゃないつて！話ずれてるつて！」

額に汗を浮かべながら、彼は慌てて机の上の盗聴器を指差す。

「ほら！達海とランスロットの話が聞きたいからここに来たんだろ！！？」

みんなの白い目は変わらない。

「だいたいあいつらの話聞くのも立派な盗聴だろ！俺とやってること変わらないからな  
！！？」

それはそうだけど、あんたに言われたくはない。

「ほら、やるぞー！」

彼はU字の頂点を指で叩いた。

すると黒い骨の顎はひとりでに浮き始め、喋り出した。

『…………… 同じく極東の国である日本出身なのですよね？』

『え、ええ』

うおっ、きもっ。

顎が喋ってる。

というか、出身？なんの話？

周りを見ると皆、一様に顔を傾げている。

『日本では男性が満18歳、女性が満16歳からでないと法律上、結婚ができないと聞き  
ました』

『は、はい。そのはずです』

結婚？

なぜ、今そんな話を……… あっ。

「マシユ！」

急に話しかけた私に少し驚くマシユ。

びつくりさせてしまつてごめんなんだけど、今はそれどころじゃなくて…

「ど、どうしましたか？」

「耳ふさい……」

『とうことはつまり……マシユとは結婚を前提としたお付き合いをしたいということ

ですか？』

遅かった……

『え？』

『とぼけなくてもよろしい。朝からカルデア中で噂に上がっていることなのです』

あ、マシユの顔が……

「ま、マシユ？ちよつと落ち着いて……」

「……」

目の端を釣り上がっていく……

「ほ、ほら、あれだよ。ランスロットも心配っていうか、ね？あれだよね？ムニエル」  
「そ、そうだよな。やつぱり、ほら、一人娘だとな？なにかと心配……」

マシユは幽鬼のような人相で言葉を発した。

「娘………殺潰しの娘………」

いかん！

心に分厚い盾が！

シールダーさん！心を閉じないでっ！

「何やってんですか!?？ムニエルさん！他に言うことあるでしょ!?？」

「バカ！そもそも俺に話を振るんじやねえ！」

「困った時のムニエルでしょ!?？」

「俺は風邪薬か!?？」

オチ担当はあなたでしよう。

『……と物事には順序というものがあるのです！すなわち今回の場合、マシユに愛をささやく前に！父である私にも一言伝えると……』

ランスロットというか、顎が喋り終える前にマシユが席を勢いよく立った。

目の中に、光がない……だと……

「ツブス……」

あ、これやばいやつだ。

私は立ってマシユの肩を引いた。

って強よ!?

体重かけてるのにひきずられるんだけど!?!?

「マシユ落ち着いて!ほら!みんなも抑えて!」

「お、おう!」

3人がかりでマシユを止めようとする。

うおお。止まらなねえ。

「マシユ!冷静に!」

「行ったら俺らが聞いてたこともバレるって!」

「とかいうか行つて何する気!?!?」

「ゴクツブシ……ハ……ダマツトレ……」

「あんた本当は冷静でしょ!!?」

「あ、ちよつと!ムニエル何やってんの!盗聴器止まっちゃったんだけど!今いいところなの!」

「そりゃ魔道具だからな!魔力を注ぐのと対象の距離にうまく周波数合わせないとそ

りや止まるよ……てか、お前らも手を貸せって！」

止まって！マシユ！

あ、礼装はまずいって。ちよつと落ち着いて！

## §

まさか、たったの5分で10合ほどはあつたであろう赤飯を、一人で全て平らげてしまつたと誰が思うだろうか。

いや、思わない（反語）

ペンドラゴンさんってすごいなあ。

彼女は口の中のお米を飲み込むとしゃもじを置いた。

「なかなか美味であつた」

「それは良かったですね」

「私はジャンクを好むがたまにはこう言うのも悪くない」

そういえば彼女の霊基は反転しているんだったか。

霊基の変化って食事にまで影響を及ぼすのか。

「祝いのために用意されたものには何であれ、それ相応の幸が含まれる。この体は鈍感だが相反するものを取り込むには都合がいい」

「はあ」

幸、幸せ、祝詞。

祝福の思いというのは方向性が違うだけで、呪いの類とあまり違いがないように思えてしまう。

こういうのは魔術を学んだ弊害なのだろうか。

客観的とも言えるが、物事を悲壮的に捉えるには僕はまだ若い気がする。

それはそれとして：

「あの、ついでですよ、食べ残し」

そう言つて僕は彼女にハンカチを差し出した。

こんなにキリツとした顔なのに口に食べカスが付いているだけで子供っぽく見える。

彼女は僕のハンカチを無言で睨みつけた後、鼻を鳴らして腕を組んだ。



「貴様が拭え」

「……………」

なんでさ。

「上の者の失態は黙って拭うのが臣下の務めだ」

僕はあなたの臣下ではない。

というか顔に食べカスつけたままで、なぜここまで不遜な態度ができるのか。  
王つてすごいな。

僕は言われた通り黙ってハンカチで彼女の口もとを拭いた。

「それでいい。」

彼女はそう言って立ち上がった。

そして赤飯の入っていた米櫃と空になったお椀ののったトレーを担いだ。

「ではな」

そのまま厨房の方へ歩いて行った。

……あれ？いつのまに僕の分の食事まで食べたんだ？

気づかなかった。

というか僕の朝食は？

今日は朝飯抜きでシユミレーションですか。

嘘だ！僕はペンドラゴンさんが怖くなっただんで嘘をついているんだ！  
嘘だといってよバーニイ。

僕のポケットの中に戦争は起こってないよ。

「はあ」

これからの空腹にため息をつけて机に頭を落とした。

頭がカサツと音を立てて何かに当たった。

「ん？」

これはさつきペンドラゴンさんが僕に投げたハンバーガーの包み紙か。

ため息を再度吐く。

食器を持って行ってくれるなら、ゴミもちゃんと片付けてくださいよ……

クシャクシャに握られた紙を見てるとふと思う。

ハンバーガーの包み紙を捨てる時って性格出る気がする。

僕は神経質だから、捨てるものでも綺麗に畳んでおかないと気が済まないたちなんだ

よね。

他人が口をつけたゴミを開くのも抵抗があるが、それ以上に不規則に纏められた紙が

気に入らない。

神経質だが潔癖症ではない僕の性質に、僕自身が首を傾げながら紙を畳もうと開い

た。  
「ん？これは……」

§

「魔術刻印？」

何とかマシユの暴走を抑えきつた私たちは、ヘトヘトの思いで盗聴器を再起動した。その時に聞こえてきたのは、あまり聞き覚えにない単語だった。

達海の体に魔術刻印があるとかないか、アルトリアが言つてた。

そもそも魔術刻印ってなに？

「ねえ、マシユ。魔術刻印ってなに？」

よく分からなかったのでやっと落ち着いたマシユに聞いてみた。

マシユは何故だか困惑していたが、説明してくれた。

「魔術刻印というのは簡単に言ってしまうと、魔術師の家系で代々伝えられてきた独自の魔術体系の事です」

「魔術体系？ システマチックって意味合いの？」

「そうです。論文や理論と言ったイメージに近いかもしれません」

マシユは眼鏡をクイッとあげる。

あ、なんか先生っぽい。

「ほとんどの魔術師は根源へと至るために研究をしているっていうのは立花さんもご存知ですよね？」

「うん。何度か聞いたよ。その根源っていうのがよく分からないけど」

その謳い文句はカルデアの職員からもよく聞くんだけどイマイチしっくりこない。

マシユはそこから説明しましょうか、と言って服をただした。

「根源というのは魔術師の方々が使う専門用語みたいなものですね。彼らは世界のあらゆる事象の出発点になったものをそう呼びます」

「出発点？」

「立花さんに馴染み深い科学的な言葉で表すと……宇宙誕生のビックバン、というの

「近いでしょうか」

「あく。なるほど」

「確かに始まりだ。」

「でも何でそんなことが知りたいの？」

「根源というのは全ての始まりであり、事象全ての原因とも言えます。それは誤解を恐れず言えば、世界全ての真理を究極的かつ完全に補完する知識です。原因を説明すれば、結果は自ずと知れますからね。学者としてはこれ以上に知りたいと思うことはないでしょう」

「……つまり、ちまちま研究するのは面倒だから大元を知っちゃおうってこと？」

私のふんわりした回答にマシユは微笑する。

「その理解でも大丈夫だと思います。言わば、彼らは帰納的ではなく演繹的に論理を推し進めたいわけですね」

「なんか高校でやった気がする。」

「数学的帰納法とか、デカルトの演繹法、パソコンの経験論？ だっけ。」

「授業聞いてなかったからあんまり覚えてない……」

「理解できてないのが伝わったのか、マシユは嘸み砕いて説明してくれた。」

「例えば重力という存在を知っていたら、リンゴを空中で手放した時、落ちるとするのは

分かりますよね？」

「うん」

「これが普遍的事実、言い換えるとあらゆる物事に通用する法則から個々の事実導き出すというもので、これが演繹法です」

ふむふむ。

「逆に、リンゴやミカン、桃などは全て空中で離したら地面に落ちますよね。このことから重力という存在があるのではないかと推測するのが帰納法です」

「一つ一つの事実から法則を見つけ出すってこと？」

「その通りです」

なるほど。

「そして二つの違いの一つには演繹法が必然性を持つのに対し、帰納法は蓋然性を持つという事です」

「蓋然性？」

またよくわからない言葉が出てきた。

「蓋然というのは、あるいはそうであろうと思われるさまのことを言います」

「そうであろうと思われるさまっ。」

「はい」

マシユは頷く。

「演繹法は前提が普遍的な事実ですから、その法則が個別の出来事に通用するのは明らかです」

「どうゆう事?」

「全ての物を地面に引つ張る重力というものがあれば、空中で離されたものは確実に地面に落ちるといふ事です」

「当たり前じゃん?」

空中で離しても宙に浮いているリンゴがあつたら怖い。

「はい。当たり前です。そしてその当たり前こそが必然性と言えます」

それが起きるのは確實つてことか。

必然的に、とかよく言うもんね。

「しかし帰納法にはその必然性が存在しません」

「なんで?物がみんな落ちれば、重力はあるつて事でしょ?」

「まさしくその通りですが、それは全てのもので成り立つ必要があります」

「全てのもので?」

「リンゴやみかんだけでなく、ペンやボール、トウキョーのビルやアマゾンの動物、果ては宇宙の端の小惑星など。この世界に存在するあらゆるものを空中に離し、地面に落ち

ることを確認しなくてはなりません。全ての物が落ちることを証明して、重力は初めて普遍的法則と言えます」

「そんなことは・・・」

「はい、仰る通り不可能です。ですから帰納法は蓋然性、つまりそうであろうと思われる、という所までしか持ち合わせません」

「でもそんなこと言ったら重力だって、物が落ちてるところを見て、人間が勝手にあるって決めただけじゃない？」

私の疑問にマシユは頷く。

「その通りです。自然界の法則というものは今知られていることを含め、全ての物が帰納的に推測されたものにすぎません。極端にいうと重力なんて物は本当は無くて、人間の立てた物理の理論を神様があたかもそういう法則で動いているように見せているだけ、という可能性すらあります」

「研究したって本当かどうか分からないなら、研究する意味なんてないんじゃない？」

「だからこそ魔術師は根源へ至ろうとするのではないでしょう。普遍的法則というものが分かれば全ての事象は確定的な事実と読み取れます」

「それはそうだけど。どうやってそんなことを知るの？」

それができないから、皆周りの小さな事柄から考えているんじゃない？



「そこで用いられるのが魔術です」

「ここで魔術になるんだ。」

「根源は未だに人が到達していない領域です。これは逆説的に言うともまだ明るみになっていない事柄を伝っていけば、いずれ根源に至るとも言えます」

「そう言えなくもないけど、随分強引な解釈だ。」

「従って根源へ至ろうとする魔術師たちは、各々がまだ明るみに出ていない真理、即ち神秘を研究します。これらが結果的に魔術と呼ばれています」

「へ〜」

「魔術ってそんな曖昧な理由で研究されてるんだ。」

「ん?」

「魔術ってみんなから聞くとところによると、世間から隠されてるってイメージなんだけど」

「そうですね。魔術は一般の人々から秘匿するのが魔術界隈で暗黙の了解です」

「でもその根源?への道筋とか方針とか大分曖昧なわけじゃない?」

「公表されている情報に関して、その通りです」

「そうだったら大学とか学会みたいにみんな情報交換をして、大人数で体系立てて行った方が効率いいんじゃないの?」

魔術師って効率重視なんじゃないの？

私の質問にマシユは苦笑した。

「科学的見地からすればそうなのですが、魔術的な見解は違うんです」  
「？」

「彼らにとつて研究の公開とは、神秘からの下落を意味します。人々に知られてしまえばもはやその研究は神秘では無くただの情報で、その行動は根源から離れていくことだ、と」

「えええ。なにそれ……」

なんか逆説的過ぎないだろうか。

私の表情はおそらく今苦い。

「これは確かに手段の目的化と言えるでしょう。根源に至るために神秘を知るはずが、神秘として維持しなければ根源から遠ざかってしまう。ある種のパラドックスですね」「秘密にする必要なくない？ 神秘じゃなくなるって勝手に思い込んでるだけでしょ？」

それがそうとも言えませんとマシユ先生は言う。

「魔術では信仰や人の意識というものが強く関わってきますので、一概にはそう言い切れません」

また数えられないものが出てきた。

人に意見を求めることもできない。明確な数値として比較できるものも少ない。そんな学問がなぜここまで発達したのか。

少なくとも私は今まで、目標を立てたら自分がやるべきことを数字にして、明確にしてから行動してきた。

分からない事があつたら人に聞いて、学びながら動いてきた。

そんな私にはこの魔術のルールっていうものがちつとも理解できない。

「でも一人で頑張つたつて、人間たかが知れてるよ」

「そうです。魔術師もそれが分かっています。そのため、彼らはあるものを作りました」

「あるもの？」

「はい。それが魔術刻印です」

あ、話が戻ってきた。

「彼らは自分だけで根源へ至ること諦めました。そして今までやってきた自らの研究を後世へと託すことにしました」

「子供に教えるつてこと？」

「そうです。彼らは今までの研究を刻印として体に刻むことで、自らが築いた成果を残し、自分の後継ぎに根源へ至ってもらおうと考えました」

「体に？」

「その家系の魔術師が研究してきた神秘を後継ぎの体に固定化する事で先代の研究を受け継ぐ。こうやって魔術師の家は代々繁栄してきました」

「つまり魔術刻印って……」

「祖先の研究、です」

「そうか。じゃあ達海には……」

「私のお父さんとお母さんに研究が達海受け継がれてるってこと？」

「そう言うことになります。ですが……」

マシユの表情はまた曇る。

何か変なところがあるのだろうか？

「どうしたの？」

「いえ、その……」

マシユが口ごもる。

何かあるなら言ってもらわないと素人の私は何もわからない。

私は次の言葉を待ったが、マシユは一向に口を開こうとしない。

そうして1分ほど過ぎた。

見兼ねたのか、隣のムニエルさんが口を開いた。

「魔術刻印の移植って基本的にはさ、事前にも万全の準備をしておかないと上手くいかないんだよ」

「そうなの？」

準備？

「ああ。それも大分入念なものだ」

「そうなんだ」

じゃあ、達海も結構大掛かりな手術をしたってことになるんだろうか。

少し心配になってきた。

「達海の体に負担がかかってるってこと？」

「いや、それもあるんだが」

煮え切らない返事をするムニエルさん。

何かあるならはつきり言って欲しいんだけど。

「つまり、なんなの？」

要するになにが言いたいんだろうか。

「その、だな。立花のご両親ってカルデアに来る少し前に亡くなったんだろ？」

「うん。そうだけど……」

ムニエルさんは眉をしかめながら、言いにくそうに口を開いた。

「つまり、亡くなってすぐに刻印を移すなんて不可能なんだよ。事前に準備して置かないと」

「え……………」

「遺体から刻印を移すのが不可能ってわけじゃない。前例もある。でも何の準備も無しに行うのはとても難しいし、大抵の場合は魔術協会に押収されちまう」

周りのみんなは一樣に表情が重い。

「じゃあ……………」

「少なくとも藤丸家の誰かは立花のご両親が亡くなることをわかって、移植の準備と協会との折衝を前持って進めてたってことになる」

「でもお父さんとお母さんはそんなこと……………」

「だろうな。言い方は悪いけど、自分達が暗殺されるのに、子供を残して飛行機に乗るとは思えないよ」

え、いや。

ちよつと待って。それって。

「待って……………」

「推測だし、当時の状況もわからない、けど」

「ちよつと待ってって！」

「少なくとも達海は、かなり前から両親が死ぬことをわかっていたってことだ」

## §

「ここ、であつてると思うんだけど」

僕は人気の少ない廊下通り、ある部屋に入った。

ペンドラゴンさんが僕に投げた包み紙を開くと綺麗な英語で “管制室裏手の倉庫に  
来い” っつて書いてあつた。

なんであんなふうに伝えただろう。

こんな回りくどいやり方しなくても直接言ってくれば、すぐに行くのに。

「ペンドラゴンキーン！ー！いますかー！」

広々とした倉庫の中は電気がついておらず、薄暗い。

「いるなら電気つけなければいいのに。とうかやたらと広いな、この倉庫」

あまり周りが見えないので、手探りで壁づたいに電気のスイッチを探す。

「うーん、どこだ？」

にしても、なんでこんなところに倉庫があるんだろう。

立地悪いし、使ったことないんだよな

あ、そういえば、この倉庫って元々は所長室だつて誰かが言っていたような…

「痛っ！！？」

何かが肘にぶつかって落ちてしまった。

バサバサつと紙が落ちるような音がした。

やばっ。書類でも落としてしまったかな。

落としたものを拾おうとしてしゃがんだ時、ズボンのポケットに違和感があった。

それで自室を出る前に、携帯端末を入れたのを思い出した。

そうだ。このスマホのライトで照らせばいいじゃん。

僕は携帯端末のライトをつけて、足元を照らした。



やはり落としたのは何かの書類だったようだ。

棚に乗せてあったものが肘にあたって落ちたらしい。

僕はそれを片付けようと足元に手を伸ばした。

そのとき、書類の文字が目に入った。

「なんだこれ？」

書類には先代所長の名前が署名されていた。

そして妙なことが書かれていた。

「ペーパームーン？アトラス院からの寄贈？………ゼロ、セイル………？」

## 侵入

「虚数潜行……… すごいで、これ………」

ペンドラゴンさんに言われて来た管制室裏手の倉庫。

暗い倉庫の中を手伝いに移動していた時、偶々ひじをぶつけて落としてしまった書類の内容は非常に興味深い内容だった。

虚数観測機ペーパームーンを用いて、虚数空間を観測し、実数空間における存在証明を外し潜行。

実数空間に浮上する場合は、逆行程で浮上。

……… すごい。

あると定義しなければ、存在すら成立しない虚数空間をここまで能動的に活用するなんて。

一体これを考えたのはどんな天才だ。  
ペーパーマン。

コンセプトを含め、カルデアにこんな大層なものを寄贈してくれたアトラス院には一度魔術をご教授願いたいものだ。

この技術、すごい使ってみたい。

虚数潜行、めっちゃやってみよう。

しかしカルデアで実用化されたのはレイシフト。

どうやらこの技術にはお蔵入りされるだけの理由があるらしい。

主な問題点は3つ。

一つは虚数空間への潜行とそこからの浮上が非常に困難な点。

虚数空間に入るとは物質的な世界を抜け出し、時の海へと入る事を意味する。

時の海は僕たちの住む世界の隙間だ。

水面を出入りするのはわけが違う。

イメージとしては冬の川であろうか。

表面は寒さで凍って分厚い氷盤で覆われているが、分厚い氷盤の下は溪谷の傾斜から濁流となっている水の流れ。

岸が実数空間であり、氷盤の下の濁流が虚数空間だ。

このとき、岸から氷盤の割れ目を見つけて濁流の中に入ることも、濁流の中から氷盤の割れ目を探し岸へと上がることも、非常に難しいことは言うまでもないだろう。

氷盤の割れ目を見つけ出せなければ、そもそも濁流に入れないし、濁流に入った後も水の流れに翻弄され、氷盤から顔を出せなければ窒息して死んでしまう。

このように虚数空間への出入りは容易にできるものではない。

ペーパームーンを用いてもその成功率は3割にも満たない。

生還率が30%以下の潜水艦なんて、対潜水兵器が発達して鉄の棺桶とまで言われてしまった第二次世界大戦中のドイツのUボートより低い。

3回に2回以上は失敗するならば実践登用はほぼ不可能と見ていい。

問題の二つ目は、浮上には何かしらにアンカーを打たねばならない点だ。

虚数空間に入り込むと、現実から存在が消失する。

存在を証明し、再び現実へ復帰するためには何かしらの目印を必要とする。

それにアンカーを打ち込み、実数空間へ引き上げる。

この行程無くしては、虚数空間から出るとは叶わないし、出る場所を限定することもできない。

問題の3つ目は、虚数空間は時間の積み重ねが行われていない点だ。

世界が存在するのは何かしらの事象や変化が起きているからだ。

そしてそれらの変化は時間として認識される。

すなわち世界は時間という概念によって成り立っている。

だが虚数空間ではこの時間の積み重ねが存在しない。

一度入れば、自分の生きていた時間の流れから飛び出してしまう。

すると空間内で時間の経過を感じなくても、実数空間に戻ってきた時、虚数空間に入ったときから何年も経っていたなんて事が起きる。

虚数空間で体感的に100年たったと思っただのに、出てみたら1秒しか経っていなかった、なんてこともあれば、虚数空間に10秒しかいなかったのに出てみれば100年経ってました、なんてこともありうる。

いわゆる浦島太郎だ。

この時、体感した時間と実際経過した時間の差は負担となつてその者に襲いかかる。従つて虚数潜行の際は、外部空間との時間の誤差を認識し、誤差を正しながら進まなくてはならない。

ゼロセイルの発案企画をさらつと読んだだけでもこの通りだ。

これを実用化するのは非常に難しいだろう。

しかしそういつてお蔵入りさせるのは、平時であればの話だ。

通常通りカルデアが運営していれば大きな問題もなく、安定性の高いレイシフトを放つてゼロセイルを行うメリットは低い。

しかしこの状況下では、ゼロセイルは大きなメリットを持つ。

そもそもにおいて、現状のカルデアはとても大きな欠陥を抱えている。

まず、レイシフトは個人の才能に大きく依存しすぎるという事だ。

レイシフトを行うには、高いレイシフト適性を持つていなければならぬ。

そして特異点の修復を行うために英霊を呼び出すためのマスター適性も必要だ。

これら2つの才能を兼ね備え、なおかつ魔術に対し造詣のある人物なんて非常に限られる。

世界中探したって何十人といないだろう。

実際、招集したマスター候補生は37名で、残り10名は数合わせの一般枠になった。それが今や僕と姉さんの2人だけ。

現場で確実な戦力が2人って、普通ならありえない。

そして2つ目の欠陥はレイシフトのための重要機器の全てが、プロメテウスの火によるエネルギー供給だけで動いている点だ。

ビックデータベースである事象記録電脳魔・ラプラス。

未来観測とレイシフト補正を行う擬似地球環境モデル・カルデアス。

カルデアスの観測を行う近未来観測レンズ・シバ。

英霊召喚の要、守護英霊召喚システム・フェイト。

そして未来観測とレイシフトの管制を行うコンピュータであり、カルデアの心臓部、

霊子演算装置・トリスメギストス。

これら全てをカルデアの最下層にある動力炉、プロメテウスの火で支えている。

もしプロメテウスの火が停止してしまつたら、カルデアの重要器官が全て止まる。

発電室の予備発電機をフル稼働しても、もつて半日。

炉の修理を終わらせる時間稼ぎにしかない。

全ての施設の動力源を一つの炉だけで賄うのは、機能的にも、保安上にも大きな問題である。

少なくとも、炉を分け一斉停止が起こらないよう、リスク分散に必要がある。

そして最後の問題点。

それはここカルデアには対外的な防衛機構がほとんどないこと。カルデアには敵から攻め入られる想定がされていなかったのか、カルデアを守る恒常的な防衛戦力が備え付けられていない。

そのため、もしも敵がカルデアスの磁場によって独立したカルデアに攻め入るような事態になれば容易に制圧される。

サーヴァントが居れば問題はないが、上記の通りサーヴァントの現界を維持する召喚システム・フェイトはプロメテウスの火によって動いている。

もし敵に侵入を許したとき、それを想定していない僕らは敵に奇襲を許す。そして僕が敵なら、初手でプロメテウスの火を潰す。

そうすれば一部を除いてサーヴァントは全て消滅するだろう。後は丸腰のカルデア制圧するだけである。

とまあ、カルデアには大きな欠陥がいくつか見られる。

なぜこの欠陥を備えながらも、マリスピリー氏がカルデアを設備したのか。僕が思うに、予定通りのカルデアならこれらの対策が可能だったからだ。

人理の消滅がなく、カルデアが孤立していなければ、まずマスターは48名用意できた。



プロメテウスの火を常時点検するだけの人員と資材、そして予備の動力炉を取り寄せ  
ることも可能だ。

そしてここまで余裕ができるなら、守備戦力を常駐させることもできるだろう。

これらは全て出来たはずだった。

そう計画されていた。

しかし現状はこうだ。

カルデアは孤立し、大きな欠陥を抱えざるをえなくなつた。

だが、ゼロセイルが実現できるのならば、それらの全てを改善または補填できる可能性がある。

この書類によるとゼロセイルは個人の転送でなく、舟で行われる計画であつたらしい。

その舟が如何様なものかは分からないけれど、重要なのは乗り物で移動するということだ。

これはすなわち、個人の才能ではなく、技術のみで人を運搬することを意味する。

つまり舟の航行技術さえあれば、レイシフト適性がなくともマスターを特異点へ運ぶ

ことができる。

さらには一定の魔力量でマスターだけでなく、舟に同乗しているサポーター達も現地へ運ぶことが可能だ。

レイシフトのような個人単位ではなく舟一隻で移動するから、人が増えようと必要な魔力量もほとんど変化しない。

従って現場での人手不足はなくなる。

また独立した舟で遊撃すること自体が、一斉停止へのリスク分散となる。

そして移動拠点は仮想敵からの奇襲回避に繋がるだろう。

以上のように、このゼロセイルは今のカルデアをカバーするのにとても都合がいい。

まるでこの事態を想定して用意したみたいだ。

それなのに、なぜ実用化しない？

確かに成功率3割未満は問題だが、技術的な問題を解決するには非常に頼りになる人材がカルデアにはいる。

彼らに頼めばおそらくだが、実践登用に漕ぎ着けるのではないだろうか？

現状を維持しても確かに問題は起こっていない。

職員の誰に言おうが、プロメテウスの火は落ちないし、カルデアの場所を見つけること自体が不可能だ、と言うと思う。

だが、僕らの現状に立ち返って欲しい。

たつた2人のマスターで人理を救済しようなんて元々は誰も考えていなかった。

そもそも人理が焼き払われるなんて、誰もがありえないと思つた筈だ。

僕らの今はありえないことの積み重ねで出来ている。

だとするならば、敵が攻めてくることもカルデアが機能不全に陥ることも十分にあり得る可能性がある事柄だ。

こんなこと、ダ・ヴィンチさんやドクターならわかっている筈だ。

なぜこの技術を放っておいているのだろうか。

彼らは虚数潜行を知らないのか？

それとも……虚数空間に移動すると都合の悪いことでもあるのか？

「来たか」

声が出た。

書類から目線を上げると、すぐ近くにペンドラゴンさんが立っていた。

ああ、そうだった。

僕は彼女に呼び出されてここへ来たのだった。

彼女は僕の手元を一瞥し、ふっと笑った。

「…… 読んだか。やはり貴様は時間に縁があるな」

読んだ？

時間に縁？

「それってどういう……」

彼女が発した言葉、僕はそれを聞いたただそうとした。

しかし彼女は僕の問いには答えなかった。

「ふむ、やはり貴様は連れて行く事にしよう。貴様にはその権利がある」

彼女は書類の入っていた棚から分厚い紙の束を取り出すと僕に差し向けた。

「これにゼロセイルの基礎理論が全て書いてある。15分で読め。そして全て覚えろ」

「え？」

彼女の言った言葉が理解できず困惑する。

いやいや、そんな分厚い論文を15分で読むなんて無理だ。

というかなんで覚えるんですか。

彼女の差し出した論文に触れず、ただ見るだけで固まる僕。

彼女は紙の束をもう一度僕に突きつけた。

「早くしろ。貴様がこれを理解することが重要なのだ」

「これを……？」

「そうだ」

そうだって言われても。

何が何やら。

「どういふことですか？そもそもなんでゼロセイルを貴方が知っているんですか？」

先程から彼女はこのゼロセイルがなにかを知っている口調だ。

彼女は僕に何をさせたいのだ。

どうか何の話をしているんだこれは。

矢継ぎ早に質問する僕に論文を持たせ、彼女は言った。

「貴様の問いは最もであるし、答えたいとも思うが、今は時間がない。話は貴様がそれを

理解してからだ」

言い終えると腕を組んで、口を閉じた。

どうやらこれ以上は、僕がこれを読むまで言うつもりがないらしい。

事情が分からないと判断も何もない。

言われたままに動くのはあまり好きじゃないんだが……

彼女はこちらをじっと睨んでいる。

「はあ」

しようがない。

とにかく読むしかない。

§

「何だ………？」

特異点観測のため、管制室で近未来観測レンズ・シバを用いてカルデアスの観測をおこなっていたロマニ・アーキマンはある異変に気付いた。

微弱だが聖杯に似たような反応が見られるのだ。

消えたり、強まったり、特定の座標ではなく、不規則に場所を入れ替えて出たり消え

たりしている。

「特異点反応、なのか……？」

僕が作業を止めたことに気付いたのか、レオナルドが声をかけてきた。

「どうしたんだい、ロマニ」

「ああ、レオナルド。これを見てくれ」

僕は彼女にこの異変の観測データを見せた。

「これは、聖杯？」

レオナルドはデータを睨みつけて呟いた。

「でも反応が弱すぎる。それにこうも不規則に反応が点々としては特異点なんてできもしないだろうし……」

「どうやら彼女も僕と同じ結論に至ったようだった。」

「変だよな？これ。なんでこんなに反応が移動してるとんだろう」

聖杯が存在するとして、ある特定の座標にとどまらなければおかしい。

何者かが転送したにせよ、その時代、その場所で異変が起こってしまったにせよ、反応はその一点で起きるものだ。

「ここまで自発的に変動するなんて、聖杯の魔力を用いてもできることじゃない。」

「移動じゃないのかも…。」

レオナルドは手を顎に当てて、目を閉じて考えながら言った。

「移動じゃない？というと？」

僕の問いかけで目を開くと、いつも持ち歩いている杖を持った。

「時空帯に起きた波によって、魔力が揺れているのかもしれない」

「波？」

彼女は杖を床に軽くつくくと、杖は回転し先端のクリスタルが射影機のように3Dホログラムを映し出した。

「例えば、こんな感じだ」

彼女の指差したホログラムには海とその上に浮かぶ船が映し出されていた。

「海が私たちの世界、そして船が微弱な魔力を持つ遺物だとしよう。基本的にこの船は小さいから私たちの観測には映らない」

「ただ、と言って彼女は思い切り手を叩いた。

パンツと音を立てるとその手の近くのホログラムが振動し、波を作り出した。

「こんな感じで大きな衝撃を作り出すと、海が揺れて波が発生する。そうするとこの波で船は上下するだろう？」



ホログラムの海は大きな波を作っていて、船は波に乗って上がったのは波が去るとともに海を下ることを繰り返している。

「これと一緒にその地点にあった、反応しやすい遺物が時空帯の波で一時的に強く反応してる、つてことじゃないかな？」

彼女はそういうと杖を再び持った。

その瞬間ホログラムはスツと消えた。

「なるほど。この反応はそこにあるものというより、この波によって副次的に発生したにすぎないってことか」

元々そこにあつたものが強い衝撃を受けて一時的に活性化しているの過ぎないと。

とすると問題は……

顔を上げるとレオナルドは真面目な顔で言った。

「ああ。今考えるべきは、何が反応しているかではなく、誰がなぜこの波を起こしているかって事だ」

やはりそこだろう。

「この波が偶発的に起きる可能性は？」

彼女は首を振る。

「時空帯は地層みたいなものだ。時の積み重ねが結果的に流れを作っているように見えるだけで、それそのものは流れではなく帯だ。であれば波なんてものはほとんど起きようがない。よしんば起きたとして、これみたいに連続して何度も波が起こるなんてほばありえないと見ている」

「じゃあこれはやっぱり人為的なものか」

「99.9%そうだろうね」

ならばなぜこれを起こすのか。

「時空帯に波を起こすことで得られる情報は？」

「波が進む速度によって時代背景がわかる。あとは私たちがみたいに魔力を宿す遺物の捜索とか……」

うーんどれもじっくりこない。

そんなことでわざわざ時空帯に衝撃波なんて起こすものか？

手間の割に得られるものが少なすぎないだろうか。

どう考えても割に合わない。

僕らがあーだこーだ唸っている間にもこの反応は観測され続けている。

全く止まる気配がない。

僕らがシバで観測できる時代からずっと続いている。

連続で周期的だ。

ん？

ふと何かが頭に引つかかる。

継続的な波。これはいったいどんな意味を持つか？

一度聖杯や時空帯を切り離して考えよう。

人間の世界では通信や情報など多くの分野で波が使われている。

この中で周期的な波が利用されている技術は？

レーダーもしくはソナーだ。

「レオナルド。カルデアはカルデアスの磁場によって人理焼却を免れた。なら時空帯において本来カルデアがあるべき場所はどうなっているんだ？」

レオナルドは僕の質問に怪訝な表情をしたが答えた。

「おそらく空っぽだ。そこには何も存在していない。カルデアスの磁場はカルデアを囲っているだけで、カルデアと周囲の繋がりを守ったわけじゃない」

「じゃあ、もしその空っぽの場所に波が通ったら？」

レオナルドは少し考えた後、回答を出す。

「波は消えると思う。通すか跳ね返すかはともかくとして媒介するものがなければ波は消えてしまう」

「ということは反射波を計測した時、不自然な穴が一つだけあるってことだ……」

僕の眩きに対しレオナルドは怪訝な表情を崩すことなく言葉を返す。

「いや、例えカルデアが元あった場所を見つけたところで、ここを突き止められることは……」

「カルデアアスの磁場だ」

彼女は話を遮られてむっとする。

だがそれを慮る余裕はない。

「人理焼却を防ぐほどの磁場があるのなら、カルデアがここに飛んできたとき、その磁場が時空帯にそれなりのねじれを残したんじゃないか？」

彼女の表情がハッとする。

「その不自然な跡を伝っていけば、ここを見つけ出すことだって……」

「……可能だ。カルデアの位置を見つけ出すことはおそらくできる」

僕は耳のインカムを押した。

「オクタヴィア！聞こえるかい！」

数秒後返事が帰ってきた。

『どうしました？司令官代理』

「警報！それと全職員に到達！第3種戦闘配置だ！」

『は？第3種？？？どういうことですか？？』

「説明は後だ！とにかく今は……」

彼女に通達を促そうと思ったときだった。

カルデアが揺れた。

地震が起こったかのように激しく揺れ、たまらず床に転倒する。

「うわっ！？」

床に頭をぶつける。

なんだ？！？

一体なんだっていうんだ？！？

僕の隣でも音がした。

レオナルドも転倒したみたいだった。

「痛っ！？」

あまりの激しい揺れにデスクの柱に頭をぶつける。  
なんの揺れだ!?!?これ!?!?

まるで世界そのものが揺れるにも感じられたその衝撃は、しかしすぐに過ぎ去り、管制室は静かになった。

「いって、レオナルド無事かい?」

僕はぶつけた頭をさすりながら立ち上がる。

隣でも立ち上がる気配がした。

「ああ、大丈夫……。ロマニも大丈夫、みただね」

ふっと気を抜いた瞬間、警報が鳴り響く。

『システムエラー。システムエラー。動力炉とパスを繋げられません。予備電源に移行します』

エラー!?!?

今の衝撃でプロメテウスの火が止まったのか!?!?

そんな馬鹿な!?!?

「一体何が……」

管制室のセキュリティをプログラムを開こうとしたが瞬間、明かりが消え、管制室が

モニターの明かりだけに照らされる。

予備電源への移行。

重要機器に優先的に電力を割り当てる都合上、管制室であっても明かりが消える。

本当に動力炉が落ちたのか!?!?

あれだけのプロテクトをかけたのにあっさりと落ちたメイン動力炉に驚きが隠せない。

しかし僕の驚きはこの数秒後に更に上塗りされることになる。

「ロマンニ！」

「今度はなに!?!?!」

「カルデア最下層にビーストの反応がある!?!?!」

「は!?!?!」

ありえない。

なぜ。

「魔神柱だ!?!?!?!?!?!?!?!」

## 不振

「大体は頭に入れました」

僕はゼロセイルの基礎理論を読み終え、論文の束を彼女に渡した。

「ほう。随分早かったな」

彼女は感心した風で言った。

早かったなって。

あんたがさっき15分で読めとか言ったんじゃないか。

「ええ。まあ覚えたのは大まかな概要ですが」

どうも読み終えて思ったのだが、虚数魔術ってどこか僕の専攻分野に似ているところがある。

こう、なんていうか、論理の振り回し方が僕のと近いのだ。

親が陰口を言っているのを見て、似たような悪口を子供が言う感じ、みたいな…

まあいいや。

それよりも今は気になることがある。

「それじゃあ話してもらいますよ。ペンドラゴンさん、なぜ貴方はゼロセイルのことを



知っていたんですか？」

僕は彼女にそう問いかけた。

言い方は悪いが、ボツになった技術の論文を漁るほど、彼女はインテリではない。そんな彼女がこの技術知っているのは何故か？

何をする気なのか？

「それは……」

僕の問いかけに答えようと口を開いたした瞬間だった。

カルデアが揺れた

§

地震というのはカルデアにもあったのか。

カルデアがどこにあるのかよく知らないけど、そんなことを感じさせるかのような揺れだった。

バニヤンちゃん、カルデアをフルシエイクとかした？

「いたた…。」

ぶつけた頭をさすりながら顔を上げる。

周りを見渡すと、みんな尻餅をついていたり、壁に寄りかかったりしていた。

シミュレーション機材はそこら中に落ちて、さながらジャツクとナーサリーが遊んだマイルームのようである。

「みんなー？大丈夫ー？怪我してる人とかいないー？」

シミュレーション室の中にいた人は私の問いかけに、手を上げたり、大丈夫ーと言ったり、嬉しいの方法で返事を返した。

ぱつと見ただけで、動けないような人もいないみたいだし怪我人はいないようだ。

「よかった」

安堵の息を吐きながら立ち上がる。

「それにしても今の揺れは一体…。」

経験したことのない揺れだった。

地震とか今までなかったし。

カルデアがどこにあるのかは知らないけど、自然災害とは無縁の地にあるとばかり思っていた。

周りのみんなも作業しながらだけど「なんだよ今の」とか「爆発?」「サーヴァントだろ」と言っていてよく分からないみたいだ。

何かの事故?

とりあえずドクターに連絡とってみようかな?

そんなことをふと考えた時だった。

急に明かりが消え、シミュレーション室の機材は電源が全て落ちた。

「は???」

「なんで???」

あまりに唐突に起こったから、機材入力をしてた人たちが阿鼻叫喚の囃となった。

「おいおい、嘘だろ!」

「どうした?」

「シミュレーションの設定保存してねえよ!」

「え!?? また最初から打ち直すのかよ!」

「つーか、これ何? 停電?」

「カルデアで停電なんて起こるわけないだろ」

「さっきの揺れとなんか関係あるんじゃない？」

「あの揺れって結局なんだったの？館内放送ないし」

「誰か電気持ってない？」

「入り口近くに非常用の懐中電灯あったら」

「あったー。お、明かりついたよー」

うるせえ。

全員が言いたいことをいって何言ってるかよく分からない。

そもそもこういう時ってどうするんだっけ？

そんなことを考えた時だった。

『……』

室内に警報が鳴り響いた。

そのけたたましい警報の、耳をつんざくような音に私だけでなく部屋の中にいた全員が動きを止める。

『緊急！職員全員に通達！第3種戦闘配置！繰り返し！第3種戦闘配置！端末をすぐさま同期せよ！』

切羽詰まったような声で放送が流れた。

第3種？

何? どういうこと?

一瞬の閑静の後、シミュレーション室はすぐさま慌しくなった。

「第3種つて、嘘でしょ?!?」

「訓練であんな放送流すかよ! いいから動け!」

みんなの雰囲気之急に物々しくなった。

慌しくシミュレーション室から人が出て行く。

戦闘配置つて言つてたよね。

とりあえず私も礼装に着替えて管制室に行つた方がいいのかな。

「おい、立花! なにぼさつとしてんだ!」

機材入力をやめたムニエルさんが私のところへ来た。

「いや、こういう時、どうするんだっけって思つて」

よく分からないので素直に言つた。

そしたら彼の目が大きく開いた。

「はあ?!? お前、マニュアル読んでないのかよ?!?」

「マニュアル?」

「カルデアにきたとき配られたろ!」

あゝ、あの無駄に分厚い冊子か。

読んでて夏休み前の校長の話よりも眠くなつたから読むのやめちゃつた。  
マイルームのどっかに置いていたような。

私の表情で察したのかムニエルさんの目は呆れていた。  
すんません。

私、ゲームはファイリングで覚える派なんです。

「あーもう！これだから藤丸姉は！こういうとこ、弟を少しは見習え！」  
彼はため息をついた後、頭をガシガシかいた。

「マスターは何種にかかわらず戦闘配置の指令が下つたら、管制室だ！」  
あ、そうなんですな。

「礼装は？」

「着るに決まつてんだろ！お前は礼装なしで魔術使えんのか!?!」  
使えまぢえん。

「俺は3種で動力炉の整備に回されてるから地下に行くけど、お前もちゃんと行けよ！  
礼装来て、管制室！はい、復唱！」

「礼装着て管制室！」

「よし」

彼は私の方に手を乗せた。

「さっきのこともあるから弟のことが気になるだろうが、今はそんなこと言ってる場合じゃない。気持ちにはわかるが今は呑み込めよ。頼むぞ！立花！」

そう言つて彼はシミュレーション室から出ようとした。

あ、もう一つ聞いておきたいことが……

「ムニエルさん！」

出鼻をくじかれ、つんのめりそうになりながら彼は振り返つた。

「なんだ!?？まだなんかあんのか!?？」

これ言つたら怒りそう。

「第3種つてなに? いつもと何が違うの?」

果たして私の質問は彼を怒らせたようだ。

案の定、彼はこめかみに血管を浮かばた。

「だからお前はそんな危機感がないのか!」

危機感?

「第3種つてのはな! カルデアに外部からの攻撃があつた時に敷かれる防衛陣形だ!」

外部? 外部つてまさか……

「そうだよ! 今カルデアは攻撃されてんの! 分かつたら走れ!」

そう言つて今度こそ彼はシミュレーション室を出て行つた。  
カルデアが攻撃？

そうなこと……あるのか。

ハツとする。

ぼやつとしてる場合じゃない。

彼に言われたことをやらないと。

とにかく管制室だ。

私も走り出した。

§



「遅れました！」

5分ほど走って私は管制室に飛び込んだ。

管制室にはドクターにダ・ヴィンチちゃん、マシユに、オペレーターみんな、いつもの面子に加え、技巧部や医療部、兵站部などで見た人も立っていた。

「よかった！無事だったんだね！」

私の姿を見て、ドクターがほっと息をなでおろした。

「すみません。遅れて」

無事。

そんなフレーズを聞いて、私は事態が思った以上に深刻なことを感じた。

「いや、謝る必要はないよ。立花ちゃんの端末に何度連絡しても出なかったら、心配だったけど杞憂になってよかった」

あつと思つて端末を取り出した。

電源ボタンを押すとロウバツテリーの文字が映る。

「バツテリーが切れてました。すみません」

私は自分の不手際にもう一度頭を下げた。

私に見せた端末を受け取ったダ・ヴィンチちゃんは懐からもう一つの端末を取り出した。

「こまめに充電したまえよ。これの最も重要な用途は緊急時の連絡だからね」  
ウィンクしながら端末を渡してくれる彼女に、ありがとうとお礼を言って受け取った。

「それである、立花さん。先輩は一緒ではないんですか？」

端末の同期が完了していることを確認し、ポケットにしまうと、隣のマシユはおずおずとだが少し前のめりに聞いてきた。

「え？ 達海のやつまだ来てないの？」

彼女の言葉を聞いて、周りを見渡す。

ゆつくりと確認したが管制室にあいつの姿はなかった。

「そうなんです。てつきり立花さんと一緒にいると思っていたのですが……」

マシユは端末で達海の連絡先をタップした。

しかし何秒たってもコール音が鳴り響くだけで、通話は始まらなかった。

「連絡にも出られませんし」

コール音が響く通話を切ると、彼女はもう一度端末を戻し、ドクターを見た。

「ああ。達海くんの端末も電源が切れてるみたいなんだ。こちらでは端末の位置情報も

確認できない」

何をしてるんだ、達海をやつ。

こういう決まりごとは絶対守るのが私の弟なのに。

まさか何かあつたのか。

ダ・ヴィンチちゃんならと思つて見たが彼女も首を振る。

どうやらダ・ヴィンチちゃんでもどうしようもないらしい。

どうすれば、と思つたところでオペレーターの1人が口を開いた。

「弟くんのことを考えても今はどうしようもありません。それよりも現状の対処を優先すべきです」

「は？」

あまりの言い方に口から変な言葉が出た。

私の無礼ないいようにオペレーターは眉をしかめたが、それを無視して言葉が続けた。

「幸いにも藤丸姉はここにいます。現状でマスターである彼女を遊ばせておく余裕はありません。すぐに攻勢に出るべきです。司令官代理」

「いや、達海もマスターでしょ？何言つてんの」

そう思つてドクターを見た。

彼ならこんなわけのわからない判断はしないだろうと。

しかしドクターは口を噤んだ。

彼の眉間にはシワがより、いつもの笑顔はどこにもない。

「ドクター。何でも言わないの」

私の言葉が聞こえているはずなのに、ドクターは黙ったままだ。

「ちよつと！ドクター……」

「わきまえたまえ！藤丸立花！」

ドクターに話しかけようとしたら、先程意味のわからない発言をしたオペレーターに止められた。

なんだよ、こいつ。

「君は呑気に遅れてきたから知らないだろうが、今はもつと重要なことがある。第3種戦闘配置の意味もわからないのか？」

黒髪に眼鏡をした男。

若干欧州の血が入った鼻の高い顔でエリートなんてイメージがすつぽり当てはまりそうないけ好かない顔だった。

「知ってるわよ……ここが攻められてるってことでしょう？」

ムニエルさんに言われたばかりだが、この鼻持ちならない言動に屈するのは癪だ。

「だったらわかるだろう。廊下の明かりが非常灯になってた事にも気づかなかつたのか？」

「そんなの誰だつて見りゃわかるでしょ!!?」

「それが何を意味してるかわかるだろう?」

「停電でしょ!」

私の言葉を聞くとこの男は大げさにため息をついた。

なによ。

言いたいことがあるならはつきり言えつての。

「カルデアで今まで停電なんて起こったか?」

「起こらなかったわよ!それが何!」

「それは今までカルデアの地下にある動力炉が、大規模な電力の発電を常に休まず行つていたからだ」

「その動力炉が敵に壊されたつてこと!!?だつたらみんなの力を借りれば...」

この男はまたもや大げさにため息をつく。

「君のいうみんなとは、おそらくサーヴァントのことを指しているんだろうが、その戦力を維持しているのはなんだ?」

「それは私との契約でしょ」

「サーヴァントはマスターとの契約によって召喚され、マスターからの魔力で維持されるものだ」

あ。

「まさかあそこまで多くのサーヴァントを自分の魔力だけで現界させていると思ってるのか？」

そうだ。

彼らは皆、カルデアからの魔力供給に頼っている。

「分かったか？カルデアからの魔力供給が止まったと言うことは動力炉に何かしらの細工をされたと言うことだ。今、サーヴァントが維持できる時間は後わずかしかない。そのわずかな時間までに動力炉であるプロメテウスの火を取り戻せなければ我々は詰みだ」

「予備発電機は……」

「予備発電機はカルデアの施設だけに電力を回す計算で半日もつかどうかだ。サーヴァントの戦闘に魔力を回そうものなら、カルデアそのものが停止してしまう。それでは本末転倒だ」

偉そうな男は眼鏡を中指であげ、鼻を鳴らした。

「だから言ったのだ。君の弟を探している余裕はないと。分かったらさっさと礼装に着

替えて出撃の準備をしてこい！」

「こ、こいつ……」

「あ、あんたねえ……」

「そこまでだ！」

この偉そうな男に言い返してやろうと思ったが、声を上げそうになったところでドクターのストップがかかった。

「今ここで喧嘩をしても時間を浪費するだけだ」

彼は管制室のモニターを叩いて、地図を映し出す。

「現状は今カワタ君が説明してくれた。我々に人理修復という使命がある以上、優先順位が最も高い項目は特異点を修正する戦力の保持だ」

彼はポケットからレーザーポインターを取り出した。

「つまり最高戦力である藤丸立花とカルデア重要施設機能の維持。よって今の最優先目標は最下層の敵を可及的速やかに排除することとする」

え、つまり達海は放っておくってこと？

「ちよつむぐ」

私が反論しようとしたら後ろからダ・ヴィンチちゃんに抑えられた。

「人の話は最後まで聞きなさい。ね？」

彼女は私の口を押さえて笑いかける。

「ただしもう一人の戦力である藤丸達海を失うことは人理修復において著しいハンディキャップを被ることになる。ゆえに最優先目標と並行してだが彼の捜索を行う」

ドクター……

「もし彼のと思しき跡を見つけたら、状況によつては一度討伐を中断して捜索を行う」私とカワタとかいう男を含むみんなの顔を見渡してドクターは言った。

「これが司令官代理としての僕の命令だ。異論は許さないよ」

ダ・ヴィンチちゃん是我的口から手を離し、小声で言った。

「あのロマンニだぜ。少しは信じてあげないと可哀想だろう？」

「…… そうだね。 そうだったね」

いついかなる時でも私たちをサポートしてくれたのは彼なのだ。

彼を信じられないのは私たちの過去を否定するのと同じだ。

私は軽く深呼吸して心を落ち着ける。

ふう、私が焦つてどうする。

冷静さを失えば救える人すら救えなくなる。

よし、大丈夫。



「じゃあ、具体的な作戦だけど、」

彼はそう言いながらポインターを地図に向ける。

「敵はカルデアの最下層に顕現している。そしてこちらからの解析で敵は魔神柱だということが分かった」

その言葉で管制室はざわついた。

魔神柱!?!?

なんでカルデアに。

「敵の目的は不明。移動については何らかの転移を行ってきたと考えられる。こちらで調査中だ。ある程度当てはついてるけど、正確に判明次第追って伝える」

言い終えると横にいるダ・ヴィンチちゃんがりモコンのボタンを押す。

すると最下層の今の状態をモデルにして組まれたCG映し出された。

なんだあれ? 魔神柱が塔のようなものに巻きついてる?

「見ての通り、魔神柱はプロメテウスの火に巻きついてる。こちらの解析を見るに炉心の魔力を吸っているらしい。プロメテウスの火から魔力供給が止まったのはこれのせいみたいだ」

なるほど。

でもこれじゃあ……

「時間が経てば経つほどに魔神柱の魔力量は増えるってことか」

オペレーターの1人が私たちに好ましくない現状を正確に言った。

時間経過とともに魔神柱が巨大化していく映像が入る。

「その通りだ。我々は補給路の断絶だけでなく、敵戦力の肥大化と言う意味でも時間の制限を受けている。今回も時間は我々の味方ではない」

いつもと同じ。

ビビるようなことじゃない。

「従って我々の取れる選択は短期決戦のみだ。だが焦るばかりにプロメテウスの火を傷つけてしまったら、今後の特異点に支障をきたす」

これはそうだろう。

今回の襲撃で、カルデアは動力炉ありきだと身に染みて分かった。

「よって攻撃は一瞬で終わらせる」

一瞬？

「固有結界を宝具に持つサーヴァントに協力してもらい、魔神柱を動力炉から隔離。そしてカルデアと隔離している間に、残るカルデアの魔力のほとんどをサーヴァント一騎に注ぎ込み、一撃のもとに魔神柱を殲滅する。作戦の概要は以上だ」

ドクターの説明に一同は哑然とする。

ダ・ヴィンチちゃんは平然としてるけど。

一撃で殲滅。

言うは易し、行うは難し。

そんな簡単に行くのだろうか。

「これだけですか？」

マシユも心配そうに呟いた。

「ああ。今回はありものだけでシンプルに、だ。時間も無いし、襲撃を受けるのも初めてで、僕達にも経験がない。下手に高度な作戦行動を考えるより成功率は高いはずだ」

言い終わるとモニターは電源が落ち、非常灯がついた。

管制室でも非常灯かあ。

「何か質問はあるかい？」

質問…… あっそうだ。

「はい」

ふと思ったことがあり、手をあげる。

「はい。立花ちゃん」

「魔力補充の術がないのに彼らに宝具を使わせて大丈夫なんですか？」

あのいけ好かない眼鏡の言う通りなら、宝具なんて使ったら現界を維持できないのでは？

攻撃に魔力を使うなら、固有結界の維持にカルデアの魔力を回すのは難しいだろうし。

「本来は危ないんだけど、一部のサーヴァント、特にアーチャーには単独行動のスキルがあるからね。」

アーチャーで固有結界……

「エミヤ！」

「そう。彼に頼もうと思ってる。頼めるかな？立花ちゃん」

「了解です！」

なるほど。

確かに適任だ。

「他に何かあるかい？」

ドクターは聞かすが、周りのみんなは特に何も無いようだった。

それを確認したドクターは両手を叩いた。

「よし！じゃあ全員所定の位置について！詳細はオンラインに共有しておくから端末の

同期は忘れないでくれ！」

§

『緊急！職員全員に通達！第3種戦闘配置！繰り返す！第3種戦闘配置！端末をすぐさま同期せよ！』

警報の後、指令が下った。

第3種!!？

敵が来たってのか？

まさかさっきの停電は……

いや、今そんな事を考えてる余裕はない。

管制室だ。すぐに移動しないと。

「ペンドラゴンさん！話は後でまた聞きます！僕は管制室へ行くので貴方も……」  
「行くな」

彼女は外へ出るために扉の前に立った。

「いや、冗談言ってる場合じゃないんですって！そこどいて下さい！」  
「私は冗談は言っていないぞ」

もう！

彼女の脇から出ようと思い、足を一步出した。

その時、僕の顔をスンと風がないだ。

そしてわずかに前髪が切れ、床へと落ちた。

彼女は黒くなった聖剣を僕に向けていた。

「私は貴様に、行くな、と言った。お願いはしていない。命令だ」

剣を首筋に撫で、彼女はもう一度言った。

「これは命令だ。止まれ、藤丸達海」

## 戦闘

「これは命令だ。止まれ。藤丸達海」

アルトリア・ペンドラゴン・オルタは僕の首に聖剣を添えながら言った。

「どういう…：： こと、ですか？」

彼女の剣幕に足がすくむ。

なぜ？彼女は僕を止める？

今は決められた形式に則って、敵に対処することが最優先のはずだ。

僕がいないことが戦線に多大な影響を及ぼすとは思わないが、それでもやるべきことはある。

彼女は僕の質問に対し、剣を添えたまま答えた。

「貴様が行く必要はない」

要領の得ない言葉。

「こんなところで油売ってる時間なんかありません。敵襲ってことは、今この瞬間にも姉さんが戦ってるかもしれないですよ」

姉さんのサポートが僕らの仕事だ。

彼女だってマスターの安否が気にならないはずがない。

「……………」

しかし彼女は何も答えない。

「あなたのマスターが危機に瀕しうる状況なんですよ！」

彼女は僕の言葉で目つきを強めた。

「貴様がそうでなければな……………言うだけ無駄な話か」

彼女は聖剣の切っ先を僕の首から少し引いた。

さつきから何の話だ。

いい加減僕にもわかるように説明してくれ。

「今から貴様の首を跳ねる」

え？

「つまり今から貴様は死ぬ」

「何を……………」



「すまんな」

言い終えた瞬間、彼女は手首を動かした。

剣は滑らかな曲線を描き、僕の首へと吸い込まれるように動く。

— Time alter·cubed accelerator !

詠唱と同時に世界の時間は遅延した。

僕へと向かっていた剣はスローモーションへと変わる。

ゆっくりと首筋に迫る剣を体を引いて避けると、僕はペンドラゴンさんの脇を通り抜けて廊下へと走り出た。

全速で走り、廊下の突き当たりを曲がる。

その瞬間、世界の遅延が終わる。

「いっ!!」

心臓が破裂するような痛みを襲われ、思わず胸に手を当てる。

足を止め、歯を食いしばって痛みをごまかす。

「はあはあはあ」

待て待て待て待て。

僕を殺す？

何言ってるんだ。

訳がわからない。

「はあはあ、僕一人じゃ、どうにも、ならない」

さつきは運が良かった。

何も言わずに切られていたら、僕の首は体と永遠の別れを告げていた。

「とにかく連絡を……」

僕はポケットから端末を取り出そうとした。

「おいおい、嘘だろ……」

ポケットが中程からスツパリと切られていて、中身は無くなっていた。

これじゃ、誰とも連絡できないじゃないか！

「クソッ！」

他に連絡手段は各部屋の固定通話だが……

荒い息を整えながら天井を見る。

「タイミングの悪い！」

廊下の明かりがすべて非常灯になっている。

予備電源に変わったって事だ。

何があつたか知らないが、この場合固定通話は繋がらなかつたはずだ。

どうすればいい!?? 助けが期待できる場所は!!?

ここからなら管制室が近いが、こちらに攻撃を仕掛けてきたサーヴァントを放つておくわけにはいかない。

況してやそんなサーヴァントを連れて管制室になだれ込むなんてあり得ない。

令呪でマシユを呼ぶか?

だが呼んでどうなる? 僕と彼女だけで凌げるか?

背筋に悪寒が走る。

「やばっ!」

僕は慌ててその場所から跳んだ。

瞬間、硬い廊下の床を聖剣が上から易々と刺しぬいた。

「貴様、あんなものまで持つていたのか。流石に反応できなかつたぞ」

刺した剣を片手で引き抜いたペンドラゴンは、こちらを無表情に眺めてそう言った。

「固有時制御だろう? 自らの体を固有結界として体内の時間を操る時間操作の魔術。その魔術は貴様の家伝にはなかつたと思つたが」

すれ違いざまに僕のポケットを切つておいてよく言うよ。

「ちよつと魔術協会のクソどもと折衝する機会がありましたね」

僕は父さんの刻印を完全な状態で移植する事ができなかった。

あの偉そうなクズどもがイチヤモンをつけて父さんの刻印の一部を接収したからだ。だから交換条件に奴らの保管している刻印の株を一部渡せと言った。

この魔術を得たのはその時だ。

確か、衛宮家とか言う家紋の魔術だったか。

奴らが接収した刻印の中で僕の専門と同じ時間系統の魔術だったから目に付いた。

馴染むのには時間がかかったが、体系が似ているから使い方には困らなかった。

「今まで使ったところを見たことないぞ」

彼女は剣を下段に構えて踏み込みの準備をする。

「切り札はギリギリまで取って置くものですよ」

これを使わなかったのは、僕の刻印が少しでも露呈するような事態はなるべく避けたかったからだ。

下手に使えばまた抑止力に目をつけられかねない。

「しかし強力な分、負担は大きいだろう。その状態でそんな子供騙し、2度も通用すると思うまい」

彼女はそういうと踏み込んできた。

僕は床につけたまま詠唱する。

固有時制御は範囲さえ限定できれば応用が利く。  
何も自分の身体だけに作用する術じゃない。

——Time alter・back set !

彼女の足運びが急に止まる。

おそらく足だけが石になつてゐるかのよう感じているだろう。

「これは……」

この魔術は自身以外に作用させるにはあまりに煩雑な儀式を必要とする。

世界の修正力が強すぎるからだ。

「……停滞か」

だが僕の本来得意とするところは逆行の魔術。

これはそれを固有時制御の魔術に応用したものだ。

〃固有時制御・逆流〃

修正力の作用で術を使う対象の動きは停滞にまで拮抗してしまうが、それでも魔術で現界しているだけの枠組みが曖昧な英霊という存在にはある程度機能する。

「効果範囲は私の足だけか？」

「ええ、脚だけでも止まれば逃げるくらい時間は稼げるでしょう」

必要な魔力が多すぎて、部分的にしか使えないのだ。

それに結局は時間稼ぎだ。  
根本的解決にはならない。

早く姉さんのサーヴァントを呼んでもらうしかない。

僕は後ろへと振り返り、駆け出そうとした。

「甘いな」

身体が重い……？

走ろうとするが後ろから服を掴まれたかのような抵抗がある。

「風よ！」

後ろで叫びが聞こえたかと思うと、前から強烈な風が吹き、僕の体を後ろに吹き飛ばした。

「うおっ!!?」

身体が宙を舞い、内臓が浮遊する嫌な感覚が僕を襲う。

宙で彼女と視線が合う。

聖剣を後ろに構え、風を噴き出しているのが見えた。

風王結界か！

にしたって廊下で対流を起こすなんて、サーヴァントってのはなんでもありか!!?

「足を止めたぐらいで時間が稼げるはずもない」

落下地点で彼女は剣を構えて待っている。

おいおいおい！

「空中なら体内時間を変えたところで何もできまい」

そうして振られた彼女の剣は容赦なく僕の首を切った。

§

「じゃあ、2人をお願いするね」

「了解した。マスター」

「やるからには徹底的にだ」

私は礼装を着た後、一階のミーティングルームでエミヤとアルトリアに来てもらった。

固有結界を持つエミヤには魔神柱の隔離を頼み、殲滅の一撃はアルトリアに任せる。現状の魔力の少ない状態で固有結界を張るのはエミヤが適任であるし、対城宝具である彼女の聖剣なら強力無比な一撃を放つことができるだろう。

戦力という観点で見れば、適任は他にも居る。

だけれども2人にはある程度の協調性があるし、指揮系統を守る意思もある。

情報が少ない今の状況でも、この2人なら柔軟かつ迅速に対応できるはずだ。

エミヤとアルトリアならヤバくてもなんとかなるんじゃないかね？ って甘えはあるよね。

「先輩は大丈夫でしようか？」

私がふざけたことを考えているとマシユが心配そうに言った。

彼女も2人に加えて同行する。

マスターである達海の安否が不明な以上、魔力パスの安定しないマシユを連れていくのはリスクが高い。

彼女はただでさえデミサーヴァントという、慎重な立ち回りが必要とされる立場だ。だけれども彼女がどうしても出撃すると言って聞かなかつたのだ。



実際もし達海と合流できれば継戦可能な戦力の増強が期待できるといふ判断もあり、ドクターも折れた。

達海は魔術師として魔力を運用できるから、カルデアからの供給を受けなくてもサーヴァントを維持できるのだ。

私としても、マシユの守りが無いのは非常に不安だったのでありがたい。

ただマシユを怪我させるのは嫌だから、彼女が力を十全に発揮できるまで何が何でも守りきらなければ。

私は顔色のよくないマシユの手を握った。

「大丈夫だよ。達海はあれで頭が回るから」

あいつはこんな所でくたばったりしない。

何よりまだ、お父さんとお母さんの事を聞いてない。

今くたばるようなら地獄まで行ってぶん殴ってやる。

「そう、ですよね」

彼女は私の手を一度強く握り返してから、離れた。

「すいません。もう大丈夫です」

顔を上げた彼女の瞳には、もう弱さは見られなかった。

それを見て、エミヤがふっと笑い、アルトリアは鼻を鳴らした。

「よし、行こう」

両手で顔を軽く叩く。

「ドクター。階段の隔壁を開けて。下に降りるから」

『わかった』

インカムから声が響く。

『オクタヴィア、開けてくれ』

『了解』

私たちの目の前で閉じていた隔壁が、鈍い音を立てながら開いていく。

徐々に開いて地下が見える。

暗くて先は見通せないが、空気はいつもと変わらない。

「エレベーターは使えないんだよね？」

『使えない事はないけれど電力は温存しておきたいし、塞がれたら物理的に詰む』

「分かった」

インカムの向こう側から若干の硬さを含む声を聞きながら了承する。

真つ暗な地下を眺めながら階段を降りる。

カツツカツツと靴の音が響く。

いつも通っていた道なのに、今はカルデアじゃないみたいだ。

階段につく手すりも、踊り場も、非常灯のランプも、既視感がなくなっていく。カルデアとは違う、特異点に居るような変な気分。

夢の中とかで家に居たはずが急に迷子になってしまったような、大海に放り出されてしまったかのような孤独感が胸をつく。

足音と私たちの息遣いだけが周囲に響く。

大丈夫。

先頭にはアルトリア、殿はエミヤだ。

それに私の礼装もある。

マシユはすぐに庇える位置にいる。

大丈夫だ。

何かあっても対応できる。

大丈夫…… 大丈夫…… 大じょう……

「マスター。今回の任務の報酬は何だ？」

「え？」

「魔神柱を滅したら、どんなご褒美があるんだ？」

先行していたアルトリアが振り返って、そんなことを聞いてきた。

ほ、報酬？

えーつと。

「うーん、ハンバーガーとか？」

いつも食べてるし。

「足らん！そんなものか！マスター！」

「え！！？」

食べ物じゃダメなのかな！！？

えーつと、じゃあレジャーとか。

「うーん、じゃ、じゃあ、一緒にお風呂入りに行くとか！ほらローマの…テルマエ？」

だっけ？」

「ほう、私の前であの忌まわしい赤セイバーの話をするか」

「じゃあ、食べ放題とかっ！」

「あつて当然だ」

えーつと、えーつと、あとなんかあったかな。

彼女の質問に私が慌てふためいていると、後ろから声がかかった。

「セイバー、マスターをあまり困らせるな」

エミヤがアルトリアの頭にチョップをかました。

「私は正当な報酬の話をしていただけだ」

「要求が多すぎる」

「何？私は当たり前のことを言っただけだぞ」

「それが多すぎると言うのだ」

「任務の報酬で食べ放題ごときも用意できんのか！」

「(う)ときか？」

エミヤの口がヒクヒクと震えだした。

それは地雷だよ……アルトリア……

案の定、今の発言はエミヤの逆鱗に触れるどころか、踏み抜いたのであった。

「食べ物の大切さも、料理の大変さも分かっていないような王はこれから一週間おやつ

抜きだ！」

「なっ!?？」

エミヤの宣言に目を丸めるアルトリア。

「貴様！汚いぞ！」

「ふん。少しは自分の発言を反省しろ」

そしてご立腹のエミヤ。

まあ、これはしようがない。

しかしアルトリアは納得できなかつたようだ。

カンカンのエミヤに挑戦的な態度で口を開いた。

「そちらがそうならこちらにも考えがある」

「ほう？言ってみるがいいさ」

なんだろう？考えって。

「後日アイリスフィールとあのフードを被った暗殺者を連れて厨房に突貫する」

「なっ!?？」

「職場に親が来て同僚と挨拶される恥ずかしさ、とくと味わうがいい」

うわあ。鬼だ。

やる事が大人気なさすぎる。

その場面を想像したのか、エミヤも冷や汗を書いているように見える。

「なんということを、絶対にやめたまえ！」

「やめるのなら、貴様のおやつ禁止令が先だ！」

なんか2人が謎の口論に発展しました。

放っておいて戦闘でもしたら、目も当てられないので私は仲裁することにした。とりあえずなんか言ってうやむやにしちやおう。

そもそもアルトリアが報酬の話をしました事が始まりだし、話題はそれでいつか。

「まあまあ、2人とも落ち着いて」

私は二人の間に割って入り、彼女に質問をした。

「アルトリアは何か欲しいものがあるの?」

私が質問するとアルトリアはキリツとした爽やかな顔で叫んだ。

切り替えはや。

「カレパだ!」

カ、カレパ?

カレパってあの?

「カレパだ!」

彼女はもう一回叫んだ。

「う、うん。カレー食べ放題ってこと?」

「違う。私はカレーパーティーがしたい」

「カレーパーティー……」

な、なぜカレーパーティー……？

「私はカルデアでカレーというカレーを食べた。そのアーチャーのもしかり、ボンカ  
レーもしかり、インドカレーにタイカレー、激辛から激甘まで多くのものを食べた」

「う、うん」

両手を交えたアルトリアの力説に私は若干引く。

「全てのカレーを食べ、結局はボンカレーが一番うまいと思つた矢先……」

「なっ!?？」

彼女の演説の途中でエミヤが聞きなれない声を出した。

「私のカレーのどこがインスタントに劣ると言うのかね!?？」

「エミヤさん！落ち着いてください！彼女の反転は趣向にも影響していますからっ！」

振り返るとアルトリアを問い詰めようとするエミヤと、エミヤを羽交い締めにするマ  
シユがいた。

あー。

頑張つて！マシユ！

私はマシユに向けてサムズアップした。

そんな2人を横目にアルトリアは続けた。

「そう思つた矢先だ。カルデアの民が言うのを私は聞いた。//飯はみんなで食うから上



手い」と言うのをな」

「みんなで食べる？」

よく聞くやつだね。

「そうだ。カルデアに来て、飯はいっぱい食べたが、他のやつと食うことがなかったからな。他の奴と食べるだけで味が変わると言うなら是非ともやってみたい」

そういうえば、アルトリアって大体一人でジャンクフード食べてたっけ。

でもまさか王様がこんな一般論を試してみたいとは。

なんかギヤツプを感じる。かわいい。

「そっかく。じゃあ帰ったらみんなでカレーパーティーしよう！」

みんなで食べるご飯は美味しいもんね。

ということだ。

決まったら料理長にお願いしないとね。

「エミヤ。お願いしてもいいかな？」

両手を合わせて彼に頭を下げる。

「インスタントが良いなどと言う輩に作る飯はない！」

彼は腕を組んでふんつと拗ねる。

そこをなんとか。

「やっぱりエミヤの作るご飯が一番美味しいんだよ。お願いっ！」

神様、仏様、エミヤ様！

なにとぞくなにとぞく。

「マシユもエミヤのご飯大好きだよねっ！」

さあ、マシユ！エミヤを盛大によいしよするんだ！

「は、はい！エミヤさんの料理は大変美味で1日5食ほど食べたいぐらいです！」

マシユ！グッジョブ！

エミヤもどうやら満更でもない様子。

頬がにやけそうなのを必死にこらえているのが分かっちゃんだよな。

あと一押しだな。

「ねっ？お願い！」

必殺上目遣い！

さあ！陥落しろ！エミヤ城！

とうとう私の頼み込みに観念してくれたのか、彼は組んでいた腕を下ろしたため息を吐いた。

「まったく。分かった。了解だ、マスター」

やった！ちよろい！

……… じゃなくて優しい！流石カルデアのママ！

「ありがとう！」

帰ったらみんなでエミヤのご飯だ。

「聞こえた？ドクター！」

私はインカムに喋る。

『ああ！みんな！やったぞ！任務が終わったらエミヤがカレーパーティーをしてくれるって！』

ドクターもテンション高い。

その気持ち、めっちゃ分かります。

『え!!? 本当ですかっ!!? ドクター!!?』

『マジですか!!?』

『やったぜ!』

『エミヤ！エミヤ！私チキンカレーがいい!』

『俺はシーフードで!』

『俺はバターカレーで頼むよ!』

『私ポーク!』

『僕はグリーンカレーだ』

『おい、カワタ。それ辛くて他に誰も食えんだろ』

『そうだぞ〜みんなの事考えろ〜』

『なっ!?? 辛党だつて何人かはいらるでしょう!??』

『おーい、辛党っているかー?』

インカム越しにみんな聞いてたのか、あつちもすごい盛り上がっている。

楽しそうだ。

とういかカワタつてさっきの眼鏡か。

いけ好かない感じだったのに、こう言うノリもいけるのか。

意外! うける!

ということエミヤにインカムを向ける。

彼は呆れた視線を向けていたが、私のインカムを持つとあちらに向けて喋った。

「任務が終わったからカレーの種類は希望を取る。1票でもあれば調理するから喧嘩しな

いように」

『『『イエーイツ!!?!!?』』』』

インカムの向こうは大変盛り上がっているようだ。

「凄いですね、アルトリアさん」

あまりの盛り上がりのように私も若干呆れていると、羽交い締め役目を終えたマシユ

が言った。

「凄いつて？」

「アルトリアさんの発言一つで皆さんの緊張がここまでほぐれたので」

言われてみれば。

私は自分の肩の力が抜けているのに気づく。

ふと彼女に目を向けると彼女はただ無愛想に前を向いて腕を組んでいた。

「私達やドクター、オペレーターの皆さんも今日のような経験が無くて肩に力が入りすぎていたのかもしれないね」

私達が気張りすぎていたのを見兼ねて、カレーパーティーなんて言ったのか。

確かに私も凄く緊張してた。

管制室のほうも緊張がインカム越しでも伝わってきた。

私達のホームが戦場になるなんて思わなかったから。

流石、アーサー王。

一国の王はやはり天性のカリスマが備わっている。

ん？

「彼女が持つてるスキルはカリスマEだったような？」

「そうですね。通常のアルトリアさんはBクラスですが、彼女の場合はEクラスに変

わっていたはずですよ」

それがどうかしましたか？と聞いてくるマシユ。

いや、臆げな記憶なんだけれども…

「カリスマEって自軍の能力を上げるだけで、軍団の士気は著しく下がるってあった気が…」

私の言葉にマシユもあつと声を出した。

「そういえば、そうですね。ということはこれは保有スキルというより彼女の才能ということでしょうか？」

マジか。

資質だけでここまでできるとは。

「アーサー王ばねえ…」

「ばねえ、ですね」

私とマシユは尊敬の目でアルトリア・ペンドラゴン・オルタを見つめる。

そんな私達の視線に気づいたのか、彼女はニヤリと笑った。

「よい。私の才覚を持つてすれば、このくらい当然だ」

自他共に認めるってやつだ。

「戦闘が始まってもしないうちから気を張りすぎては、いざ戦う時にさせる力も出な

ろう。特に職員達はな。」

職員？

「あつちの緊張なんて分かるの？」

「奴らは基本、現場に居ないからな。戦場に身を置く意識が違う。いくら全員が命をかけてと言っても、戦いが目の前にある状況はその場の経験でしか慣れる方法もなからう」

そして騒いでるみんなをインカム越しに諭すエミヤを見る。

「少し抜かせすぎた気もするが……」

インカムを見る彼女は若干の呆れ顔。

「まあいい。ガチガチで使い物にならん奴はもういないだろう。そろそろ行くぞ」

そして彼女は前を向いた。

「うん。そうだね」

よし、行きますか！

《どい？》

「え？」

今何か…

「どうかしましたか？立花さん？」

私の声を聞いてマシユが疑問を口にした。

何か聞こえたような気がしたんだけど…

気のせいか。

「いや、何でもない。行こう！」



## 浮上

そこは本に囲まれていた。

多くの分厚い専門書がずらりと並び、背の高い本棚がいくつも設置してある。

床には描き途中の論文、付箋がつけてあるノート、クシヤクシヤに丸められた紙。

机の上には砂時計とトランク、そして纏められていない術式の束があった。

汚く、整理されていない、そして僕の見慣れた部屋だった。

「移植の準備をしろ!!?」

父の書齋を訪れた僕は、感情のままに叫んだ。

「そんなことしてる場合じゃないだろ!!?このままじゃ父さんも母さんもアラヤに殺されるだけだ!」

父さんは机に向かいながらただ筆を動かしている。

聞いているのかいないのか、視線は卓上を見つめ続けるだけだ。

「父さんー」

僕は両親の命の話をしているのだ。

どうでもいい理論の話をしているわけではない。

父の肩を掴み、こちらに向けさせた。

しかし、それでも父の目は卓上を向いたままだった。

「いい加減にしろよー」

あまりにも僕の話に無関心な父に僕は激昂した。

「そんな研究して何になるってんだ！死んだら何の意味もないじゃないか！」

父の首元を掴みこちらに寄せる。

そこで初めて父は僕の目を見た。

「達海。意味とは何だ？」

父の目は感情の高ぶりが感じられないほど冷たかった。

「え？」

「死んだら何の意味もないとお前は言うが、死ななかった場合にどんな意味がある？」

淡々と僕に問う。

あまりにも機械的すぎる言い方に、僕は一瞬鼻白む。

「い、生きられるじゃないか。母さんや姉さんと一緒に」

「では私が家族とともに生きる意味とは？」

同じような質問を問いかけてくる父。

家族と生きる意味？

「そんなのっ、家族といえるのに意味なんか必要ないだろっ」

意味がなければ一緒にいられない人を家族と呼ぶか。

父はその答えに何ら感情を示さず、また質問をしてきた。

「お前は行動するのに意味はいらないと？」

「そういうわけじゃ……」

「じゃあ私が家族と生きる意味は何だ？」

父の目は空虚な穴のように見えた。

他人事のように何もかも話すその声に僕の腹は据えかねていた。

だから僕は乱暴に答えた。

「そんなの僕に分かんねえよ！」

「だろっうな」

父の目は襟をつかんでいる僕の手に向けられた。

“離せ”とその目は言っていた。

僕は渋々手を離した。

「私が奈津と子を作り、家族とともに生きるのは私がそうしたかったから。それに意味なんてものはない。」

父は両手で服の乱れを整える。

「意味なんてものは全て結果論だ。結局のところ、人はやりたいことしかできない。だがそれをそのまま言ってしまうにはモラルがないからな。適当な理由づけをして意味などと宣っているだけだ」

服を整えると視線はもう一度僕の目に向いた。

「そして今、私のできることはこの研究を完成させる事だけだ」

「それで死んでもかよー！」

「ああ、そうだ」

全ての質問に父は本当に機械のように答える。

そうだ、の一言はただでさえ熱くなっている僕の頭をより感情的なものにさせた。

なんだよ、それ。

なにも考えてないじゃないか。

「そんなの無責任だろ！僕の気持ちも、姉さんの気持ちも何も考えてないじゃないか！」

自分がしたいことだけして僕と姉さんを残して死ぬつもりだって、それでも親かよ！

「責任とは？」

「は？」

「責任とはなんだ？」

さつきから、なんだ？なんだ？つて！揚げ足とりばかりして！

人の話を聞くつもりねえのか！

「そんな話をしてるんじゃないか！」

「いいや。そんな話だ」

父さんは眼鏡を外し、机の上に置いた。

「達海。お前が言う『責任』とは社会が求める親の責任だろう」

社会が求める？

「この社会では親は子が自立することができるようにするため、扶養する責任を持つとある。それはなぜか？」

「そうする事が親として当たり前だからだ！」

「それは違う。社会を維持するためにはある程度成長し、分別を弁えた人間が一定数必要だからだ。間違つても道徳などというありもしない理想主義のためじゃない」

「なっ？？」

「では社会を維持するのはなぜか？人間個人の力は非常に矮小だ。個々で動いても優れた成果は得られない。だから組織的に動くことにより得られる利益を増す」

「僕はそんなことを聞きに来たんじゃ……」

僕の言葉を無視して父は続ける。

「だが社会の運営を指揮するのは個人だ。運営している人間に有利になるようにこの社会は作られている。お前達を、その人間どもにとつて都合のいい歯車にする事を社会では“責任”というのだ。だから実際には子の不利益になるようなことでさえ、道徳や良心などと偽つて子の気持ちを大切にしろと嘯くのだ」

「……………」

「私が果たしたい責任は違う。達海や立花が自ら考え、でき得る最善の選択で生き抜く人間になるよう育てる。それが私の果たしたい責任だ」

父の目は今に至つても冷たいままだ。

「奈津も同じだろう」

だがその冷たさはあるいは必要な冷静さだったのだろうか？

「そしてそれを果たすためにやるべきことは、我々を抹消しようとする抑止力からすべしと逃げ出すことではない」

「なんで……」

「そんな事をして、状況は悪化するだけだ。お前も立花もまともな生活が送れなくなる」

違うよ。僕はただ…

「そうではなく、死を覚悟しても私と奈津でこの研究を完成させ、この技術をお前達に継ぐ。これこそが、お前達が自分の力で生き抜けるようにするための最善の行動だ」  
ただ…

「お前達には自分の頭で考えられるだけの教育は施した。財産は僅かばかりしかないが、その代わりこの知恵を託す。」

そう言つて自らの卓上を指で軽く叩く。

「お前達が大人になるまで付き合つてやれないことは非常に残念なことだ。私も奈津もお前達が成人になった姿を見なかった。立花とバージンロードを歩きたかったし、達海がいい歳したおっさんになってから酒を酌み交わしたかった。」

いつの間にか父さんの表情には微笑みに似た優しさみtainなものが僅かに含まれていた。

それで気づいた。

これはあの日の夢だ。

「だがその為にお前達の人生を世間の隅に追いやることが、私の果たしたい責任ではないのだ」

「……………」

「私と奈津が研究をしていなければこんな事態にならなかったかもしれないが。この研究をしていなければ私が奈津と出会うことも、お前達が生まれることもなかっただろう」

「……………」

「だからそこは諦めてくれ。そして無い物ねだりせず、腐らず、生き抜いてくれ」  
「……………」

「それができるための知恵を今見出しているのだ」  
「……………」

「だから私に責任を果たさせてくれ」

夢の中の父はそう言って僕を抱擁した。

あの時の僕は父の言っていることに納得できなかった。

「こんなことを言ってしまうんだから、やはり私は魔術師には向いていないな」  
父はなぜか微笑んでいた。

そして僕は、結局何もできなかったのだ。



なんだかとても懐かしい夢を見ていた気がする。  
内容を思い出そうとするのだが出てこない。  
夢ってなんですぐの忘れてしまうんだろう。

「起きろ」

あれ？というか僕は何をしていたんだっけ？  
何かさつきまで必死になって何かをしていた気が。

「起きろー！」

ミシツという音が聞こえた、  
というか  
「痛ッ！」

手首あたりに強烈な痛みを感じて僕は飛び起きた。

え？なに？なに？

めっちゃ痛い。

「やっど起きたか」

右側から声が聞こえた。

そちらに向くと、ペンドラゴンさんがいた。

「うわっ!!」

僕はその場から飛びあがった。

思い出したからだ。

彼女に追い回され、吹っ飛ばされ、首を切られたのを……つて。

彼女の聖剣が僕の首をスパッと切った記憶が僕の視界を横切った。

「え？あ？……あ、あ？」

首を何度も左手で触る。

傷はどこだ？首はつながってるのか？

そもそも僕は生きているのか？

「落ち着け。貴様の首はちゃんとつながっている」

焦ってペタペタと首を触る僕に、ペンドラゴンさんは落ち着いた声で言った。

「つながって…？は？いや、え？」

左手は首のつながった皮の感触が返ってくるだけだった。

どうやら僕は重症で死ぬ一歩手前というわけでも、デユラハンになったわけでもないらしい。

その事実気付いた瞬間、肩から力がどつと抜けた。

というか気づいたら力が入らなくなっていた。

よかった。

流石にあの時ばかりはもうだめかと思った。

「何をそこまで驚いている？戻したのは貴様だろうか？その刻印を使わせたのは私だが」

僕の視線の先、椅子に座っている彼女は言った。

「時間遡行。貴様の魔術刻印の中身だろうか？」

「っ！！」

なぜ知っているんだ？

僕は身を固くした。

「ああ。でも今はあのロクデナシに隠蔽されてるんだったか？だとするとこれも織り込み済みということか。あのトラブルメーカーめ」

まさか遡行魔術で体を復元したのか？僕は？

だがそんな魔力は回していないはずだ。

そもそもこれを使ったら……

足を組み、こちらを見下ろす彼女を見る。

彼女はなんだ？

僕を倉庫に呼んで、変な論文を読ませたかと思ったら、追い回して刺して。

いったい何がしたいんだ？

敵なのか？

それとも……

「貴方は何者ですか？」

額を汗が垂れる。

この質問の答えによつては、何としても彼女を倒さなくてはいけなくなる。

姉さんにだけは、絶対に奴らを近づけるわけにはいかない。

僕の質問に彼女はすぐに答えた。

「安心していい。私は守護者ではない。」

！

そこまで知っているのか。

「私は貴様を消しに来たのではない。貴様に助けてもらいに来たのだ」

「助けてもらいに?」

予想外の言葉に目が点になる。

「なんだ、その反応は」

彼女は僕の反応を笑った。

いや、僕の反応は至極正しいと思う。

助けを故意に來た人物は助けを求める相手の首をはねたりしない。

彼女は椅子から立ち上がると、僕の目の前にある台に立った。

台の上には円形のオブジェが横たわっていた。

そういえば、ここは一体どこだ?

薄暗いし、狭いし。

周りを見るとごちゃごちゃと多くの機材が置いてあり、据え付けの席もあった。

管制室に少し似てるか?

「私とて最初から貴様の首を切るつもりではなかった。貴様に頼んで刻印を使つてもら  
うつもりだった」

「刻印を?」

無意識に右肩に触れる。

ああ、と彼女はうなづく。

「だが食堂で貴様に聞けば、使うつもりは毛頭ない様子だ。あげくあのバカが手を加えたようでもあるし」

先ほどからロクデナシとかバカとか罵倒されている人物はなんなんだろうか。

「命を落とす状況にでもならんと貴様は使わんと思つたのでな。強引なやり方をさせてもらつたぞ」

強引と言うか、それはもはや脅迫に近いのでは？

「なぜ、そんなことを？」

僕に刻印を使わせる目的が分からない。

「縁を作れたかった。アンカーを打ち込めなければ虚数空間からボーダーを上げることができない」

アンカー？ボーダー？

「この未完成な虚数潜航艇とその理論の理解者、そして刻印の使用。この3つがボーダーの浮上に必要だと探偵が言っていたからな」

彼女は僕の方へ向いた。

「あの倉庫で、訳は後で話すといったな」

「ええ」

そうだ。

あの後、訳が分からないまま論文を読んで、襲われて、逃げて。

肝心なことは彼女から何も聞いていない。

さつきから質問しても要領を得ない言葉ばかりだし。

ようやくとまともな説明が聞けるのか。

この時、僕は暢気にそんなことを思っていた。

その数秒後、さらに混乱すると知らずに。

彼女は腕を組んで僕を見た。

「私は未来のカルデアから来た」

そして僕を指さした。

「世界を救った一人のマスターを貴様に救ってもらうために、私はここへレイシフトしてきた」

「はっ。」

は？

ちよつと待て。

全く分からない。未来のカルデア？レイシフト？

これは何かの冗談か？

ここは笑うところなのだろうか？

「いやいやいや、待つてください」

僕は額に手を当てる。

もう少し緩やかな説明が欲しい。

「いや、待たん」

僕の制止は全く聞かれなかった。

彼女それを無視してこちらに歩き、私の腕をつかんだ。

「悪いが状況説明は苦手だ。この後来る奴らの方が向いている」

「え？」

さつき説明するっていたばかりじゃないですか。

彼女は私を引っ張り、先ほどの円形のオブジェの前に立たせた。

「さあ、ペーパームーンに触れ。それであいつらを呼ぶ」

「ペーパームーン？これが？」

あのゼロセイルに使うっていう？

ごくりと息をのむ。

そんなもの触って大丈夫なのか。



分からない。

優柔不断な僕に、ペンドラゴンさんはしびれを切らした。

僕が戸惑っている間に彼女はつかんだ僕の腕を台にあげ、私の手をこのオブジェに押し付けた。

「ちよっ!!」

そして指先がペーパームーンに触れた。

「……」

「……」

何も起きない。

静かなままだ。

「あの」

変化しない状況に僕が疑問の声を上げた、その時だった。

『……これでいいと思うんだけど。うーん。もしもしく。聞こえてるー?』

謎の声が響いた。

え、誰?というか何この声?通信?

謎の声に、隣のペンドラゴンさんが返答した。

「ああ、聞こえているぞ」

えっと、知り合いですかね。

『やつと繋がった!』

謎の声がはしゃいだ。

なんかこの声聞き覚えがあるな。誰だっけ。

『調整ミスったんじゃないかと焦っちゃったよ。聞こえているなら早く返答してよね』  
「だまれ、境界性ロリ。こちらも準備で忙しかったのだ。なぜ存在証明がこんな面倒なのだ」

境界性ロリ？

なんだ、そのパワーワードは。

謎の声とペンドラゴンさんは会話を続けている。

あの、いい加減説明してくれませんか？

『それは仕様だから諦めてくれよ。どうしてもというならこの方針を立てたホームズに言ってみてね』

「あいつは好かん。言葉でなんでもかんでも煙にまくタイプだ」

『あくほんとそれ』

ホームズ？

ホームズって、キャメロットにいたあのホームズさん？

『本人がいる前でいうことではないと思うが』

『だって本当のことじゃん？』

『まあね。だが君も似たようなものだろう』

あ、本当にホームズさんの声だ。

え、なにこれ？

どことつながってるの？

『おい！ダ・ヴィンチ！行くなら早くしてくれ！おっさんの堪忍袋の緒が切れそうだ！』

『技術顧問！なにをしている！早くしろ！』

『はいはい』

なんかいろんな人の声が聞こえる。

あれ？今ムニエルさんに似た声が聞こえたような。

ん？ダ・ヴィンチ？

『おーい。つながったことは君の隣には彼がいるんだよね？』

「ああ、いるぞ」

謎の声がまた戻ってきた。

『彼と話せるかい？』

「ああ」

そんな会話をするとペンドラゴンさんは目で僕に話せと言ってきた。

「え？誰ですか？この人？これ、どことつながっているんですか？」

「未来のメンツに決まっているだろう。あつちの虚数潜航艇だ。さつき読んだはずだが？」

そんな、当たり前だろ？って顔されても。

もうこっちはしつちやかめつちやかかなんですけれども！

戸惑っていたらあちから話しかけてきた。

『……達海くん。久しぶりだね』

謎の声は知己に会うかのような口ぶりだった。

「久しぶり？ですか？えーつと僕はあなたとお会いしたことがあるんですか？」

確かに声は聞き覚えがあるが急に言われても誰なんだか。

僕の質問に、またもや聞いたことがある言い回しで謎の声は言った。

『あ、ひつどーい。こんな完璧美人天才少女を忘れるなんて』

ん？

『さすがの私でも傷ついちゃうぞ』

「え、その言い方って」

自分をここまで持ち上げる言い方。

そんな人間は一人しか思い浮かばない。

「貴方はもしかして」

『私はみんなの頼れるレオナルド・ダ・ヴィンチちゃんだよ。もう一度脳裏に刻んでおくよーに』

「……マジですか」

『マジだよー』

なんか声が幼い気もするがこの言い方は紛れもなくダ・ヴィンチさんだ。

これはいいよペンドラゴンさんが言ってたことが現実味を帯びてきたぞ。

ドツキリとかじゃなければ。

『色々と聞きたいことはあると思うんだけど、とりあえず達海くんは虚数潜航の概要はわかっているんだよね？』

「え、ええ」

『そうならそちらのペーパームーンにもう少し強い魔力を流し込んでくれ』

「魔力を？」

『ああ。私たちが乗ってるシャドウ・ボーダーを浮上させる。君たちが乗ってるその未完成のシャドウ・ボーダーを目印にさせてもらいたいんだ。』

僕たちが乗ってるシャドウ・ボーダー？

今僕がいるここって……

ペンドラゴンさんを見る。

「ああ。ここは放り込んであった未完成の虚数潜航艇の中だ」

「まさか虚数空間の中にいるんじゃないやありませんよね？」

「なわけないだろう。この舟は未完成だ」

そうか。

つまり実数空間にあるこのペーパームーンを目印に彼らは虚数空間から浮上するつもりってことか？

ペーパームーンの扱い方なんて知らないんだけど。

「魔力を流し込むだけでいいんですか？」

『うん！頼むね！』

とりあえず言われたとおりにしよう。

添えてある左手からペーパームーンに魔力を回す。

何も変化は起きない。

これでいいんだろうか？

『虚数空間震、観測した！錨固定しろ！』

『錨、固定！』

魔力を流してすぐ怒鳴り声っていうか号令みたいなものが聞こえてきた。

『ペーパームーン航路図プラスマイナス収束開始。

シヤドウ・ボーダー、間もなく実数領域へ入港します。』

これ、あつちの舟のアナウンスだよな？

なんでこつちに届いてるんだろう？

これ、通信というよりは接触回線に近いのか？

『実数空間における存在証明、投錨済み。

対象、2015年カルデア、ペーパームーン。』

本当に彼女がさっき言っていた虚数潜航艇なのか。

なんかなにもしてないのに高揚感が。

ワクワクしてきた。

僕は何もしなくていいのだろうか？

「僕は他に何かすることあります？」

仏頂面のペンドラゴンさんに尋ねてみた。

「ない」

ですよね。

「なんだ、その顔は」

いや、僕も男の子なんで、あんな感じのものを聞くと参加したくなると思いますか。  
ロマンを感じざるを得ないと思いますか。

『虚数空間より浮上中。』

実数空間到達まで残り15秒』

ほら、こういうの。

「だったら外に出て、出迎えでもしてやれ。叶わぬ対面だったからな。喜ぶ奴も多からう」

「あつちの虚数潜航が終わるまでここにいないといいんですか？」

アンカーがずれたら船は慣性で大きく振り回されるような気がするんだけど…

「境界性ロリはそんなこと言っていないかった。何とかなるだろう」

そうなのか。

そういうもんか。

「出口はこっちだ」

「あ、待っててください」

急いで彼女の後を追った。

『虚数潜航、終了。』

『これより実数空間へ浮上します』



## S

「ここつて第3倉庫じゃないですか。なんでこんなところに」

「知らん」

外へ出ると、そこは見慣れた倉庫だった。

こんなところに保管してあったのか。

僕たちが中に入っていた未完成だという虚数潜航艇を見上げる。

これが虚数潜航艇？

どうみてもただのコンテナなんだけど…

「来たぞ」

僕がしげしげとコンテナもどきを見ていると、横で彼女は虚空を指さした。

僕はそちらに目を向ける。

指をさした空間が揺らめいた。

そしてふつと気づいたら大きな車両がその空間に存在していた。

急に現れたのだ。

瞬きしたらあつたみたいな、変な感覚だった。

「え？」

現れた車両はなぜか猛スピードで走っていた。

僕と彼女の目の前を猛スピードで横切り、過ぎ去っていく。

そして速度を維持したまま倉庫の壁に激突した。

ガツシャーンという擬音があまりにも似合う衝突。

壁を壊し、破片をまき散らし、砂ほこりをふきあらし、やかましい音を立てる。

そして数秒後、静かになった。

「……」

「……」

これは、あれか。

おそらくあれだな。

僕は横のペンドラゴンさんを無言で見た。

彼女は虚数潜航艇が突っ込んでいった先を無言で見ている。

「やっぱり、まさかだったですかね。ペーパームーンから離れたの」

「……」

彼女は何も言わない。

「……」

「……」

「あれは並みの装甲車より強い複合装甲を持っているらしいからな。大丈夫だろう」

「それ、僕らがあそこから離れていい理由になってないですよね」

「……」

「……」

やっべ。

## 半分の真実

「動きませんね」

「動かんな」

壁をぶち破って止まった虚数潜航艇を見て、僕とアルトリアさんは呟いた。

あの舟、いや形状的には車両に近いんだけれども概念的は舟だ。

その舟が現れて一分近くたったが、動く気配も、誰かが出てくる気配もない。

やっぱりパーパームーンから離れるのはまずかつただろうか。

「ペンドラゴンさん。あの舟の中、確認しに行きませんか？」

一応、虚数潜航なんて荒業を行う前提で企画された船だから、あの程度で壊れるってこともないだろうけど。

人間が耐えられるかは別の話である。

搭乗員が何人いるかは分からないけど、けが人が出たのかも。

そう心配していたのだが、すぐにそれは杞憂だと分かった。

人の声が聞こえてきたからだ。

「ええい、離せ！離さんか！この私が直々に文句をいってくれる！」

「待てつて！おっさん！あんたは出るなって言われてるだろ！」

「黙れ！航空機着陸直前に進入灯を消す奴があるか！」

聞こえてくる喧騒。

どうやら浮上のおきのことと言い争っているみたいだ。

やっぱり離れちゃダメだったか。

「離れちゃダメだったみたいですね」

僕は隣のペンドラゴンさんにいった。

「知らん。駄目なら駄目と言っておけ」

そう言い切る彼女の顔には微塵も罪悪感はなかった。

いいなあ。

僕もこれくらい割り切れたら楽なんだろうけど。

「はいはい。ゴドルフ君は司令室に下がっててね」

「技術顧問、所長である私の行動に意見しようというのかね？」

所長？

カルデアに新しく所長が就任したのだろうか？

「ミスター」

「なんだね!!経営顧問!!」

「我々としては現状、危険が多いここカルデアで指揮官たるミスターを守ろうという意思の元、行動しているつもりですが」

「う、うむ。流石だな。経営顧問」

「危険をとしても現場で我々の指揮をしてくださるといっているのであれば、方針を変えることも吝かではありません」

「む」

あ、ホームズさんの声だ。

「ダ・ヴィンチ。ミスターは我々と共に危険を顧みずカルデアへと出動するつもりだよだ。礼装の準備を……」

「わかった!わかった!そうだな!確かに所長たる私が危険な場所においては、貴様らも目の前のことに集中できなからう!私は戻る!」

「ご英断です」

「あ、あれだぞ!決して危険な現場が怖いとかではなく、お前たちが元気だけが取り柄のバカと盾の娘のことに集中できるように……」

「はいはい。じゃあ、行くよ」

新しい所長さん、わかりやすいキャラしてるなあ。

漏れてくる会話を聞いてそんなことを思っていたら、後部のハッチがあいた。

下りてくる人影は二人。

一人は長身ですらつとした青年。

キヤメロットで見たときと変わらない。ホームズさんだ。

そしてもう一人は……少女？

童顔に、ホームズさんの胸ほどぐらいの高さの背丈。

おまけにランドセルのようなりユツクを背負っている。

誰だ？あの子？

左手には身長を超すぐらいの杖を持っている。

ん？あの杖、ダ・ヴィンチさんが持っていたんだが。

二人はこちらに近づいてくると、声を上げた。

「やあ！達海くん！」

小さい女の子が杖を振りながら挨拶してきた。

この声……さっきの通信でダ・ヴィンチさんって言った人と同じ声だ。

え、嘘でしょ。

「いやゝ。君はいい反応してくれるね！私もこの体を作った甲斐があるというものだ

「よ」

おいおい、マジですか。

「そう……ご推察の通り！私がかの有名な万能の天才！才色兼備で勇邁卓犖、ついでに麟子鳳雛なレオナルド・ダ・ヴィンチちゃんさ！」

どうしてこうなったんだ……

なんで時がたつと若返るんだ、この人。

とうか今、自分に才能があるって三回も連呼したぞ、この万能人。

なんてコメントすればいいんだ。

「どうだい？この私は？」

どうだい？

どうだいって。

「すごく可愛らしく？なりましたね」

これでいいのだろうか？

思考が違いすぎて、もはや何を言えば誉め言葉になるかさえ分からなくなってきた。

「そうだろう！そうだろう！もつと褒めてくれたまえ〜！」

どうやらこのお言葉でもお気に召して頂けたらしい。

機嫌をよくしたのか両手を軽く開いて、その場でターンするとピースしてきた。



アーティストになつたなあ。

いや、ダ・ヴィンチさんは元からアーティストか。

「自分を褒め称えたい気持ちにはわかるがね。今は自重したまえ」

くるくる回るダ・ヴィンチさんを見てホームズさんは呆れながら言った。

「おっと、そうだったね」

彼女は左足を出して、キュツと回転を止めた。

「お久しぶりです。ホームズさん」

ダ・ヴィンチさんの隣にいるホームズさんにも挨拶する。

私のあいさつに彼は笑つて答えた。

「ああ。久しぶりだ。ミスター・達海。君とまた会えて嬉しいよ」

そう言つてニコツと笑つて右手を出してきた。

握手だろうか？

差し出された彼の右手を握る。

「ふむ。なるほど」

そうつぶやくと彼は手を離れた。

「久しぶりの対面も終えただろう。さつきと行くぞ」

僕らのあいさつが終わるとペンドラゴンさんは急かすように言った。

今も片足のつま先で地面を何度か叩いている。

「失礼。ミス・アルトリア。貴方には随分と苦勞を掛けました」

「世事はいらん。お礼は現物でよこせ」

「なるほど」

ホームズさんの感謝に随分と厳しい言葉で返すペンドラゴンさん。

そんな言葉にホームズさんにはっこり笑って、懐に手を入れた。

コートの内側に食べ物でも入れているのだろうか？

「でしたら、この少し服用するだけで宇宙を垣間見ることが出来る魔法の粉を……」

「スト————ストップ！ストップ！ホームズ！そういうのは個人的に楽しんでくれ！」

「ふむ。何か問題が？」

「あるに決まってるだろ！」

キョトンとした顔のホームズさんとあきれ顔のダ・ヴィンチさん。

やっぱ頭いい人って何考えてるか分かんない。

「ここカルデアはどの国にも属さない独立機関。いわば法律の空白地帯だ。ここでのどのような嗜好品を楽しもうと私の自由では？」

これ全部素面で言っちゃうのがホームズさんだよなあ。

「そーい問題じゃない！達海くんの情操教育に悪いでしょ！彼は未成年なんだから

ね！」

なんと常識的な発言をする万能人。

驚き。

そうか。ダ・ヴィンチさんも天才で頭おかしいけど、彼に比べればまだまだも……でもないか。

「知を追及するのに年齢は関係ないとも。ミスター・達海。どうかな？私と共に宇宙の神秘を覗くというのは」

キセル片手にそんなことを言ってきた。

世が世なら彼はただの犯罪者として捕まっていたかもしれないな。

僕はそちらに行くのは御免です。

ということとで断ろうとしたその時。

視界の隅で何かがぶれた。

「遊びが過ぎるぞ。探偵。イカれるのは一人でやれ」

ペンドラゴンさんの回し蹴りが彼の顔を襲った。

だが蹴りを左手の甲で受け止めたホームズさんは笑顔を少しも崩さなかった。

「失敬。紳士ジョークですよ」

二人のやり取りの隣でダ・ヴィンチさんは大きなため息を吐く。

なんだろう。

まるでダ・ヴィンチさんが苦勞人の立場をしているみたいだ。

「私は先に戻るぞ」

そう言うのとペンドラゴンさんは壁に突っ込んだ虚数潜航艇へと歩いて行つた。

その後ろ姿を見ながらダ・ヴィンチさんはホームズさんにあきれた視線を再度向けた。

「はあ。後でちゃんとフォローしておくんだよ？あれで結構責任感じてるんだから」

「もちろんだとも」

余裕綽々にキセルを吸いながら彼は言つた。

まさか今も服用しているんじゃないですよ？

「まあ、なにはともあれ。私たちが無事対面できたのは何よりだ」

ダ・ヴィンチさんは綺麗な笑顔を浮かべてそう言つた。

「そう？ですな」

僕は少し疑問符を浮かべながら肯定する。

いや、彼女の言に賛成したい気持ちは山々なんだけれども、僕は彼らがなぜ未来から来たのか全く知らないのだ。

ペンドラゴンさんは、僕に助けてもらいに來たつて言つていたけど具体的にどうい

意味なんだか。

状況が分からないので判断のしようがない。

という僕の思考は僕の表情に出ていたみたいだった。

ダ・ヴィンチさんは僕に言った。

「とりあえず情報共有をしたい。まずは、達海くんがどういう経緯でここにいるか、私たちの状況をどこまで知っているか。それを教えてもらっていいかい？」

そろそろそちらのことも教えて欲しいと僕は思う。

けど僕よりはるかに頭の回転が速いこの二人がこう言うことは、やっぱり何かしらの意味があるんだろう。

僕は言いたいことをぐつとこらえて飲み込んだ。

「分かりました」

了承の意を伝えて、頭の中を整理する。

経緯っていうなら一応カルデアに来た時から話した方がいいのかな。

うん、そうだな。

「まず、僕がカルデアに来たのは……………」

S

「首を切り落とされたあ!!」

カルデアでの諸々の経緯を語り、ペンドラゴンさんがここに来るまでにしたことを話したら、ダ・ヴィンチさんは素っ頓狂な声を上げた。

うん。人としては正常な反応だ。

ちなみにホームズさんはダ・ヴィンチさんの隣で万年の笑みで大爆笑している。

うん。人として終わっている。

「そうみたいです。幸いなことに頭が地面に落ちた記憶自体はないのでPTSDの心配はなさそうです」

頭だけで地面から首のない自分の体なんかを見たら、夢に出てきそう。

首が切られても7秒くらいは意識があるっていうしなあ。

「そういう問題じゃない」

ダ・ヴィンチさんはまたまた呆れ顔。

何事にも限度ってあるよね。

「彼女が自分から行くって言ったからこの任務を任せただけど、あの効率性が完全に裏目に出たよ」

もうつと彼女はため息を吐く。

それを聞いてホームズさんはいまだに肩を震わせて笑いながら言った。

「いや、一概にそうとも言えない。彼女の行動はやりすぎだが縁を結ぶことはできた。結果的に我々はこうしてこの時代に来ることができたじゃないか」

「結果的にでしょー!」

ホームズさんの弁にダ・ヴィンチさんは憤慨する。

「やりようなんて他にいくらでもあるだろうに」

「ミス・アルトリア、それも彼女の場合はそれこそ効率的だからね。実際これ以上遅れていたら我々も、この時代の彼らも危なかつた可能性が高い」

「まあ、そうだけど」

ダ・ヴィンチさんが憤慨してくれるのはありがたい。

実際もう二度と首を切られる感覚なんて御免だ。

だがそれはそれとして。

彼らはなぜ僕の刻印を知っているのか？

そして最も分からないこと。彼らがなぜ未来から来たのか。

もう、流石に聞いてもいいだろう。

「教えてください。貴方たちはなぜ未来から来たんですか？」

僕の質問を聞いた二人の顔はすぐに笑みが消え、真剣な表情になった。

そしてダ・ヴィンチさんは口を開いた。

「私たちは……魔神柱を追ってきたんだ」

「魔神柱？」

魔神柱。

僕らの特異点探索で幾度も立ちほだかつてきた敵。

ソロモンがかつて召喚したとされる魔神の集団“ソロモン72柱”の魔神と同じ名を冠する存在。

太い柱に幾筋もの裂け目が走り、いくつもの眼球が張っているおぞましい存在。

彼らは人理焼却を果たすために特異点に送り込まれる存在ではなかったのか？

なぜカルデアに。

「君がさつき言っていた第3種の警報。あれは君も知っての通り外部の敵から侵入があったことを知らせるものだけだ」

「進入してきた敵が、その魔神柱だと？」

「ああ。その通りだ」

僕の言葉にダ・ヴィンチさんは頷いた。

じゃあ、今カルデアに魔神柱がいるってことなのか？



そうだったのなら僕はここでこんなことをしていいのだろうか。  
姉さんは既に向かっているのか？

だとしたら僕も今すぐにでも魔神柱のいる場所へ向かうべきではないのか？  
いや、落ち着け。

情報収集をしないで戦うなんて愚の骨頂だ。

今現在、状況を最も正確に把握しているのは僕の目の前にいる2人だ。

彼らの話を聞くのが最善の選択だ。

深呼吸し、頭の中を整理する。

よし。

「追ってきたとはどういう意味ですか？」

最初に彼女が言っていたことを聞く。

魔神柱を追ってきた、これはどんな状況を指すのか。

僕の質問を静かに待っていたダ・ヴィンチさんは、その言葉にすぐ答えた。

「私たちは人理修復の過程で、討伐すべき魔神柱に逃げられてしまったんだ。だからその魔神柱の持つ聖杯の反応を追って、ここまで来た」

「魔神柱が逃げた？」

そんなことあるのか？

僕らが戦った時は、一度だつて魔神柱が撤退したことなんてなかった。

別に彼らが物だつて思つてゐるわけじゃない。

彼らは確かに意思を持っている。

だけれども戦いを通して感じたものは、どの特異点でもたつたの2つだけだつた。

1つは、人理は間違つたものだということ。

そして2つ目は人理焼却を果たすということ。

例外はあつたが彼らの意思はその2つにほぼ限定的で、機械に似ているのだ。

意思はあつても自我がないというべきだろうか。

決められた目的を果たすために動いてるとでもいったような。

だから彼らは自らが劣勢になろうと、あくまでその2つを果たそうと動いていた。

自らの危険を感じて魔神柱が逃げ出すなんてあるのだろうか？

それがましてや特異点を作る聖杯を持つて逃げるなんて、自ら特異点を壊すことは彼

らの存在意義に関わることはないのだろうか？

頭の中を様々な疑問が駆け巡る。

「君の疑問はわかる。魔神柱が逃げるなんて私たちも予想していなかったからね。実際なぜそんな行動をとつたかよくわかつていないんだ」

ダ・ヴィンチさんは肩をすくめて言った。

まあ、それはそうだよな。

そもそもわかっていたら特異点でももつと有効な作戦がたてられるというものだ。

これは置いておこう。

原因が分からないのなら対策を話し合うべきだ。

「ダ・ヴィンチさんは先ほど人理修復の過程で、と仰ってましたけれど、そちらの時代では無事修復をやつてのけたのですか？」

僕は彼女に質問した。

この質問に彼女は全く表情を変えず、こう聞き返してきた。

「なぜそれを問うんだい？」

彼女の顔は先ほどと同じだが、それ以上に何か圧があった。

僕が質問した理由はいたつてシンプルだ。

「増援の有無を知りたいだけです」

「増援？」

彼女はきよとんとした顔で聞いた。

何も不思議がることじゃないと思うけど。

「ええ。僕らは今に至るまで限られた人員、資材、施設の中で何とか特異点を修復してきました」

「うん。それは私も知るところだ」

未来から来たならそうだろう。

「でも人類の存続をかけた戦いをこの規模のサポートでやるなんて通常ではありえない  
はずです。もし修復が完了しているならそれなりのマスターが呼べると思うのですが」  
そもそもその基準がおかしいのだ。

だから僕を戦場で使わなければならなくなるし、姉さんはたった一人でほとんどの  
サーヴァントと契約している。

もし、未来から増援が期待できるならより本格的な戦力を投入できるかもしれない。  
そうすれば魔神柱であろうと、より確実に討伐できるのではないだろうか。

……姉さんだって危険な目に合わなくて済むかもしれない。

僕の話聞いてダ・ヴィンチさんはなるほどと頷いた。

だけど彼女から答えは僕の期待通りではなかった。

「君の言うことはもつともだ。だけどそれには答えられない」

「なぜですか？」

「それを言うことは今ここで生きているすべての人を裏切る行為だからだ」

彼女は腕を組んで険しい表情をしていた。

「人理修復は一つ一つの歩みにこのカルデアすべての人たちの血のにじむような努力と

苦勞があった。その全てを無視して結果だけを述べるのは、人理を焼却したゲ、いや……、ソロモ……君たちの敵と同じになってしまふから」

そういつてから彼女は肩の力を抜いた。

「ただ増援に関しては答えられるよ」

「あるんですか？」

ふふん、と笑みを浮かべる。

やはりあるのか。

じゃあ、虚数潜航は先遣隊と言うことか。

たしかにあの虚数潜航艇なら並みの攻撃なら防げるだろうし、緊急時には虚数空間に逃げ込むことも可能だろう。

もしくは舟のなかにもういるのか？

あの所長とわめいていた人か？

「ないよー！」

ない？

「これはサポートの有無の問題じゃなく、運用の問題だ」

「運用？」

運用……

魔力が足りないってことか？

それとも召喚システムに問題が？

疑問符が頭に乱立する。

ダ・ヴィンチさんはどこからともなく眼鏡を取り出した。

そしてかけた。

「まず基本として、マスターが英霊呼び出せるのは、マスターとなる人間が魔術を使えるからではない」

「魔術的素養ってことですか？マスター適正みたいな」

もつとも僕に足りない部分だ。

そう思ったが彼女は首を振った。

「それもあるけどね。本質的には『世界からの要請』という許可が下りているからだ」

世界からの要請……

抑止力のことだろう。

「人類滅亡や星の破滅を回避するために、出される要求ですか」

「そうだ。そのためのサーヴァントだ」

全を守るために一を殺す。

それを行うのがサーヴァント。

世界は綺麗ごとでできていない。

「英霊が世界の法則から外されてサーヴァントとして召喚されるのは、抑止力が世界維持のための力として認めているから」

元はグランドクラスを呼び、人類悪に対抗するための手段。

聖杯戦争はそれを格落ち、つまり流用したものと聞いている。

「だからその許可なくしては座から彼らを呼び出すことはできない」

つまり要約すると英霊を貸し与える役割を抑止力は担っている。

マスターは許可をもらうつて初めてサーヴァントとして英霊を召喚できるということだろう。

「そしてわれわれは、この時代においてもっとも平常な場所に来た」

「平常……たしかに外に比べればまともな空間ではありませんね」

人理が消滅したこの世界で人類が営みを続けている場所がここカルデアだ。

そうだ、とダ・ヴィンチさんは言う。

「このカルデアはこの時代で唯一、世界を守ろうとする陣営の領域と言えるだろう。抑止力の拠点とさえいえるかもしれない」

なるほど。

確かにここまでサーヴァントが集まっていれば抑止力陣営ともとれる。

知らぬ間に僕は最悪の陣営についていたらしい。

「そんな唯一の拠点に、だ」

彼女は唯一を強調する。

「未来からの介入なんて不特定要素を多分に含んだ存在が来た時、世界がどんな判断をするだろうか？」

なんとかきれいに保ってきた庭。

そこに入ってくる訳の分からない集団。

僕だったらどうするか？

「確実に追い出しますね」

生活が懸かっているならなおさらだ。

英霊を召喚する許可？ 出すわけがない。

「そうだろう」

ダ・ヴィンチさんもまさしくその考えに至っていたようだ。

「そんな状況でマスターを連れてきたところで、おそらく英霊を呼び出すことすらままならない。できるかもしれないけど試すにはリスクが高すぎる」

「なるほど」

それで増援のマスターは期待できないってことか。



理になつてはいる。

だがそうすると……

「じゃあ、今いる僕と姉さんだけで戦うってことですか？」

そう言うことになる。

結局戦えるのはサーヴァントを率いるマスターだけなのだから。

「うん。この時代の戦いは敵が何であれこの時代の者にしてもらうしかない」

ダ・ヴィンチさんも眉をしかめながら言った。

やっぱりか。

世界の断りがある限り、未来の彼らが戦うのは不可能に近い。

しかしそれなら彼らはなんのために僕にコンタクトを取ったのか。

何もできないのに虚数潜航艇を動かしてくる意味なんてほぼ皆無だろう。

当たり前に行きつく思考は彼女も読んでいたようだ。

眉をしかめつつも言葉をつなげた。

「私たちには敵の情報と未来で培ってきた技がある。それを使ってもらいたい」

情報と技。

今の僕らには喉から手が出るほど欲しいものだ。

だが……

「姉さんのところに行ったほうがいい」

直接的な援助ができないというのであれば戦力の乏しい僕よりも、姉さん方へ行くべきだ。

彼らが所持する技術や情報が何であれ、それを有効に活用するためには人材が密に通う人物に渡される必要がある。

つまり姉さんだ。

現場での司令塔を担う姉さんに知らせず、何の意味があるのか。

ダ・ヴィンチさんは僕のつぶやきに反論した。

「君のお姉さんはあまりに強力すぎる」

「え?」

強力すぎる?!

「未来から来た人物が、過去でその本人や近い知人と出会うということは危険だ」

「なぜですか?」

「その人物の行動によって本来の世界の流れを壊す危険性がある。特異点であれば、その世界の歴史は本来のものでなかったからよかったが」

「……たしかにココカルデアは正しい世界の歴史ですね」

今まで特異点にばかり目を向けていたが、ここは唯一、人理が続いている空間でもあ

るのだ。

そうなれば抑止力はここに限っては、正しく働くということか。

「その通りだ。過去の人物と会うことは世界の断りを乱す行為。すなわち抑止力の排除対象になる可能性が高い」

融通の利かないシステムだな。

抑止力ってのは。

「だから君のお姉さんと接触を持つのは避けた」

そう言うとな彼女は右手を僕に差し出した。

僕が見慣れている手よりも大分細かい手だった。

「私たちが手を貸せるのは達海くん、君しかいない」

だがその手によって支えられているものは大きいらしい。

「だから達海くん。私たちに協力してくれないか？」

彼女にはとてもお世話になっている。

それにホームズさんにも。

それにカルデアが危険だというなら無視できない。

「もちろんです」

そういつて彼女の手を握った。

彼らの言い分はわかった。やるべきことも分かった。だが問題は別にある。

「ただどうやって魔神柱を倒すんですか？その方法がありません」

僕には姉さんほどの力はない。

「僕が契約しているのはキリエライトさん一人のみ。それだって彼女からの了承で半ば強引な形です。彼女は本来出せる力の6割ほどしか使えていない」

僕のマスター適正は著しく低い。

だから僕はキリエライトさん一人の力さえ上手く發揮しきれていない。

今までは彼女自身が宿す英霊の名を知らないことにも起因していたかもしれない。

しかしそれもなくなった今、彼女の枷となりうる要素はもはや僕だけだ。

すなわち僕は壊滅的にサーヴァントの運用に向いていない。

「それは思い違いだ。ミスター・達海」

僕の考えに反論を投げかけたのは今まで静かにしていたホームズさんだった。

「思い違い？」

思い違いとは、いったい？

「君はマスター適正が低いわけではない」

何を言ってるんだ、彼は。

彼は落ち着いた顔で説明する。

「遺伝しやすい魔術的素養がここまで姉弟で違うのは不自然だと思わないかね？」

それは確かにそう思ったこともあったけど。

「でも事実、僕は上手く運用できてません」

実際にできないのなら適性がないとみるしかない。

しかしホームズさんによると違うらしい。

彼はキセルを右手に持って言う。

「さつきダ・ヴィンチ女史が言った言葉を思い出してみたまえ」

言った言葉……？

「英霊の召喚には『世界の要請』、つまり抑止力の許可が必要だ」

ああ、マスターがなぜ英霊を呼べるかって言ってたやつか。

確かに言っていたが、それが一体何だというのだろう。

「だがマスター・達海。君にはその魔術刻印がある」

彼は僕の肩を見る。

「時間遡行の魔術。もはや根源に到達しかねないほどの魔術を持った人物に抑止力は許

可を与えるか？」

この刻印が……原因？

「答えはノーだ」

僕の父さんと母さんが命をとって作った刻印。

父さんと母さんを殺しておいて、刻印をまで消さないと世界に認められないって言うのか？

そんなのは断じて認められない。

「君は素養がないのでなく、抑止力に資格をなく奪されているのだよ」

「つまりこれを捨てろってことですか？」

僕の両親の形見だぞ。

「絶対に捨てません！何があっても！」

僕は両親のことを思って怒鳴ってしまった。

だけどホームズさんはにこりと笑った。

「もちろん、構わない。そうでなければ困る」

「へ？」

英霊を召喚できるようにしろって話じゃないのか？

「でもそうならどうやって戦うんです？」

サーヴァントがいなきや魔神柱とやりあうのは無理だ。

「たしかに英霊は呼び出せない。だが何事にも例外はある」

例外？

「ちよつとしたずる、とでも言おうか」

我々の世界にいるのは何も英霊だけじゃない、とホームズさんは言った。

「民間伝承や物語などの架空の存在、英雄と呼ぶには活躍が乏しい者。英雄にも反英雄にもなれず朽ちていくだけの存在。そう言った存在が山ほどいる」

「確かにいますけど、それは・・・」

「そう。座にすらいない彼らは、本来呼び出すこともできない」

だからこそ英雄が英霊となるはずだ。

「だが、極めて世界法則が乱れた世界では、呼び出すことが可能だ」

乱れた世界？

「そして呼び出された彼らは『幻霊』と呼ばれている」

「幻霊？」

「ああ。個人的な縁さえあれば、もともとお姉さんと同じポテンシャルをもつ君になら  
召喚することは容易なはずだ」

「僕に縁なんてありませんよ」

「そうだろうか？」

ホームズさんはキセルで一服した。

僕に縁なんてあったか？

ひと間空けて彼は言った。

「君はフランスで、英雄ではない、作られた架空の存在に出会ったのではないかな」

フランス？

英雄でない？

作られた存在……

まさか……

「ああ。竜の魔女。作られた架空の聖女。彼女は偉業を成した過去の人物でも、悪でありながら救い手となった反英雄でも、抑止力と契約した守護者でもない」

強引だ、そんなの。

「彼女は英霊ではない。幻霊だ」

そう言い切るホームズさん。

彼が言うならそうかもしれないが、見ていないから言えることもある。

「あの存在が僕に力を貸してくれるとは到底思えません」

彼女が英霊にならないのは、その本質的な問題もあるはずだ。

だがホームズさんにとっては些事のようにだ。

「だが君には縁があるだろう」



いくら何でも無理だ。

召喚したとして焼き殺される可能性の方が高い相手だ。

僕の不安は顔に出ているのだろうか。

ホームズさんは安心させるように、ぼくに笑った。

「安心したまえ。私たちが魔神柱が未来から来た時点でこのカルデアは極めて世界法則の乱れた世界となった。時は進むだけなのが世界の絶対法則だからね」

そうじゃない。

「さあ、召喚の準備を始めよう」

「彼は聡明だ。小細工はすぐにはばれるぞ」

召喚準備のためボーダーへと戻る私にホームズは言った。

「ばれる？何がだい？」

聞き返した私に、ホームズはちらつと目線を向けた。

「とぼけるのはよしたまえ」

彼は続ける。

「我々は魔神柱を追ってきた。なるほど。反応は魔神柱だ。反応は」

「……」

「確かに我々は魔神柱が逃げ出すなんて『予想』はしていなかった」

「だが経験はある。我々は魔神柱を逃がし、そして打ち倒した経験が4度もある。」

「……」

「たしかになぜそんな行動をとったか分かっていない。だがその主語は魔神柱と言うべきではない。彼女と言うべきだ」

「……」

「我々がマスターを連れてこないのは『世界の要請』が得られないから。確かに我々もそのリスクは考えた。だがマスターを連れてこれない根本的な理由はそこじゃない」

「……」  
「我々にマスターがいらないからだ」

「……」

「ミス・立花が強力すぎる。彼女に接触するのは困難である」

「だがそれならマスター・達海を彼女への伝令にして、彼女のサーヴアントを戦力とするのがもっとも確実な戦術だ」

「彼自身に魔神柱討伐を頼む理由にはなっていない」

「……」

「そしてなにより、未来から来た人物が過去の本人や知人などと会うことが危険なのだとしたら」

「我々が過去の彼に会うことはなぜ危険ではないのか？」

「……」

「たしかに嘘は言っていない。が、正確に真実を言っているわけでもない」  
「意図して真実を省いている」

「……」

「……」

もう！

「うるさいな！それくらいわかってるよ！」

私だってこんな詐欺まがいな行為、やりたくてやってるわけじゃない！

「じゃあ言うけどさ、すべての真実を言うことが彼の救いになるのかい？」

「……ふむ」

「人が前に向かって歩いていくには希望が必要なんだよ。明日は今日よりも幸せで、明日は明日よりも幸せだ、って想像がなくても進める人間は決して多くない」

人は前に進むことができる。それは確かだ。

だが同時にとても弱い存在でもある。

「態々彼の力を借りるために来た私たちが、彼の希望を踏み碎くなんてそんな凶々しい真似、私はするべきでないと思う」

恩を仇で返すのは、あの優しいお医者さんだけで十分だ。

「なるほど」

ホームズは顎に手を当てた。

「だが彼の所感も聞かずに、彼が打ちのめされるところともまた傲慢だ」

「……」

「……」

「うるさーい！ さっさと用意しろ！ この訳知り顔で肝心な時に何も話さない探偵！ 幻霊召喚は君だよりなんだからな！」

「ああ、わかつているとも」

## 召喚

「これでいいんですか？」

僕は渡された術式を読んでホームズさんに問いかけた。

「ああ、それで問題ないはずだ」

僕の目の前に立つ彼はそう答えた。

そうなのか。

「でもこれ、ほとんど英霊の召喚と変わりませんよ？」

術式を見る限り、ほとんどやってることは変わらない。

聖杯を通すか否か、違うのはこの一点のみだ。

これでホームズさんが言っていた幻霊？を召喚できるのだろうか？

ホームズさんは僕の言葉を聞くと、ふむとひとこと言って顎に手を当てた。

「君は注射を受けたことはあるかい？」

注射？

「予防接種とかで病院で受けるあれですか？」

「ああ」

「受けたことありますけど」

そりゃ、現代人なら一度は受けたことあると思うけど……

召喚と注射にいったい何の関係が？

僕の訝しげな視線など素知らぬ表情で彼は続ける。

「注射器は1844年にフィンランドの医師が発明してからここ170年程、ほとんど

形が変わっていない。なぜだか分かるかい？」

なぜかって言われたら……

「変える必要がなかったから、じゃないですか？」

必要がなければ変化も生まれまい。

需要と供給の関係ではなからうか？

僕の答えにホームズさんは笑った。

「エクセレント！」

僕の答えは彼の満足いくものであったらしい。

「その通りだ。注射器はあの形がベストだ。だから大きく変化することなく使われ続けている。召喚もそれと同じだよ」

「召喚もですか？」

「サーヴァントの召喚システムはマキリ・ゾオルケンが考案したとあるが非常によくできている。格落ちとはいえ、これを使わない手はないさ」

ええっと、つまり……

「召喚システムも洗練されてた技術だから、幻霊の召喚に流用してしまおう、ということですか？」

「理解が早くて助かるよ」

彼はにこりと笑って拍手した。

まるで先生だ。

完全に子ども扱いされている。まあ、事実子供なだけけど。

はあ、とため息をつく。

そんな僕の横を小さな車のような機械が何台か通り過ぎていく。

この機械は召喚陣を描くためにダ・ヴィンチさんがさつき持ってきた。



イメージは小学校の頃によく見た白線を地面に書く手車に近い。校庭でよく先生が使っていたあれである。

といつてもこつちは全部自動で動いているが。

ウイーンと音を立て、術式に描いてある陣と寸分たがわぬそれを滑らかに床に描いていく。

結局、魔術も効率化を目指すと現代科学とそんなに変わらないのかもしれない。

「おーい」

そんな益体もないことを考えていたら、先ほど戻ってきたダ・ヴィンチさんが帰ってきました。

何か巨大なものを抱えて。

いや、あれ抱えてっていいのか？

背中に背負っていたランドセルのようなりユックから、六本指の大きな手みたいなのが取り付けられている。

そしてその手が彼女の頭上まで、何か大きなものを抱えて運んでいるのだ。

というかその手は一体どうやって入れていたんですか。

さつきそのランドセルから生えてきましたけど、体積的にどう考えてもおかしいですよ。

この二人の前にいると、自分の中の常識がどこかへ飛んで行ってしまいそうで困る。  
「よいしょ」

ダ・ヴィンチさんは描かれた陣の真ん中に運んできたものを置いた。

「はい、お疲れ。君たちは戻ってて」

どうやら陣が完成したらしい。

彼女がそう言つて両手を叩くと、先ほどまで陣を描いていたミニ自動車は虚数潜航艇の方へ走つていた。

オツケーグーグル。

多分あれのソフトウエアは今のミニ自動車が原点に違いない。

彼女の背中の巨大な手は、理解の及ばない変形をしてリュックへと戻り、彼女は言つた。

「さあ、触媒も持ってきたことだし召喚を始めようか」

触媒？

「幻霊の召喚にも触媒が必要なんですか？」

僕はホームズさんに聞いた。

「もちろん」

彼はすぐに答えた。

「先ほども言ったがこの召喚は召喚システム・フェイトの流用だからね。君のお姉さんがいつもやっているのと大きく変わらないさ」

いつもの召喚……

「じゃあ、あれはキリエライトさんが使っている盾、ですか？」

「……ああ、その通りだ」

それにしてはゴテゴテしている。

彼女の盾にあんな装甲はなかったが。

「ん？これ？これは強化外骨格って言ってね。まあ、ゼロセイルと同じでお蔵入りになった技術を掘り出してきたのさ」

僕の視線に気づいたダ・ヴィンチさんはそんなことを言った。

あれも使われなかった技術なのか。

すごいな、カルデアって意外と倉庫だけでも宝の山なのかも知れない。

「そんなものもあつたんですね」

「……まあね」

そこでふと疑問に思う。

そう言えば彼らは何でお蔵入りになった技術を使っているんだろうか？

虚数潜航であれ、あの強化外骨格であれ。

ドクターもこちらのダ・ヴィンチさんも、あんなもの使おうなんて一言も言っていなかったが。

“注射器はあの形がベストだ。だから大きく変化することなく使われ続けている”

さつきホームズさんが言っていた言葉が頭をよぎる。

この言葉。

逆説的に考えれば、必要に迫られれば変化する、と捉えることもできる。

未来のカルデアは、骨董品を漁らなければやっていけないほどの何かがあった……のか？

まさかな。

虚数潜航にしたってとても有用な技術だった。

だから実用化しただけだろう。

頭を振る。

やったこののない幻霊の召喚を行うからナイーブになっているのかもしれない。

下らないことを考えてる場合じゃない。

こういう時、いつもはキリエライトさんがいたからか、余計なことも考えなかったん

だけど。

そういえばキリエライトさんは来ているのかな。

ダ・ヴィンチさんが盾を持ってきたってことは舟の中にいるのかもしれない。

聞いてみようかな。

「詠唱は一部分だが幻霊の召喚に合うよう変更してある。聞きなれたフレーズで行わないように注意したまえ」

ぼんやりしていたら隣のホームズさんにこんなことを言われてしまった。

いけないいけない。

少し気を抜きすぎた。

僕は手に持った術式の研究書をもう一度確認した。

S

「素に銀と鉄。 礎に石と契約の大公。」



「あれが……魔神柱……？」

私だけでなくマシユ、エミヤ、そしてアルトリアもそろって固まっているようだった。私たちはまた隊列を組み最下層まで下ったが、結局敵の形跡らしいものは何一つ発見できなかった。

そのためそのまま進み、最下層の扉をくぐったのだが……

「細い……よね？」

そんな私たちを出迎えたのは今なお稼働中の動力炉と、魔神柱と呼ぶには形状の大きく違う敵だった。

動力炉であるプロメテウスの火は側面が弓のように緩やかなカーブを描き、上下が少し太い円柱であるのだが、その床から天井までつながっている円柱に太い蔓のようなのが巻き付いている。

最初はあれも動力炉の一部かと思っただが、生理的な嫌悪感を催すほどの量の目がその蔓の表面を這っているのが見えた。

おそらくあれが魔神柱なのだろう。

あれで柱と言っているのかが甚だ疑問ではある。

魔神蔓と言った方が正しい。

「立花！」

私たちが驚き、足を止めていると向こうから人影が数人駆け寄ってきた。

「ムニエルさん！」

先頭を駆けているのはシミュレーションルームで別れたムニエルさんや技巧部のメンバーだった。

彼らの姿を見て、マシユが声を上げた。

「無事でよかった！」

7人ほどが小走りにこちらの近くに来ると、軽く笑った。

「いや、そつちもなんもなさそうよかったよ」

戦闘にいたムニエルさんは腰に手を当てて言った。

「はて？」

「何でここに？」

なんでムニエルさん達はここにいるんだっけ？

そう思った私は彼にそう問いかけた。



それを聞いて彼は呆れた視線を私によこした。

「いや、シミュレーションルームで言ったろ。俺たちは炉心の整備に回されてるって」  
ああ。そういうばそんなことを言っていた。

警報が鳴ってごたごたしたときのことを思い出す。

「ずっとここにいたの？逃げなかったの？」

威圧感を放っている魔神柱を背にしているムニエルさんに私はそう質問した。

彼らがここの配置なのはわかる。

しかし彼らが怪我をしましては、元も子もない。

あんなえげつない敵が目の前にいるのになんで逃げないのさ？

私はそんなことを思ったのだけど、ムニエルさんはやっぱりみたいな顔をした。

なにその反応。

「じゃあ侵入してきた敵ってやっぱあれなのか？」

彼は炉心に巻き付いてる魔神柱を指さした。

「うん」

どうみても敵。

「いや、俺たちも最初はそう思ったんだよ。で逃げようとしたんだが、どうも変なんだよな」

彼の言葉に周りの技巧部の人たちもうんうんと頷いた。

変？

「確かになんか細いけど……」

変と言うなら魔神柱がカルデアにいることそのものが変だ。

態々言うことでもない。

だが彼の表情を見る限り、そういうことを言いたいわけではないらしい。

「それもそうなんだが、それだけじゃなくて」

「それだけじゃないって？」

「ほら。この状況だよ。おかしいと思わないか？俺たちが無事って」

彼は両手を広げて自分の体をアピールする。

怪我がないならよかったけど……

そんなことを考えてからハツとした。

言われればそうだ。

彼の言葉にあんまり緊迫感がなかったから考えなかったが、そもそもマスターでもない彼らが魔神柱と同じ空間にいて傷一つないってのも妙だ。

ムニエルさんは両手を下すとあの魔神柱を指さした。

「この距離だし俺たちのこと見えてると思うんだけど、なぜか攻撃してこないんだよ」

「攻撃してこない？」

「ああ。最初この階にエレベーターで降りたらすぐあいつが見えた。だから俺たちも逃げようとしたんだ」

普通そうするよね。

「そしたらトマリリンが腰ぬかしちまってよ」

ムニエルさんの隣の大柄な男の職員が頭を搔いて苦笑いする。

熊も投げ飛ばせそうなくらい大きいのに、腰抜けちゃったか。

「こんなガタイだからよ、肩貸そうにも引つ張ることすらできなくてな。その場で悪戦苦闘してたんだ……」

そういつて彼は後ろの魔神柱を見る。

「あいつ、目の前で腰ぬかしてる人間がいるのに何もしやしねえ。1分もすればトマリリンも立てるようになったんだが流石に変だと思ってるな」

彼は肩をすくめた。

なるほど。

「でもそれだったら連絡してよ。端末使つて管制室に知らせてくれればこんな急がなくてもよかつたのに」

猶予があるならもう少し余裕を持ってきたかった。

「したさ。でも繋がらないんだよ」

彼はズボンから端末を取り出す。

右上には offline と表示されている。

故障か？

そう思つて私も端末を取り出すが、offline と表示されていた。

電波が通らないのだろうか？

「ここをこのまま放置しておくわけにもいかないだろ？かといつて上に敵がいなくても限らないからこのメンツを分断すんのも危険だし、だから身を潜めて待つてたつてわけ」

潜める意味もなかったけどな、そう言つて彼は端末をしまった。

そういうことか。

彼らがここにいる理由はわかった。

さてどうするべきか？

炬を復旧させるのが目的だから、炬が整備できる彼らにはここにいてもらつた方が都合がいい。

だけど戦闘するとなると彼らを危険にさらしてしまうかもしれない。

一度戻つてもらふべきだろうか？

上からここまでに敵らしい敵もいなかったし。  
うーん。

ドクターに聞こう。

インカムのマイク部分を口に近づける。

「ドクター。聞こえてたと思うけど、どうすればいい？一回ムニエルさんたちを連れて帰る？」

「……」

「ドクター？」

「……」

返事が返ってこない。

故障？

いや、電源は入ってるよね。

「インカムも使えないんじゃないか？端末と同じで」

耳からインカムを取ってにらんでいると、それを見ていたムニエルさんがそう言った。

「あー、どつちも使えないのか」

困ったな。

連絡できないのはあまりよろしくない。

一回戻る？

でも予備電源の発電量を考えると時間がないだろうし。

むむむ。

そもそもあの魔神柱は何しに来たんだろう？

態々カルデアの魔力を吸い上げるために来たのか。

それはそれでこちらとしては壊滅的な被害なんだけど。

何というか地味だ。

50 mほど先の奴を見る。

私が入ってきてても攻撃する様子もないし、こちらが本当に見えるかも怪しい。

うーむ。

顎に手を当てて悩んでいると、周りを見ていたムニエルさんはあることに気が付いたみたいだった。

「達海はどうしたんだ？こっちに来てないみたいだけど」

弟がいないことに気付いた彼がそんなことを言った時だった。

「マスター！」

エミヤが叫んだ。

それを聞いた私はムニエルさんを蹴飛ばす。

「うおッ！」

「ごめん！ムニエルさん！」

そう叫びながら私もその場を飛びのく。

頭を抱え、受け身の体勢で地面に転がった。

バゴッ！

そんな大きな音とともに衝撃が走り、私とムニエルさんがいた場所の床から勢い良く何かが生えてきた。

「あつぷな」

冷や汗が背中をすうーつと垂れるのを感じながらそんなことを呟く。

すぐさま立ち、生えてきたものの正体を確認する。

「げそっ？」

床を突き破って生えてきていたのはイカの足に似た何かだった。

吸盤のように赤い斑点があり、表面は紫色。

厚みがあり、見る限りは肉質が堅そう。

「？」

ゆらゆらと揺れる足の吸盤が動いた。

注意深く見ると斑点は吸盤ではないようだった。

「目か」

ってことは、これは魔神柱の一部ってことで。

「立花さん！攻撃です！」

マシユが盾を構えながら叫んだ。

だよねえ。

やっぱり魔神柱相手に穩便に、とはいかないか。

となると…

「当初の作戦通りに行こうか」

礼装にわずかばかりの魔術を補填する。

そして振り返りざま、指示を出す。

「マシユは技巧部の人たちを守りながら後退！彼らを部屋から出し次第戻ってきて！」

「了解です！」

「ムニエルさん！一度管制室まで戻ってください！ここに来るまで敵はいなかったの  
で、すぐに戻れるはずですよ！戻ったらドクターたちに現状を伝えてください！」

「わ、わかった！」

私の指示を聞いた職員たちは急いで階段の扉のある方向へ走る。



殿はマシユ。

後ろを確認しつつ、的確に彼らを誘導する。

まずは彼らの安全確保が最優先だ。

「エミヤ！アルトリア！魔神柱の気を引くよ！回避優先で攻撃して！」

「了解した！」

「こちらもだ！」

二人は魔神柱に向けて踏み込んだ。

エミヤが投影魔術で弓を生成し、剣を矢にして番える。

弓を引き絞り、右手の筋肉が服の上からわかるほどに収縮する。

そして迷いなく矢を放った。

一直線に飛んでゆく剣の先は魔神柱の目。

寸分たがわぬ狙いがまさにその目を貫こうとしたが……

「むっ！」

剣ははじかれて床へ落ちた。

カランと金属音を立てて、床をはねる。

「なっっっ！」

右側面からアルトリアが距離を詰め、そして飛んだ。

「これでどうだー！」

風を推進力にし、速度を乗せると体に回転をかけながら聖剣で魔神柱を切り裂いた。焔に巻き付いていた体の一部が切り裂かれ、体内部から黒い液体が噴出する。

「この手ごたえ……っ！」

よし！

こちらの攻撃が全く通用しないというわけではなさそうだ。

そうならばやりようはある。

《——！！——！！》

魔神柱が鳴いた。

音が出ているのだが、こちらでは表現できないような声だった。

まるで聞いたことがあるような。

旧友の声を聞いているかのような感情を心のうちに抱かせる声だった。

「魅了の魔術？」

あまりにも不自然に沸き立つ心を感じ、敵側の魔術を警戒する。

「マスターー！」

エミヤが私に向かって叫ぶ。

それを聞いて、私はまた前に大きく跳んだ。

「大丈夫！」

受け身を取りながら彼に答えを返す。

そして先ほどまで立っていた場所をまたしてもげそのような足が床を壊し、下から貫いた。

「二人とも！」

「ああ！」

体を回転させ勢いのまま立った私は、二人の姿を確認して叫んだ。

エミヤとアルトリア、二人の足元の床が盛り上がり上がっていたからだ。

エミヤ返事をして跳び、アルトリアは私が声を出す途中で既に回避運動に入っていた。

そして二人が寸前までいた場所を、下から足が貫いた。

「こいつ、この気味の悪い足を何本持っているんだ？」

「さあな」

二人が回避運動をしながら会話している声が聞こえる。

余裕だなー。

まあ、それもそうか。

「この足、気配を消す気がまるでないもん」  
おっと。

床の振動を足で感じた私は後ろに大きくステップする。

その一瞬後、また足が床を貫いて生えてきた。

危ない危ない。

絶え間なく床を貫いてくる足を、感覚を頼りによける。

しかしワンパターンだな。

とうるか当てる気あるの？これ。

さつきから何本か、私たちの位置と関係ない場所に生えてきてるんだけど。

魔神柱の近くでつかず離れずを繰り返している二人とは、離れた位置に生えてきた足を見ながら考える。

いつもの魔神柱なら広範囲の魔術や個人を狙った出力の高い術を使ってくるのだが、今回のこいつはさつきから物理的な攻撃しかしてこない。

しかも適当な場所に足を生やすだけ。

たしかにムニエルさんの言っていた通り、なにか変だ。

邂逅直後に宝具を使ってもらうつもりだったけど、この状況だと難しいし、もう少し様子を見るべきか？

「あ

そんなことを考えていたら、ステップの着地をしようとした足が滑った。

私は転倒方向の床に手をつこうとした。

視線の先はひびが入り、今にも何かが貫いてきそうなほど不自然に盛り上がった床。  
やばっ。

「マスター！」

前線の二人が同時に叫ぶ。

それと同時に私の体が宙に浮いた。

「おっ！」

お腹に圧迫感。

顔を上げるとマシユの顔がすぐ近くにあった。

「大丈夫ですか!!立花さん！」

どうやらマシユが私を抱えて間一髪で跳んでくれたみたいだ。

「ありがとう。助かったよ、マシユ」

「いえ。私でもこれぐらいなら」

マシユは私を抱えながらもこりと笑ってくれた。

そして素早く回避行動をとる。

一連のさまを見て、前から荒い声が飛んできた。

「気を抜きすぎだ！マスター！」

「猿でももう少しましな動きをするぞ！間抜け！」

ひどっ！！

特にアルトリアさん！

今のただの悪口じゃない！！

まあ、気を抜いてた私が悪いんだけどさ！ごめんね！

…でも確かにこれは危ない。

「マシユ、このまま私を抱えて動くの頼んでもいい？」

見た目がひよろひよろだからと言って、よく分からない敵に私一人というのも心許ない。  
い。

幸いにも今回は彼女がフリーなので頼む。

「もちろんです。立花さん」

マシユは私を抱えたまま、私の頼みを快諾してくれた。

彼女が守ってくれるなら万全だ。

「マスター！」

マシユの腕に抱えられたまま移動していると、魔神柱を切っていたアルトリアが叫ん

だ。

「いつまで様子見をしているつもりだ！」

職員たちの避難も終わり、こっちが守りに入っている理由もなくなった。

敵の攻撃もワンパターンだし、彼女もしびれを切らしたのだろう。

確かにこれ以上様子見をしてもあまり意味はなさそうだ。

しかし…

「宝具を使うには足場が悪い…」

アルトリアの宝具にしても、エミヤの宝具にしても溜めがいる。

宝具を開放するまでのわずかな時間、彼らは無防備なのだ。

こんな無作為な攻撃の中、発動させるのは非常にリスクが高い。

本当だったらほかのサーヴァントに陽動してもらいたいんだけど、生憎今回は彼ら二

人分の魔力しかない。

マシユとパスをつないでるのは達海だから彼女に宝具を使ってもらうわけにもい

ない。

どうするか…

そんなことを考えていた時、マシユがあることを呟いた。

「この攻撃、狙いが偏ってますね…」

「狙い?」

彼女のつぶやきに顔を上げる。

「はい。見てください」

彼女は走りながら横に顔を向けた。

私もそちらを見る。

「先ほどから魔神柱が生えあがってくる場所が固まっているんです」

彼女の視線の先には魔神柱の下足みたいなものが貫いた床の後があつた。

彼女の言う通り、穴が開いている場所には偏りがあつた。

集中的に貫いている場所は二つ。

一方は当然だが魔神柱の周りで戦っている二人の周囲。

戦っている彼らを攻撃しようとすれば当然そうなるだろう。

もう一方は私たちの周りに集中している。

と言つても私たちのいる場所を貫いているのではなく、先ほどから進行方向を塞ぐ形で

足が生えてきている。

私たちを囲もうとしているみたいだ。

「あの攻撃は出せる位置が限られている、ということでしょうか?」

その可能性もある。



奴のあの攻撃はとぼせる位置が限られるのかもしれない。

でもまいちピンとこない。

それならば悟られる前に私を攻撃するのがあの魔神柱にとって最も都合のいいこと  
なはずだ。

なぜ私とマシユを囲うように、あのイカの足みたいなもの延ばしているのか。

不穏だ。

魔力に余裕がない状態で後手に回ることだけは避けたい。

だったら先手必勝！

「ここで決める！」

すーっと大きく息を吸い込むとお腹に力を込めて渾身の声を出す。

「エミヤ！宝具！使って！」

私は叫ぶ。

「周りの攻撃は気にしなくていいから！」

私をちらりと見て頷いたエミヤは動きを止めた。

「了解した！」

何も聞かずに宝具の開放に入ってくれる彼に口角が上がる。

これが彼の信頼。

裏切るわけにはいかない。

「マシユ！私を魔神柱目掛けてぶん投げて！」

エミヤの魔力が高まるのを感じながらマシユに言った。

「はい……はい!!」

マシユは目を丸くした。

「え!! 投げるんですか!!」

「そう！ほら！」

私は両手を上げた。

彼女が私の腰をつかみやすくするためだ。

「本気ですか!!」

「本気！本気！」

マシユの目がぐるぐる渦巻いている。

「着地はどうするんですか!!」

「なんとかなるって！」

「そもそもなんで投げるんです!!」

「必要だから！」

奇襲はいつだって相手の想定を上回る必要があるんだよ！

さあ！

「どうなつても知りませんよ！！」

私がいちたつて冷静だからか、マシユは混乱しながらも指示に従つてくれた。

彼女は右腕で脇下に私を抱えた。

そして左足を軸にして回転し、円盤投げの要領で魔神柱めがけて私を思いっきり投げた。

「飛んでーくださいー！」

彼女の掛け声とともに体にもすごい負荷がかかる。

「うおっ！」

耳元でごうごうと風を切る音がする。

そして炉心とそれに巻き付いている魔神柱にどんどん近づく。

予想はしていたが、内臓が動く感覚に肝を冷やす。

分かっているもジェットコースターとかでフワツとなるあれだ。

スリル満点だね。

風を切る感覚を肌で感じながら右腕を魔神柱に向けて構える。

ふと、この前のことを思い出した。

「キャメロットでもやったな、これ」

そんなことを呟きつつ、私が補填したわずかばかりの魔力で礼装を起動させた。

「ガンド!!」

右手の先から赤黒い光が飛び出し、真空放電のような不規則な道を描きながら飛んだ。

そして魔神柱に直撃した。

パキンッ!

ガラスを割ったような音が辺りに響く。

下で荒々しい音を立てて床を破壊していた魔神柱が動きを止めた。

よし!効いた!

「I am the bone of my sword…」

下では既にエミヤが詠唱を始めていた。

タイミングばっちりだ。

流石だね。

空を飛びながら、私を投げたマシユの様子を見る。

彼女はこちらを見て固唾をのんでいた。

そんなに心配しなくても……。

「え？」

足を止め、こちらを見ている彼女にそんな感想を抱いたとき、彼女の周りの違和感に気付いた。

私たちが囲うように床から飛び出ていた足。

それが円を作っていた。

彼女を中心として綺麗にすべての足が、等間隔で地面から飛び出ていてまるで陣のようだった。

「陣……？」

放物線の頂点に達したのか私の体が落下し始めた。

背を地に向けながら体が落ちていき、地面にぶつかる5秒ほど前でアルトリアに抱き留められた。

「まったく無茶をする」

彼女が私を立たせながら言った。

「だがおかげでチェックメイトだ」

彼女は魔神柱の方へ向き、聖剣を構えた。

「さあ、魔力を回せ。決めるぞ」

しかし彼女の言葉に私は反応できなかった。

空中で見たあの円、見たことがあった。

既視感。

マシユを中心とした円。

ある場所であれを私はよく目にしていた。

彼女の盾を中心としてサークルを作るのだ。

そしてその後に行うのは……

「まさか……」

そんなはずはない。

そんなことはあり得ない。

だが有り得たとしたら。

「エミヤ！ 宝具の開放をやめ……」

その判断は遅かった。

「……My whole life was “unlimited blade work”！」

彼の詠唱の終わりとともに私たちをまばゆい光が囲う。

あまりのまぶしさに右腕をかざし、光を遮る。

白光が収まり現れたのは、無数の剣が地へと刺された荒れた大地の丘だった。

固有結界。

一定時間、現実を心象世界に書き換える特殊魔術。

魔神柱の隔離を実行するための結界は完了した。

あとはアルトリアの宝具を開放するために魔力を回せばいい。

それだけのことができなかった。

目の前の光景が衝撃的だったからだ。

「召喚陣……」

最下層から切り離され、固有結界の中に閉じ込められたことによつて魔神柱が床の下からどのように足を生やしていたのかが露になった。

本体から木の根のように私たちの足元へ、あの蔓のような体を無数に張り巡らせていたのだ。

そしてマシユの周りを取り囲んでいた魔神柱の足のようなものは絡み合い、召喚陣を作っていた。

「まさかさつききの攻撃は、これのため……」

私たちの行き先を塞いで取り囲むだけが目的ではなかった。

地下に根を張らせ、召喚陣を描いていたのか！

私たちを囲んでいたのはまさか、マシユの盾が触媒になるってわかっていたってこと

!?

巻き付いていた炉から隔離され、蔓のような本体がすべて地に投げ出された魔神柱を睨みつける。

でも魔神柱が召喚なんてできるわけない!

そんな私の考えをあざ笑うかのように声が響いた。

《素二銀卜鉄。礎二石卜契約ノ大公。

降り立ツ風ニハ壁ヲ。四方ノ門ハ閉ジ、王冠ヨリ出デ、王国ニ至ル三叉路ハ循環セ

ヨ》

この詠唱は…やはり…

《閉ジヨ。閉ジヨ。閉ジヨ。閉ジヨ。閉ジヨ。

繰り返スツドニ五度。

タダ、満タサレル刻ヲ破却スル》

いや、今は考えている時ではない。

「マッシュー！急いでその陣から出て！」

触媒がなければ召喚システムは安定しない。

彼女の盾さえ陣から外してしまえば…

「立花さん！っ！」



私の声を聞いたマシユは両足に力を入れるも動けなかった。

床から生えていた魔神柱の足の一部が彼女に絡みついて、固定していた。

あちら側もお見通ししてことか！

だったら！

《——告ゲル。

汝ノ身ハ我ガ下ニ、我ガ命運ハ汝ノ劍ニ。

聖杯ノ寄ルベニ従イ、コノ意、コノ理ニ従ウナラバ応エヨ》

私はカルデアに残った魔力を注ぎ込んだ令呪を3画すべて起動させた。

「マスター！！」

私の行動を見て、エミヤが驚く。

奴がなぜ召喚をしようとしているか分からない。

だが敵がサーヴァントを召喚できるのだとしたら、長期戦ができない私たちの方が部が悪いのは明らかだ。

だったら、奴が術を終える前にその一切を消滅させる！

「令呪を持って命ず！宝具を開放せよ！セイバー！」

膨大な魔力がアルトリアに注がれ、彼女の聖剣はおびただしいほどの黒い光に飲まれた。

「了解した。魔竜ヴォーティガーンにも達する我一撃を持つて勝負を決する！」

周りの空気に圧がかかり、体が重くなる。

「卑王鉄槌。極光は反転する」

彼女が自身の前に黒い聖剣を掲げた。

《誓イヲ此処ニ。

我ハ常世総テノ善ト成ル者、

我ハ常世総テノ悪ヲ敷ク者》

「光を呑め！」

《汝三大ノ言霊ヲ纏ウ七天、

抑止の輪ヨリ来タレ、天秤ノ守リ手ヨ——！！》

『エクスカリパー・モルガン約束された勝利の剣！！！！』

私の視界は一面の黒によって塗りつぶされた。

## 再召喚

「やった……？」

アルトリアの放った宝具によっておこった砂煙が私の視界を塞ぐ。

土が焼けた匂いが辺りに充満している。

令呪3画を用いた現状最大出力の攻撃。

砂煙が晴れていくにつれ、彼女の宝具がいかにも強力だったかを再認識させられる。

「谷だ……」

彼女の正面は地が裂けて、浅い谷ができていた。

加減をしている場合じゃないと思って出力全開でやつてもらったが、流石にやり過ぎただろうか？

よく結界が持ったものだ。

流星はエミヤだ。

宝具まで抜かりのない仕事である。

砂煙が晴れて、先が見えてきた。

私とその視界で真っ先に捉えたのは、エミヤの背中だった。

彼はなぜか空中で足を漕いでいる。

何をしているんだろう？

魔術？

やはりさつきの一撃が結界に綻びを生んだのだろうか？

その思考は彼の先に人影があることよって霧散した。

「エミヤ!?」

彼は首を絞められていた。

あれは空中でもがいてただけだ。

「アルトリア!」

彼の姿を見て、私はとつさに叫んだ。

「分かっている!」

私の叫びを聞いて、まだ宝具の余韻を残した聖剣を携えて彼女は飛び出した。

その瞬間、彼女の体が横にぶれた。

「な!??!」

彼女の足に絡みついていたのは、あの魔神柱が生やしていた足だった。

「まだ生きてたの!??!」

その足は彼女の足を掴んだまま大きく振りかぶると、地面に叩きつけた。

「ぐはっ!??!」

「アルトリア!??!」

そのままの勢いで彼女を何度も地に叩きつける。

「このっ!」

彼女が足に絡んだ魔神柱の蔓を切ろうとするが、蔓から新たな蔓が伸びてきて右腕を

固定した。

「イカもどき風情が!」

そして再び地に叩きつけた。

「がはっ!??!」

まずい。

彼女にはもうほとんど魔力が残っていない。

あのままじゃ捌り殺しにされる。

でも私の礼装は再使用までの冷却時間がある。

どうする!!?!

何か手は!!?!

「お止しなさいな」

私が焦っていると人影の方から声がした。

その声に反応して、魔神柱の足はアルトリアを叩きつけるのをやめた。

エミヤの首を握っていた謎の人物は、彼を足元に叩きつけると、右足で思いつきり踏んだ。

「がっ!!?」

耐えきれず彼の肺から空気が漏れた。

彼を地へと叩きつけた衝撃で風が吹き荒れる。

その風圧によってエミヤの周りの砂煙が晴れ、彼を叩きつけた人物の姿が私の目に入った。

「うっ..」

変な言葉が出た。

ふざけているわけではない。

その人物の姿があまりに突飛だったからだ。

——痴女だ

姿を捉えて、まず出てきた感想がそれだった。

再三に渡つて言うがふざけているわけではない。

法衣、なのだろうか？

振袖のように袖丈がとも長く、襟下は地に引きずるほどに長い。

艶やかで、美しい長髪であるのに尼さんが被る帽子のようなものをかぶっている。

そしてその全てが金色の綿のごとく上品に織られたもので、これだけを見ればさぞや高貴な身の上なのかと思うかもしれない。

しかし問題はこれからだ。

肩から脇下までの袖付けが存在しておらず、首から腰までの露出が異様に激しい。

さらには首から胸元を通りへそ下あたりまでがスリットになっており、正面がもろに露出されている。

まるで局部以外は隠す必要がないと言っているかの如くだ。

僧侶や尼のように禁欲を代表する法衣を身に着けておきながら、それを態々色っぽく見えるように着ていることが彼女の艶やかさを余計に強調しているように思える。

なんだ、あの変態は。

私はあらたな悟りの境地のようなものを見せられて固まった。

「まったく。現界直後にこれとは、なんて熱烈な歓待なのでしょう」

そんな私の存在を無視して、変態はエミヤの胸を執拗に踵で踏んでいた。

「素晴らしいですわね？」

「どけっ!!」

エミヤは胸に乗った足を払おうと右手を伸ばしたが、彼を踏んでいるのとは反対の足で蹴られた。

そのまま体重を強くかけられて、彼はうめいた。

「く!?!」

「それは無理な相談というものでございます」

変態は左足を地に下ろすと、右足で彼のみぞおちをぐりぐりと押し続ける。

「貴方にはしてやられましたからね。私怨は些か雅にかけますが、こう意趣返しができるとするのは非常に気持ちが良いものです」

謎の変態はエミヤを踏みつけながら、頬を赤く染めていた。

シルクのように白く瑞々しい指を頬に添え、息を荒くしている。

エミヤが窮地だというのに体が動かない。

脳が本能的に、あの変態に接触を取るのを恐れていた。

「ねえ。そう思いませんか?」

変態はエミヤを踏みつけながら彼に問うた。



「なんの、話だ？」

苦しい表情をしながら彼は言った。

「あら？あなた……。随分とつまらない目をしてますわね」

彼女は高揚した表情から一転、水をかけられたかのように静まった。

「ああ。あなたはそうだったということですか」

大きくため息をついた。

「私のような毒蛾に出会わずとも地獄に落ちる”。ほら、私の言った通りでしょう？」  
そして頬に添えていた手をすつと伸ばすと手刀のようにたてて、エミヤの顔に向け  
た。

「悪であれば何人も許せないその心”。結局のところ “鉄の心” など人が持つべきで  
はないのですよ。……なんて平凡。なんて代わり映えのしない末路。興覚めです」

周りの空気が一瞬で冷えたかのように寒さを感じた。

鳥肌が立つ。

彼女の纏う空気にまがまがしさがにじみ出る。

そして今更気づく。

異様なのは彼女の服装だけでないことを。

頭からはおぞましい黒い角が左右に2本生えている。その表面には無数の目が張つ

ており、さながら魔神柱だ。

そして胸部から下腹部までも気味の悪い目が血管のように並んでいた。どうみても人間ではない。

この姿、まさか先ほどの魔神柱が呼び出した英霊なのか…？

私は彼女が今からしようとしていることにとてつもない不安に襲われ、たまらず叫んだ。

「ま、待って！」

私の叫び声が響き、エミヤを踏んでいた彼女はゆっくりとこちらを向いた。

そして私を見るとにっこりと微笑んだ。

「あらあら。お久しぶりです。お元気でしたか？」

久しぶり？

「私、地獄の窯の底、いえ、電子の海の底より舞い戻ってまいりました」

恍惚とした表情で彼女はそう言った。

電子の海？

彼女は一体何を言っている？

「あ、あなたは、誰？」

震える手を抑えながら私は声を絞り出す。

「まあ！あれだけ熱烈に交わったのにも関わらず私のことをお忘れで？なんてひどい。私、昂ってしまいます」

彼女は手を口元にかざし、上品に笑う。

「ま、まじわる？」

言ってることと、やってること、そして立ち姿。

全てがちぐはぐで混乱する。

「なにを言ってるの？」

私はひどく焦燥しながらも口を動かす。

「あなたは何？」

私の問いに彼女は首を傾げた。

「はて？記憶の書き換えと言うわけでもなさそうですが、とぼけているというわけでもなさそうですわね」

彼女がつぶやいたあと、大地が大きく揺れた。

《—————》

またあの声だ。

心をかき乱す、異様な声。

その声に目の前の彼女が振り返った。

魔神柱はアルトリアの身動きを封じたまま、鳴いていた。

《——、——》

「あら？あなた、随分と可愛らしい姿に変わったのですね」

彼女は魔神柱の方へ視線を向け、何やら語りかけ始めた。

《——》

「まあ、どうもご丁寧に。私は…」

《——、——》

「そうですか。それは助かります」

《——、——》

「へえ。あの人間の…」

会話してる？

魔神柱の鳴き声と彼女の言葉の間はまるで会話の応酬のようであった。

なにがなんだかよく分からない。

ただあの魔神柱との意思疎通ができる可能性がある以上、先ほどの召喚で呼び出したのが彼女なのだろう。

召喚を阻止できなかった。

あの魔神柱までもピンピンしてる。

非常にまずい。

それにあの女、奥の魔神柱と同じような気配がする。

あの女に関わることを無意識に避けようとするのは、あの姿のせいと言うだけではない。

体がさつきからいうことを聞かないのだ。

「はあ。なんででしょうか？」

こちらの魔力はほぼゼロ。

礼装はまだしばらく使えない。

二人のサーヴァントは相手に拘束されている。

どう転んでもこちらの不利は変わらない。

どう切り抜ければ：

——マスター、聞こえるか？

エミヤ!!

頭に彼の声が直接聞こえてくる。

何かの魔術か？

驚いて彼の方に視線を向けようとしたが彼に止められる。

——そのまま動くな。私が話しかけていると悟られるな。

その言葉に反射的に体を止める。

——そうだ。それでいい。

これ何？なんでエミヤの声が響いてくるの？

——初歩的な伝達の魔術だ。だが今はそんなことどうでもいい。

彼の声はとも焦っているように感じられる。

——時間がないから要点だけを言うぞ。

う、うん。

——君はマシユを連れてここから今すぐに撤退しろ。

え？

あ、マシユは!!

——無事だ。だが意識を失っている。

私は急いで先ほど召喚陣があつた方を見た。

そこには彼女がうつむけで倒れていた。

「マ……」

——落ち着け！彼女は無事だ。おそろくだが先ほどの召喚で魔力を取られたのだ

ろう。魔力の消耗で一時的に気絶しているだけだ。大きな怪我もしていない。

彼女の上半は呼吸で上下に動いていた。

それを確認して私は安堵の息を漏らす。

良かった。

——安心してはいられないぞ。マスター。

彼の言葉を聞いて力を抜きかけた気を引き締める。

そうだった。

彼女の意識がないということは今動けるのは私だけということだ。

エミヤ、アルトリアは敵に拘束され、マシユは意識がない。

そして動ける私は魔術が使えないし、彼らに回す魔力もない。

——あの女は危険だ。

私は彼の言い方に違和感を覚えた。

あの人を知ってるの？

——いいや。だが胸騒ぎとでも言うか。あいつはとても危険な存在であると、私の

霊基がそう言っている。

明確な論拠もなく話を進めるなんて。

至って冷静でリアリストな彼には珍しい。

状況は想像以上に追い込まれているのかもしれない。

——とにかく逃げろ。マシユを連れて管制室まで撤退しろ。あの女はヤバい。おそらく今までで一番狂っている。

彼の言い方には一刻の猶予も感じられなかった。

——目くらましに結界を崩す。その隙について君たちは離脱しろ。私とセイバーで時間を稼ぐ。

え!!二人はどうするの!!

——君たちが撤退したらすぐに追う。

嘘だ。

私は彼が過去何度も私に言っていたことを思いだす。

「君はサーヴァントを人として扱いきていない。私たちは使い魔なのだ。いざとなったら使い捨てにする、それぐらいの腹積もりは持ちたまえ」

彼は自分たちを囚にして、私たちを逃がすつもりなのだ。

駄目だよ!そんなの!

——いくぞ!5数えたら彼女のもとへ走れ!

彼は一方的にそんな事を言った。

止めなければ。



そう思つて制止しようとしたが、彼の行動を止めたのは私の言葉ではなく魔神柱と意思伝達のようなことをしていた彼女だった。

「まあ、なんてこと。図らずもとても都合の良い事態になったのですね」

そんな声を上げた彼女に私たちの視線が集中する。

「〃星の数ほどの英霊に殺される〃」

彼女は魔神柱から目を離し、こちらへと向き直つた。

「ようやく欲を満たすことができそうです」

目が合った瞬間に冷や汗がどつと流れる。

なぜ彼女を見るだけでここまでおぞましく感じるのか。

分からない。

「そうでした。ごめんなさいね。貴方は私をご存知ないということでした」

彼女はそう言つて軽くお辞儀をした。

「改めて自己紹介を。私の名は殺生院キアラと申します」

「殺生院…キアラ…?」

「はい。そうでございます」

殺生院。

尼さん?

私はその名を反芻するが出てくる事柄はなかった。

元々、そこまで歴史に詳しくない私が考えてもしようがない。

彼女は三蔵ちゃんのように高名な僧侶なのだろうか？

私は恐る恐るその疑問を口に出した。

「貴方は、魔神柱に召喚されたサーヴァント、なの？」

「サーヴァント？私か？」

私の疑問を聞いた彼女は目を丸くした。

そしてすぐに笑いだした。

「あははは！」

彼女は上品にだが豪胆に笑みを浮かべる。

「あのような蟻わたくしと人間を見違えるとは。なるほど確かに貴方はああ成長するのしょう

ね」

その笑みが宿す瞳は、まごうことなく人を見下す目だった。

「私は魔性菩薩。大悟も解脱も随喜自在。アギトのごとき天井楽土。そして…」

彼女は両手を軽く上げ、袖丈を軽く浮かした。

「ビーストⅢ／ラブチャーでございます」

ビースト？それって…

「人類悪!!」

「馬鹿な!! ビーストだと!!」

私と共にエミヤもまた荒げた声を上げた。

当たり前だ。

ビーストなんて。

驚愕した足元のエミヤに視線を向けた。

「何を驚いておいでで？」

「このカルデアにビーストなどっ！ありえん!!」

彼は絞り出すような声で言った。

「守護者のわりに随分とのんきなことを言うのですね。貴方と同じあの男は、もう少し用心深かったです。でも、この子も私と同類じゃございませんか」

彼女は後ろの魔神柱に目をやった。

「魔神柱はビーストの使い魔にすぎん！人類悪そのものがカルデアに顕現するなど！どうなっている!! 貴様は一体…!!」

「この子が魔神柱?…ふふっ」

エミヤの言葉を聞いて彼女はまた笑う。

「まさか、気づいていらっしやらないなんて！」

気づく？

私たちの反応を見て、彼女はまた笑った。

「いいですわ!!あなた達の無知!私にとつて最高の快樂となりそうです!」

彼女は私たちの疑問に答えることはなく、ただそう言った。

その彼女の足元から無数の手が生えてきた。

それを見た瞬間に体ががたがたと震えだした。

な、なに？

急に胸の内からあふれ出す恐怖に戸惑う。

「それでは始めさせていただきますでしょう」

彼女はこちらに歩みを進める。

逃げなくては。

そう思うのだが。

力を入れようとするが、足が震える。

「貴方はマスターなんですすよね?」

彼女は動けない私の目の前に来ると問いかけてきた。

答えようとするが口が動かない。

歯がガチガチと音を立てる。

どうにか震える顎と下を動かし、声を出す。

「そ、そう、で、す……」

「貴方を痛めつければ、星の数ほどの英霊が私を責めてくれるのですか？」

彼女は動物園の獣たちを観察するように私の目をのぞき込む。

その感情を感じさせない目が私の恐怖を増幅する。

震えが止まらない。

「あら？ 貴方……魔力が全くありませんね」

震える私をよそに、彼女は私の魔力回路の少なさを指摘した。

「なぜ？ 英霊を数多従えているのではなくて？」

私は無意識のうち彼女の背後の炬を見る。

彼女は目ざとく私の視線に気づき、そしてああと頷いた。

「なるほど。ここもS.E. R.A. P.Hと同じですか。確かに召喚システムの構築がすん

でいるのなら魔力生成を外部に委託しても問題ありませんね」

この人は一体何がしたいの？

顎に手を当て、何かを考え込む彼女を前にそう思う。

だが口に出そうとしても体が動かない。

神経がすべて切れてしまったかのようだ。

「しかし、あの子が私をここに連れてきた以上、糧を奪うのはよろしくありません。さりとてそれでは貴方を使えません」

彼女はただ自分と会話しているかのようにつぶやく。

「貴方のような虫が這っているということは、S.E. R.A. P.H.のように何匹も使い潰せるマスターはここにはいないのでしょうか？」

虫…私のこと…？

「ああ！別に貴方を使う必要なんて微塵もないではありませんか！」

顔を輝かせると私の右手に目を向けた。

「契約の証はその令呪。それをいただくとしましようか」

彼女は私に手を差し出してきた。

その手は明らかに友好的なものではない。

「さあ、それを私に渡してください」

私と話していない。

彼女は話すのではなく、ペットに躡をする主のように命令口調でそう言った。

私は冷や汗を流し、震えるだけで動くことができなかつた。

自身の言葉に反応しない私を見て、彼女は満面の笑みを浮かべる。

「許していただけますか？あの場と違ってここは情報化されていないので、五感の感覚が

違うのですよ。少々慣れるまで時間がかかりそうでして。」  
許す？慣れる？

この恐怖は彼女の魔術……？

「だから貴方が自分で渡してくださいませんか？」

私がこれを渡す……？

頭がぼんやりしてくる。

「私が右腕をそのままちぎってもよろしいのですが、それはそれで後の楽しみが減ってしまうので」

彼女の笑みが恐ろしい。

あれは、なに？

「可哀想に。こんなに震えてしまつて」

こわい。こわい。

「ほら、それを手放すだけで恐れはなくなります」

声が聞こえる。

お母さんみたいなこえ。

やさしくて、あまくて。

ほっとするような。

「さあ。こわかったでしよう？いたかったでしよう？私にすべてを委ねて…」

ああ、なんか、ここちいい。

もう、いいかな。

「マスター！」

声が聞こえる。

だれだったわけ？

まあいいや。

おかあさん。わたしつかれたからだっこして。

「そう。そうですよ。そうやって思考停止して全てを私に渡しなさい」

『ラ・グロンドメント・デユ・ヘイン  
吼え立てよ、我が憤怒』!!!!!!

きゆうにめのまえがあかろくなつた。

あかるい。

きれい。

だれかきた。

だれだっけ。



ひかりがとんでいった。  
ながれぼしみたい。

「地獄に落ちろ。クソ女」  
くろいひと。

「あんた、生きてるわよね？」  
なにか言ってる。

「あんたに言ってるのよ！」  
めのまえがあかるくなる。

あかるい。

あかるくて、ごうごうしてて、あつい。

あつい。あつっ。

熱い。

「熱っ!!」

熱!!

え!! 礼装燃えてる!!

ちよ!! え!! なんて!!

驚いた私の目の前を、旗のようなものが横切る。

ゴウツ!

大きな風が巻き起こり、耐え切れず目をつむる。

「なに?! さつきからなに?!」

腕に感じていた熱さが消える。

風が止み、目を開ける。

腕に目を向けると礼装の火が消えていた。

「え?」

「目が覚めましたか? お馬鹿さん」

前から聞き覚えのある声でした。

誰?

視線を上げる。

そこには黒い鎧と黒い槍を持った女性が立っていた。

よく見ると槍には帆のような布が巻き付けてある。

槍じゃなくて旗?

彼女は左手で旗をふるう。

ボツと音がして旗が広がる。

この旗は……救世の旗……

「ジャンヌ!!」

なんで!!

「私は聖女じゃないわよ」

私の声に黒い鎧を着た彼女はこちらを見た。

「竜の魔女って言えばわかるかしら」

「え?」

「アホ面ね。バツカみたい」

竜の魔女って。

フランスの特異点の、あの?

彼女が、いったいなんで?

状況が呑み込めず、混乱する。

「地獄に落ちろって。あの人、尼さんっぽくなかった?」

後ろで声があった。

「知らないわよ、そんなの」

「だとしたらすごい皮肉っぽいよ、さっきの」

後ろから人が歩いてくる音がする。

「褒めても何も出ないわよ」

「それにいきなり宝具撃つのもいいけど、魔力を回すこつちの身ももう少し考えてみません?」

「あら、甘ったれたこと言うのね? マスターちゃん?」

「戦略的な問題です」

「」の声は…。

「達海?!」

私の目の前には、連絡がつかなかった弟がいた。

「遅れてごめん。姉さん」

## 援軍

どうやらこの世には地獄しかないらしい。

私がこんな単純な事実に気付いたのは死の直前だった。磔にされ、動けない私の前にいたのは石を投げる人々。

彼らは口々に私を魔女と罵った。

その顔に浮かぶのは怒りだったり、恐怖だったり。

ただただ感情の赴くままに動く彼らもまた、神に祈り、家族を愛し、生きている人々で、私を救世主とあがめていた人々と何ら違いはないのだ。

だからこそ、私は怒りを覚えなければならなかったのかも知れない。

ともに苦労を分かち合った仲間も、肩を並べた戦友も、泣き合った友人も、彼らと変わらぬ。

そんな現実を直視したくなかったのだ、私は。

だから憤怒した。

私を殺した人々を、陥れた司祭を、見捨てたフランスを憎んだのだ。

こんな単純な現実から目をそらすために。

でも逃げれば逃げるほど現実と言うものは付きまどってくるようだった。

死んでも付きまどってくるとは、しつこい事この上ない。

しかもそれを突き付けてくるのが私を否定した一味と言うのがとても癪に障る。

私が現界直後から、顔をしかめて正面を見る。

「…お久しぶりです。ジャンヌ・ダルク」

よくもまあ、私を呼び出せたものである。

こいつの面の皮はいかほどか。

「急にお呼び出してしまった無礼はこの場でお詫びします」

そうよ。謝れ。

…まあ、べつに。世界の隅で不貞腐れていたただけだからいいけれど。

「どうか僕の願いを聞いてくれませんか」

諦念と現実が入り混じったその目の中には一筋の希望があった。  
いや、希望と言うよりは願望か。

それももうつすいハリボテのようなやつ。

「この願いを聞いてくれたら、どんなことでもします。だから…」

そういつて私を呼び出した少年は私に頭を下げた。

その少し後ろには、いけ好かないキザ野郎と面持ちだけは年をとったガキが立っている。

「…」  
どちらも辛気臭い顔をしてやがるわ。

「…」  
気に食わない。

この状況も、それに連なる人間も、すべてが気に食わない。

「…」  
ただ無言で頭を下げ続ける召喚者。

微動だにせず、ひたすらに首を垂れるその姿は「神に祈る敬遠な誰か」を彷彿とさせた。

「…チツ」

私は後ろにいる二人組を睨む。

殺意を込めて。

こいつら、わかつて黙ってやがるわ。

私の視線に物ともせず、後ろの二人もただ無言だった。

イラつく。

この状況も、後ろの偽善者も。

だけど何より一番むかつくのは、頭を下げ続けるこいつだ。

犬の群れにいるライオンが、自分が何者かも理解せずに嬉々として自分の磔台を作っている。

哀れだ。

愚かすぎる。

だが、フェアじゃない。

どうせ地獄に行くならば、自分の足で嬉々として向かうべきだ。

誰かに押されて滑り落ちるなんて神が許しても、私が許さない。

私は私と同じような馬鹿が、同じような馬鹿をやつて、馬鹿を見て、馬鹿みたいに死んでいくのを絶対に許さない。

いいわ。



こいつのために地獄への水先案内人になってやろうじゃないの。それがクソつたれな私ができる唯一のことだ。

「…いいでしょう」

私の言葉に間抜けは顔を上げる。

間抜け面だ。

笑えるわね。

「…どうしました、その顔は？ さ、契約書です」

まあ、それに？ 地獄に一人くらい仲間がいても、楽しそうですし？

S

「達海!？」

僕らがやってきたのを見て、姉さんは目を丸くした。

「遅れてごめん。結界を壊すのに時間がかかって」

ジャンヌと契約した僕は彼女と共に地下まで急行した。

だが地下の入り口は結界が張られていて、大分時間を取られた。

「だから言ったでしょ。宝具を使ったほうが早いって」

僕の前に立つジャンヌは振り返ってこちらを見ながら文句を垂れた。

その言葉に僕は苦笑する。

彼女は結界を壊す時も、ひたすら文句を言ってきた。

やれ優雅じゃない。

やれ面倒臭い。

初めての仕事がこれ？

等々いろいろ言われたが、結局請け負ってくれるのは彼女の根が真面目だからかもしれない。

「状況も分からないのに無駄に魔力を消耗できませんよ」

僕の言葉に彼女は意地悪く笑った。

そして馬鹿にするような口調で言った。

「あんたなら大丈夫でしょ」

過剰評価だな。

それとも皮肉だろうか。

軽くため息をつく。

「それにしても…」

辺りを見回す。

状況がいまいちつかめない。

壊れかけの結界。

僕らの侵入口やそこらじゅうのひび。

周りを観察した後、視線を前に向ける。

魔神柱…なのか？あれは？

視線の先にはいつもとはシルエットの違う魔神柱のような敵が静止している。

蔓のような足を周りに垂らしているが、だらしなく地に這っている。

全く動かない。

そしてその魔神柱の前には燃え盛るジャンヌの宝具。

あの敵サーヴァント、マスターは誰だ？

いったいどうなっているんだ？

僕は振り返り、姉さんを見る。

「?」

まだ意識が戻りきっていないのか、僕の視線にぼんやりと目線を返している。姉さんのサーヴァントはどこに？

この結界の質からするとおそらく彼がいると思うのだけれど：

「達海！無事だったか！」

エミヤさんの声が響く。

やはりだ。

あの固有結界の魔力の質からするに彼だとは思ったが…。

声の響く方を向くと、エミヤさんが何かを抱えてこちらに着地した。

僕は彼の方へ向き直り、口を開いた。

「心配をおかけしました。色々と説明しなければならいことが多いんですが…」

助かった、彼がいるならば状況把握はできる、そう思つて彼の腕へ視線を向け、声が止まった。

負傷した彼の両腕には、意識のないキリエライトさんとペンドラゴンさんが抱えられていたからだ。

「マッシュ!!」

意図せずして口から声が漏れた。

なぜ二人とも意識が…

「大丈夫だ。二人とも大事無い」

僕の声に慌てず、エミヤさんは滑らかな手つきで二人を床に寝かせた。

だが手つきに反して口調は焦っているようだった。

「そうですか」

僕はほっと息をついた。

とにかく無事でよかった。

「マスターちゃん？ 仲間の心配もいいけれど。私たち敵の真ん前にいることをお忘れで？」

彼女は旗の石突で地面をコツコツと叩く。

そうだった。

状況を忘れてはいけない。冷静にならなければ。

そう思った矢先、エミヤさんは焦ったように言った。

「その敵が問題だ。撤退の準備をしてくれ」

「撤退？」

どういふことだ？

「こちらはまだ十分に余裕がありますが…。いったいなぜ？」

当然な質問をする。

状況は分からないが、援軍が到着後すぐに退却と言うのは些か以上に判断が早い。

「彼女は君のサーヴァントか？」

彼は横目でジャンヌを見つつ、僕に言った。

「アーカイブにあつたフランスでの敵にそっくりだが……」

彼の目には幾何かの疑念が宿っていた。

まあ、そうもなるか。

この状況で背中を刺されてはたまらない。

「え、ええ。そういう認識で構いません」

細かく言うとうと違うが説明している暇はない。

とにかく彼女を信用してもらうにはこれが手っ取り早い。

「ジャンヌが達海のサーヴァント……サーヴァント……え!!」

ぼんやりしていた姉さんの意識がはつきりしてきたようだ。

姉さんがエミヤさんの声に反応し、視界の端でジャンヌの額に青筋が立つのが見えた。

「ごめんなさい。」

「そうか……なら君たち二人が殿だ。フォローは私がする」

彼の片手に青い電気のようなものが走る。

その光の後、手にはいつもの弓が握られていた。

「奴らとはまともにもやりあうな。時間だけ稼いでくれ」

彼はいまだに動きのない敵を見ながら言った。

一方的な指示に疑問符が浮かぶ。

「だからなぜ……」

だがそんな疑問符は彼の言葉で吹き飛んだ。

「彼女が宝具をつかった敵、やつがビーストだからだ」

ビースト……は？

「ビースト!!」

ビースト、またの名を人類悪。

人間の獣性から生み出された災害の獣の総称。

全人類が内包する大いなる悪であり、人類を守ろうとする願いそのものである。

より良き未来を願う精神が、今の安寧に牙をむいた結果できた人類の自滅機構。

確かにいづれ相まみえる可能性は考えていたが、なぜ今なんだ!!

少なくとも今、人類に安寧はないし、より良き未来のために僕らは戦っている。

今の僕らを襲うのは彼らの存在定義を根本から揺るがしかねないはずだ!

「どうして?!」

僕の叫び声に、エミヤさんは険しい表情で答えた。

「状況は分からないが、事実としてあの魔神柱によって召喚された」

「…魔神柱？」

嘘だろ。

「ああ、そうだ」

それは、あっちゃいけないだろ…

「人類を滅ぼそうとする悪にビーストが召喚される…」

一体何がどうなっている？

ビーストはその名の通り人類悪。

復讐者や人類に仇なす人外とはその根本が異なる。

形はどうあれ、幸福への願いにあふれた人類悪と人類を滅ぼそうとする悪とは相いれない存在であるはずだ。

なのにどうして…。

悪……悪？

いや、待て。

もしかしたら僕は前提を間違えているのか…？



魔神柱はもしかしたら…

「とにかく今は対処が先決だ」

僕の思考はエミヤさんの言葉によって打ち切られた。

その通りだ。

いまここでうだうだ考えてもどうしようもない。

「やつがビーストなら我々では歯が立たない」

元はと言えば人類悪こそサーヴァント召喚の発端。

彼らにかなうのは冠位クラスのサーヴァントだけだ。

だとするならば…

「今は管制塔まで撤退し、新たな策を練る必要が…」

やはりそうするしかない……

「だっさ」

僕の思考とエミヤさんの発言が同じような内容になった時だった。

ジャンヌの挑発がエミヤさんの指示に水を差した。

「なに？」

彼の鋭い声が飛ぶ。

だがそんな声に臆することもなく彼女はもう一度言った。

「勝てないから、逃げまゝす。なんてあんたそれでも守護者なわけ？」

さらなる挑発にエミヤさんの目線は険のあるそれへと変わる。

普段では見ない険しいものだ。

「ちよつと……」

なんでそんな言い方を……

あんまりな言いように、僕はジャンヌを止めようとした。

だが彼女はそんな僕に我関せずで、彼のことを鼻で笑った。

流石のエミヤさんでも頭に来たようだ。

彼はジャンヌを睨んだ後、口を開いた。

「かなわない敵に策もなく挑むものはただの愚か者だ」

彼の舌はいつもよりか少し速く動いていた。

「理想論だけ振りかざして考えもしない阿呆は臆病者よりたちが悪い。なぜだかわかるか？」

彼の言葉には少し自罰的な何かが含まれているように聞こえた。

「エミヤ」

姉さんも意識が完全に回復したようだ。

彼の言い方に制止する言葉を仕向けた。

だが彼は姉さんの声に視線だけ向け、そのまま続けた。

「仲間を殺すからだ。君もそのたぐいかね？」

そう言つて彼は腕を組んだ。

二人の間に険悪な雰囲気ながれる。

おいおい。

こんなところで仲違いしている場合じゃ…

だがジャンヌにとつてこれは挑発ではなくプレゼンであつたらしい。

僕らは次の一言に意表を突かれた。

「だから、その策があると言つているんですが？」

ジャンヌは馬鹿にするように表情をゆがませた。

策？

人類悪に有効な手立て？

一体そんなもの…

エミヤさんも僕と同じようにいったん目を見開いた後、訝しげな視線を彼女に向けた。

「状況打開の策があるの?!」

だがそんな僕らと違い、ジャンヌの言葉を聞いた姉さんは表情を明るくし、声を弾ま

せた。

単純だがこれが最も話の早い行動だったかもしれない。

ジャンヌは姉さんの方を向くと皮肉気に笑った。

「ええ、ありますとも」

そしてもう一度エミヤさんに向き直る。

「勝算を持つ賢者と逃げるだけの臆病者。一体どちらが愚か者でしょう？」

## S

「ねえ、エミヤ。やつぱり一度撤退した方が…」

私は左手に弓を持ちながら、達海たちの方を向くエミヤに言った。

あの後、ジャンヌは

「私は特別製なのよ。あんたらは黙って後ろで見てなさい」

とだけ言って、作戦の概要を話してくれなかった。

「ああ、私もそれが最も安全な策だと思う」

「ならー！」

彼の少し突き放したようないいように、私は思わず彼の腕をつかんだ。

達海に何かあつたら…

「だが撤退したところで、策があるかも分からない状況だ。ならここで彼女にかけてみただけの価値がある、かもしれない」

「かもしれないってそんないい加減な」

エミヤは腕をつかんだ私を見た。

「もう一つ理由がある」

「もう一つ…?」

彼は私の耳もとに口を近づけると小声で話した。

「あのジャンヌ・ダルクは信用できない。少なくとも今彼女を連れて我々の拠点に帰るのはリスクが高い」

ジャンヌが信用できない？

「で、でもジャンヌは達海が召喚したサーヴァントなんでしょう?」

「そうは言っていたが靈基に違和感がある。それに彼女は敵だったのだろうか?」

私はフランスの特異点を思い返す。

竜の魔女。

救国の聖女の別側面。

「でも彼女は私たちのために戦ってくれているじゃない」

少なくとも私を助けてくれた。

彼女を疑うのは失礼な気がする。

私の顔を見て、エミヤはため息をついた。

「まあ、それでこそ我々のマスターだがね」

そして前を向く。

「これは彼女が信頼できるかを試すテストでもある。信頼できないと私が判断した場合、敵ごと彼女を射抜いて撤退する」

「そんな…」

「心の底にとどめておいてくれ。マスター」

「…わかった」

どちらにせよ、エミヤがそういうつもりだということは受け入れておかなければ。

そう思った時だった。

頭痛がした。

——辺りには血が広がっていた。

止まらない！血が！

ここまで来て！

《どうして！どうして！》

視界が涙でゆがむ。

《どうしようもないよ》

待って、置いていかないで！

《もう疲れた》

握った手がするりと抜けて地へと落ちた——

「おい、マスター、マスター！」

「あ、うん、えっと……」

傍でエミヤの声が聞こえた。

反射的に彼を見上げようとして、足元がふらついた。

「大丈夫か!」

彼が大げさに私の肩をつかむ。

貧血かな。

それより今は、いったい？

「あ、あれ？」

頬に何か冷たいものが走る感覚がした。

何だろう？

手で拭う。

「わたし、なんで泣いてるの？」

訳も分からず、エミヤに質問した。



## 殲滅

「……」

ジャンヌは僕に背を向けたまま、ただ黙って立っている。

「……」

「……」

敵に動きはない。

魔神柱は動かないまま。

依然として炎はあたりを焦がし続けている。

「…ジャンヌ。策って何か、いい加減教えて欲しいんですが」

「…」

彼女は反応しない。

「ジャンヌ？」

「…」

「あの…」

「うっさいわね！そんなに言わなくても聞こえてるっつーの！」

何度も呼んでいたら、彼女がキレた。

石突を地につつけ、カキンツと甲高い音が周りに響く。

いや、聞こえてるなら返事してよ。

「今準備してるのよ」

「準備？」

おうむ返しに聞く。

武装の調整や魔術の準備をしていたわけでもないし、魔力の流れも感じなかった。

それらしいことをしていた様子はなかったけど…

「なんの準備ですか？言ってくれば僕も手伝いますよ」

敵はまだ動いていないがいつ動き出すか分からない。

何かすべきことがあるなら迅速に終わらせたい。

しかし僕の質問に彼女はただ目を俯かせた。

「…」

また無言になってしまった。

「えつと…」

「……………はあ」

僕がおろおろしているとなぜだか彼女は大きなため息をついた。

「なんか馬鹿らしくなってきたわ」

馬鹿らしい？

彼女はそんなことを言うと面倒臭そうな目つきでこちらを見た。

僕が何か失礼なことをしただろうか？

「説明するのも面倒だからちよつと目をつむってなさい」

「目を？…なんでですか？」

反射的にした質問に彼女の目の端がぴくつと動いた。

「いいから目をとじろつての！」

そしてまた怒鳴った。

なんなんだ。

「分かりましたよ」

分からないけど従わないと話が進まないのと言う通り目を閉じた。

「今から10秒、絶対に目を開けんじやないわよ」

「はあ」

10秒つて、何する気ですか。

生返事をしてそんなことを思った直後、唇に柔らかな感触がした。

そして何か接触した部分から暖かさが伝わってきた。

「!!」

驚いて目を開きそうになったが、何をされているのか見ることが怖かったのでとつさに瞼に力を入れて視ないようにした。

そのあと何か湿ったものが口内に入ってきてすぐ、口の中でガリつと音がした。

「痛っ!!」

僕は痛みで反射的にのけぞり、目を開いた。

え、なに? 何してたの?

口に痛みが残っていて手をやると指に血が付いた。

切れる。

視線を上げ、ジャンヌを見る。

彼女は唇についた血を舌でなめとつた後、口を開いた。

「準備、終わったわよ」

気だるげにそういう彼女の頬は赤みがさしているように見えた。

え、なに？今何したの？

何の準備だったんですか？今の？

「黙りなさい」

困惑する僕に対し彼女は言った。

いや、まだ何も言っていない。

「質問は受け付けないので」

そう言つて彼女は顔を背けた。

え、えええ。

結局、何の準備をしていたかさえも分からないままなんです。

「これで充分なのよ、あんな奴には」

彼女はそれだけ呟いて、床に刺していた旗を手に取つた。

旗がバサツと音を立て揺れる。

そして前に歩きだした。

え!!

「もう戦う気ですか!!」

策どころか、まだ何も聞いてないんですが!!

「そうよ」

彼女は歩きながら言った。

そうよって、連携ぐらい事前に話しておかないとフォローにも限界が：

「すぐに終わるわ。だから今ので充分よ」

彼女は一瞬だけ歩みを止め、ちらりとこちらを見ると歩みを再開した。

その時見えた彼女の横顔はとても悲しそうで、僕は口に出す言葉を飲み込んだ。

戦う直前だというのに、あまりに悲壮感が漂う背中はまるで友人の葬式に向かうように見えた。

S

「彼女は……とても怒っていたね」

私は先ほどの召喚を思い出して呟いた。

達海君を見た後、こちらに向けた憎悪の目。

まさかあそこまで敵意に満ちた視線を受けることになるなんてね。

「彼女の怒りは当然だ」

シャドウボーダーの後ろに座るホームズは加えているキセルをつかみ、煙を吐き出しながら言った。

吐き出された煙は直上の換気口に吸い込まれてすぐに霧散した。

「なにせ、何も知らないマリオネットにヘンゼルとグレーテルをやらせようとしているんだから」

ホームズは換気口に入っていく煙が消えていくのを見上げていた。

「いや、この場合はハーメルンの笛吹き男だろうか……」

ホームズは見上げたまま、頭を背もたれに乗せ大きく息をはいた。

「こんなとき、彼がいたら素晴らしい合いの手をしてくれるんだが」

そう言つてこちらをちらつと見た。

「私に探偵助手は務まらないよ」

なんだか突つ込みに覇気が出ない。

どうやら私みたいな天才でも人並みに負い目なんてものを感じたりするらしい。

新たな発見だ。

「…」

センサーが反応したのか、通気口から音が響き部屋の換気を驚くべき速度で行って行く。

私も力を抜いて、煙が吸い込まれていくのをただ眺める。

あれだけ漂っていた煙があつという間に吸い込まれていき、この部屋から消えていく。

「これは我々の責任だ」

煙がすべて吸い込まれ、通気音の音が止んだころホームズは呟いた。

「あの小さな両肩に、多くの荷物を背負わせ続けたツケを払わされている」

彼は手元の丸机にキセルを置いた。

「だから罪悪感も、軽蔑も甘んじて受け止めるべきだ」

「…うん、その通りだ」

自分の尻ぐらいは拭わないと彼に示しがつかない。

「だがそれは世界を救わない理由にはならない」

「…わかってるよ」

その通りだ。



どんな罪を犯しても、どんな間違いをしておまうと私たちは進まなければならない。  
い。

私たちはそのために多大な犠牲を払ってきたのだから。

「責任はとる。だけどツケを払わなければならないのは私たちだけじゃない」  
弛緩していた体に力を入れなおす。

辛いなんて言える資格が私たちにあるわけがない。

弱音を吐く前に、やるべきことがある。

ホームズは椅子から立ち上がり、こちらを見た。

「ああ。今の彼女では文字通り話にならないしね。無理にでも引つ張り出すしかないだ  
ろう」

ホームズはいつも通りの余裕の笑みを浮かべる。

だが違和感があった。

おそらく笑顔の裏に憤怒が隠れているからであろうことは言うまでもない。  
「花の魔術師、マーリンを」

「いつまで薪になつてゐるわけ？ いい加減盗み聞きも趣味が悪いわよ」

今なお燃え続けている炎を前にして彼女はそう言った。

彼女の言葉の直後、炎の中心に穴が開いたかと思うと炎がその穴に吸い込まれ始めた。

「もうよろしいのですか？ ろくに作戦会議もやらなかったようにお見受けいたしました  
が」

炎が渦を描くように吸い込まれ、先ほどの女性がその中心から姿を現した。

その姿は傷どころか、火傷をした様子もなく健在であった。

こちらに下りる直前に見えたあの姿は目の錯覚ではなかったようだ。

彼女自身はとも気品のある物腰で、どこか上品に感じられる雰囲気醸し出しているのに服装が煽情的すぎる。

あまりにちぐはぐだ。

「いらぬわよ、そんなもの」

ジャンヌの声は戦闘前の興奮も、死への恐怖も帯びておらず、ただ気だるさだけが感じられる響きだった。

「少なくともあんたごときにはね」

ジャンヌの挑発ともとれる言葉に、目の前の女は絹のような白く滑らかなそれを見せるように口元に手をやった。

そしてくすくすと笑い始めた。

「それは大変よろしゅうございます」

笑い方にもどこか気品を感じられるような動作をする。

「それではこちらの善意から忠告させていただきますが、あなたはマスターさん連れ、尻尾を巻いて逃げた方が賢明だと思えますよ?」

彼女は冷笑のまま、こちらにそんなことを言ってきた。

逃げろ?

おかしなことを言うな:

ジャンヌも同じことを思ったようで、苛立たしげな声を上げた。

「はあ?」

彼女はこちらにっこりと笑みを浮かべて言葉を続けた。

「あなたのマスターさん、さきほどの方よりもマスターとしての力量が大変劣るように感じられるのですが」

何を言うかと思えば、僕へのダメ出しだった。

まさか味方ではなく、敵に、しかも戦場でこんなことを言われることになろうとは。我ながら虚しさを感じる。

「英霊との親和性が限りなく低い。あなたのマスターさんの気配には全く興奮しませんもの」

親和性。

そんなものが気配で分かるのか、あの女は。

そして女はジャンヌに向き直る。

「あのマスターさんの力量では貴方は私に傷一つつけることも叶わないと存じます」

言いたい放題だな。

まあ事実か。

とするならばあれは人類悪の自負なのだろうか。

ジャンヌは右手に持つ旗の旗先を少し下げた。

「仮にそれが事実だとして、なんであんたはそんな忠告を私によこすわけ？」

彼女の声に特に感情は感じられない。

やはりあるのは気だるさだけだ。

ジャンヌの問いに女は顔を赤らめた。

「まあ！なんでかと私に問われるので？」

彼女は恥ずかしそうにこちらを見た。

え？なに？

なんでそこでその表情？

あの女の表情変化がまいち読めない。

「それは当然でございましょう。あんな初々しい逢瀬を見たら、気を遣うのが人と言うものでございます」

お、逢瀬？

「私、馬に蹴られる趣味はないものですから」

何言ってるんだ？

さつきから言ってることが理解できない。

カチカチ：

「？」

金属がぶつかるような音が入る。

なんだ？

音源の方に目を向けるとそれはジャンヌの右手だった。

彼女の右手が震え、手甲と腕の鎧が何度もぶつかる音だった。

「ジャンヌ……？」

武者震いのように体が小刻みに震えている。

ジャンヌの様子を見て、女は少し驚いた表情をした。

「色恋沙汰は触れられたくない話題でしたか？」

挑発するかのようない方だった。

「今すぐにその滅らさず口を閉じなさい」

ジャンヌは体を震わせたまま、口を開いた。

「3つ」

その声は彼女の根源に近い。

ただ怒りが体を喰らいながら喉を出てきたかのように底冷えするほどの低い声だった。

「あんたの間違いを3つ、ただしてやるわ」

彼女の右手に力が入る。

旗棒がミシミシと悲鳴の音を上げる。

「1つ、英霊との親和性はあんたをぶつ殺すのに必要ないってこと」

何度も地を叩く音がした。

そして僕は石突から滴る赤い雫に気が付いた。

彼女の手から、旗棒を伝って血が滴っている。

「2つ、私のマスターはあんたをぶつ殺すのにこれ以上なく最適だということ」

彼女が旗を強く握りすぎているのだ。

あまりにも強く握りすぎて、血がにじんでいる。

「3つ、あれは逢瀬じゃない。けじめよ」

それを言った瞬間、彼女の体が消えた。

「なっ！」

一瞬後、女の体が右側に吹っ飛んだ。

猛スピードで体が飛ぶと壊れかけの結界を突き破り、そのまま地下室の壁に突っ込んだ。  
だ。

轟音と共に壁が崩れる。

女がいた地点には片足を蹴り上げているジャンヌ。

それで彼女があんな女を蹴り飛ばしたのだと気づいた。

「燃えろ」

ジャンヌが一言発した。

その瞬間、彼女の周囲全てが発火した。

世界が火で包まれる。

その炎は結界の残滓を吹き飛ばし、蛇のように地に這うとそのままが突っ込んだ場所を燃やし尽くした。

無機物であるのにもかかわらず、轟々と炎が燃え盛る。

高温すぎるのか、青い炎が揺らめいている。

その異常な風景がまるで彼女の怒りを表しているようだった。

「やっつけてくれますわね」

炎の中心から女が飛び出た。

その体はところどころ黒く焼け焦げていて炭化している。

「あまり調子に乗られるのも癪でございます。ここらで立場の違いというものを分からせてあげましょう」

彼女の中から魔力の流れる気配がした。

まずい。

何かする気だ。

だが焦る僕とは反対にジャンヌは冷静だった。

ただ彼女を見下してこう言った。



「やってみなさいよ」

彼女の言葉に女は表情をゆがませた。

「虫が……！」

彼女の表情に初めて負のものが見えた。

憎々しげな、とはああいうものを言うのだろう。

そして口を開いた。

『跪きなさい』

それは普通の声とは違う、何かの違和感があつた。

『私にすべてを委ねなさい』

何かの魔術か？

魅了の魔術に類似する何かを感じるが……？

僕は警戒を強める。

しかしそれだけだった。

その声を発した後、女は勝ったかのように笑みを浮かべる。

なんだ？

既に何かしたのか？

奴を睨みつつ、いつでも反撃できるよう回路をフルで回転させる準備をする。

「…」

しばらく経つが何も起きない。

「…?」

だが時間が経つにつれ、徐々に変化するものが一つだけあった。

女の表情だ。

奴の表情が余裕から驚愕へと変化した。

「私の『万色悠滞』が効かない!!」

万色悠滞?

やはり何かの魔術なのか?

「立場の違いとやらが分かったかしら?」

驚きの表情になった女に向けて、ジャンヌは馬鹿にするように言った。

「どちらが上でどちらが下か」

だがその表情には嘲笑はなく、ただ軽蔑のまなざしで女を見下していた。

「あなた…いったい何をしたのです」

そのまなざしに女は憎々しげな視線で返す。

「私は何もしていないわよ。ただあんたがどうしようもなく矮小なだけで」

「虫がッ!」

女が吼える。

それと共に彼女の足元から無数の手が湧き出した。

そしてお腹が開き、そこから魔神柱のように無数の目が這っている管の様の物が伸びてきた。

「あなたのような虫など、私の権能を持つてすればっ!!」

彼女は言葉を止めざるを得なかった。

旗が槍のように投擲され、彼女の腹を貫いたからだ。

「はっ!!」

女の体が後方に倒れ、旗棒をずると滑らせて竿頭に引っかけり体を止めた。

彼女の口から大量の血が吐き出される。

「このっ!」

女は体に力を入れ起き上がろうとする。

しかしまたしても驚愕に顔をゆがませる。

『『ログスイーター』が使えない!!なぜ!!』

「へえ。あんたの権能そういう名前なの」

女の体に影が差す。

ジャンヌが女の目の前に立っていた。

「まあ、どうでもいいけど」

彼女は腰につるしていた剣を抜くと、剣先を上にあげた。

それと同時に彼女の周りに黒色の槍が4本現れる。

そして剣先を下げると4本の槍は女の体をことごとく貫いた。

「ぐっ！！」

女が痛み顔に顔をゆがませる。

僕はその時、違和感を覚えた。

女の体、ジャンヌの炎で炭化した部分が回復していない。

なぜ？

最初に宝具を使った時の傷は完治していたのに。

まさかもう魔力切れを起こしたのか？

人類悪なのに？

そんな馬鹿な。

ジャンヌは女の腹に刺した旗の旗棒を握ると力任せに引っ張って抜いた。

「ああ！！」

女が悲鳴を上げる。

そして旗を振り上げるともう一度同じ場所に刺した。

「あああああああ！」

女はさらに悲鳴を上げた。

返り血でジャンヌの顔は赤く染まり、鬼のように見えた。

「ふう、ふう、ふう」

女が荒く息をする音が聞こえる。

かすれた呼吸をする女を見下して、ジャンヌはただ一言言った。

「無様ね」

そこにあるのは依然として軽蔑のまなざしだけだった。

女のかすれた呼吸音だけがあたりに響く。

一方的だ。

あまりに一方的すぎる。

奴は人類悪じゃないのか？

なぜここまでこちらに打ちのめされる。

まるで太刀打ちできていない。

僕は本来喜んでいい展開に、困惑していた。

理屈が合わない。

本来奴と僕らは逆の立場になるはずだ。

それともこれが彼女の言っていた策と言うやつの効果なのだろうか…？

僕が困惑していると人類悪の女が口を開いた。

「な、なるほど。そういうことですか…」

苦しげな呼吸をしながら女は言葉を紡ぐ。

「たしかに英霊との親和性など必要ありませんね…」

親和性？

「可能性があるとは思いましたが、ま、まさかこんなところにいるとは…」

彼女は咳をして、血を吐き出すと続けた。

「そ、それで？あなたとマスターさん、どちらなんです？」

そういつて奴はジャンヌを見上げた。

「さあ？」

ジャンヌのやる気ない返答に女は笑みを浮かべる。

「あなたのマスターさんですか…」

くつくつと女は笑い始めた。

「じゃあ、あなたもまともな英霊じゃありませんね。いや、そもそも英霊ですらないので

しょうか…？」

訳の分からないことを言い続ける女をジャンヌは黙って見下ろしている。



なんであの状態でしゃべれるのか。

僕は背筋がすうつと寒くなる。

ジャンヌはもう一度言った。

「燃えろ」

その言葉で火はさらにその勢いを増した。

「ですが、べつに、あだぐじがまえたからとえって、あなたがかったあえでわな、い…」

その言葉の直後、僕の後ろに一つ管が生えた。

これは…さつき奴が腹の中から出していた管の一つか!?

「しまっ!?!」

その状況にジャンヌが目を丸くする。

「ふふふふ、あだぐじとぎて、もあいあずあ、よ」

ヤバい!

この状況じゃ、固有時制御も間に合わない!

「詰めが甘いぞ」

管が僕を貫こうとした瞬間、後ろから飛んできた矢が管を消し飛ばした。

「あ」

「エミヤさん!」





「この世界がなんであるか、すぐに貴方にもわかりますわ。その時にぜつ……」  
それを最後にその肉片は灰になって消えた。

勝った、のか……？

## 妄執の夢

「……………」

勝った、んだよな？

灰になった肉片の残滓を見つめながら思う。

僕は余りにもあつけない勝利に戸惑っていた。

いや、あつけないってことはないのだけど。

彼女の猛烈な攻撃にはそれなりの魔力を持っていかれた。

ちゃんと充分量の対価は払っている。

ただ戦闘の流れがあまりにも一方的すぎた。

今までにここまで圧勝した戦いがあつただろうか？

僕らの戦いはいつだって敗北と紙一重の勝利だった。

ここまで乱れがない戦いだと、まだ何かあるのではないかと身構えてしまう。

まだ、何か来るのではないか？

だって相手はビーストだぞ？

落ち着きなく僕があたりをきよろきよろ見渡していると、ジャンヌがこちらを見た。

少しだけ乱れた息を整え、剣を鞘にしまっていた彼女はそわそわしている僕を見て呆れ顔をした。

「何やってんのよ、あんた」

ため息をつきながらこちらに歩いてきた彼女に僕はただどしく返事をした。

「いや、まだ何かあるんじゃないかと思って……」

僕の言葉に彼女は目の端を少し上げた。

「はあ？」

あ、怒らしちゃった。

「なに？あんた？私のとどめが信用できないってわけ？」

僕は慌てて返事をした。

「いや、そうじゃなくて……」

額に汗がうかぶ。

「そうじゃないなら何よ」

「いや、その……」

僕の煮え切らない態度に彼女は顔をゆがめた。

「面倒臭いわね！文句があるならはつきり言いなさいよ！」

怒鳴られた……

「わかりましたよ」

馬鹿らしいからあんまり言いたくなかったんだけど……。

「こういう時って映画とか漫画だと油断した人がよく死ぬじゃないですか。だから落착かないんですよ……」

有体に言つて、僕は圧勝することに慣れていないのだ。

感覚的にはあれだ。

何か良いことがあった時、この後とてつもなくひどいことが起きるんじゃないかって怖くなるじゃん。

あんな感じなのだ。

僕の言葉を聞くと、彼女はお腹を抱えて笑い始めた。

「あ、あんた、バツカじゃないの！そんなことで不審者みたいにきよろきよろしてたの  
！」

文字化したら語尾に笑笑とかw w wとかが付くんじやないだろうかっつてぐらいに笑  
われた。

「だから言いたくなかったんですよ」

いいじゃないか、別に。

フランス人は知らないかもしれないけど、日本には「勝つて兜の緒を締めよ」つてこ  
とわざがあるんだぞ。

慎重なくらいがちようどいいんですよ。

「まあ、あんたがどうしようもどうでもいいけど」

彼女は笑いすぎて出てきた涙をぬぐう。

いや、笑いすぎでしょ。

「文鎮みたいな敵もまだ残っていることですか？」

そう言つて彼女は広大な地下室の奥を見る。

境界内ではだらしなく地に這っていた魔神柱は、どう動いたのか魔力炉心に巻き付い  
ていた。

使った魔力を回復しようとしているのだろうか？

まあなんにせよ、不気味な沈黙を貫いたままだ。

戦闘が終わるまでも一貫してアクションを起こさなかった。

何なんだ？あの敵は？

「ですが…」

彼女はこちらに視線を戻すと僕を馬鹿にするような声で言った。

「勝ったなら驕りなさい。敵を心から見下しなさい。そうすれば少なくとも隣人愛に目覚める必要はないでしょう」

彼女は愉快そうに笑う。

「クソ野郎になれば、聖人にならずに済みますからね」

彼女は自罰的につぶやくと、魔神柱の方を向いた。

「さあ、首を刈りませうか。あの化け物に首があるかは定かではありませんが」

圧倒的だ。

彼らの戦闘はその一言に尽きた。

私が行うような紙一重の攻防でもなく、作戦前に綿密な計画を練り、破綻した部分を臨機応変に修正していく場当たり的な戦いともまるで違った。

これまでに培ってきた技と力によって、敵を正面からねじ伏せる。

敵に反撃の隙すら与えなかった。

これが本来のサーヴァントの戦い方なのかもしれない。

達海は魔術師として王道を歩いている。

魔術回路もあれば知識もある。

あいつのスキルとサーヴァント本来の力が噛み合えばこうなるのは当たり前なのだろう。

サーヴァント3人に協力してもらって、それでも無様に負けた私とは月とすっぽんだ。

本来喜ぶべきことだ。

戦力が増えたのだから。

でもこの時、私を感じたのは不安だった。

居場所がなくなるとか、優劣が逆転するとか、そういうことじゃない。



ただ達海に前線に出てもらう、そのことが不安なのだ。

私は怖いのだ。

また一人になるのが怖くて怖くて仕方がないのだ。

あの時と同じだ。

お父さんとお母さんが去り、達海一人に守ってもらっていた時と変わらない。

嫌だ。

また後ろでただ見ているだけに戻るなんて嫌だ。

ズキッ

頭にそんな痛みが走った。

——私は一人になった。

《どうしてよ。こんな、こんなことの為に私はここまで…》

震える手でコフィンに触る。

手に伝わってくるのは無機質な冷たさだけで、以前のような温かみのある反応は帰っ

てこなかった。

《なんで…》

ポトツポトツという音を立てて、涙が何度もコフィンに落ちる。

《お願いだから、なんとか言ってよ》——

ハツとする。

真つ白だった目の前が次第に色を取り戻す。

またか。

まるで白昼夢だ。

リアルすぎる。

勘弁してほしい。

前を見ると既に戦闘は終わっていて、達海はジャンヌと何かを話していた。

良かった。

取り敢えず二人とも無事みたいだ。

みんな無事、今はその事実さえあればそれでいい。

「あとはあの魔神柱だけだね」

隣のエミヤに向かって言った。

「…」

だが返事は帰ってこない。

「エミヤ？」

不自然に思つて彼を見上げる。

彼の顔には険しい表情が浮かんでいた。

「どうしたの？」

「……………まさか」

彼はただ二人の方を見て、何かを考えている。

「エミヤ……？」

「いや、そんなはずは…」

彼がそんなことを呟いたときだった。

地震が起こった。

「な、なに?!」

慌てて体勢を整えながら前を見る。

視界の先には召喚を行ってから今まで何ら動きのなかった魔神柱が蔓のような足を暴れさせ、周りを破壊していた。

「何を…」

今更になって暴れだした？

万策尽きた末の悪あがきだろうか？

なんにせよあの魔神柱はビーストを呼び出し、あれだけ行使したのだ。

魔力だつてたいして残っては…

「あ…！」

もう一度、魔神柱の姿を見る。

魔神柱は最初と同様にプロメテウスの火に巻き付いていた。

しまった…

あまりに状況が混乱して当初の目的を忘れていた。

プロメテウスの火を奪取すること、それが私たちの作戦の目的だった。

先の戦闘で結界が完全に壊れてしまっている。

あのままでは魔力炉が壊される！

「死に損ないが…！」

エミヤはそう吐き捨てると、とつさに先ほどの弓を構えた。

右手に青い雷がほとばしり、矢の概形を描いたが具現化しないまま霧散してしまっ  
た。

「くそっ！もう魔力が……！」

アーチャーにいくら単独行動のスキルがあつたとしても、それは一時的なもの。

ここまでの長期戦は戦えない。

私はその姿を見て、右手を掲げる。

「令呪をもつてめい……!!」

そう言いかけた私の目に入ってきたのは、令呪の跡がうつすら残っているだけの右手  
の甲。

そうだった！

魔神柱が召喚儀式を行う直前に、3画全てを使ったんだ。

やばっ。

焦る私の視界に入ったのは、左手に旗を持ち、右手に剣を掲げるジャンヌだった。

え？

まさか、あの火力で魔神柱を吹き飛ばすつもり!!

「待って！ジャンヌ！」

私は叫んだ。

「貴方の全力じゃ、後ろの魔力炉まで破壊しちゃう!!」

私の叫び声に反応した彼女は少しだけ振り向き、横目でこちらを見た。

その横顔はイラついているような、呆れているような表情だった。

「生憎と、私はピンポイントで狙えますので」

そう言った瞬間、彼女の眼前がゴウツと轟音を立てて、爆発した。

いや、爆発じゃない。

炎がものすごい勢いで燃えだしたのだ。

「ああー……あれ?」

炎は彼女の眼前を燃やし尽しそうな勢いだった。

だが違った。

プロメテウスの火全てを燃やしているかのように見えるそれは、よく見ると炎が螺旋

状になっている。

あの炎は魔神柱が巻き付いている部分だけを的確に燃やしていた。

「すごい……」

あの威力の攻撃をあの精度でコントロールできるなんて。

「どうやって……」

「おそらく過程をうまく分担しているのだろう」

私のつぶやきを聞いたエミヤが隣で答えてくれた。

「達海が常に必要量の魔力を過不足なく彼女に渡すことで、彼女は流す魔力量を気にせず、攻撃範囲にだけに集中できるようにしている」

魔力が切れて体が重そうであったが、彼の目はしっかりと観察していた。

「急場の契約でよくあそこまでできるものだ」

彼にしては珍しく本気で感心しているような口ぶりだった。

私も彼につられるようにして達海の方を向く。

あいつはジャンヌの後方で冷静に魔神柱の方を見ていた。

「…」

目に入る達海の背中。

魔神柱の前にあいつの後ろでただ見ている。

妙な既視感があった。

あいつの背中を見ていて無性に悲しくなった。

そうだ、あの時も…

あの時？

あの時っていつだったけ？

いや違う。だからあの…

《 ！ 》

魔神柱から声がした。

《 ！ 》

妙に頭に響く。

「おい!!」

《 ！ 》

「マスター!!」

うるさい。頭に響く声を出すな!

「しっかりしろ!マスター!」

《 ！ 》

頭に鋭い痛みが何度も走った。

——世界はいつも通りだった。



誰も彼もが日常を謳歌している。

穴が開いてしまったのは私だけだった。

誰よりも世界の為に動いてきた私たちが異物だった。

なぜあんなことを考えてしまったのだろう。

戦争や飢餓で多くの人はいつも理不尽に死んでいる。

画面の中に映る大量の人の死を、私は他人事のように眺めていたはずだ。

そんな私が、目の前で後輩が死んだ程度でなぜ救わなくちやなんて思ってしまったのだろう。

なんで人の命を秤にかけなかったのだろう。

《なんで世界を救わなくちやなんて思ってしまったのだろう》——

——《なぜ、勝手に召喚システムを使ったんだ？》

《一人でサーヴァントを何体も持つなんて許されないぞ》

《交流措置が必要だ》

《いいや、処分すべきだ》

《だいたい人類史が消えるなんて、そんなことあるのかね？》

《召喚を行ったのだからこれは我々の管轄だ》

《我々も出資をしている。ある程度の取り分がなくては納得できない》

《記録に関してはこちらに一任して頂く》

《そもそもカルデアは国連の管轄で…》

どいつもこいつも自分のことばかりだ。

私たちの戦いを否定して、何もしいことを美徳みたいに言う。

やれ倫理だ、法律だって。

既得権益を守るのに必死なだけなのに。

こんな世界の一体どこに価値があるのだろうか——

——星が降り注いだ。

人々の悲鳴が聞こえる。

誰もが知らないふりをして、日常を謳歌していた。

そんな当たり前が白紙になった。

正直、すつとした。

私の中で何か報われるようだった。

そう思った。

だけれど私の周りの穴は埋まらなかった。

世界は白紙化しただけなのに、私の周りは穴だらけだ。

こんな世界二度も救う価値があるのか？——

——世界の命運を託された。

世界に救う価値を見出さない私に、こんなものを託してどうなるというのか？

いつそ全部壊してしまおうか？

そんなときだった。

《だったら救う価値のある世界を救えばいいじゃないか》

そんなことを言ったやつがいた——

そうだ。

そうだった。

そうだったんだ。

危うく夢に溺れるところだった。

ありがとう。

マシユ。

§

《キイイイイ！キイイイイ！》

炎にあぶられて、魔神柱が悲鳴のようなものを上げている。

《キイイイイ！キイイイイ！》

何度も何度も。

《キイイイイ！キイイイイ！》

まるで断末魔だ。

「うっさいわね。さっさとくたばれっつーの」

もはや炎にあぶられて、煽られているだけにしか見えない。

魔神柱はこちらに攻撃することもなく、ただ蔓のような足をばたつかせいるだけだった。

何がしたいんだ？こいつ？

《キイイイイイイイイイ！！！！》

魔神柱がひとときわ大きな悲鳴を上げた。

「チツ」

ジャンヌは顔をゆがませて、舌打ちをした。

「宝具、使いわよ」

そしてそんなことを言った。

宝具？

「いや、こいつは攻撃してこないし、魔力は温存しておいた方が……」

『ラ・グロントメント・デユ・ヘイン 吼え立てよ、我が憤怒』！！！！』

彼女は僕の言葉を聞くこともなく、宝具を放った。

体から大量の魔力が抜ける感覚がする。

その感覚の後、彼女の足元から爆発と間違えるくらいの轟音がして黒炎が湧き出す。

彼女から湧き出した黒い炎は蛇のように地面を伝うと、そのまま魔神柱の体を走り抜け

た。

そして炎を追うように現れた無数の黒槍が魔神柱の体を何度も貫く。

《キイイイイイイイ!!!》

これが本当の断末魔となった。

黒炎が魔神柱の体全てを炭にした。

そして黒槍が刺さった部分からぼろぼろと崩れだした。

「ハアハア」

そんな奴の前に、ジャンヌは肩で息をしていた。

「…つたく、手間かけさせるんじゃないわよ」

そんなに焦らなくて、あのまま攻撃を続けていれば倒せたんじゃない…

そんなことを思いながら彼女の背中を僕は見ていた。

足元のツタ部分が崩れ、魔力炉に巻き付いていた魔神柱は音を立てて崩れた。

炭と化した魔神柱の体が粉塵となって舞い上がり、砂煙を作る。

「終わった…」

何ともあつけない終演に僕はただぼーっとしていた。

これで終わりなのだろうか？

これで未来から来た彼らの頼みは完遂できたのだろうか。

僕がシャドウ・ボーダーで目覚めたとき、ペンドラゴンさんは僕に

「マスターを助けてもらいに来た」

と言っていた。

これで助けたことになったのだろうか……

……おっとこれじゃ駄目なんだっけ。

さつきジャンヌに言われたばかりだった。

えーつと心から敵を見下せ、だっけ。

「弱い！弱すぎる！この貧弱者が！」

こんな感じだろうか。

さすがにこれを言うのは恥ずかしいな。

やっぱやめよう。

そんな風にふざけている間に砂煙が晴れてきた。

黒い粉塵が薄くなつていき、微かに先が見え始める。

どこかで既視感のある光景だった。

いつだったかな？

ああ、そうだ。

僕らが旅を始めたときだ。

管制室で爆発が起こつてあちこちに瓦礫が広がっていた。

その瓦礫の崩落に巻き込まれたマシユを助けようとしたことが僕らの旅の始まりだった。

ノスタルジックな気持ちに包まれながら、粉塵の先を見ていた時だった。

僕の目に入ってきたのは炭化した魔神柱の体とぼろぼろに崩れた炭、そして…

黒変した人の足だった。

体中に悪寒が走り、僕は知らないうちに駆け出した。

「な！馬鹿！勝手に走るんじゃない！」

ジャンヌが後ろで何かを言っていたが全く耳に入らなかった。



焦燥感が体中を駆け抜ける。

少し前の会話を思い出す。

—— そんな状況でマスターを連れてきたところで、おそらく英霊を呼び出すことすらままならない。

ダ・ヴィンチさんはそう言っていた。

たしかにそうなのかもしれない。

でもだったら、

サーヴァントを連れてくることはできるはずだ。

だってダ・ヴィンチさんもホームズさんもサーヴァントじゃないか。

それなのに彼らはこちらに来ていた。

だとすれば僕らのサポートに最もふさわしい人物がいる。

僕らとともに旅を続け、いつもそばで僕らを守ってくれた娘が。

大きな盾で常に恐怖と戦ってきた、誰よりも優しく勇敢な娘が。

—— じゃあ、あれはキリエライトさんが使っている盾、ですか？

—— …… ああ、その通りだ

本人がいらないのになんで宝具だけを持ってくるんだ。

宝具の扱い方を一番知っているのは本人だ。

彼女を連れてくる方が安全に決まってる。

—— 未来から来た人物が、過去でその本人や近い人物と出会うということは危険だ

—— 過去の人物と会うことは世界の理を乱す行為。

だったらダ・ヴィンチさんやホームズさんはなぜ僕と接触したんだ。

もし僕に過去を変えてしまうほどの影響力がないから彼らが僕に会っているんだと仮定したら、彼女と僕を会わせる事だって問題ないはずだ。

頭のなかに色々なことが駆け巡る。

魔神柱はなぜカルデアの地下室にピンポイントで現れたのか？

魔神柱はなぜ攻撃を仕掛けてこなかった？

魔神柱はなぜ何度も同じように叫び声をあげていた？



ハツとする。

右手が震える。

現実を見ようとする理性と逃避する心が拮抗する。

それでもなんとか振るえる手で灰をかいた。

そこにあつたのは

顔、だった。

ところどころが炭となり、美しい肌だった場所はガサガサの皮膚となっていて、艶やかな髪はぼさぼさの糸みたいになって、それでもわかる見慣れた顔だった。

「…………マ…………シユ…………？」

僕は震える声で、呟いた。

その声に反応するかのようにかさかさの瞼がピクリと震えると、目を開いた。

その目の中心には彼女の美しい色彩はなく、灰色で埋められてた。

こちらが見えているかも分からなかった。

下の灰が動き、そこから割れて肘までしかない左腕と辛うじて指が2本残っている右

手が出てきた。

左腕が何かを探すように動き、震える右手の人差し指が僕の頬に触れた。

感触を確かめるように何度か僕の頬をつつくと、灰色の目から涙が垂れた。

「……や……つと……や……と……会えた」

僕は無意識に人差し指と薬指しか残っていない真っ黒な右手を両手でつかんだ。

わずかに手のひらが崩れ、右手に亀裂が入る。

「……せん……ばい……せん……ばい……」

彼女の割れた頬にわずかにえくぼができる。

「ごめん……なさい……せつかく……ここまで……きた……のに」

えくぼに耐え切れなかったのか、頬から右目にかけてパキツという音と共に亀裂が入る。

「もう……なにも……でき……そうに……ない……です……」

何も声が出なかった。

「せ……かく……さずか……つ……た……こ……も……うん……で……あげる……こと……も……」

挙げていた左腕が肩から折れて、灰の上にぼさつと乗った。

「……できなく……て……」

彼女の目からは涙が流れ続けた。

涙で水がしみ込んだのか、辛うじて動いていた唇が割れた。

「……お……えん……あさい……おえんあさい……」

彼女はただ虚空を見て泣いていた。

「えめて……あやありた……かった……んえす……」

両手が震える。

「いつか……さんあ……あるくあり……ません……わたし……あ……あるいん……で……す」

空の喉で嗚咽を吐いていた。

なんで……どうして……

カキンツ!!!!

後ろで甲高い金属音がした。

僕は呆然としたままゆっくりと振り返った。

そこにはマシユの体に剣を振り下ろそうとしているジャンヌと、それを杖で抑えているホームズさんがいた。

「邪魔よ。どきなさい」

ジャンヌの顔に感情はなかった。

無表情だった。

「申し訳ないがレディ。それはできない」

カタカタと震える金属音と共に鏢迫り合いは続く。

ジャンヌが無表情で力を強め、ホームズさんが押され始める。

彼の頬に汗が伝った瞬間、ジャンヌが後ろに跳んだ。

バゴンツ!!!

さつきまでジャンヌがいた場所に何か落ちてきて、砂煙を巻き上げた。

落ちてきたものの影を見る。

それは大きな拳に似ていた。

あれは…ダ・ヴィンチさんが背負ってた6本指の…

僕の目を、舞い上がった灰塵が覆う。

「ごめんね。達海くん」

前の人影から声がした。

「私たちに謝る資格なんてないけれど」

灰塵が晴れる。

「それでも言っておかなくちやならない」

僕の前に影が差した。

「なんで……ここに……」

僕の前には未来から来た二人、ホームズさんとダ・ヴィンチさんが立っていた。

「ごめん」

彼らは僕らを守るようにこちらに背を向けていた。

そして彼らの視線の先にはジャンヌがいる。

「来たわね。偽善者2人組」

彼女の表情は気だるげなそれに戻っていた。

「そうだろうとは思ったよ」

ダ・ヴィンチさんは言った。

「あのとき君が私を睨んだのは、君がこちら側の世界の英霊だからだね？」

「こちら側？」

彼女の要領を得ない言葉にジャンヌは軽蔑のまなざしを取った。

「英霊？少なくとも今の私はそんな高尚なものじゃありませんが」



彼女は不機嫌そうに二人を睨む。

「それはあんた達が一番わかっていることでしょう？」

そういうと彼女は振り返った。

「ねえ？ そう思うでしょ？ 藤丸ちゃん？」

…藤丸？

彼女の後ろから声がした。

「やっぱり来たんですね。2人とも」

コツコツとこちら側に誰か来る音がした。

ダ・ヴィンチさんはその人物に向けて、口を開いた。

「うん。君を止めに来たんだ」

「立花ちゃん」

## 会合

「姉……さん……？」

ジャンヌの後方から砂煙を切りながら歩いてきたのは、紛れもなく僕の姉であった。

ただ、先ほどまでと纏う雰囲気が違う。

カルデア制服にどことなく似た黒い礼装を身にまとい、長くなっている赤茶色の髪を無造作に後ろ一本にまとめていた。

目の下には遠めから見てもわかるぐらいくつきりと隈が現れていて、何かを呪っているかのように鋭い目つきをしている。

姉さんは呆然と呟く僕を少しだけ見ると視線を僕の前にいるダ・ヴィンチさんとホームズさんに合わせた。

「二人がいるってことはみんなも来てるんでしょ？」

姉さんの声は年季が感じられるような重い声だったが、少なくとも疲労を感じる声でもあった。

姉さんの問いにダ・ヴィンチが答えた。

「そうだよ。みんないる」

姉さんと違って、ダ・ヴィンチさんは心配そうに姉さんを見ていた。

「私たちはもちろんゴールドルフ君、ムニエル、カワタ、オクタヴィア、トマリン、チン、カヤン、エルロン、マーカス……」

彼女は右手を握り、自らの胸にあてた。

「みんな心配している。帰ろう、立花ちゃん」

その声を絞り出す彼女はとても悲しそうだった。

そんな彼女の悲痛な叫びに姉さんはただ眉をピクリと動かした。

「……帰る？」

姉さんはそうつぶやくと、嘔き出した。

そして暗い笑顔を作りながら、くつくつと笑い始めた。

「ふふ………帰る、なんておかしなこと言うね？」

そして姉さんは地面を指さした。

「ここが私の帰る場所だよ？」

そう言つて地下室に暗い笑い声をこだませた。

その態度にダ・ヴィンチさんは一瞬だけ何かを言おうとした。

「っ……………」

彼女は振り返り、僕と手元にいるマシユをみる。

そして唇を噛む。

その表情は懺悔人のようで、目元には悔いとも、怒りとも、悲しみともとれる感情が

寄つていた。

なんで、なんなんですか、その目は。

彼女は何かを喉の奥にしまいこもうとして目を閉じる。

眉間にしわを寄せ、呟く。

「君はっ……………」

彼女は最後まで迷うかのように唇を震わせていたが、最後には口を開いた。

「君は何でこんなことをしたんだよっ！！」

ダ・ヴィンチさんの叫びに隣のホームズは少し驚いたような顔をした。

「眠っていたマシユを無理矢理起こして、大令呪の欠片を集めて……拳銃の果てに南極にこんな世界まで作って!!」

ダ・ヴィンチさんは姉さんを責めているのに、言い方が懺悔みたいだった。

「私たちの旅が一体何を犠牲にしてきたのかを忘れたのかい?!」

彼女の叫びに姉さんの目つきが険しくなる。

「私たちがどれだけ理不尽に何の罪もない世界を踏みつぶしてきたのかわかっているだろうか!!」

ダ・ヴィンチさんは激昂していた。

それは多分、信頼の証だったはずだ。

でも姉さんはその信頼を受け取らなかった。

「信頼していた人が犠牲になったら、私の弟はあんな最期を迎えてもいいんですか?」  
「っ!!」

その言葉にダ・ヴィンチさんは目を見開いた。

姉さんもまた、なぜだか怒りに震えていた。

「あるはずのない過去の異常をなかつたことにしたら、私の後輩はあんな体になってもいいんですか?」

姉さんの目には涙が浮かんでいた。

「存在しないはずの世界を消し去ったら、かけがえのない人たちをぼろぼろにしてもいいんですかっ!!!」

姉さんもまだ怒ったまま、泣いていた。

「そうやって私の大切なものを全部捨てて、残ったのはあんな世界で……」

「私だって救われた世界の一部でしようっ!!」

「なのになんでこんなにはじき出されるのよっ!!!」

彼女はそう吐き捨てると目元の涙を腕で拭った。

「だから私はっ!!!」

『マイ・ロード』!!!」

直接頭に響くような声が出た。

姉さんがハツとして口を止めた。

姉さんの隣にいるジャンヌは苦い表情を作った。

「君にはまだやるべきことが残っているだろうか?」

声がる先を見る。

いつの間にか、姉さんの後ろに白いローブと大きな杖を持った男が立っていた。

この声、どこかで聞き覚えが……

「やはりか」

男を見て、ホームズさんはそうつぶやいた。

隣のダ・ヴィンチさんは親の仇を見るような目であの男を見ていた。

「出た。胡散臭男」

ジャンヌは嫌悪感を全く隠さずに言う。

その言葉に一切表情を崩さなかった男は姉さんの肩に手を置いて、優しく微笑んだ。

「ほら」

姉さんは肩に置かれた手をキツとにらむと右手で払いのけた。

「マーリン………いったいどういうつもりなの?」

男は姉さんの睨みをもつとせせず胡散臭い笑顔を浮かべ続ける。

「どういうつもりって?何がだい?」

その言葉に姉さんは目を吊り上げる。

「とぼけるのはやめなさい」

暗い目つきにこれ以上ないほどの険をもたせる。

「何で私の記憶に幻術をかけたのよ?それも態々わたしを昔の姿にしてまで下らない茶

番をやらせて」

幻術?茶番?

「皮肉？それとも私を馬鹿にしているの？」

姉のあんな顔を見るのは初めてだった。

悲壮感と憤怒にまみれた顔だ。

白いローブの男はそんな表情を前にしても先ほどの微笑みを崩さなかった。

「そんなつもりは無い。私は君に休んでほしかった」

「休む？」

「あれから今まで、君はずっと一人で頑張ってきたんだ。それが泡沫の夢であったとしてもこの世界でまどろむくらいは許されるだろう」

姉さんは少しだけその目を見開いた。

面食らったかのようにも見えたがすぐに険を含んだ眼付に戻した。

「余計なお世話よ」

「そうかい？」

「ええ。私とあなたは利害が一致しただけの協力関係。私の面倒を頼んだ覚えはない」

「でもいい夢は見れたろう？」

そんな言葉に姉さんは泣きそうな顔をして一瞬だけ言葉を止めた。

だがすぐに口を開いた。

「……最悪な夢だった。自分を殴り飛ばせないことが不憫でしよすがなかった」



「それはすまなかつたね」

「それに…」

姉さんはこちらを見た。

「いざというときの保険まで使ったのに、この状況よ」

保険？

「一歩間違えればすべてが終わっていたわ。次こんな真似をしたら貴方をこれですぐに幽閉するわよ」

そう言つて左手の甲を男に向けた。

姉の手はともに皮の手袋をしていてよく見えなかった。

それを見て男はおどけたように笑つた。

「怖い怖い。次があつたら気を付けるよ」

男のいいように姉さんはいい目を向けなかったが、舌打ちだけにとどめた。

「それで？どうするんです？」

言い合いをしていた彼らにジャンヌが言った。

「処分できたビーストはたったの1体、これ以上は増やせそうにありませんし面倒な奴らも来てしまいました」

その言葉でマーリンと呼ばれた白ローブと姉さんの二人は彼女に目を向けた。

ジャンヌはやる気なさげに肩をすくめる。

「まあ？仕事が未完遂の私にこんなことを言われるのも癪でしょうけどね」

そんな言葉に男はこう返す。

「いいや。とても助かったよ」

男はまた胡散臭い笑みを浮かべた。

「本来僕ら2人だけで進める必要があつた計画だからね。君がいてくれて大分楽になつた」

「……ありがとう。ジャンヌ。達海を守ってくれて」

二人は旧知の間柄であるかのように彼女に接していた。

そんな二人の言葉を聞いて彼女は苦々しい表情を作つた。

「あんたらのためじゃないわよ。私は私の借りを返すためだけにここにいる」

その言葉に姉は静かにうなずいた。

「うん。わかってる」

彼女たちの会話を見ながらホームズさんは何かを考え、ぶつぶつとつぶやいていた。

「保険……ピーストの処分……増やす……そうか！そういうことか！」

僕の両手の中で微かに振るえる2本の指。

耳を澄まさなければ聞こえないほどの微かな吐息とそれに混じる嗚咽。

周囲の会話は聞こえるし、理解できる。

なのにノイズみたいにいるさく感じる。

なんで？

そんな感情を幾度となくこの旅で持つてきた。

存在しないはずの悪、必要のない過去、無慈悲な征伐、世界は理不尽にあふれていて、そのたびに「なんで」と意味のない問いかけが胸中を渦巻いていた。

そして今はこれだ。

僕のそばで、僕を支えてくれた娘の未来はひび割れた炭への末路。

痛みに耐えながら、涙を流し、嗚咽を吐く。

そこままでしても我関せず、周りは勝手に話を進めていく。

誰もが彼女を痛ましい目で見ただけだ。

多分僕もその側に立っている。

なんだろうな。

遣る瀬無さって言えばいいんだろうか。

違うな。

これは多分「怒り」だ。

「……もういい加減にしてくれ」

知らないうちに言葉が出ていた。

「訳が分かんないよ」

言葉が震える。

彼女を前にして感情のままに吼えるなんてどうしようもない真似はしたくない。

でもこんな彼女を前にして怒らないことの方がどうしようもない人間のような気がした。

「どうしてマシユがこうなるんですか……説明してくださいよ。ダ・ヴィンチさん、ホムズさん」

僕の問いかけに二人の背中では反応しない。

「二人は未来から来たんでしょう？」

「……」

「……」

「何か言ってくれないと、分からないですよ……」

「……」

「黙ってないで！何とか言ってくださいよ！！！！」

「せ……ん……あい……」

！！！！！！

僕の声に彼女は微かに声を出す。  
無意識に彼女の手を握る両手に力が入る。

「……ほら、出番よ。お姉さん」

聞こえた声に顔を上げる。

声を出したジャンヌは姉に目を向けていた。

「あんたが言うべきでしょ」

そう言われる姉の目には微かに揺れていた。

「……」

「じゃあ、彼女に代わって私が……」

何かに迷っている姉さんを見て、口を開いた白いローブの男が何かを言おうとした。

ジャンヌはそんな男の首に旗の穂先を突き付けた。

「あんたは黙ってなさい」

男は笑って振り向く。

「なぜだい？」

ジャンヌはそんな男を睨む。

「いかれたあんたには分かんないだろうけど、こういうのはフェアじゃない。敬意がな

ければ大義もただの独裁よ」

「…」

「価値観の押し付けも結構ですが最後に決めるのは当人でしょう」

「…君は彼女の願いが壊れてもいいと？」

「私は借りを返すためにいる。そう言ったわ」

「…」

「いいから黙ってみてなさい」

白いローブの男は左手の杖を微かに上げた。

その動作にジャンヌも目つきを強める。

「マリーリン」

だが姉さんの一言でその手は止まった。

「ジャンヌの言う通りよ。これは私がやるべきこと」

「…」

「だから貴方は何もしないで」

男はその言葉を聞くと杖を下げた。

杖の先が地に当たり、微かにカツンという音が聞こえた。

「仰せのままに。マイ・ロード」

姉さんは意を決したかのようにこちらを見た。

その目にはまだなにか迷いと恐怖が混在しているようだったが、それらを断ち切るように彼女はこちらに歩を進めた。

そしてジャンヌとマーリンと呼ばれた男の前に出ると止まった。

「達海」

「…姉さん」

「…」

「…」

「あなたがどこまで知っているか知らないけれど……」

「…」

「私はあなたが知る私より、少し先の未来の私なのよ」

…？

「姉さんは僕らと一緒に旅をしていたじゃないか」

「それは……」

姉は少し気まずそうに口をつぐんだ。

「故意じゃなかった。私もさつきまで気づかなかったのよ。でもごめんなさい」

そして謝った。

「あれはあなた達に対する最大の侮辱だった」

何を……言ってるんだ……？

会話が噛み合っていない。

「まさか姉さんも、今僕の目の前にいる姉さんも、もしかして未来から来たのか？」  
そう言うことなのか？

だとしたらさつきまでいた姉さんはどこに……？

困惑していた僕の言葉に姉は大きく目を見開いた。

「未来から……来た……？」

そして僕の前のダ・ヴィンチさんとホームズさんを見た。

「……そう。そういうこと」

一瞬だけ迷いや恐怖とは違う感情が目に浮かんでいた。

しかしそうつぶやいてこちらに戻した視線の中に、それはなかった。

「2人を恨むのは筋違いね。すべては私が始めたことだから……」

そうして姉さんは両手の手袋を取った。

そして右手の甲をこちらに向けた。

そこには先ほど使って、うっすら見えるだけの令呪の跡。

「これはロールプレイの跡。昔の私が使った令呪」



そう言つて右手を下げたあと、左手の甲をこちらに向けた。

「これが今の私の契約よ」

その左手の甲にはノイズが走つたかのように不規則に線が引かれた非対称の令呪があった。

「達海。今からあなたにすべてを話すわ」

「私が経験してきたすべてを」

§

「ハアハアハア」

廊下には荒い呼吸と複数人の足音が響く。

「クソツ。管制室までつてこんなに長かったか!？」

いつもは歩いててもすぐに着くのによ!

「口動かしたって距離は縮まりませんよ！動かすのは足です！足！」

後ろを追隨するスタッフのトマリんに叫び返された。

「わーってるよ！」

階段を一段飛ばしで駆け上る。

流石に肺が悲鳴を上げてきた。

脇腹がいたくなり、口から洩れる息がひゅうひゅうと変な音を出し始めた。

歩きたい。

今すぐ膝に手をつけて呼吸を整えたい。

心の中で芽生える気持ちをも、走る足で蹴り飛ばす。

そんなくだらねえこと考える暇があったら走れ！

自分を叱責する。

今も立花たちが戦っている。

それをサポートするのが俺たちの仕事だ！

そんなムニエルの心の中の叫びに、後ろにいるスタッフたちも駆け足と荒い呼吸を

もって賛同する。

「ハアハアハア」

いつも見慣れた廊下を走る。

「ハアハアハア」

いつも入っているトイレの入り口がそばを通り過ぎていくのを眺め、走る。

「ハアハアハア」

アストルフオとデオンがよく通る廊下を走る。

あの二人がきやつきやつうふふしている虚像を見ながら走る。

「今！なんか！変な回想流れませんでしたか!!」

後ろの一人がそんなことを言ってきた。

「ふざけたこと言っていないで走れ！あと変じゃねえ！」

「やっぱ流れたでしょ!!」

走る。

足の痛覚が麻痺するぐらいに走る。

角を曲がり、合流通路にでる。

「見えた！」

俺たちの視線の先にひと際大きな扉が見える。

よし！

早く立花たちの状況を知らせなくては！

あと10歩。

5歩。

3歩。

1歩ッ！

扉が完全に開くのを待たず、体を無理矢理ねじ込んだ。

「炉心整備班！帰還しました！全員無事です！」

ムニエルはそう叫び、班全員が管制室に駆け込んだ。

「状況報告！いま立花たちが最下層で魔神柱と戦っています！通信がつながらないみたいで……………つて、え？」

駆け込むや否や、彼らの現状報告をしようとしたムニエルたちは動きを止めた。

あまりにも衝撃的な光景によって。

「あ！君たち！無事だったんだね！」

駆け込んできたムニエルたちを見て、管制室の端にいたドクター・ロマンが表情を明るくした。

「え？あ、はい。無事ですすけど…え？」

彼のかけてくれた言葉も構わず班員全員が啞然としていた。

管制室の状況が理解できなかったからだ。  
なんだ、この状況……？

管制室にいるカルデアメンバーは全員部屋の一端に固まっている。

そして彼らを守るようにして、天才かつ万能人のレオナルド・ダ・ヴィンチが前に立っていた。

彼女は管制室に入ってきた俺たちを見て、固い笑顔を浮かべた。

「君たちが無事でよかったよ」

彼女は視線だけをこちらに向け、向かい側の端に杖を構えている。

「さあ、早く私の背中に隠れてくれたまえ」

問題はダ・ヴィンチが杖を構える先だ。

カルデアのスタッフががいる壁とは反対側。そこにいたのは…

「俺？」

俺、だった。

いや、俺だけではない。

正確には太つちよのおっさんと、どこか見覚えのある奴らが管制室の反対側の端に固まっていた。

誰だ？こいつら？

小太りのおっさんは全員をかばうように前に出ている。

ぶるぶると震え顔が真つ青ではあるが。

「あ、ほら！俺じゃん！」

向こう側にいた俺とそっくりな男は俺を指さした。

「馬鹿者！勝手に私の脇から出るんじゃ……」

「な？俺たちの言つた通りだろ！！」

太つちよのおっさんが言うことには目もくれず、あつちにいる俺は必死な形相でダ・ヴィンチに言う。

ダ・ヴィンチは冷静にその言葉を肯定した。

「ああ。確かに彼らは無事帰ってきた。君たちの言うことにも今のところ矛盾はない」

「じゃあ、協力してくれ……」

だが彼女は鋭い目つきで彼らを見つめる。

「だがこの事実で改善した君たちへの信頼は1ナノメートルほどだ」

その冷たい言葉に太つちよのおっさんが怒つたように言った。

「ええい！技術顧問！一介の顧問の身でカルデアの所長たる私に対して何という態度を

……」

その言葉にダ・ヴィンチの鋭い目つきが彼を射抜いた。

「誰が？カルデアの所長だつて？」

彼女から凄いい殺気が流れ出る。

「ひいひいひい！！」

その言葉に小太りのおっさんは身をすくませた。

弱っ！

いや、でも一行を背に隠したままってことは、胆力はあるのか？

「私はそういう冗談は嫌いだね。カルデアの前所長なら殉職したよ」

彼女の目つきにがたがた震えるおっさん。

「それと、私は君たちの技術顧問になつた覚えもない」

「あ、今の所長代理は僕ね」

ダ・ヴィンチの後ろにいたドクターが今の空気に合わないぼけた声で言った。

ダ・ヴィンチが睨み、カルデアのみんなもジト目を彼に向ける。

ドクター……

これだからあんたは……

いつもの弛緩した雰囲気になつていた。

そんなとき予想外な方向からも声が飛んできた。

「相変わらずだな、ドクターは」

「まあ、あれこそがドクターだよな」

「そうね。ドクターと言えばあれよね」

それは太つちよのおっさんが後ろにかばっている一団から出た声だった。

「え、なんか僕、知らない人たちにまで残念な子扱いされてない!!」

ん?なんだ?

あいつらはドクターの知り合いなのか?

「君たち!! そんなこと言っている場合かね!!」

なごむような空気になっていた後ろの一団に対して、焦ったようにおっさんが言った。

「大体話が違うではないか! 経営顧問のやつめ!」

立派な髭をだらしなく垂らしながら青い顔でしゃべる。

「何が『ミスターの威厳があれば彼らも快く胸襟を開くでしょう』だ!!」

「落ち着けて、こんなことしてる場合じゃないだろ」

隣でなだめすかしているあちら側の俺の努力もむなしく一人で空回りしている。

「胸襟どころか死への扉が開いてしまいそうなんだが!!」

そんなコントみたいなのをやっている彼らにさしものダ・ヴィンチも呆れ顔をし始



めた。

「潜入者だとしたら随分と間抜けな……あつ」

ダ・ヴィンチが何か気づくとにやにやしだした。

「どれ……ちよつと試してみようか……」

ダ・ヴィンチは何やら眩きだすとポケットから何かを取り出した。

ん？

なんだ、あれ？

USB……？

「カルデアスタッフ諸君！ついでにそつちの不審団体御一行！これを見給えー！」

彼女はそう言ってポケットから取り出した何かを右手につかみ、頭上に掲げた。

「ここにはカルデアのあるものが規約を違反し、集めたデータをコピーしたものがあ

る！

規約を違反……？

まさか立花たちの情報を盗み出した奴がいるのか？！

敵？！

そしたらあいつらはその仲間ってことか？！

「今からこの中に入っている情報の一部を流す！」

ダ・ヴィンチはそう言つて杖の中から接続端子を取り出すと、USBにつなげた。あの杖、何でも入ってんな…

「もし君たちが、君たちの言う通りの一団だとするならば規約を違反した者が誰か分かるはずだ！」

読み込んでいるのか杖の上の結晶部分が回転しだした。

そしてその結晶のどがった先からモニターが映し出された。

あれは…：動画か？

モニターに映っているのはスタートマークが画面中央に表示された画像。

あの右矢印を円で囲ったよく見かける奴だ。

ん？後ろの画像、なんか見覚えがあるような…

「君たちが我々の敵でないというのなら、その裏切り者をここで密告したまえ！」

ダ・ヴィンチが言い終えると動画が再生されだした。

いったいこれは何の動画だ…？

動画は何やら薄い煙が漂う部屋の中で始まった。

部屋の中には白いプラスチックの棒でできた柵があり、その中に藁でできた籠が何個も入っているのが見える。

ジャーっという水音のようなものが時折聞こえ、人の話し声のようなものもくぐもつ

ているが聞こえる。

ここは……大浴場の脱衣所、だよな？

でもなんでこんな動画を？

サーヴァントの傷の位置でも知りたかったのか？

周りを見ると皆一様に首をかしげている。

「なんだ？この動画は？」

小太りのおっさんも頭にはてなを浮かべている。

不思議に思っていると動画からはつきりとした声が聞こえてきた。

『おっふろくおっふろく』

声とともに現れたのは桃色の髪をした天使……ではなく男。

『アストルフオ。走ってはいけないよ』

そしてもう一人は金色の髪をした天使……ではなく男……でもなく女でもない。

『デオンは気にしすぎだよ。大丈夫だって！』

そう。現れたのは現世に降臨した完全にして、耽美。美の女神よりも美を象徴するア

イドル二人組。

アストルフオとシユヴァリエ・デオンだった。

ってだったじゃねえ！

この動画は俺の秘蔵コレクション『天使の遊戯3——天使が生まれたままの姿になるとき——』じゃねえか！

なんでダ・ヴィンチが持ってんだ！

みんなが動画に注目する中、俺は焦ってダ・ヴィンチに目を向ける。

ダ・ヴィンチの表情はまさに“てへぺろ！”という擬音が出てくるのに相応しいふざけた表情でこちらを見ていた。

あのじじいいい！

あ？

なんだあのフリッブ？

俺が睨みつけているとどっから出したのかダ・ヴィンチは白いボードを取り出し何かを書き始めた。

そして書き終わるとそのフリッブをこちらに見せた。

えーつと、『悪いとは思うけど、更衣室の盗撮って普通に犯罪だよな？公開処刑もやむなし』

ここにきて唯の正論ツ！

ぐうの音も出ねえ！

脂汗を流しつつ歯ぎしりをする。  
まずい。

とにかく今はあのじじいを逆恨みしてる場合じゃない。

モニターに目を向けると彼女たち（？）はまだ柵の前で談笑していた。  
まずいぞ……

額から顎にかけて汗がつうーつと流れる。

このままでは……

『背中洗いっこしようよ！』

『それは構わないけれど、君の場合ほかの場所まで触つてきそうじゃないか』

『まつさか』

『待て、なぜ目をそらすんだい』

二人は会話をしながら上着を脱いで、たたんでいる。  
そう。

この動画はつまり彼女（？）たちが浴場に入るまで続く。

すなわちこのまま動画が続くと……

天使たちのキャストオフが始まってしまふのだ！

やばい。

それが流れた後に所持者がばれたら、俺が社会的に死んでしまうッ!!

そのとき、ふと俺の視界の端に一人の人間が映った。

そいつも俺と同じように動揺し、脂汗をだらだらと流していた。

そして、そいつも俺と同じように脂汗を流している俺を見つけていた。

お前はッ——

——もう一人の俺!

なぜか見覚えのある顔の連中ばかりの謎団体の中にいた、俺と同じ顔を持つ男。

普段なら彼らに対する不信感と違和感を持つような状況。

しかしそれ以上に迫る危機感を前に俺ともう一人の俺は心が通じ合った。

俺はあいつの目を見て頷く。

あいつもまた俺の目を見て無言で頷く。

俺たちが心の中で思ったことはただの一つ。

——天使たちの真の姿が開放されてしまう前に、動画を止める!

天使たちの姿は魔術の秘匿よりも秘匿されねばならない。

彼女ら（？）の御身には魔術ごときでは到達できない真なる神秘が隠されている。

既存の概念では価値など着けられないのだ。

だから何としても動画を止める。

決して自分の立場が危ないとかではない。

決してだ！

だが具体的にどうすればいい？

この状況ではコンソールには触れない。

そんなことをすればすぐに嫌疑がかけられてしまう。

だからモニターを外部からシャットアウトはできない。

いや、そもそもダ・ヴィンチのあの杖はシステムとして独立しているのだから外部か

らのコマンドは受け付けないだろう。

もし受けつけたとしても、天才のファイアオールを抜けられると思うほど俺は自分

を過信してはいない。

だとするならばここは上手く声を上げ、こんなくだらない鑑賞会をしている場合では

ないのに場をうまく誘導するのが最適だ。

というかそれ以外に方法が思い浮かばないわ。

視線をもう一方の俺に向ける。

やつも俺を見ていた。

あつちの方も同じことを考えていたようだ。

流石俺。

思考回路が単純すぎる。

一瞬の視線の交錯がミツシヨン開始の合図となった。

俺ともう一人の俺が一步踏み出した、まさにその時

「何をやっている?」

管制室の入り口が開き、不機嫌そうな声が聞こえた。

その声にもモニターを見ていた全員が振り返る。

そこにいたのは騎士王アルトリア・ペンドラゴンだった。

それもオルタの方だ。

あれ?

あいつ、立花と一緒に戦ってたよな。

何でここにいるんだ?

まさかもう戦闘が終わったのか?

「おおっ! ちようどいいところに来た! バカ娘のサーヴァント!」

彼女を見ると小太りのおっさんは顔を輝かせた。



「貴様からあいづらに言ってくれ！我々は敵ではないと……」

「あ？」

「ひっ」

アルトリアはひと睨みしておつさんを黙らせた。

弱っ。

さつきからおつさん弱いぞ。

「私は、何をしている、と聞いたのだ。私の問いに答えろ」

彼女の言葉におつさんは反射的に口を開く。

「答えろ、だと？貴様！…いったい何様のつもりいいでございますか……」

最初は威勢が強かったのに彼女が再び睨みをきかせると語尾が小さくなって、敬語になつた。

だから弱い。

弱いつて。

「王様だが？」

ドヤ顔で返すアルトリア。

うざい。

だが事実だ。

一向に話が進まない彼らの会話にダ・ヴィンチはため息を漏らした。

「君も、どうやら我々の知る君ではなさそうだね」

「ほう?」

ダ・ヴィンチの言葉に面白いとでも言いたげな声を上げるアルトリア。

「君はあちら側に与していると考えていいのかな?」

腕を組んでいる彼女はまさに偉そうに返答した。

「だとしたら?」

「なら」

ダ・ヴィンチは後ろを指さした。

「この動画、誰がとったか分かるかい?」

その指が差す先をアルトリアは見た。

『ああもう! 洗う前から体に触るんじゃない!』

『いいだろう! 減るもんじゃないんだしき!』

モニターには全裸になったアストルフオがデオンのズボンを脱がそうと走り回る姿が映っていた。

しまった!

彼女に気を引かれている間に天使の神秘が半分開放されてしまった!



こうなつてしまった以上弁解のしようもない。

殺せ！

俺は俺の愛を貫いた。

もはや一片の悔いもない！

「……」

荒れ果てた世界で霸王となつた人間のような心持ちで目をつむる。

「……」

「……」

「……」

あれ？

なんの返答も来ない。

はて？

不思議に思つて目を開ける。

周りを見渡す。

「だろうな」

「いや、むしろ他に誰がいるんだよ」

「でもこれはちよつと引きます」

「いやドン引きでしょ」

「……俺、ちよつとわかるかも……」

周りの人間はこつち側、あつち側に関わらずみんな呆れ顔でそんなことをしゃべっていた。

え、えええ。

カルデアスタッフと同じような反応をする向こうの奴らを見てダ・ヴィンチはため息を吐いた。

「どうやら君たちの言っていたことは真実みたいだね」

あいつらが言ってたこと？

……ん？

いや、ちよつと待て。

おかしいだろ!!

なんで動画の原因が俺ってわかったぐらいであいつらの信用度が上がるんだよ!!  
ていうかなんで全員犯人が俺ってわかってるわけ!!

焦る俺の肩に後ろのトマリンがポンつと手を乗せた。

「日頃の行いってやつですね」

こ、この野郎……

「あと規約違反ですのであれは後日没収します」

こ、このヤロオオオオオオオオオオオオ!!

パンツ!

甲高い音が鳴る。

ダ・ヴィンチが両手を叩いて鳴らしたようだ。

「さて、どうやら君たちは信頼できるみたいだし、話を聞かせてもらおうじゃないか」

その言葉に全員の顔が引きしまる。

「さっき言っていた異聞帯、ってやつの話」

異聞帯?

なんのことだ?

「私たちがイフの世界の人間、なんだっけ?」

俺たちがイフ?

「それ、すっごい興味ある」

## 君が知っていたはずの物語

## 演習

ふと気づいたときから後ろには弟の心配そうな顔があつた。

私の背中に隠れて、びくびくしながらも少しだけ顔を出す弟。

私より2年遅く生まれた弟。

あの子がいる限り、私はいつだってあの子の前に立ち、気丈に進まなければならない。そうして振り返つた後に、とびっきりの笑顔でこう言つてやるのだ。

「ね？なんとかなつたでしょ？」

そうすればあいつは泣き腫らした赤い目をこすつて笑つてくれる。

だから私が泣き言を言うわけにはいかない。

それはいつだって同じだ。

私たちを取り巻く環境が変わつても、私たちを利用しようとする人間が何度現れても。

でも変わらなかったのは私だけで。

前を見ることばかりに精一杯なのは私だけで。

いつからだろうか。

あの子の成長から目を背けるようになってしまったのは。

## §

「忌々しいッ!!」

焦燥を含ませる声音で私たちを睨みつけた獅子王は、自身の持つ槍を高く掲げた。

「あの光は……」

聖槍が強烈な光と共に膨大な魔力を感じさせ始めた。

左耳につけたインカムからドクターの声が響く。

「立花ちゃん！ 達海くん！ 数値の変動が大きすぎるんだけど！ 何が起こっているんだい



「!?」

キンキンと耳に響くほどに声に対して、達海は冷静に返答した。

「獅子王の持つ槍からです。おそらくは…宝具の発動準備かと」

達海の声に食い気味にドクターは反応した。

「宝具だつて!?? そんな馬鹿な!?」

焦るドクターに私もまた冷静に返した。

「大丈夫。撃たせる前に仕留めるよ」

「え!?」

「ここからが正念場だから、一回切るね」

「いや、ちよつとま…」

私はドクターの言葉を最後まで聞かずにインカムの電源を切った。

そして弟に視線を送る。

「達海、やれるわね」

達海はにやりと笑つて視線を返す。

「当然」

その小生意気な宣言の後、達海は自らの前に立つ少女に叫んだ。

「BBー！」

達海の前に立っていた紫色の髪をもつ少女はその声に振り返り、満面の笑みを浮かべた。

「嫌でーす！」

「……」

「こういう荒事はお隣のなんちゃって聖女さんをお願い致しまーす」

ふざけた物言いに隣にいたジャンヌが口をひくひくさせる。

「あんたねえ……」

「お願いいたしーますっ」

達海は彼女の言葉を聞くとにっこり笑った。

すっと右手を上げる。

そして無言で右手の甲を彼女に向けた。

彼女の笑みがぎこちなく固まる。

「……」

「……」

「……」

「……」

「令呪をもつて……」

「わーかーりーまーしーたー！ わかりましたよっ！」

B Bが不貞腐れた顔で了承した。

「言つときますけど、これはサービスではありませんから」

彼女はこめかみに青い筋を浮かばせながら口を動かす。

「あとで追加分は請求するのでお忘れなく」

「わかつてますよ。」

達海はにっこり笑ったまま彼女を前に促した。

「……」

「お願いします」

B Bとよばれた少女は不満顔であったがため息を吐くと槍を掲げた獅子王の方へ視線を向けた。

コホンつと一度咳払いをする。

「真！ B B、チャンネル〜！」

彼女がそう叫ぶと同時に周囲に砂嵐のようなノイズが走る。

「フィジカル、メンタル、全てにおいて高レベル。これはいけません」

彼女は手に持つ教鞭を空中でくるつと一度回転させた。

次の瞬間、彼女の姿が一瞬で消えた。

「はい、頭の悪くなる注射ですよ。ま、一時的ですけどね」

気づくと彼女は獅子王の背後に大きな注射を持って立っていた。

獅子王が目を見開く。

彼女は間髪入れずに大きな注射を彼女にぶっ刺した。

「こういう使い方もできるんですっ！」

媚媚の声で彼女はそう言った。

獅子王が煩わしそうに左手の手刀をふるう。

「邪魔だ」

「おっと」

彼女はまたいつの間にか消えていて、達海の目の前に戻っていた。

周囲のノイズもいつの間にか消えている。

「はぁーいっ！お仕事完了です！」

彼女がそれを言い終えると同時に、獅子王の槍の光が霧散していく。

獅子王が再び目を見開いて、槍を見る。

「これは…」

膨大な量の魔力が霧散する。

量があまりにも大きすぎて魔力の流動が私でも感じられる。

「人に…戻りかけている…?」

獅子王のつぶやきにBBはにっこりと笑った。

「だーいせーいかーい!」

BBはいつ取り出したのか、さつき持っていた教鞭を右手に持って指のように左右に振った。

「私、周囲のチャンネルをちよこつといじることがができますのでその応用です」

「…チャンネル?」

「虚数空間から取り出す中でも最も悪性である情報 “人間性” をあなたに上書きさせていただきました」

相変わらずのふざけたテンションで教鞭を回す。

「普通は対象への上書きなんて面倒なんですけど、人の世で、神なんて曖昧な姿をしているなんて格好の餌食ですっ!」

獅子王の威圧感が先ほどより小さくなっている。

魔術に疎い私でもわかる。

あのBBって子、反則すれすれっていうか、反則に片足突っ込んだ行動をしてる。絶  
対に。

「さあ、マスターさん。あとはお願いしますよ」

その言葉に達海は勝ち気で笑った。

「十分すぎますよ！姉さん！」

「ええ！英雄王！」

私の横に立っている英雄王は苦虫を噛み潰したような表情であったが、私の言葉を聞いて左手を少しだけ動かしした。

「……ふん」

獅子王の周りに金色の光が輝くと、光から無数の鎖が出てきた。

「チッ」

獅子王は舌打ちをして、その場から飛びのこうとするが時すでに遅い。

その足首には既に金色の鎖が絡まっている。

「!!」

獅子王の動きが止まったその一瞬で、鎖は獅子王の四肢を雁字搦めに縛った。

「で、でたー、ギルギルマンの反則ズツ友チエーン。相変わらずえげつないですね」

達海の隣のBBはドン引きの表情で言った。

「人間性を付与して力が弱まるときに、なけなしの神性まで縛るとか…もしかして悪魔？」

「それ、君が言う…?」

おそらくその場にいた全員が思ったことを達海が代弁した。

「あんたらねえ、少しは真面目にやりなさいよ!」

私たちの微妙な空気に怒ったように叫んだのはジャンヌ。

彼女は身動きのできない獅子王の上まで跳ぶと、その手に持つ旗を獅子王に思いつき

り突き刺した。

「燃えろっ!!!」

ジャンヌの叫びを引き金に、獅子王の体がどす黒い炎で包まれた。

炎が金属、砂、そして皮膚を焼く匂いがあたりに充満する。

獅子王は体を拘束され、強みの神性も封印されている。

こちらの攻撃への耐性も薄く、とどめは私たちの戦力の中で恒常的に高火力の出せる

ジャンヌだ。

これで終わりだ。

私はそう思った。

おそらく達海もそう思ったんじゃないだろうか。

だが戦いと言うものは思わぬところで問題が発生するのだ。

なぜなら行うのが人だから。

ジャンヌの炎に一人顔をしかめる人物がいた。

「我の宝物おれ ほうもつにそのような炎を近づけるでない」

英雄王は顔をしかめて、左手を振った。

その行為と同時に獅子王を縛っていた鎖が光の粒子となって消えた。

「！」

「は？ ああああ！！」

ジャンヌが信じられないものを見るように英雄王を見る。

当の本人は素知らぬ顔だ。

視線を交わした間に、獅子王は四肢の自由が戻ると体に刺さった旗を引き抜いた。

「あ、ちよ！！」

そしてジャンヌの体ごと旗を吹き飛ばした。

彼女は旗に捕まったままの間抜けな体勢で飛ばされると旗をつかんだまま地面を転がった。

ぼろ雑巾、そう表現されそうな倒れ方だ。

まあ、そのまま済むはずもなく、彼女は土まみれになった顔でこちらを睨むと顔を真つ赤にして大激怒した。

「おい！ その金ピカア！ あんたやる気あんのッ！！」



「王の御前であるぞ。我に意見おれを具申したいというのであれば、まずその汚い身なりを何とかせよ」

英雄王は土まみれのジャンヌを見て鼻で笑った。

「小汚い小娘など、言葉を交わす気にもならん」

「あんたのせいでこうなってるんでしょうがッ!!!」

怒りが大噴火している。

ジャンヌは頭に血が上りすぎて血管がちぎれそうだ。

「はあ」

私と達海のため息が重なる。

またか。

これで何回目だ？

「これで9回目です」

達海も私とまったく同じことを思っていたらしい。

おんなじ表情をする達海に、傍にいたBBが言った。

「ギルギルマンにチームプレイとか、正直、猿にプログラミングさせるより難しいのでは

？」

彼女がにやにやしなから達海にいうと、あいつはまたため息を吐いた。

「それじゃあ、困るんですよ」

あいつはそう言いながらインカムの電源を入れた。

「あ、ドクター、聞こえますか?」

左耳インカムをはめながら会話する。

「ええ。はい。駄目でした。そうです。いったん止めてください」

達海がそう言った数秒後、さつきと同じように宝具を放とうとしていた獅子王の動きが停止する。

それだけではない。

空気も景色も、動いていたものすべてが止まる。

景観にテレビのようなノイズが入る。

『仮想戦場、第六特異点。シミュレーション訓練を中断します』

どこからかアナウンスが流れると立ち眩みのような感覚が訪れ、意識がブラックアウトした。

ビリツと体に電気が流れるような感覚が走り、意識が覚醒する。

……何も見えない。

重い腕を動かし、頭のあたりを手で探る。

前頭部あたりにとっかかりを見つける。

あつた。取っ手だ。

そのまま取っ手をつかむとヘッドセットを引つ張つた。

目に大量の光が入り、視界が真っ白になる。

私は目を細め、手で視界を遮りながら目を明かりに慣らす。

ようやくまともに見えるようになってくるとゆっくりと視界を広げながら正面を見た。

視界に映つたのはさつきまでいた虹のような空間ではなく、真っ白い天井だった。

体を起こそうとするが予想通り異常に重い。

力が入らず起こすのを諦めて一度全身の力を抜いた。

いつも通りだ。

訓練が終了すると、いつも自分の体とは別の人間の体に入ってしまったかのようなだるさが付きまとう。

レイシフトは違って、仮想空間に意識だけを量子変換する影響らしいが詳しいことはよくわからない。

ただ私はこの体のだるささかどうにも苦手だ。

いつも感覚を戻すための調整に時間がかかる。

体育会系の人間としては指先の感覚がずれるのは大変に困るのだ。

達海と違って、これは私の生命線なのだから改善してもらいたい。

だるい頭を振りながら寝ている上体を起こす。

まだ頭がぼんやりする。

「大丈夫？ 姉さん」

左側から声が出た。

私はのっそりとした動きで声のする方を見る。

そこには既に覚醒してコフィンから出ている弟がいた。

ぼんやりとする意識を振り払うため口を開いた。

「……駄目ね、やっぱり。これ苦手だわ。私」

「姉さんはレイシフト適性が高すぎるからね。霊子酔いを起こしてるのかも」

達海は苦笑しながら私に手を差し出した。

私は弟の顔を見て、差し出された手を見て、それから達海の顔をもう一度見る。

「ん？ どうしたの？」

「いや」

首を振って弟の手を取る。

「ほいっと」

弟は軽い掛け声で私の手を引っ張るとそのまま私をコフィンの外側に立たせた。

おぼつかない足取りで立つ。

「ありがとう」

「その顔じゃあね。一人で立たせる方が心配だよ」

私の礼に弟は苦笑しながらそんなことを言ってくる。

なんと失礼な奴だ。

そんなこと心配されずとも立つぐらいできるわ。

赤子じゃあるまいし。

まったく。

私は歩こうと一歩踏み出した。

「あっ」

膝に力が入らず、足がカクンと折れて体勢が崩れる。

真っ白い床が視界に広がっていく。

床と私の顔がこんなにちはする1cm前ぐらいで私の落下が止まった。

「あれ?」

「ほら。言わんこつちやない」

首だけ動かし視界を上げるとそこには達海の呆れ顔。

あいつが私の首元をつかんで、転倒を止めていた。

まさか歩くこともできないとは。

今回の酔いは思つてゐる以上に重いらしい。

「もう少し休んでから行こう」

達海は制服の上着を脱いで床に敷いた。

そして私をそこに座らせた。

こいつ、いつの間にかこんな紳士ムーブを覚えたのだ。

驚きだ。

私はそんなくだらないことを考えながら弟に謝つた。

「悪いわね。2, 3分もすれば治ると思うから」

そんな私の謝罪にあいつは笑つて言った。

「そんなに急いでるわけでもないし。こんなときぐらいは休んでもいいでしょ」

達海もまた地べたに座り込んで、ふうつと息を吐いた。

そして達海は天井を数秒間見上げていた。

天井をどこか遠い目で見ている弟をまじまじと見る。

そう言えば、こうやって落ち着いて弟と対峙するのは久しぶりな気がする。

最近は怒涛の目まぐるしさで冷蔵庫のプリンも食べられなかったし。マスターもなんだかんだとやることが多い

よく弟を見るとその体の大きさに驚く。

細身だが筋肉質な体に、要所所で角ばった骨。

いつの間にか越された身長。

こいつも段々と男として成長してるんだなーと謎の感慨にふける。

「いやー、ダメだったね」

弟は天井を見上げながら、口を開いた。

「ダメ?……ああ。さっきの訓練のこと?」

「うん。それ」

見上げていた視線を戻すとあいつは苦笑しながらこっちを見た。

「やっぱり英雄王がなー」

私はさっきのギルガメッシュの行動を思い出す。

嫌々ながらの敵の拘束。

私的な理由で敵拘束の解除。

敵そっちのけで味方を煽る。

彼らしくない行動だ。

いや、まあ彼らしいと言えるような部分がないわけではない。

たしかに彼は王として確固たる矜持を持って動いているし、一般的には理解しがたい価値観を持ち合わせてもいる。

だが、戦況が読めないような馬鹿ではない。

むしろ為政者として生きたことがある分、そう言った視点には並みはずれたものがある。

あそこまでセオリーを度外視するような行為は今までほとんどなかった。

今まではある程度、私のお願ひも聞いていてくれたんだけど。

ここまで非協力的となると…

「僕のが気に食わないんだらうね」

はっはっはっと笑い流す達海。

私もまたそれに同意した。

「まあ、そうなんでしょうね」

「ひびっ！」

私の同意に弟は傷ついたような表情をした。

「普通こういう時つてさ、そんなことないよ、とかいつて励ますところじゃない？」



「姉弟でお世辞なんて言つてどうするのよ。それにあんた、なんで嫌われるかわかつてるんでしょ」

むしろ達海は私よりも嫌われる具体的な理由が分かっているように感じる。

私は何となくギルガメッシュの態度から推測しているんだけど、こいつには何か確信に足るものがあるのだろう。

「わかつてるなら直しなさいよ」

「そりゃね。できたらそうしたいところなんだけど…」

苦笑いする弟。

やはり直したくても直せないことなのか。

今の達海で直したくても直せないこと。

「理由はやっぱり…その召喚術式？」

幻霊召喚。

サーヴァントを上手く召喚できなかつた達海が第一特異点の戦いの後、独自で研究して作り上げた儀式。

私には詳しく分からないが座というものにいない存在を複合して召喚するとか言っていた。

何にせよ、こんなものを一人で作り上げてしまうとは我が弟ながら感嘆してしまう。

私の魔力量が少ないせいもあるが、宝具などの例外を除いて基本出力が最も高いのはこいつの召喚した幻霊なのだから恐れ入る。

しかしその幻霊を使役するときにはギルガメッシュの機嫌が悪くなることもまた事実だった。

だとするとその術式を使うのをやめてもらわなきゃならないが、それを弟に言うのは酷と言うものだ。

戦える手段があるのに、しかもそれを一から作り上げたのに、それを使わずに後ろで見ていろ、なんてことは私の立場からは口が裂けても言えない。

それがたとえ達海に危険を近づけることになっても。

人は外傷だけで死ぬのではない。

無力感、孤独感、疎外感。

そう言ったものでも人は容易に腐って死んでいく。

弟を敵から守ることはできるが、心を守ることは難しい。

「うーん、どうだろう…」

達海は何とも言えない微妙な表情を作る。

「それもあるけど、どっちかって言うところ…」

そしてその表情のまま、うーんとうなっている。

「なによ。はつきりしないわね」

曖昧な返事に私がそう答えたがあいつは唸りっぱなしだった。

「僕も上手く表現できないんだ。なんか引つかかることがあるだけで」

弟は粘土でもこねているのかと言うぐらい首をぐねぐね傾げながら考えていたが、結局はつきりした答えは出ないようだった。

しばらくすると答えを出すのを諦め、首をかしげるのをやめた。

今思えばここでちゃんと考えておけば、あんなことにはならなかったのかもしれない。

まあ、それも今となってはただの戯言になってしまいうけれど。

「まあ、なんにせよ。彼には協力してもらわないと」

「そうよね…」

私も弟の言葉にうなづく。

「なんたって次の特異点は…」

「バビロニア、ですものね」

このとき私たちは第6特異点までの6つの異変を修復し、とうとう最後の特異点に向

かおうとしていた。

『二人とももう起きてるかい?』

部屋の上からダ・ヴィンチちゃんの声が響いた。

ミーティングルームから放送しているのだろう。

「はい。もう大丈夫です」

達海は足をだらしなく広げた状態から足を上げ、振り下ろす反動で立つと、放送に向かつて少し大きな声で言った。

この部屋にはマイクが入っているからそれぐらいの声でもあつちに届くだろう。

「姉さん、もう立てる?」

私は両足に力を入れてすつと立った。

「ええ。もう大丈夫」

お尻に敷いていた達海の上着をはたいて返した。

「これ、ありがとね」

達海は自然体の笑顔で受け取った。

「どういたしまして」

そんな会話をしていたら部屋に変な声が流れてきた。

『あんの金ピカ出しなさいよッ!!! 今日と言う今日こそは串刺しにした後、炭になるまで燃やしてやるわ!!!』

『ジャンヌさん!! 落ち着いてください!!』

『わーい。下らなすぎる修羅場にさしものBBちゃんもあくびを禁じえませーん』

バゴオオオオオン!

謎の破壊音まで聞こえてきた。

『そう言うわけだ。できるだけ早く戻ってきてくれると嬉しい』

聞こえてきた彼女の声は若干震えていた。

ダ・ヴィンチちゃん、何回も修理やらされて大分怒ってるな……。

「行こうか」

「ええ。そうね」

## 部下

第一会議室へつながる廊下を歩く。

「いやー。すごかったね」

隣を歩いていた達海は苦笑いで言った。

「あれは流石にやりすぎよ…」

私はため息を吐いた。

「まさかミーティングルームが廊下とつながっちゃうとはね」

その後、戻ったミーティングルームで待っていたのは大激怒しているジャンヌとそれ

を煽るBB。

そして帰ってしまったのか既にもぬけの殻となった英雄王の席だった。

ジャンヌは宝具振り回すし、BBはさらに火をつけるような言い回しするし、ギルガメッシュはそもそももないしで、すーんごい大変だった。

怒ったジャンヌが振り回していた旗が壁にぶつかり、そのまま炎が燃え移った。そしてミーティングルームの壁が炭と化した。

ダ・ヴィンチちゃん、怒りで体が震えてたな…

「マッシュがいなかったら確実に炭になっていた自信があるよ」

頭の後ろに手を組んで気楽そうに笑う弟。

ジャンヌが暴れてる間、私と達海とドクターは彼女の後ろに隠れていた。

そうしないと割とマジで燃えていた気がする。服とか。

あんたが召喚したんだからそこはあんたがしつかりしなさいよ、とお小言を言いたくなつてしまつてもいいだろう。

もう一度ため息を吐く。

「はあ……… あ、マシユと言えばあんた、あんな約束して大丈夫なの？」

「約束?……ああ、さっきのあれ？」

「ええ」

暴れるジャンヌを鎮めたのは「何でも言うこと聞くから」という達海の言葉だった。

その言葉を聞いた瞬間、ジャンヌは暴れるのをやめ、何度もその言葉を達海に確かめた後、



「じゃあ、1日私に付き合いなさい！」

と嬉しそうにやけながらミーティングルームから出ていった。笑みを抑えようとしていたのはわかったけど全く抑えられていなかった。

あの時の彼女の笑顔を思い出したのか達海は微笑んだ。

「この前ファッションがどうのって言ってたからそれじゃない？」

「ファッション？」

「うん。現代の服装に興味があるんだってさ。ファッション雑誌にもいっぱい付箋張ってあったし」

あ、そう言えば非番のとき私服でうろろしていたら、ジャンヌが私のことをちらちら見てたな。

あれはそう言うことだったのか。

「ジャンヌってなんだかんだ言っているんなことに積極的だね」

達海はまるで娘を見る父のような、父性を感じさせる笑みで言った。

「彼女のそういうところ、すっごい好きだな」

「でも服って。どうするのよ？作るの？」

繊維は貴重な資源だ。

趣味の範囲で使っている量はあまりなかった気がする。

達海は私の質問を聞くと思案気に宙を見る。

「うーん、シミュレーションをちよつといじれば上手くできると思うんだけど」

「シミュレーションって、訓練の？」

「うん。彼女、都会でブラブラ歩きながらシヨツピングしたいみたいだから。上手く調整すればまあ、新宿とか渋谷の再現くらいでできると思うよ」

え、なにそれ。

私も気になる……

「つて、私が言いたいことはそうじゃないわよ」

そう。

私が言いたいのは約束の内容ではなく、約束そのものだ。

「マシユ、すつごい拗ねてたわよ」

「……あ」

達海はポカンとした後、冷や汗をだらだら流し始めた。

「あ、じゃないわよ」

駄目だこいつ、まるで治つちやいねえ。

「私があそこまでレクチャーして上げたのにことごとく台無しにするわよね」

呆れ顔を向けると達海は焦りながらも反論してきた。

「いや！今回ののは不可抗力でしょ！！」

「ふうかあこうりよくう？」

「だって僕がああしなかったらミーティングルームが全焼してたかもしれないじゃん  
！！」

「乙女心にだってもクソもあるもんですか。そんなことしてたらそのうち愛想つかされ

「ちやうわよ」

「うわああと叫びながら頭を抱えてしやがみ込む我が弟。その無様な姿を見ながら、ホホホと高笑いをする。」

「お勉強ばかりしていても女心は永遠にわかりません事よ。」

「魔術のお勉強ばかりしてないで、たまには人の心を勉強しなさいな」

「姉からの言葉、感謝しながら受け取るがよいぞ。」

「それは姉さんに言われたくない」

「頭を抱えていた弟は私のありがたい言葉を聞くとジト目を向けてきた。」

「な、なんぞ?」

「ドクター言つてたよ。『立花ちゃんは頑張り屋さんだね。この前も、僕の部屋に教本片

手に魔術を習いに来たよ』

「っ!?」

『深夜なのにすごいよね。僕も見習わないとなあ』って」

頬がかーつと赤くなっているのが自分でもわかる。

「そもそも対象として見られていないみたいですが、そこのところどうなんですかね？  
姉上殿？」

こ、こいつめ……。

「う、うっさいわね！城攻めは時間をかけて行うものなのよ！」

「まったく進歩してないじゃん」

「こっから怒涛の展開が始まるの！」

「ええ。ほんとにござるか？」

「こ、このつ…。」

形勢が逆転したからって調子にのりおって。

「べ、べつに私はあんたと違って失態は犯してないのでまだセーフですう」

「いやいや。行動しないのは失敗以前の問題だと思いまーす」

「……」

「……」

二人して落ち込む。

何やってんだ、私たち。

団栗の背比べ、颯ごっこ、五十歩百歩。  
醜い……

「不毛ね……」

「……うん。やめよう」

暗い表情で歩きだす。

「……はあ」

ため息が重なる。



ああ、気分が重い。

だがため息がつきたくなってしまいうのも仕方がない。

いや、我々の思いがどうのこうのではなく。

単純にこれからいや々な仕事が続っているのだ。

「…こういう気分になるのも全部会議が悪い」

「まさしく」

二人でどんよりしながら廊下を歩く。

「なんでいつもああなるの」

「僕としては何とも言えないけど…」

もう帰りたい。

会議室に着いてすらいないけど帰りたい。

「毎回、毎回、よくもまあ当人たちを置いてきぼりであそこまで白熱できるわよね。あの熱量だけは買うけど」

「あの派閥みたいのはやめて欲しいなあ。割と疲れる」

「みたいっていうか、完全に二分してるわよねえ」

「最近は特にね」

マジで帰りたい。

全日本帰りたい協会。

まあ、帰る場所もここカルデアなんだけど。

「……はあ」

ああ、神よ。

今日の会議は延期となるように取り計らってはくれないものか。

「あつ！いたつす！達海さーん！」

Oh…my god…

神よ、頼んだ瞬間これですか。

迷える子羊を導いてはくれないのですか。

『あんた、そもそも迷ってないでしょ』

うるせー！

こちとら常に世界の狭間をさまよつとるわ！

もう絶対頼まないからな！

「チンさん」

通路の向こう側から聞こえた声に達海は返事を返した。

向こう側からカルデアスタッフの制服を着た小柄な少女が軽快な走りでこちらに近づいてくる。

「何してたんすか、もうっ！遅いつすよー！」

黒髪の長いツインテールを揺らしながら達海一直線に走ってくる。

しかしその視線が私をとらえるとたちまち苦虫を噛み潰したような表情に変わる。

「げ。姉も一緒つすか」

「げ」、とはなんだ。 「げ」とは。

相変わらず失礼な小娘（年齢不詳）だ。

少女は達海の前まで走つてくると片腕をつかんで自分の方に寄せ、私から離れた。

「ダメつすよ。達海さん。こんな頭の固いボンクラどものボス猿なんかとつるんじゃ」

「ボス猿つて……」

少女のあんまりな言い様に達海が苦笑する。

こいつ、等々私を猿扱いしやがった。

許せん。

「つるむも何も、私たち血のつながった兄弟なんですけど」

イラつときたのでとりあえず当然のことを言つてやる。

私を猿って言うなら達海も猿だぞ、おら。

「スマートでインテリジェンスな達海さんと、パワーだけの脳筋ゴリラじゃ土台が違うっす」

「脳筋ゴリラ…」

このアマ…

というか達海、あんたも何笑ってんのよ。

「そっすよ！達海さん！達海さんがこっちにくる前書いていた論文読んだっすよ！『迦行性魔術の定義と範囲、その応用性について』！」

チンは達海の右手をガシツと両手で掴み、目をキラキラさせながら言った。

「は、はい。ありがとうございます」

「素晴らしかったっす！時間の魔術を魔術回路そのものに応用しようなんて誰も考えないっすよ！回路そのものを時限の潮流と考えると、迦行させる。実質的な完全非侵食物質の生成なんて、もう感動っす！」

早口でまくしたてるチン。

何言ってるの？この子。

「それに制服の礼装も達海さんが強化したんすよね！身体強化に加速流動性を加えて強度を高めたって！」

「よく知ってますね…。」

「それに何と言っても『幻霊召喚』！術式見せてもらつたつすけど、どうしてああなるかまるで分かんないつす！あんな高度な召喚術式を短期間で作っちゃうなんて、どう考えても天才つす！すごいつす！」

「いや、あれはそんな高尚なものじゃ…。」

ベタ褒めやん。

あまりの褒め具合に当の本人である達海も軽く引いている。

「時計塔の魔術師連中も理解し切れてないんすよ！やつばあんな埃っぽい場所で仲間内だけでワイワイやってる奴らとは違うつすね！達海さんは！」

「僕も時計塔に短期留学したことあるんですが…。」

おい、待てい。

「私は…。」

「は…。」

チンが心底訳の分からない、と言う顔をする。

いやいや。

「私、英<sup>みんな</sup>霊と契約、礼装の改善案、学園に属していない、ねえ？私は？」

これでもそこそ役<sup>そ</sup>に立ってるんですよ？

褒めてくれてもよくない？

とうか褒めて。

私もベタ褒めされたい。

しかしチンは私の言葉を聞くと鼻で笑いやがった。

「何言ってるんすか。私の話聞いてなかったんすか？」

やれやれと首を振る。

「達海さんはどんなにピンチでも頭を使ってスマートに切り抜けていくつすよ。『強い敵？とりあえずみんなんで殴ってから考えよう』とか言ってるゴリラと比べること自体がおこがましいつす」

殴ってみないと敵がどの程度か分からないじゃない。

「達海さんは私たちノンキャリアの星なんです！お堅いキャリア組とは違うんすよ」

「私だって家柄がいいわけじゃないでしょ。達海と同じ家だし。なんなら魔術なんてここに来るまで存在すら知らなかったわよ」



どちらかと言うと達海の方があいつらに近いでしょ。よく知らないけど本格的に魔術学んでみたいだし。

しかし少女は私の言葉を一笑に付すと肩をすくめて首を横に振った。

「あのエリート（笑）組のリーダーってだけでももう無理っす。生理的嫌悪っす。ゴリラっす」

「ゴリラは関係ないでしょ！」

「ゴリラがキレたっす！シルバーバックっす！」

「誰がボス猿よ!!」

「そもそもリーダーなんかやってるつもりないんですけど！」

「まあまあ」

合つてすぐ喧嘩を売つてきたこいつと私の応酬を見て達海が仲裁に入った。

あんたからも何とか言つてやりなさいよ！

私、何もしてないのにすつごい罵倒されてるんだけど！

私は達海に無言の圧を送る。

「チンさん、何か用があつて来たんじゃないんですか？」

あいつは私の視線を軽やかにスルーして、少女にやってきたわけを聞いた。

おい。

それを聞くと少女はハツとした。

なんやこいつ。

来た用件忘れてるなんて、私が猿ならこいつは鳥ね。

「そうっす。そうでした」

そうやって腕の時計をちらつと見た

「戦略会議のことなんすけど」

そうだろうね。

そのために私たちも会議室に向かってたわけであるからして。

「会議の時間には早いんすけど、20分前ぐらいに二人以外は会議室にそろったんすよ」

まあ、私たちはバイタルチェックがあつたし。

それに、それも踏まえて余裕を持たせたスケジュールだからまだ余裕はある。

ただその余裕がいらぬ問題を引き起こすことも間々ある。

「そしたらまあ、違う部門の人間が一堂に会してるので色々と情報交換とかするじゃないっすか」

あ、嫌な予感がする。

達海もそうらしい。

口がひくついている。

「それで最初は世間話をする程度だったんですけど、それがだんだん議論みたいになってきて、今じゃ喧喧囂囂の有様っす」

もう帰っていい？

「で結局いつもの様相を呈してきて議論が平行線っていうか、とにかく当人がいないと進まねえってなったんで私が呼びに出されたんす」

そこまで言うとな彼女は両腕でつかんでいた達海の右手を引っ張って、その場で駆け足を2度した。

「というここと達海さん！会議室までダッシュですよ！」

「えつと了解です。それと走れるから腕を…」

達海が言い終える前に少女はもう一度右手を引き寄せると達海にウィンクした。

「それから、チンじゃなくてイーハンつす。名前で呼んでくださいって何度も言うてるっす！」

「あははは…」

「はいっ！イーハンつす！呼んでください！」

少女は目を輝かせて顔を達海に近づける。

近くない？

近いね。

処すよ。

達海は引き気味に苦笑している。

「いや、ほら、名前呼びつて凶々しくないですか…？」

「大丈夫つす！凶々しくないつす！達海さんには呼んで欲しいつす！」

押しが強い。

よろしい。

そんなに呼んで欲しいなら呼んで差し上げましょう。

「イーハン」

私が甘い声で呼んだあげるとバっと振り返って、滅茶苦茶睨みつけてきた。

「あんたに呼んで欲しいとは一言も言っていないっす」

さえざるな、小娘よ。

アホウドリ。

君は大切なことを忘れている。

「その当人つてのには私も含まれているんだけど、なあんでさつきから私が蚊帳の外なのかなあ？」

チンはそれを聞くとふんつと顔を背けた。

「私は達海さん呼びに来たので。どうせゴリラはあの頭でつかちどもが呼びに来るっす。だからついていくるなっす」

こいつ…まだ言うか。

こめかみがびくびく震える。

よろしい。

そんなにゴリラゴリラ連呼するなら、偉大なる森の賢者の力を見せてやるわ。

「ゴリラは怒ると狂暴なのよ」

「は？何言ってるんですか？頭大丈夫ですか？」

「つまり今からお前をボコボコにする」

私は制服の礼装を用いて自身に身体強化を施した。  
体に力がみなぎる。

よし、潰す。

「ぐ、ゴリラが怒った！達海さん！逃げるっす！」



身体強化を見た瞬間、チンが目を見開いて走り出した。

「逃がすか！おとなしく私の拳の下敷きになりなさい！」

今までの暴言、後悔させてやるわ！

待ちなさい！

後ろで達海がため息を吐く音がした。

「そう言うことするからゴリラって言われるんだよ、姉さん……」

既に扉の外側からでも聞こえてくる怒声。  
始まってすらいない会議で飛び交う怒号とはこれ如何に。

私はチョークスリーパーでチンを締め上げつつ、げんなりとした気分では会議室の扉の  
前に立つ。

「ギブツ、ギブつす！」

「！」

「！」

「！」

「あー。入りたくない」

やだなー。

もう勝手に終わってくんないかな、これ。

「大体さ、勝手に始めたなら始めた人たちで収集をつけるべきじゃない？」

私は後ろから歩いてきた達海にそう問いかけた。

「そんなこと言っちゃだめだよ……というか姉さん、離してあげなよ」

「え？」

「チンさん、白目向いてるよ」

「あら」

さつきまであれだけ威勢よく私の腕をタップしていたのに。  
貧弱者め。

私は泡を吹き始めたチンを開放する。

チンは私の足元にバタンと倒れ、3秒ほど痙攣していたがすぐに目を覚ました。

「く、来るなー！ゴリラは森へかえ……あれ？」

叫びながら上体を起こしたチンはハツとして辺りを見回すと軽く息を吐く。

「なんだ。夢っすか」

相変わらず周りが見えていないのか勝手に独り言を始めた。

「ふう。やれやれ。ゴリラに首を締め上げられる夢とか、最悪っす。夢の中まで脳筋とかもはやプロテインの精霊っす」

「おはよう」

猿の次はサプリメントかよ。

「うわあむぐぐ!!」

悲鳴を上げかけたチンの口をふさぐ。

「はい、静かに。中に聞こえちゃうでしょ」

私が耳元で言つてあげるとコクコクと首を縦に振つた。

よろしい。

ゆつくりと口から手を離す。

チンは手が離れるとすぐに達海の後ろに隠れた。

何もしねえよ。

「な、なにやってるんすか？二人とも」

弟の背中に隠れながら、扉の前に立つ私たちに聞いてくる。

「入らないんすか？」

その言葉に私たちは顔を見合わせる。

「……」

何とも言えない空気にチンが首をかしげる。

「どうしたんすか？」

彼女はただ純粋になぜ入らないかを聞いてくる。

「時間稼ぎです」

「はい？時間稼ぎ、ですか？」

「いえ、僕も姉さんもできればもう少し議論の熱が冷めてから入りたいなあ、というささやかな願望で……」

こんな中に入ったら、絶対また面倒なことになるし。

それに一応サポートしてもらってるとは言え、私苦手なんだよね、あの人。教授がいつも引つ提げてるあの笑顔。

目が笑ってないんだもん。

本当は何考えてるかまるで分かん。

「！」

「！」

「！」

「ああ、もう！全然話が進まないじゃない！あの二人は何やってるのっ！！」

部屋の中からそんな声が聞こえてきた後、こちらにどしどし歩いてくる声が聞こえる。

終わった。

嵐がやってくる。

ああ、安寧なる日常が。

達海もまたあきらめの表情で扉を見ている。

次の瞬間、大きな両扉が開いた。



「あの二人はどこにいるの……よ……」

扉から出てきたのはカルデアの所長であつた。

うわあ。

よりにもよつて一番面倒くさい人出てきたあ。

扉の前で私たち二人が立っているのを見て、所長は目を丸くした。

しかし真ん丸になった目をすぐに引きつらせたあと、目じりを吊り上げて鬼のような表情をした。

「遅いッ!!何やってたの!」

そして怒鳴り声で叱りだした。

予想通りめんどくせえ。

とうるか遅いつて。

会議が始まる時間までまだ20分あるんですが……

しかしここでそのことを言うのは愚の骨頂。

言った後に「それくらい見越して早めに来なさいよ！」と逆ギレされるに決まってる。

ならどうするか。

それは弟<sup>たて</sup>を使う。

達海！君に決めた！

私は弟に目線で合図する。

目が合うと弟はジト目を向けてきた。

が、しばらくするとため息を吐いて口を開いた。

「申し訳ありません、所長。会議に間に合わず、手間をおかけしました」

「ツ……」

達海の口上に面食らった顔をする所長。

「ですがやはり流石です、所長。ここまで会議を能動的に進めることができるのはやはり所長の力あつてのものです」

大紛糾の会議を「能動的」とは。

物は言いようである。

「そんな会議を我々のせいでは止めるわけには参りません。所長御自身のお時間を無駄にしないためにも、ぜひ我々もこの会議の末席を汚させて頂きたく存じます」

言い終えると達海は一礼した。

よくもまあ、こんな口上がペラペラと出てくるもんである。

私だったら「まだ20分もありますよ」を言つてからの所長大激怒タイム突入だといふのに。

弟が詐欺師にならないか、お姉ちゃん心配だわ。

頭を下げた達海を見て、何を思ったのかは分からない。

所長は無言で何秒か弟の姿を見ていたが、すつと回れ右した。

「…次はありません。早く席に着きなさい」

そう言うと彼女は部屋へ入っていく。

流石、達海！

この手の扱いはこなれてるわ。

達海の後ろにいたチンはそーつと顔を出しながら所長の文句を言い始めた。

「いくらアニメスフィア家の娘だからって限度つてもんはねーんですかね。何であんな偉そうなんすか」

「所長ですからね。彼女は間違いなく“偉い”んですよ」

達海の返しにチンは頬を膨らみます。

「それはそうっすけど…」

その表情に達海は苦笑する。

「まあ、でも多分、彼女は“真面目”なんですよ。それだけなんじゃないでしょうか？」

真面目ねえ。

だとしたら“ド”が付くほどの大まじめだ。

達海の言い方に何か感じたのか、チンはじーつと達海の顔を見ていた。

「な、なんですか？ チンさん？」

「なんか妙に含みのある言い方っすね…」

顎に手を当てて言う。

「さては所長となんかあつたんすね!!」

相変わらず元気だ。

「何があつたんすか！ 言うっす！ あのオルガマリー所長を垂らし込めるだけの何かがあつたんすね!!」

「そんなものありませんよ……」

「それからイーハンっす！ 何度も言ってるっす！」

「あははは……」

ガンガン押していくチンと引く達海。

「あんた達、遊んでると次こそ所長にどやされるわよ」

多分次は割と本気で。

その言葉を聞くとチンは焦ったように達海の腕を引いた。

「あつ、ヤバいっす！行きましょ！達海さん！」

「腕引つ張らないで……」

そのまま会議室に入っていった。

「あく、帰りたい」

私もその後を追った。

## 予定調和

扉を抜けるとそこは大きなコの字型のテーブルがあつた。

そのテーブルの周りに20人ぐらいの人が席に座っている。

みんな各部門の部門長か、顧問だ。

彼らは私たちが入ると一斉にこちらを見た。

私を見て顔色を明るくする人。

達海を見て安堵する人。

私たちが入った後のみんなの表情の変化は大体この2種類だ。

比率としては前者が7割、後者が3割ぐらい。

ちなみに前者は達海を見て舌打ちするし、後者は私を見て眉をしかめる。

もうこれだけで全日本帰りたい案件だ。

「3人とも早く座りなさい」

コの字の凸部、上座の議長席に座っていた所長は入ってきた私たちを睨みながら言っ



た。

へいへーい。

「達海さんはこつちつす」

「了解です」

達海は入つてすぐのコの字の端部分、下座のところにチンと並んで座つた。

でははく私もそちらに：

「リツカ君、君はここだ」

私も達海たちの隣に座ろうとしたが、所長の右隣に座っていたレフ教授が右手のひらで自分の右前の席を示した。

私はその言葉に眉をしかめる。

うへえ。

またあの席かあ。

なあって、一戦闘員にすぎない私があんな上座に座らなきやいかんのか。今日こそはなんとかならんとですか。

私は視線で助けを求め、所長の左側に座っているドクターを見た。

ドクターは私の視線に気づくと苦笑して首を横に振つた。

「諦めておとなしく座りなよ」

席に座った達海が小声で言った。

「ええ」

「じゃないともっと面倒なことになりかねない」

ですよねー。

「…行つてくるわ」

私は達海にそう言ったあと、陰鬱な表情で席まで歩き、そこに座った。

それを確認するとレフ教授はニコリと笑った。

背筋に鳥肌が立つ。

怖っ。

この人、笑顔が一番怖い。

「出席予定者、全員の参加を確認したので第7特異点戦略会議を始めます」

所長が周りを見回した後、そう宣言した。

「ではまず、全員に今一度、今までのグラント・オーダーの行程の情報共有を図りましょう。医療部門、部門長ロマニ・アーキマン」

「はい。所長」

所長に名前を呼ばれるとドクターは書類片手に立ち上がった。

いつものふんわりとした雰囲気はなく、表情もどことなく真面目だ。

やるときはちゃんとやる。

大人としては当たり前の行動なんだろうけど、ドクターのこういうギャップはとても好きだ。

かつこいい。

「我々、人理継続保障機関フィニス・カルデアは周知の通り、この惑星の人類史を保障するという目的の元、前所長マリスビリー・アナムスフィア氏によって結成されました」  
マリスビリー…。

現所長のお父さんだったらしい。

私が来た時には既に現所長が所長の座についていたので、私は会ったことがない。

「我々は当初の予定通りファーストミッションを実行。レイシフトを行ったが霊子演算装置・トリスメギストスに謎のバグが発生し、マスター47名の霊子変換に失敗。チャンバー形成後、因果の狂いの補正計算ができず、マスター47名生存証明が不可能となります。マスター47名の保護のため、死が世界に観測される前にチャンバーごと凍結。そのためマスターはファーストミッションから外されていた藤丸立花のみが健在」  
私はあのととき達海に言われて礼装の調整をしていた。

私の着た礼装がちょうど壊れていたことを弟に指摘され、礼装なしでのレイシフトは危険だからと待機に回っていた。

本当に運がよかった。

そこまで言い終わるとドクターは一枚目の書類をめくる。

「その後、特異点Fを発見。これを修復すべく藤丸立花を仮のマスターとし、デミサーヴァント、マッシュ・キリエライトに霊基外骨格を装備しレイシフト。現地で他のサーヴァントの協力を得つつ特異点を修復」

冬木…

「ソロモンを名乗る敵が人理の焼却を宣言。そして7つの特異点が露見。この状況から我々の主目的であるグラウンド・オーダーを所長が発令」

所長は腕を組んでドクターの報告を聞いている。

「第1特異点を同戦力で修復。戦力不足が懸念され、第2特異点において戦力不足が顕著となりました。しかし藤丸達海による戦力の底上げ、及びマッシュ・キリエライトの英霊融合成功により無事修復」

「以後、紆余曲折はあるものの我々はマスターである藤丸立花を主軸に第6特異点までを修復。次点である第7特異点を目前として今に至ります」

ドクターは席に座った。

「結構」

ドクターの報告に所長は一言そう言うと言席に着く全員の顔を見た。

「これまでのことに関して何か議題にあげるべきことはありませんか？」

所長は達海の隣の少女がプルプル震えているのを見て一瞬だけ止まったが、それを無視して言葉が続けた。

「特にないようですね」

「では本題に入りましょう。第7特異点の修復について、航路計略部門、部門長ステイブン・ユリフィス」

「はい」

そう呼ばれて立ったのは中肉中背、金髪の髪をツンツンさせた碧眼のおっさんだ。

彼は航路計略部門のトップだ。

航路計略部門と言うのはカルデアが特異点を修復していく際に、どの特異点を回っていくのが効率がよく、戦略的に有効か、特異点はどの時代で、どのような理が敷かれているのか、等々の調査及び、カルデアスの観測を行う部門：らしい。

マニュアルにそう書いてあっただけで、私はいつも調査、観測した後の結果しか聞いていないので具体的な仕事内容は知らない。

彼はその中でも優秀と聞く。

「ここに来る前に時計塔の降霊科？と言うところにいるらしい」

「第7特異点については事前の調査で、地点はバビロニアにありその時代は紀元前にさ

かのぼることが分かっています。紀元前のためレイシフトの危険性がこれまでの転移より高く、またその世界では神性がまかり通っている可能性もみるとみまです」

ある地点より昔はレイシフトがとても難しくなるってドクターが言っていたのは聞いたことがある。

だけでももう一つ聞きなれない言葉が聞こえた。

「神性がまかり通っている？」

どういう意味だろうか？

私がつぶやくのを近くのレフ教授が耳ざとく聞いていた。

「西暦以前の世界は神代の真っ只中であるということだ」

「？」

「要約すると神と言う存在が当たり前のように具現化している。これまでの特異点でも神性を持つものがサーヴァントとして格落ちして存在していたことはあったが」

エウリュアレとかステンノとかだよね？

「第7特異点はあれとはレベルが違う。神が人と同じように当たり前の面で群雄割拠している可能性がある」

「神さまがいるっ？」

「そのとおりだ。いても何もおかしくはない」

神さまがいる……

全く想像がつかない。

アマテラスオオカミがいなくなると世界が暗黒に包まれるのだろうか。

その世界では。

「これまでの特異点とは段違いに危険です」

部門長は書類から目を上げる。

「我々人間が知らないうちに地に歩く虫を潰すように、神々がその気なしにとった行動が人間を殺す世界」

「すなわち、いるだけ死ぬ可能性が高い世界です」

なんだそれ。

「いくら何でも無茶苦茶だ」

あまりにも理不尽な世界について口からこぼれた。

部門長は私のつぶやきを肯定する。

「まさしく無茶苦茶な世界です」

彼はそのあと所長を見た。

「ゆえに今回は今までのように現地で協力者を探すということに重きを置かないことを

提案いたします」

重きを置かない？

所長も疑問に思ったのか、具体例を求めた

「というと？」

「これまでカルデアから多くのサーヴァントを連れていかない理由は、彼らにリソースをそこまで割けないというのもありましたが」

「特異点では過去の時代であつても変調をきたしていることが多く、特異点にいる人間や英霊に状況を聞く方が極めて効率が良いと理由もありました」

確かにその土地に縁の深いサーヴァントを連れていっても状況が一変しているというのは今まで何度もあつた。

その度、現地の人やはぐれのサーヴァントに協力してもらいながら情報収集をしてきた。

「そのためレイシフト後、協力者を探すというスタンスをとってきましたが、第7特異点では悠長にそんなことをしている暇はありません」

「転移して1秒後、たまたま神が通りかかつて死にました。などということが十分にあり得ます」

嘘でしょ!!



そんなゲーム感覚で死んじやうの!?

「したがって今回のレイシフトでは既に現地経験のあるサーヴァント、ギルガメッシュを同行させることが必要だと具申いたします」

「ふむ。なるほど。水先案内人を先に雇っておくということか」

レフ教授はその提案に面白そうに笑った。

いや、相変わらず糸目でいつも笑ってるようには見えるけど。

「必要性はわかったわ。それでサーヴァントを連れていくデメリットは？紀元前に転移するなら今までと同様にやってもかなりの時間とエネルギーが必要だと思うけど」

所長はすぐに現実的な数字の話を出した。

「我々の試算ではこれまでの3倍のリソースが必要と出ております」

「3倍……そんな余裕あるかしら」

彼女は顎に手を当てて少しの間考えたがすぐに顔を上げ、航路計略部門長の隣にいる初老の男性に質問をした。

「総務部門、部門長クリム・アトロホルム。削減可能なリソースは現実的にどれくらい？」

クリム・アトロホルム。

白髪オールバックで顔にしわの多い老人。

いつもしかめっ面

だが話してみると案外ユーモアが分かる。

彼は総務部門のトップだ。

総務部門はカルデアの事務処理を一挙に担っている部門である。

人事、経理、機材管理、清掃、e t c . . .

私たちが快適に生活できるのは彼らのおかげなので頭が上がらない。

聞く限りだとただの事務だが、全部門の書類を一括管理しているので幅広い魔術知識

がないと仕事ができない、というのは達海談。

そんな部門のトップなのだから彼も相当に頭が切れるのだろう。

「そうですね。できて2倍前後ですな」

彼は右手で顎をさすりながら答えた。

「2倍……」

その答えに所長は難しい表情をする。

「もう少し何とかならないか」

航路計略部門長は苦々しい表情で聞く。

「無茶言わんでくれ。ただでさえ食事、空調、照明、医療器具に必要な電力を最小限まで

削つとるんだから。機材管理課は炉心のオーバーワークだと悲鳴を上げておるわ」

そのように答えてから、彼は少しにやけた。

「まあ、しかし、無理をすればできん事もないですがね」

「無理？」

所長が聞き返す。

「今もつとも使われているエネルギーをレイシフトに回してしまえば、できなくはないですとも」

最も使われている？

彼は意地の悪い笑みを浮かべつつ続ける。

「マスター47名の凍結か、そちらのマスターさんが行っている英霊との契約。どちらかを解除する許可をいただければ現状の5倍はまわせるんですがねえ」

こういうことを平気で言ってしまうあたりこの老人も魔術師なのだろう。

この偏屈じじいめ。

あとで毛細血管にガンドを打ち込んでやる。

脳梗塞の恐ろしさを知れ。

所長はその提案を即座に否定した。

「マスターの凍結解除は許可しません」

「でしようねえ」

当たり前だろ、じじい。

お前遠回しに人殺すって言ってるんだからな。

自覚してんのか。

してるんだろなあ。

「戦闘部門、部門長キャロル・エーデルフェルト。そちらはどうです？」

じじいの発言のしわ寄せを受けるのが赤髪ポニーテールの女性。

引き締まった体、高い背丈、切れ目の人物。

「ありえませんが。特異点攻略に必要な戦力とカルデアの防衛のための戦力。こちらだつてぎりぎりの戦力でやっています」

「それに契約は機械的にできるものでもありません。要らないから契約を切るなどというやり方ではいずれ藤丸ほどの英霊とも契約を結べなってしまうですわ」

そして私の直属の上司でもある。

基本的に戦闘指揮、体術、魔術などは彼女に指導してもらっている。

「そうなんですか？ 戦闘部門、強襲課長、藤丸立花さん」

「へ？」

航路計略部門長が私に聞いてきた。

あまりそちらの名称を呼ばれることがなかったので間抜けな返事をしてしまった。

私も戦闘部門に所属している。

一応マスターは全員戦闘部門に所属する予定だったらしい。

強襲課以外にも支援、偵察、遊撃など一応の区分けがあったとか。

課長といつても強襲課は私一人なので形式上のものである。

この役職いる？

「へ？ではなく、どうなんです？」

私が間抜けな返事で答えを止めていたのでユリフィスがもう一度聞いてきた。

英霊との契約を切るか？だっけ。

「まあ、みんな人ですし、そういうやり口じゃ信頼は得られないんじゃないですかね？」

みんなとの契約を切るなど絶対に有り得ない。

が、ここで主観的な主張をしてもただ馬鹿にされるだけだということは何度も経

験した。

これぐらいのほうがすんなりと受け入れられる。

口調？

私にそれは期待されていない。

「そうですか」

予想通り彼はすんなりと私の言葉を受け入れた。

「となると……」

「うむ」

「まあ、そうね」

3人の部門長は神妙にうなずいた。

「……やはり、レイシフトに連れていくマスターを絞るしかあるまい」

「そうだな。今回は藤丸立花君一人で行ってもらおうということに……」

「こいつら……会議の前にこうするって決めてたな？」

結論に到達するまでがスムーズすぎる。

他人事だと思つて都合のいいように決めやがつて。

一人でつて簡単に言うけどな、ローマで私たちがどんな目にあつたか……

鮮やかに3人の部門長の意見が一致したところで待つたの一声がかかった。

「異議ありつす！」

少女の声に3人の視線がそちらに向いた。

ギロリという擬音が鳴りそうな向け方だ。

「……なにか？ 技巧部門、副部門長チン・イーハン」

声を上げたのは先ほどまで私を森の賢者と呼称していた少女だった。

「今の意見は横暴つす！」

「どういう意味だね？」

「そうだそうだ。」

「言つてやれ。」

「今までの特異点で多くの敵を撃破して、藤丸立花をサポートしたのは達海さんつす。その功績を無視して待機つて言うのは筋が通らないつす」

彼女の言に顔をしかめると、アトロホルムはその隣に視線を向けた。

「君の部下はそう言つておるが、どうなんだ？」

「技巧部門長、藤丸達海くん」

「技巧部門長と呼ばれ、私の弟が顔を上げる。」

「驚くことなかれ、私の弟もなんと一部門の部門長なのだ。」

「技巧部門。」

「基本的に私が使つていようような魔術礼装や英霊に使う概念礼装、その他召喚儀式の設立や特異点で使うようような戦術道具の開発なども行つている。」

「完全な技術職だ。」

「まあ、そもそも魔術師が技術職みたいなどころがあるのでこの表現もどうかと思うが。」

「達海はそのトップなのである。」

元々は特別顧問として技巧部にいたらしいが、幻霊召喚を成功させてからチンに部門長の座を譲られたそうだ。

本人曰く「逃げられなかった」、らしいけど。

「どうでしょうね?」

質問を向けられた達海は一言そう言った。

その返事にユリフィスは馬鹿にしたような視線を向けた。

「どうでしょうね?とは、また適当なことをおっしゃる。まるであなたの術式のようではないですか」

その挑発にキャロルさんやアトロホルムも同調する。

「あのような訳の分からない召喚術を使うと頭もやられていくのでしょうか」

「おいおい。そりや言いすぎではないかね」

「それはそれは…」

またか。

謎の批判。

私たちが会議室に入って来た時に顔色が分かれたのはこれだ。

達海が成功させた幻霊召喚、これはカルデアの7割の人間には歓迎されていない。

いくらカルデアが実力を持つ人間を選抜して結成されたといっても、その人間たちが



実力主義か否かとは別の話だ。

選抜そのものを実力主義でおこなった分、彼らがどのような主義主張や価値観を持っているのかはまるで考慮されていない。

そして魔術の世界において力を持つのは古い家である傾向が強い……らしい。よく知らんけど。

そして古い家ほど血統を重視する立場、いわゆる貴族主義であることが多いそうだし、これもよく知らんが。

そうするとカルデアでも部門のトップに来るほどの実力者は貴族主義が多いわけで、下らない批判をしている部門長たちを見る。

まあ、こうなる。

一応、うちの家も新興の魔術家系。

そうすると彼らの価値観では軽蔑の対象と言うわけだ。

くだらねえと思うのだがこれで彼らも相応の実力者であるから質が悪い。

その軽蔑を向けられている達海自身は

「このカルデアは英霊召喚を基盤に作られているんだ。そこに幻霊召喚なんて言う規格の合わないシステムを使うやつが現れたら、邪魔者扱いするのがまっとうな人間の反応だよ」

とか言っていたが。

未知に対する恐れか、異端に対する怒りか。

いずれにせよ

これのせいで会議はいつも2分し、私たちは頭を痛めている。

「いの……」

私が部門長3人に声を上げようとすると達海が思いつきりにらんできた。

“余計なことをするな” って目だ。

あいつからするとここで私が部門長らに反感を買われることの方が面倒らしい。達海が言うから私はいつも部門長たちにおべっかを使っている。

私が達海と同じ家系なのに、弟とは違って嫌われていないのはそう言う理由だ。自分で言うのもなんだが私はマスターとして、天性の才能がある。

もはやマスターをするべくして生まれたかのようなレベルだ。

そして才能ある若者に敬われるのはどの国の大人でも嬉しいらしい。

こうして私は彼らにゴマをすっている。

下らない批判に拳を震わせているとバンツ!!と大きな音が鳴った。

そちらを見ると所長が眉をしかめて机の上に手を置いていた。

「どうやら彼女が机を手でたたいたようだ。」

「静粛に……」は議論をする場です。特定の個人を批評する場ではありません！」  
彼女がすつと全席を睨む。

先ほどまで達海を叩いていた連中はみな素知らぬ顔だが、静かにはなった。  
すると所長は達海にさっきの内容を改めて問いただした。

「それで技巧部門長、どうなんです？」

達海はため息を一度吐くと口を開いた。

「逆に聞きたいのですが、強襲課長のみで神代の地を渡り歩けるのでしょうか？」  
「どういうことですか？」

「ユリフィスさんの言う通り、第7特異点は神代の地。神がいる可能性は極めて高いでしょう。危険性が高いというのには僕も同意です。しかしその通りなら尚更、僕もあちらに行く方がよろしいかと存じます」

達海は所長を真つすぐ見つめる。

「二人のマスターのみで歩くということは、当たり前ですが不慮の事態が起こった時のカバーが効きません。神による副次的な災害が起こりやすいのならむしろ2人体制で行き、相互に補助を行いながら攻略していく方がリスクは少ないのでは？」

達海の意見に所長は少し考え込む。

「それは…確かに、一理あります」

そう言って弟の意見を肯定した。

所長を思ったよりも達海の意見にすんなりと飲んだことに焦ったのか、ユリフィスは慌てて反論する。

「し、しかし、2人を転移させた為に二人とも中途半端な戦力しか保持できなくなっ  
てしまえばそれこそ本末転倒でしょう」

しかし達海も冷静に反論する。

「そちらの試算方法は存じ上げませんが僕の場合、魔力は自身で賄っておりますので  
転移後の補給は結構です。その場合必要なリソースは2・6倍ほどになるのではない  
ですか？」

「だとしても足りていない」

「ええ。ですので技巧部の開発資材を一時的にエネルギーに回します。それで足りない  
リソースの8割ほどは賄えるでしょう。あとの2割は僕が時間差で転移すれば十分に  
埋められるはずですよ」

「む、むう」

ユリフィスが達海に押されて黙り込む。

すかさずアトロホルムが別の側面から反論する。

「これは人事課から聞いた話ですが、かのサーヴァントは技巧部門長との共闘を浴びて  
いるとか」

この意見に達海は眉をピクリと動かした。

その反応に老人はにやりと笑う。

「共に行つて、現場でサーヴァントが言うことを聞かなくなるのは非常に危険なのでは  
ないか？」

「……」

正論だからか達海は反論しなかった。

そんなんで勝つたつもりか？

ふ、馬鹿どもめ。

英雄王は最初から私の言うことなんて聞くつもりがないわ！

私が高らかに王様の自由度を宣言しようとしたところで、再び所長が机をたたいた。

「静粛に！」

そして右側を見た。

「レフ、あなたは どう思う？」

「ふむ」

彼は手を組み、少しの間考える。

「確かに地の利を有しているサーヴァントを連れていけるのはとても心強い」

レフ教授の言葉に7割がたの人間は顔色を明るくする。

「おお！」

「でしたら！」

「だが」

浮かれた周りを前に教授は反対意見もまた肯定する。

「魔術に精通している技巧部門長がリツカ君についてくれるなら、そちらの方がリスクは低いだろう」

「そうつすよ！」

その意見にチンが賛同の意を示す。

達海は訝しげに教授を見ていた。

「なら折衷案としてこういうのはどうだろうか？まずリツカ君及び彼女のサーヴァントが先にレイシフトを行う。それで一時的に様子を見る。もし彼女に危険が迫ったり、手が足りないようであればその時に彼を転移させる」

彼はコの字型の机の凸部分から両側を見る。

「これなら、かのサーヴァントを連れていくことも可能かつ、リツカ君の安全性も保たれるだろう」

「ふむ。まあ、それなら」

「まあ、緊急時を作らなければいい話だしな」

「私としても異論はありませんわ」

と周りが納得しかけたとき、一人異論を発した。

「いえ、その場合では援護までに時間がかかりすぎてしまいます」

弟だった。

「彼女が転移した後は一度安全な場所に身を隠してもらい、僕が転移した後活動してもらう方が危険はより少なくて済むはずですよ」

「なるほど……」

レフ教授は頷く。

「だが君との共闘を英雄王は快く思っていないのだろうか？」

「っ……」

「こちらが後から君が連れていく腹積もりであることが知れば、英雄王は立腹してしまいかもしれない」

確かに彼ならそのまま帰りがねない怖さがある。

「だがマスターの身が危険となればそこで怒るほどのかの王の器量も小さくはないだろ

う」

「畢竟、君は緊急時の奥の手にしておくのが全体的に見て、最も効果的な手だと思ふよ」  
そう言うのと達海は黙った。

教授はそのまま左側の所長に提案する。

「どうだろうか？オルガ」

「そうね……レフがそう言うのなら……」

所長はちらつと達海を見た。

達海は眉をしかめていたが、所長に見られてることに気付くと  
「確かにそれなら資料の節約も可能ですし、現実的な妥協点かと」

そう言い、どうぞと言うように手のひらを上にして向け、所長に会議の進行を勧めた。

所長はまだ達海を見ていたがしばらくすると目をそらした。

「他にこの意見に異論があるものは？」

周りを見渡すが声を上げるものはいなかった。

「では第7特異点は藤丸立花、及びそのサーヴァントを主軸としてレイシフトを進めて  
いきます。レイシフトの見積もりは各自明日までに提出すること」

「計画の詳細はそれらを鑑みてこちらで決定します。決定したら端末で共有しますので  
各自確認を必ず行うように」



「以上。  
解散」

## ひび

ドスツ！ドスツ！ドスツ！

今にも床を踏み抜きそうな足音を廊下に響かせる。

胸のうちに暴れ回る感情をどうにか発散させようとするが上手くいかない。

歩くというよりかは蹴るという表現がふさわしいほどに足に力を入れる。

歩きたびに足裏に衝撃が走る。

だが、それでもこの遣る瀬無さは消えてくれないようだ。

私の顔がしかめっ面なのか、向かい側から歩いてくる職員たちはみな一様に苦笑いし

て通り過ぎていく。

しかしそんなことは気にせず、大股で歩を進める。

まったく！

なんなのよ！あれは！

あれのどこが会議なのよ！

先の会議室でのやり取りを思い出したら、またイラついてきた。

会議って言うのは議題に対してお互いの主張をぶつけながら意見を昇華させてくも  
のでしょ！

間違ってもあんな足の引つ張り合いをする場じゃない！

やる気あんのか！あいつらは！

つたく！

鼻息が自然と荒くなる。

なんで彼らは素直に物を言えないのか。

反対意見があるなら、回りくどくりソースがく、サーヴァントがくなんて蛇足をつけ  
ずに言えればいいのだ。

主張があるなら、こうしたい！とはつきり言え。

そう言ってくれば私だって喜んで引き受ける。

もちろん人を害するような頼みは聞けないけれど。

本音で話し合って、ぶつかり合って練られた案ならとても素晴らしいものが出来上が  
るはずだ。

なぜならここカルデアにいるみんなの実力は折り紙付きであるから。

選抜されて組織されたチームなのだから、協力し合えば今よりずっとタフでシャープ

なチームワークを生み出せるはずなのに。

ホントもく

もーっもーっもーっ！

「もーっもーっうッ!!」

ぐしやぐしやぐしやぐしやと頭を掻きむしる。

向かい側から来ていた男女の2人の職員がびっくりしたように立ち止まる。

「だ、大丈夫？リツカ？」

「あ、シルヴィアさん」

立ち止まった職員の女性が心配そうにこちらに声をかけてきた。

「何かあった？」

彼女すつと綺麗な眉をハの字にして私の奇行の理由を聞いてくれた。

そんな彼女の表情を見て少し冷静になる。

いかん。

いくら上があれば、あれな会議だったからと言って周りの人にまで余計な心配をかけるのは良くないな。

うん。

「はっはっはっ。大方、また会議でうちのボスがいじめられてたんじゃないのか」

シルヴィアさんの隣の男性は屈んで何かをとり、こちらに渡してきた。

「不満の発散は結構だが、精密機械を乱暴に扱うのはやめてくれたまえよ。修理するのは我々なんだからな」

「あ、私の端末」

彼の手の上にあつたのは私の端末機器だった。

ありや、さつき頭かいたときに落としたか。

「ありがとう、エルロンさん」

私は礼を言いながら彼から端末を受け取る。

画面割れてないかな？

あ、端が欠けてる。

まあいいや。

「いじめつて…まだやってるの？あのお偉いさんたちは」

エルロンさんの言葉にシルヴィアさんは眉をしかめる。

私はため息交じりにこたえる。

「まだもなにも、ローマから帰って以来ずっとだよ」

まったく！

何のためにやってんだか。

あれが人理修復の何に役立つというのか。  
頬を膨らます私にエルロンさんは苦笑いした。

「あの爺さんたちも懲りないよな」

彼の言葉にシルヴィアさんは呆れ顔をする。

「懲りないよな、じゃないわよ。言われているのはあなたのとこの上司でしょ」

そうだ。そうだ。

エルロンさんだつて技巧部に所属しているんだからもうちよつとは怒るべきだ。

しかし言われた当人は苦笑い。

「だつてなあ。実際あの爺さんたちの気持ちも分からなくはないからな」

なんでやねん。

あんたどつちの味方さ。

「あんたねえ、あの子に引き上げてもらつたんでしょ？その恩も忘れちゃつたの？」

「まさか！ボスには感謝してる。あのまま総務部にいたら雑用処理の窓際族扱いだつたからな。感謝してもしきれなくらいだ」

彼の言葉に内心すごく驚く。

そうだったんだ。

てつきり技術交換みたいな目的で移動したとばかり思つてた。

「だったら……」

「でもそれとこれとは別問題だろ？」

彼の言葉にシルヴィアさんはうっと顔をしかめる。

「もともと技巧部はダ・ヴィンチ氏がカルデアに所属するために作られた形だけの部門だ。本来なら資材管理は機材管理課の管轄だったし、戦術道具の開発は戦術課の管轄だった」

「それは……まあね」

「だけどボスがあっちこっちから捨て猫助けしてきてはマジなもんばかり作り出すもんだからいつの間にか本格的な部門になっちまった」

「捨て猫助けって……」

「間違っちゃいないだろ？ 技巧部はみんな似たような奴ばかりだ」

シルヴィアさんがため息を吐く。

あいつ、そんなことしてたのか……

全然知らなかった。

「まあそんなにどんどんと発言力をつけてきた後に、あの幻霊召喚だろ？」

「あれね、未だにあれで召喚できる理屈が分からないわ」

「安心しろ、俺もわからん」

彼はキメ顔でそう言った。

いや自信满满々で言うことじゃない気がする。

ほら、シルヴィアさんもジト目だよ。

て、あれ？達海の召喚って魔術をちやんと学んでいる人でもわからないものなの？

「若手が訳の分からない高等儀式を開発、レイシフトにも参加してお飾りの部門が頭角を現し始めたかと思えば、その部門は自分の庭で邪魔者扱いしてきた落ちこぼればかりときた」

やれやれ、とでもいうようにエルロンさんは肩をすくめる。

「そりゃ、そんな面倒臭い奴らがいたらその頭を叩き潰したくなるのも当然だろ？」

彼は当たり前のように言った。

シルヴィアさんはポカンとする。

鳩が豆鉄砲を食ったような顔だ。

そしてもちろん私もだ。

「当然だろって、エルロン。あなたが所属してる部なのよ？そんな暢気に言ってるのよ？」

「暢気？」

「部下なんですよ？あなた。それも自分の窮地を救ってくれた上司の」



呆れ顔のシルヴィアさんの質問に彼は頷く。

「ああ。そうだな」

「だったら助けて上げなさいよ。針の筵に立たされているあの子を助けてこそ、恩返ししてもでしょ」

「恩返しだって？」

彼はその言葉に目を丸くした。

そしてその数秒後笑い始めた。

？

エルロンさんの言葉に笑うような面白い要素あった？

「うちのボスに恩返しなんてしたらそれこそ怒られるよ」

彼はひとしきり笑い終えた後、そう言った。

怒られる？

達海が？怒るの？

一回りも年が上の職員さんに？

しかも助けてもらって。

「どとういとうとっ？」

「ボスはさ、自分はいじめられっ子を助ける癖に自分が応援されたり期待されたりする

と滅茶苦茶怒るんだよ」

「ホントに？」

「ああ。えっと、なんだっけな……」

エルロンさんは少しだけ目をつむり何かを考えていた。

「あつ、あれだ。他人に責任を負わず行為は等しく悪だ」だ

「何それ？」

「ボスが怒る理由をチンが直接聞いたときに言われたらしい」

「どういう意味よ？」

「俺もよくわからん。ただボスなりの信念つてもものがあるんだろう」

達海ってそんなひねくれてたっけ？

そんなこと言ってるってこと見たこともないけど。

「だからまあ、俺たち技巧部は自分の仕事をきっちりやって、それをボスに還元するのが恩返しだっと思ってるよ」

「……なるほどね」

そうかあ。

それでいつも技巧部門の人たちから反発があまりなかったのか。

「実際のところ、会議でボス側についてるのは言うことを聞かないチンと、ボスの進言で

予算が増えた総務部門の機材管理課、医療部門の回路外科辺りだな」

会議室でいつも戦闘部門とか航路部門と言い争ってる人たちだ。

「つっても機材管理課はトップがああ爺さんだから強く言えんだろうし、うちの副長はあれだからな……」

“あれ”ですまされるチン、哀れ。

「矢面に立てるとしたら医療部門の回路外科長のシャルロット・ミハエルぐらいじゃないか？ 部門長のドクターは中立だしな」

「あの女か……」

シルヴィアさんの表情が曇る。

シャルロットさんって治療室でいつも治療してくれる人だよな？

「シャルロットも悪い奴じゃないんだが、なんせ気が強いからな」

「あ……」

「無駄に衝突して問題を増やされるのも困りものだ」

「確かに……」

「あいつにはあいつよりもお堅い上司でもいたらもう少し丸くなるかもしれんが……」

三人で頭を悩ます。

「うーん、難しいなあ……」

適任者が意外といない。

エルロンさんも頷いて同意する。

「まあ、それもこれも所長がしつかりしてくれればいいだけの話なんだがな……」

彼はため息を吐く。

「所長が……？」

所長？ なんでそこで所長？

「トップの人間が恐れるような実力者ならこんな目立った派閥争いなんて起きないだろ？」

私がポカンとしているとエルロンさんは不思議そうな顔でそう言った。

「まあねえ。彼女もあの若さでよくやってるとは思うけど」

シルヴィアさんもため息を吐きながら同意する。

「彼女には少し荷が重いわよ、あの立場は」

「でもなあ。ダ・ヴィンチ氏が技巧部を抜けてからボスへのあたりも強くなつたし、せめてあの教授任せな態度は何とかしてほしいところだ」

「ああ、あれはね……」

「あれじゃ実質的な所長はレフ教授じゃないか。そんなんだから爺さんたちが偉そうにのさばるんだよ」

わりと辛辣……

所長は性格は面倒だけど、結構頑張ってると思う。

ん？

と言うか今なんかすごいこと言ってるなかつた？

ダ・ヴィンチちゃんが技巧部を抜けた？

「ちよつと待つて、それって……」

あらぬ情報に私が再度聞こうとしたとき、廊下の向こう側から声が聞こえた。

「おーい！エルロン！コフィンの整備始めるつて言っただろー！遅れるとまたちびっこ副長がキレルぞー！」

その叫び声にエルロンさんは目線を下し、腕時計を見た。

「おつと。もうそんな時間か」

シルヴィアさんが呆れ顔でエルロンさんを見る。

「時間にルーズなの直しなさいよね」

「大丈夫だ。デイナーには必ず間に合わせるさ」

え、マジでこんな発言する人おるん？

すごくね？

そう思いながら隣を見るとシルヴィアさんが顔を赤くしていた。

えー……

「そう言う気障なセリフは似合わないって……」

は？（威圧）

なんか目の前で惚気られた。

とうかそんな赤面でいっても説得力無くね？

彼女の発言に苦笑するとエルロンさんは振り返って叫び返した。

「悪いームニエル！今行くー！」

そしてこちらに向き直ると私を見た。

「と言うわけで失礼するよ。フジマル君」

「あつ、はい。整備頑張ってください」

「ああ」

彼は小走りで去っていった。

「じゃ、じゃあ、私も管制室のモニターテストがあるから先行くわね！」

「あ、ちよ……」

少し恥ずかしそうに頬を赤らめながらそう言った彼女は小走りで私を置いていくと、少し先の十字路を左に曲がって姿を消した。

あー。

「ダ・ヴィンチちゃんの話、聞き損ねたな……」

まあ、いいや。

取り敢えず訓練行こ。

§

「遅いー！」

キャロルさんは叫びと共に私の顎めがけて掌打を放ってきた。

速い。

避けきれない。

「くっ……」

私は左足に少しだけ魔力を流し込み、腿の筋肉を無理矢理縮める。

ミシミシと足の筋肉が軋み、重心がわずかにずれる。

重心のずれに逆らわず上体をそらし、紙一重で掌打を躲した。彼女の小指が左の頬をかすり皮膚を削る。

「しっ！」

腹から浅い呼吸を吐く。

私はそらした上体のひねりを利用し、彼女の右手に巻き付くようにクロスカウンターを放った。

魔力を乗せた拳は遠心力が加わり、猛スピードでキャロルさんの顔に迫る。

「甘い！」

マジか。

彼女は右足を軸に空度を半回転させ、左ひざを上げて私の拳を受け止めた。

ちよ、反応速すぎ。

「動きが止まっていますわよ！」

キャロルさんは左手を私の喉元に、左足を私の膝裏に差し込む。

やばっ。

慌てて下がろうとするが、遅かった。

彼女の右手で首裏の襟をつかまれた後、左足をかけられ梃子の力で投げ倒される。

「うお……」



視界が回転する。

天井が見えたと思った直後に背中に衝撃が走り、肺の空気が無理矢理押し出される。

「かはっ！！」

痛みにひるんだのもつかの間。

目の前に鋭い手刀が迫ってくる。

「おっあつ」

間拔けな声で無理矢理呼吸を整え、首をひねって躲す。

ズドンッ！

耳元で床が破壊される音が響く。

威力がおかしいっての！

私は倒れた状態から足で彼女の足をからめとり、寝技を試みる。

が、彼女は私の足を払うことはせず、前傾に倒れ左腕を私の首に押し付けてきた。

「うぐっ！！」

気管が塞がれる。

腕で払おうとするが、密着していて届かない。

足は逆にかからめとられて、身動きができなくなっていた。

「ぐ………」

暴れるが全く動かない。

完全にきめられた。

く、クソっ。

視界が狭まってきた。

残った力でキャロルさんを振りほどこうとするが全く動かない。

まるで自分の体の上に大きな岩が乗ったみたいだ。

徐々に抵抗できる力が弱くなり、意識が途切れそうになる。

「う……」

その寸前、彼女が腕をどかせた。

「チエック」

肺が空気を求めて、息をただ吸わせようとしてくる。

「げほっ、げほっ、げほっ、はあ、はあ、はあ、はあ」

私は四つん這いになって咳をした。

止まっていた血流が急に脳に流れ出したせいか頭痛がする。

涎がたれ、何度も咳をしながらなんとか呼吸を整える。

「迷っている時間が長すぎですわ」

上からキャロルさんの声が聞こえる。

「迷いは隙を産み、隙は先手を許します」

汗が頬垂れて、口にはいる。

塩の味がした。

「動きは体に覚え込ませなさい。徹底的に叩き込んで反射で動けるように」

「は……はい……」

「考えなしに戦うのは馬鹿ですが、考えながら戦うのは愚鈍です」

息が……

「戦術は反射で済ませなさい。戦いながら考えるのは戦略と大局ですわ」

「はあ、はあ、はあ」

「ミクロには末端神経で、マクロには中枢神経を使って戦いなさい」

「はあ、はあ」

呼吸がなかなか整わない。

クソ。

さつき無理をした足の痛みが今になって効いてきた。

「返事！」

聞いているんだか聞いてないんだかよく分からない私の態度をみて、キャロルさんが怒

声を発した。

怒鳴り声に私は反射的に立ち上がり、気をつけの体勢になった。

「はー！」

癖が……

「よろしい。それでは今日はここまでにしましょう。体を洗ってから戻ってらっしゃい。そのあと立花にも見積書に目を通してもらいますわ」

「了解、です」

彼女はそう言うとしつかりとした足取りで訓練室から去っていった。

息も全く上がっていなかった。

瞬発的な身体強化をあれだけ繰り返しておいてまったく疲れてる様子がないなんて、彼女は化け物か。

「……はあ」

緊張が抜け、私はその場で座り込む。

いつものことだけど戦闘部門長だけあって、訓練もスパルタだ。

怠慢で格闘戦をさせられるのは割ときつい。

「……疲れた……」

私がマスターになってからずっと彼女の手ほどきを受けてるけど、全くかなわない。

いや、敵うと思うほど自惚れてはいないけど、手ごたえがない。

やればやるほどに自分の未熟さを見せつけられる。

それは戦闘訓練だけじゃない。

ここにいると学べば学ぶほど、技術を身に着けるほどに周りとの差を痛感する。

多分あまりにも距離が開きすぎてるんだ。

思えば当たり前である。

このカルデアにいる人員は誰であれ、どこかしらの団体から選抜されたメンバーであるわけ。

自分のような素人と比べること自体が間違っているような精鋭たちなのだ。

だから彼我の距離を考えてはいけない。

でも……

それを理解してもなお、思わずにはいられない。

私は成長しているんだろうか……

千里の道も一歩から。

そんなことはわかっている。

でも一歩進んだ後に見据える景色は、千里から一歩分の距離を差し引いた道だけだ。  
一歩前とほとんど変わらない。

そんな当たり前の事実が私を苛める。

私はみんなの願いを守るような人間に、なれているのだろうか。  
分らない。

「あー！やめ！やめ！」

思考の迷宮に迷い込みそうになった自分の頭を振る。

そうだ。

どうせ考えたところで答えなどでない。

進んだ先の景色が変わらなくても、今は進む以外の選択肢はない。

進まなければならない。

私はそういう物を背負っているのだ。

今はその事実を理解していればいい。

「取り敢えず、シャワーを浴びてこよう」

カルデアの制服に着替えた私は部の部屋の前のパネルに手のひらを押し付ける。数秒でパネルから軽快な電子音が流れ、パネルの上部から黒い円筒が付き出てくる。そして底面部が開く。

その中にはきらりと光るカメラのレンズがあつた。

私は左目を円筒に近づけた。

2秒ほどで左目の視界にアンロックの文字が映つた。

パネル左側にある扉が自動で開く。

毎回思うけど、どの部もこんなに警備を厳重にする必要があるのだろうか。

入るのが手間だ。

「ふう………あれ？」

戦闘部の事務室に入ると誰もいなかった。

いつもは25名ほど詰めている部屋には、乱雑に積まれた書類、電源が切られたモニター、スケジュールの書かれたボードが取り残されていた。

「みんなどこに行ったんだろう……？」

「総出で礼装と機材の調整に行きましたわよ」

「うわっ!!」

後ろからの声に驚いて振り返る。

そこには先ほど戻ったはずキャロルさんが呆れ顔で立っていた。

「お、脅かさないでくださいよ、部長……というか先に戻ったんじゃないんですか？」

「先の訓練で分析した貴方の動きのデータを届けに行っただけですよ」

「さっきの？」

「ええ。貴方の動きもだいたい良くなりましたし、データは誤差がより小さい方がよいでしょう。身体強化の補正は数値の誤差が大きいほど肉体への負荷が大きいですからね」

「仕事はやつ!!」

さつきって私がシャワー浴びて、着替えたの合わせても15分くらいだったんだけど!!

「何を呆けているのですか……」

私が驚きを隠せないでいると彼女はため息を吐いた。

「神代へのレイシフトを行うのですわよ。できる限りのアップデータはしておくべきですわ。部も総出で機材調整していることですよ」



「ああ、それでみんないないんですね」

「それは1週間ほど前に部内で通達しましたわ」

「え」

マジか。

聞いた覚えがないなー。

「まあ、いいですわ」

彼女は呆れ顔でそうつぶやいた後、抱えていたファイルから一つの書類を出した。

10枚ほどの用紙だ。

「これは……?」

「それは先ほど言った見積書です」

ああ。

さつき言ってたやつ。

「貴方に注意してもらいたいことはこれです」

彼女は私に渡した見積書を何枚かめくるとある一点を指さした。

えーつと……

「『魔術回路の摩擦係数減少に伴う、宝具魔力の調整について』………なんですか、これ？」

ちよつと何言ってるかわからない。

「貴方の魔術回路の性質を考慮して、炉から供給される魔力量を少し変更しようと考えています」

「私の回路の性質……?」

私の魔力回路に特筆するべきことなんてあつただろうか？

ただでさえ貧弱魔力なのに。

「貴方は気づいていないと思いますが、ここ何回かのレイシフトを経て貴方の回路は伝達率が非常に向上しています」

「でんたつりつ」

私のオウム返しにキャロルさんはまたため息をついた。

だめだ、こいつと言わんばかりである。

ごめんなさい。

「……魔術回路が魔術師の生命力を魔力に変換する『炉』であり、術式へと魔力を注ぐ『路』であることは知ってますわよね?」

「も、もちろん知ってます」

もちろん知らない。

えーつと、ちよつと待って。

回路は発電機でもあり、電球に電力を送る電線でもある、って感じか。多分。

よし。

「魔術回路を用いて作り出した魔力を、回路を通して術式へと送るとき基本的に作り出した魔力を100%注ぎ込むことはできません」

え、なんで？

「回路内で魔力が相反し、抵抗が発生するからですわ。我々は便宜上これを『摩擦』と呼んでいます」

うーんと？

ああ、高校でやった電気抵抗みたいなことかな。

魔力がぶつかり合って、その分のエネルギーが減っちゃう、みたいなことだね。うん。「ですがここ最近のあなたは、回路と魔力間で発生する摩擦が類を見ないほどに少なくなっています。変換した魔力をほぼ100%術式に用いることができるほどに」

え、すご。

なにそれ、どうやってんの？

「ですから一般の魔術師ベースでカルデアの炉からあなたへ魔力を供給すると、必要量以上の魔力を術式に注ぎ込むことになってしまいますのよ」

「術式がパンクしちゃう感じですか」

「そうですね…あながち間違ってますせんわ。貴方の場合、魔力の受け手は術式ではなくサーヴァントになりますけど」

そうだった。

「それを防ぐために今までまとめて使っていた宝具の魔力を調整し直してくださいませ、という申請ですわ」

ほー。

じゃあ、私にぶん投げてた宝具1回分の魔力量が減るのか。

ふむふむ。

えーつとつまり？

「結局どうなるんでしょう？」

「……………要するにサーヴァントの宝具を打てる回数が増えるから注意しなさいってことですよ」

「……………ああ、なるほど」

最初からそう言ってほしかった。

そうか。

とりあえず有効打を打てる回数が増えたのは喜んでいい気がする。

うん。

私の表情を見て、キャロルさんは今日何度目かの溜息をついた。

そんなにため息ついてはっかかりだと幸せが逃げますよ。

「それは立花、あなたが提出しておいてください」

「え、私がですか？」

「ええ。私はこれから強化された礼装に貴方の身体データを打ち込む仕事がありますので」

「打ち込み？部長がやるんですか？」

データの打ち込みなら数値だけ整備に送った方が早いのでは？

「さつき貴方と打ち合ったのは私しかいないでしょう」

私の質問に当たり前のような顔をして答えた。

一方的に殴り倒しただけで人の能力を数値化できるんですか……

えげつな。

しゃあない。

行くかー。

「所長って今、管制室にいましたっけ？」

「ああ。それはレフ教授に提出しておいてくれればいいです」

え？

「見積書は所長に提出するんじゃないんですか？」

基本的に部門の決算書とかは責任者がやってたんじゃないかなかったっけ？

「あの娘に提出しても結局レフ教授が確認するんですから、初めからレフ教授に出した方が早いでしょう」

「いや、そう言う問題じゃ……」

「よろしく頼みますわ」

それだけ言って部門長はすぐに廊下へ出ていった。

うーん、いいのかな？これ。

## なけなしの

「こんにちわー」

書類の入ったファイル片手に管制室の扉をくぐる。

迷ったが取り敢えず見積書は所長に渡すことにした。

決まってること無視してレフ教授に渡すというのは、やはり筋が通っていない。

それに所長が教授に回すなら、まず所長に渡したって問題ないよね。

……まあ、教授と面と向かって話すのが苦手つてのもあるけど。

「ああ。リツカ君か」

私のあいさつに管制室のおくにいた人が顔をこちらに向けた。

げ。

レフ教授じゃん。

なんでいるんじや。

周りを見渡す。

コフィンや礼装の整備でオペレーター組も忙しいのか周りには誰もいない。いるのは管制室の指令席に座っているレフ教授と……

「あれ？達海？」

指令席の前で机に手を付け、前のめりになっている我が弟だった。

はて？

さつき技巧部はコフィンの整理があるってエルロンさんが言っていたような……？

達海が振り返る。

「……姉さん」

その顔はとてもこわばっていた。

般若のような表情、なんて比喻表現が頭をよぎる。

「達海……？」

手の中でクシヤツと音がする。

「あ」

しまった。

びっくりして書類を潰しかけている。

いかん、いかん。



これを潰してしまつたら部長にまたどんなお小言を言われるかわかつたもんじやない。

少し折れた見積書を何度かなぞつて伸ばす。

よかつた。

ギリギリセーフ。

折れきつていないのが幸いした。

「それは見積書かい？」

慌てて直しているとレフ教授が私の持つている書類に気付いた。

彼の声に顔を上げる。

「姉さん、重要な書類は大事に扱つてと言つてるじゃないか」

隣の達海は呆れ顔でだった。

「え、ええ。そうね。気を付けるわ……」

その表情はいつもよく私が見る顔だった。

さきほどのこわばりは影も形もない。

見間違い……だろうか？

「戦闘部は書類の提出がいつも早くて助かつてるよ」

教授はこちらを見てにこりと笑う。

「ははは…私が用意してるわけじゃないですけどね…」

分家とはいえさすがは名家出身。

部門長の仕事の速さには毎度のことだが頭が下がる。

「できていても提出してくれない部もあるからね。持ってきてくれるだけでもありがたいよ」

教授は笑いながら達海を見る。

「というわけで技巧部門長。戦闘部を見習ってもう少し早めの提出をお願いするよ」

そうやって冗談を言う教授。

怖いわ。

上司に遠回しに嫌味を言われるときのストレスは、回避状態の相手に宝具を使ってしまった時のイライラを優に超える。

辛み。

でもちよつと意外。

達海ってこういう面倒な仕事はさっさと終わらせるタイプだと思ってたんだけど。

「もう期限が迫っている」

笑顔の裏の庄。

恐ろしす。

その庄に達海も臆したのか少し焦り気味に返事をした。

「……わ、わかっています。引き延ばすつもりはありません」

そういうと達海は踵を返し、私の方へと歩いてきた。

「ごめん、姉さん。僕も今日中にまとめなきやいけない書類があるから工房に戻るね」

「ええ。頑張つてね。だけどあんまり無理しちゃだめよ」

上司の庄に屈してはいけないぞ、達海。

あくまで自分を優先しなさいな。

私のエールに達海はほんのり笑う。

「うん。ありがとう」

そして後ろの扉を出ていった。

あいつも大変だな……

今度、あいつの大好きなプリンでも持って行ってあげよう。

差し入れの糖分は頭にしみいる。

ドクターのおやつだけど。

「リツカ君。座つたらどうだい？」

「あ、すいません」

わたしは手近なオペレーターの席に座る。

結局、所長はどこにいるんだろう？

私はこれを所長に私に來たのであつて……

いや、聞けばいいのか。

「教授、所長はどこにいらつしやるんですか？」

「オルガかい？彼女ならコフィン整備の様子を見に行つたが……」

「あ、そうなんですな」

ああ、入れ違いになつちやつたかー。

下に下りるの面倒だなー。

所長の不在に頭を悩ませる。

私が顔をしかめていると教授は何を考えているのか気づいたようだ。

「ああ。そういうことか」

彼はにこりと笑い、こちらに手を伸ばした。

「良かったら私からオルガに渡しておこうか？」

有難い申し出ではある。

うーん。

けどまあ、顔見せに言つただけならすぐ戻るだろうし。

それまで待つてもいいか。

「いえ、大丈夫……」

「教授ー持ってきましたよー」

「こつちもです」

教授の申し出を断ろうとしたら、後ろで扉が開いた。

そしてぞろぞろ人が入ってくる。

入ってきたのは男女合わせて4人。

「ああ、すまないね」

入ってきた人たちに教授は声をかけた。

えーっと、あれは航路部と総務部の人たちか。

「お、なんだ、フジマルも見積書を提出しに来たのか」

「あ、うん。航路部と総務部も？」

「ああ。部門長がさつきと行ってこいってうるさくてな」

「右に同じく」

入ってきた彼らはみな一様にだるそうな表情であった。

まあ、お使いは大抵面倒くさいよね。

ただでさえレイシフトの準備で忙しいだろうし。

「あ、みんな。今さ、所長が下に下りたらしいから帰ってくるまで少し待つかも」

時間ないだろうにタイミングが悪い。

なんかこつちまで申し訳なくなってきた。

所長がいらないことを今来た彼らに告げた。

それを聞くと彼らは不思議そうにこちらを見た。

「?」

「おお、そうか」

そう言いながら彼らは指令席の前まで歩く。

ん?

なんか話が噛み合っていない?

「いや、だから所長今いないんだって」

「ああ。それはわかったが……?」

彼らは眉をひそめて私を見る。

「見積書を提出に来たんでしょ?」

「ああ……? ああつ! そういうこと!」

彼らの一人が手をポンと打った。

3人はその一人に顔を向ける。

「なに? どういうこと?」

「ほら、一応決まりだと決算に関わる書類は責任者が受け持つことになってるだろ？」

「ああー。そう言うこと」

「なるほどね。フジマルは真面目ねー」

彼らは謎の盛り上がりを見せた後、レフ教授に見積書を渡した。

「よろしくお願いします」

「ああ。ありがとう。こちらで預かっておく」

え。

ちよつと。

「それは所長に……」

彼らは教授に書類を渡した後、振り返って私に言った。

呆れ顔で。

「いや、所長に渡してどうすんだよ？」

「いつも精査してくれてるのは教授でしょ？」

当たり前のようにそう言われる。

「でも決まりだし……」

「決まりつてなあ。細かいところまで毎回確認してくれてるんだから、教授に直接渡すのが筋つてもんだろ。所長からまわしてもらうなんて失礼だ」

彼らの一人が口をへの字にしてそう言った。

失礼……

いやいや。

「それって所長には失礼じゃないの？」

面子丸潰しってことでしょ？

所長を無視して話進めるって。

「いや、それは違うだろ」

彼は私が言ったことにムツとした。

「だいたい所長が言い出したことじゃないか、実力主義って」

それを聞いて、ある言葉が頭をよぎる。

カルデアに来て、初めてのブリーフィングで所長に言われたことだ。

『それはあくまでも特別な才能であって、あなたたち自身が特別な人間ということではありません。あなた達は人類史を守るためだけの道具にすぎないことを自覚するように！』

道具だと言われた。

それはつまり人類史を守るために有用な役割を果たさなければ無価値ということ。

結果がすべてと言っているのだ。



「フジマルたちも言われただろ？あれ」

総務部の職員は顔をしかめながら言う。

他の職員3人も眉を八の字にしている。

「俺たちも入所するときに全員言われたんだぜ」

マスターだけじゃなかったのか。

「それなのに自分の立場が危うくなった時は忖度してくれって、そりゃあ都合がよすぎるってもんだろ」

「それは……そうだけど……」

「だいたい所長だっていうならもう少し考えて動くべきじゃないか？」

彼はしゃべり始めたら止まらなくなってきたのか、段々と饒舌になってきた。

「敵を作るような発言ばかりして、レイシフトもできないくせにフジマルには偉そうに命令するし」

饒舌な彼の隣でこちらを見ていた女性職員が目を見開く。

ん？

「それでいて肝心な時は教授だよりだろ？」

「ちよつと」

隣の女性が彼を肘でつつく。

「部下だつて上司のことちゃんど見てるんだぜ？あんな態度で責任者つて……」  
「ちよつと！」

「もう、なんだよ。さつきから」

「言いすぎよ！馬鹿！」

「ああ？いいんだよ。フジマルは優しいからこれぐらい言つておかなきゃ。お前だつてさつき、言つて、た……」

其処まで言いかけた男性職員はこちらを見て目を見開き、口を魚のようにパクパクさせた。

陰口。

他人の悪口を当人が見ていない場所で口にする行為。

この言葉は得てしてよくできていると思う。

陰で口にする。

陰で行うことは目先の期間では見つからないこともあるが、大抵の場合白日の下にさらされる。

壁に耳あり障子に目あり。

つまり何が言いたいかと言うと。

大体的場合、本人の耳に届くということだ。

人づてか、はたまた本人が背後で聞いているかは分からないが。

「おかえり。オルガ」

扉が開く音がした後、教授は笑顔のまま言った。

「ええ」

かつかつとヒールの音がする。

横を向くと、件の所長がいた。

「コフィンの方は何か問題があったかい？」

教授は表情を変えず、所長に聞いた。

全くのポーカーフェイス。

さっきまで所長のことを話していたとは感じられない顔である。

あの人どんな心臓してるんだ。

「順調とは言えないわね」

「手厳しい」

所長は冷静に口を開く。

「紀元前に跳ぶのだから今まで以上に良好なコンディションにしておく必要があるわ」

「確かにそうだが、靈子化の数値は今までで最高値なんだろう？ベストを求めて終わらなければベターよりも悪い」

「分かっています。ある程度の調整で妥協するつもりです」

所長は一呼吸置いた後、キツイ目線を教授の手元へ注いだ。

彼の手元に束になった書類が置かれているのを見ると、彼女の表情が一瞬だけ崩れた。

しかしすぐに先ほどの冷静な表情に戻り、また淡々と話し始めた。

「……見積りは期日通り提出されているみたいですね」

「ああ。あとでまとめて君のところに持っていくよ」

「お願いします」

レフ教授はそんな彼女を見て苦笑いしている。

「それで、あと出ていないのはどこですか？」

「あとは……医療部門と技巧部門だ」

「そう」

彼女はそう言うのと踵を返し、先ほど通った管制室の扉へと歩き出した。

「どこへ行くんだ？オルガ」

「まだ出してない部に書類を取りに行きます」

「態々直接？」

「……今回はある程度余裕を持って事に当たりたいので早めに回収しておきます」

「そうか」

そして私の横を通り過ぎ、扉から出ようとした。

あ。

ちよつと。

「所長！」

私の呼び声に彼女は足を止める。

そして顔だけを振り向かせこちらを見る。

「なんですか？」

声が低い。

「これなんですけど……」

私は手に持った戦闘部の見積書を彼女に差し出す。

彼女は冷たい目でそれを見下ろした。

そして視線を上げ、こちらを見た。

「さっきの話を聞いてなかったの？レフに渡しておいて」

「いや、所長に渡す決まりですし……」

「臨機応変に対応しなさい」

「でも……」

一応所長に渡すために待ってたわけだし……

そう食い下がったが間が悪かった。

彼女に渡す意思を見せ続ける私を見て、所長はきつい目線を繰り出す目をさらに吊り上げた。

彼女は左手で私が持っていた書類を勢いよく払った。

花吹雪のように紙が舞い、バサバサと音を立てて落ちる。

「同情なんていらぬのよ！ そんなくだらぬことを考えている暇があるのなら、あなたはあなたがやるべきことをやりなさい！」

ひらひらと舞う紙と対照的に、管制室の空気は凍りついた。

「っー」

彼女はキツと私を睨みつけた後、速足で管制室を後にした。

今、目に……

「おい、フジマル？」

そうか。

今の所長には私の態度は同情に映るのか。

「おーい、大丈夫か？」

私の視界にドアップの顔が映る。

「うおお。びつくりした……」

総務部の男性職員が私の目をのぞき込んでいた。

「返事しろよ」

「すいません」

彼は床下に散らばっていた書類をまとめるとこちらに渡してくれた。

「ほい」

「ありがとう」

あーやばし。

バラバラになっちゃった。

直さないと。

「ひどいわよね」

「え？」

バラバラになった書類の順番を直していると航路部の女性がこちらに近づいてきた。

酷い？

「ああいうこと言った私たちも悪いけど、だからってあなたに当たらなくても」  
「……………」

ああ、そうなるのか。

眉を寄せて不快感をあらわにする彼女。

たぶん彼女は私を気遣ってくれているんだろう。

その気づかいは嬉しい。

けど、その気づかいはほんの少しでも所長に向けてくれたら、彼女の目に涙が浮かぶこともなかったかも……………」

いやいや、こういう考えは不毛だ。

私は私にできることを、彼女に言われたとおりにやろう。

バラバラの書類を強引にファイルに差し込む。

「リツカ君？とりあえずそれはこちらで預かって……………」

「いえ！」

泣いてる人を放っておくのは嫌だから。

多分今の私がやるべきことはこれだ。

「私も所長の仕事を手伝ってきます！」



私の発言に、眉をしかめるレフ教授。

「……今は一人にしておいた方が……」

彼女はいつも一人だ。

たまには愚痴を吐ける部下がいてもいいじゃないか。

「空気を読めないのは私の特技なので！私のも後でまとめて渡しますね！」

それだけ言って管制室を出る。

扉をくぐり、廊下に出る。

技巧部と医療部、所長はどっちに行った？

距離は同じくらいだし……

医療部はドクターがいるから後に回すはず！

よし、こつちだ！

私は走って所長の後を追った。

「チッ」

「どこにいるんだろう?」

技巧部までの廊下を進むが全く所長の背中が見えてこない。

所長、歩くの速いって。

もしかして医療部の方に行っちゃったのかな……?」

階段を上り、右に曲がる。

ここを直進して突き当りを右に曲がったら技巧部の工房に着いちやうんだけど。

速足で廊下を進む。

カルデアの建物内部では地上部分は円形の構造だからか、廊下がわずかに曲がっていて曲線を描いている。

先が見えないので誰と出会うか分からなくて面白かったりする。

しかし地下部分は日本にあつたような直線配置の構造なので歩いていてもたいして面白くない。

災害用についている壁面の足元ランプを見ながら、歩く。

そして突き当りを右に曲がる。

見えた。

大きく物々しい扉。

魔術や戦術道具の研究のために分厚くしたらしいけど、ためつて研究中に爆発でも起きるのだろうか。

景観から明らかに浮いている。

その扉がわずかに開いていて、ドアノブに手をかけたまま止まっている人物がいた。

「よかつた。やつぱりこつちに来てた」

腰まで伸ばした綺麗な銀髪が廊下の照明を反射して光っている。

強烈なクセツ毛で先端がぐるんと丸まっているのはご愛敬である。

立ち姿も背筋を這つていて凜としている。

所長つてやつぱり美人だよなあ。

ゆつくりと彼女に近づいていく。

彼女は引き戸のドアノブを握つたまま動かない。

何をしているのだろうか？

歩いて進んで行き、彼女の背中に声をかけようと思つたとき声が聞こえてきた。

『聞いたか？また部長が吊し上げ喰らつたらしいぞ』

所長が開きかけている扉の隙間からだ。

技巧部の職員だろう。

『吊し上げ？』

『ほら、会議のあれだよ』

『あー、あれか』

声だけ聴くにエルロンさんと同じような反応である。

『相変わらずあのクソどもも飽きないよな』

『ホントだぜ』

憎たらしいってよりは笑い話みたいな声音だ。

彼が言っていたように、技巧部の職員たちは達海自身のことに対して心配のような心

遣いはあまりないらしい。

『まあ、あいつらが変わるなんてこれっぽっちも思つてないからいいんだけどな』

『陰湿さは身を持って体験してるからな』

割とぶつちやけてるなあ。

これも工房の分厚い扉と壁があつてこそか。

まあ、今はその扉が開いちやてゐるわけだが。

『そういや副長が言つてたけどよ。次のレイシフト、部長行かないつてよ』

『は？行かない？達海さんが？マジで？』

『マジで』

『え、馬鹿なのか？あいつら？』

『だよなあ』

『いや、達海さんが行かないでつて無理だろ？あいつらローマでフジマルが死にかけたの忘れたのか？』

ぐっ…

我が事ながら、そこを言われるのは少し痛い。

『あのときは経験も少なかったし、キリエライトが上手く霊基に順応してなかったつてのもあるが、それにしたつてなあ』

『厳しすぎるだろ。次のレイシフト、紀元前なんだろ？大丈夫か？』

『幸い、フジマルの成長度合いはちよつと目を見張るものがあるからな。上手くできん事もないかもしれん』

『あれはちよつとどころじゃねえ』

な、なんか照れるな。

自分がいないところで自分の話されるのはちよつと怖いけど、意外と私って評価高い？

『とうかなんでそうなったんだ？ やっぱり魔力不足か？ プロメテウスの火にも限界があるし……』

『いや、あいつらの横槍だつてよ』

『……おいおい、今回は幾らなんでもやりすぎじゃないか？』

彼らの声に軽さがなくなる。

『やっぱりお前もそう思うか？』

『ああ。あいつらいくら意地悪くても、レイシフトの安全性を下げるようなことは今までやらなかったよな？』

『そうなんだよな。まあ、教授が容認したつてことは最低限、何かしらの担保があるんだろうが……』

『教授が？』

『副長はそう言つてたぞ』

それからしばらく無言が続いた。

会議ではだいたい魔力がカツカツつて言つてたからなあ。

なんだかんだでそこが一番大きいんじゃないかな。

『もしかして、だけども……』

しばらく間があく。

『もしかして、なんだ？』

『…会議で抑えきれなかった、とかないよな？』

『あいつらが調子付きすぎてるってことか？』

『ああ』

『いや、あれつて一応、全部門強制参加の戦略会議だぞ。カルデアで最も大きい意思決定機関がそんないい加減な理由で議決をとるなんてことは………ない、とも言えないな』

『だろ？いつもみたい議事進行役は所長だったんだろ？』

ドアノブに手をかけていた所長がびくりと震える。

『ああ。そう聞いている』

『所長じゃ抑えるのは無理だろ。時計塔の先達だろうし』

『……そうだな。舐められてるしな、完全に』

『教授もなあ、もっと積極的に指揮してくれりゃあ上手くまとまるんだが……』

所長の背中がまたピクリと震える

『一応気を使ってるんだろう。教授が指揮を取り出したら、所長の立つ瀬がないだろうしな』

『そこだよ！そこ！』

『そこ？』

『根本的はずれはそこだろ！』

『ずれて……ああ、そういうことか』

『あんだだけ俺たちに結果だ、実力だって言ってたんだからよ。実力のある人間に地位を譲るべきじゃないか？』

『一理あるが……この施設はほとんどアニムスファイア家の私費で作られたようなものだろう？それは流石に厳しいんじゃないか？』

『それってつまりスポンサーだろ？いくら株主が金持ってるからって代表取締役社長をそいつにするか？普通』

『……それもそうだな』

『実力のない金持ちに舵取りやらせるからこんなことになるんだよ。人類全体の命運がかかっているんだぜ？私財がどうのなんて言ってる場合じゃねえだろ』

ちよつと、言いすぎじゃない？

確かに言ってることに正しいところもあるけど、会議に参加もしてないのここまで言う



?

『レフ教授が所長になってくんねえかなあ』

おい。

流石に言っているいいことと悪いことつてもんがあるでしょ。

注意しようと言顔を上げたとき気づいた。

ドアノブを握っている所長の手が、震えていた。

ただ顔を下に向け、体を震わせていた。

「っ……………」

彼女のその姿に反射的に手を伸ばす。

だが上げた右手が彼女の肩に触れることはなかった。

ゆっくりと私は右手を下した。

冬木で彼女は言っていた。

必要な才能だけがなかった、と。

質のいい魔術回路も、豊かな家も、明晰な頭脳も、健康な肉体も持つて生まれた彼女は

は最も必要な才だけがなかったと。

悲しげに、言っていたことを思い出す。

レイシフトとマスターの適性。

たまたま持っていただけの私が、たまたま活躍しているこの状況で私は彼女に何と声をかければいいのかだろう。

“同情なんていらなのよ!”

そう言われたのに、これじゃあそれよりひどい。

憐憫だ。

『おい』

聞こえてきた声にピクリと耳を動かす。

この声は……

『あ、部長! お疲れ様です!』

『お疲れ様です!』

達海だ。

『君たち何やってるの?』

声が堅い。

『い、いえ。副長から会議の様子を聞いたので次のレイシフトはどうなのかと……』

『そうですか……詳細が決まったら全端末に同期するって連絡しましたよね?』

『は、はい』

『じゃあ、それ今する話じゃないですよね?』

『……はい』

『僕はあなた達にあの礼装の調整をお願いしてたんですけど、そっちは終わったんですか?』

『……いい、いえ』

『口を動かすのも結構ですが並行して手も動かしてください』

『すみません』

ものすごい低い声だ。

あいつのこんな声なんて滅多に聞かない。

『で?なんでしたっけ?所長が変わった方がいいとか……僕にも聞かせて欲しいんですけど』

所長がピクリと手を動かす。

『いえ……それは、その……』

『その?』

『その……あの、ちよつとした冗談みたいなもので……』

『……』

『……』

『言えよ』

底冷えするような声だった。

『会議で、ぶ、部長が、理不尽な意見を押し付けられたと聞いて……』

『聞いて?』

『その……まとめ役がもつとしっかりしていれば部長も動きやすいのではないかな……と』

『……』

しばらく無言が続いた。

『……僕は、あなた達に素晴らしいポテンシャルがあると思つて、技巧部に来てもらいました』

『……』

『そして見込み通り、いや見込み以上のものを技巧部全員が発揮してくれている』

『は、はい』

『おかげでレイシフトのサポートは想像以上の質で行えています』

『あ、ありがとうございます』

『でも、ですよ? 思い出して頂きたい。ここに来る前のあなた達を』

『……』

『自分の技術も、経験も、才能も、何一つ有効に活用されずにいたとき、あなた達はどうか』

でしたか?』

『そ、それは……』

『腐ってましたよね? 自分には才能がないと自虐的になったり、周りの奴らは自分を全然理解できてないと殻にこもったり』

『……』

『それ自体が悪いとは言いません。人間ですし誰だつてそう言うこともあるでしょう』

『ですが、そんな経験した貴方たちが所長を否定するんですか?』

『っ……』

『周りから攻撃されるだけの立場を経験した貴方たちが?』

『……』

ハアとため息を吐く音が聞こえる。

『僕たちに今最も必要とされる力つてなんだと思います?』

『……分かりません』

『そうですか。……これは持論なんですけどね』

『僕は“現実を見つめる能力”だと思ってます』

『現実を?』

見つめる?』

『ええ。これまで私たち全員が経験してきましたが、正直言つて敵の規模は我々が思っている何百倍も大きくて、私たちを阻んでくる障害はいつも我々の想定を優に超えています』

『それらを前にしては、個人の才能なんてちつぽけなものですよ』

『我々の誰が、周りと比べてどのくらい優秀か、なんてほとんど意味がありません』

『それでも私たちがここまで進んでこれたのは私たちが目を塞いでうずくまることをせず、常に敵や障害を見つめてきたからでは？』

『……』

『これは理想論や根性論で言ってるわけではありません。アメリカで魔神柱に囲まれたとき、カメラロットで円卓の騎士に鬪り殺されそうになった時、我々を救ってくれたのは常に現実から逃げず直面してきたがゆえの力だったはずですよ』

『……そしてその力を所長は持っています』

所長が顔を上げた。

『あなた達が自らの境遇に腐っていた時、彼女は何をしていたか分かりますか？』

『……』

『彼女は寝ることもせず、自分にはない知識を必死に勉強していましたよ』

『どこぞの老人に皮肉を言われようと、部下に馬鹿にされようと、レイシフトに必要なこ

とやカルデアをまとめるために必要なことを死に物狂いで学んでいました』

『所長が……?』

私たちが見ていないところでそんなこと……

『彼女は泣きもしますし、怒りもします。理不尽な命令や間違った指示を下したこともありました』

『ですが彼女が現実から目を背けたことは一度だつてなかった』

『彼女はどんな苦境に立たされても、指揮を放棄したことは一度もなかったでしょう』

『分からないことがあれば周りに聞くこともありましたが、自分の頭で考えることは絶対にやめなかつたはずだ』

『そんな彼女が所長に相応しくないとって?』

『少しは考えてから発言しろよ』

『僕は感情で喋る馬鹿を部下にした覚えはない』

その口調はとて断定的で重かった。

彼女の信を見ていた言葉にもまた確固たる信念があつた。

「っ……」

嗚咽が聞こえた。

私が視線を上げると、扉の前には雨が降っていた。

とても局地的で、水源は二つの瞳からだけだったけど。

オルガマリー・アニメスフィアは口を手で覆い、声を漏らすまいとしていたが背中を一目見ればわかるくらいにむせび泣いていた。

「っ……………」

でもたぶん、悔し泣きでは、ないだろう。

『す、すいません、部長…………』

『軽率な発言でした…………』

扉の中から謝罪する声が聞こえる。

『僕に謝ってどうするんですか』

達海の声にはさっきのような険はなかった。

ただ呆れは含まれていたかもしれない。

『所長に謝る気があるのなら、今整備してる礼装をちゃんと仕上げてください。それが彼女のためにもなります』

『は、はい!』

『やります!』

『奥の工房で大体の調整はしておいたので、データのチェックとテストをお願いします。』



保険ですからね。割と慎重にお願いしますよ』

『承知しました!』

二人分の声が聞こえたあと、駆け足が遠ざかっていった。

あいつ、言うときは言うのね。

しかもちゃんと人を見てる。

正直、自分の技術以外あんまり興味のない奴だと思つてたけど。

私も認識を改めなければ。

『っ……っ』

視線を上げると所長はまだ動けなさそうだった。

今の彼女に声をかける必要はないだろう。

どうやら私が来たのはただのお節介だったみたいだ。

まあ、でもせつかくここまで来たし、所長のお使いつてことで医療部の見積書を回収しようか。

目を真っ赤にしてドクターにあつたら、いくら誤魔化したつて所長が可哀想だからね。

私は音を立てずに彼女から離れ、廊下の分かれ道を左に曲がった。

目覚まし時計。

私はこの言葉に違和感を覚えることが多々ある。

ある特定の時刻に起床するために使われる道具であり、一般的に普及しているものである。

だがここで考えて欲しい。

こいつ、名前がおかしくないだろうか？

目覚まし時計であるならば、私たちではなく時計が目を覚ますべきだ。時計の本懐とは我々に時を知らせること。

本来、陽の動き具合や気温など外界の変化でしか感じることでできない“時”と言うものを一定の尺度で測り、我々に客観的指標を提示することである。

すなわち時計において、目覚めていない状態とはその役割を果たせていない状態を指

すのではなからうか。

だというのなら音を鳴らすから目覚まし時計とは語弊がある。

今まで時計盤を表示すらしていなかった時計が、設定していた時刻になると時刻を表示し始める。

こういった機能を実装して、初めてその時計を目覚まし時計と言うことが可能となるであろう。

だから朝方にやかましい音を奏でていたこいつの呼び方は、目覚まし時計とすべきではない。

目覚まさせる時計、これが正しい呼称である。

しかし。

だがしかしだ。

目覚まさせる時計、この呼称はおそらく一般に流通し得ない。

それはなぜか？

語呂が悪いからである。

目覚まさせる時計。

長すぎる。

あんな頻繁に使う道具の呼称が9文字など、アアウトオブ眼中だ。

考えても見て欲しい。

「お母さん！また私の目覚まさせる時計、勝手に止めたでしょ！」

「止めてないわよ。あなたが自分で目覚まさせる時計止めたんでしょ」

「もう！私が目覚まさせる時計止めても起きてこないの気づいたら起こしてっていったじゃん！」

「お母さんも朝は忙しいの。起きられないならあと3台くらい目覚まさせる時計買ってきなさい」

「そんなに目覚まさせる時計いらないよ！」

やかましいわ。

なんだこの会話。

話していて疲れないのだろうか？

いや疲れる。

そしてそのうち目覚まさせる時計は、まさる時計とか省略されるのだ。

誰だよ、まさる。

それに比べ、目覚まし時計の語呂の良さと言ったら。

悔しいが認めざるを得ない。

だって「めざましどけい」だぜ!!

7文字じゃん。

日本人は体が勝手に五七五に反応してしまう遺伝子が組み込まれているので、理屈なしに称賛してしまう。

これはいいものだ。

喚きだす 目覚まし時計 くっ殺せ： (藤丸立花)

聞かんでもわかる。

凄いやつやん!

絶対つこおてしまうやん! 7文字なんて!

許せん。

なので殺しました。

今私の手の下にある目覚まし時計はペしやんこになっている。

朝からうるさかったので私が潰した。

私は悪くないのだ。

目覚まし時計なんて紛らわしい名称で自分が起きるふりして、喚き散らすこいつがいけない。

名前を変えて出直してこい！

たとえセツトしたのが昨日の夜の私でも、私は絶対に謝らない！

絶対にだ！

「絶対にだ！……じゃありません、マスター」

マイルームのベッドの上でひたすら言い訳を考え続ける私に声がかかった。

私はそちらを見る。

目についたのはとても長い黒い艶やかな髪。

足元まで伸ばしたその髪は先端でまとめられている。

その髪を先端からだどつていくとその髪の持ち主が、神がかったプロポーションの持

ち主であることがよくわかる。

すらつとした細く長い脚。

ほどよく肉付いた太もも。

服の上からでもわかるキレなくびれに、引き締まった腹筋。

そして大きいおっぱいが2つ。めっちゃでかい。でかい。

華奢な佳人と思わせる細い首筋。

その首にのる頭には、つややかな唇。

すつとした鼻筋。

細く長い目には蜂準長目を思わせるような知性を纏わせながらも、その上に並ぶ睫がどこか淫靡な雰囲気を漂わせている。

まるで完成された美しい人形のような顔。

日本美人を体現したかのような容姿だ。

「朝の気だるげな気分は母も理解しておりますが、ものに当たるのは賢い者がすることではありません」

並びに戦闘力まで恐ろしく高いサーヴァント、源頼光さんに叱られた。

「いやあ。でもこれ私物ですし……」

寝ぐせだらけの頭をポリポリかきながら言い訳をする。

備品なら流石にやりませんよ。

私のそんな態度に頼光さんは腰に手を当てて怒った。

「いやでも、ありません！ そういった態度は日ごろから改めておかなければ肝心な時に出てしまうものなのです！」

プリン怒っている頼光さん。

かわゆす。

「聞いているんですか！ マスターー！」

「はいはい」

「はいは一回です！」

「はい」

「伸ばさない！」

ほつペをぶつくりさせている頼光さん。

激おこプンプンなほつペをぶにぶにしたら怒られるかな？

「まったく……マスターにはまだまだ母の教育が必要ですね」

彼女は困ったようにつぶやいた。

そしてベッドの上に散らかっている掛布団を綺麗にたたみだした。

さつきから言っていることと言いい、やっつることと言いいほんとお母さんみたいだ。

いや、もうお母さんである。

ママである。

ビッグママなう。

なおどこがビッグかは言わずもがな。

ふう。

そろそろ現実を見ようか。

「あのさ、頼光さん」

布団をたたむ手を止めてこちらを見るみつちゃん。



「なんですか？ マスター？」

不思議そうにこちらを見ている。

「……なんでいるの？（こっ）に」

「？」

可愛げに首をかしげるみっちゃん。

「？じゃないよ！ サーヴァントはD区画から出ちゃいけない決まりでしょ！！」

私の回路を通しているとはいえ、私が契約しているサーヴァントを現界させているのはカルデアの炉で作られた魔力だ。

カルデアの炉は無限に魔力を精製できる便利な魔法道具ではない。

戦闘時でもないのに、サーヴァントに無駄な魔力を消耗させるわけにはいかない。

そこで考えられたのが、サーヴァントをあえて弱体化させ現界に必要な魔力量を少なくさせる方法だった。

霊基を確立させるための必要最小限な情報だけを抽出し、部分的に魔力を流すシステム。

Degrading System Section.

機材管理課や技巧部の職員は頭文字をとってDSSなんて呼んでいるけど、言いにくいので私はD区画と呼んでいる。

カルデアの地下3Fに設けられた区画。

レイシフトなどの例外を除き、基本的にサーヴァントはそこで過ごす決まりだ。

「私はマスターの母ですが?」

それ以外に理由が必要で?と言わんばかりの顔。  
なんだ。

文脈跳びすぎだよ!

理由になつてないよ!

可愛く首をかしげてもマスターは許しませんよ!

こんなに強くて頼りになるのに、なぜバーサーカーなのか。

その原因はたぶんここなんだろう。

「ますたあの言う通りです、左馬権頭様。ちゃんとダミーを置いて足が付かないようにしなければなりません」

だから今私の背中にくつついている蛇姫さまもバーサーカーに違いない。

「あら?私の霊基はランサーですよ?」

当たり前のように心を読むなあ!

「もうなんでいるのっ!?!清姫!」

私は振り向いて張り付いていた清姫を引きはがした。

清姫はいやん、とふざけた言葉をはいてベッドの上に倒れる。  
安珍清姫伝説で有名な少女。

和歌山県のある地域の管理を任されていた役人の子。

お偉いさんの箱入り娘だ。

綺麗に梳かれた髪。

シミ一つない白い肌。

艶めかしい指先。

倒れてもなお醸し出す気品が、彼女がやんごとなき身分であったことを示している。

だが顔にはあどけなさが残っていて、彼女の気質さえ除けば礼儀正しい童女に見えた  
だろう。

気質さえ見なければ。

布団をたたみ終えた頼光さんは微笑を浮かべて清姫を見た。

「真砂の君、ご心配なさらずに。道中の監視カメラはすべて潰しておきました」

「まあ。それなら問題ありませんね。流石は当主であつたお方です」

ニコニコとそんな会話をしている。

ちよつと!?

全然大丈夫じゃないんだけど!!

それ見つかった時に怒られるの私ですよ!!

問題しかないよ!!

「さあ、ましたあ。私と一緒に紀元前へ、はねむーんと行きましょう」

彼女は私に正面からしなだれかかってきた。

うおっと。

彼女の体重に負け、背からベッドに倒れ込む。

彼女に覆いかぶさられてしまった。

「観光はどこにいたしますか？私、伊拉久についてはあまり知識がないのでましたあがえすこーとしてくださると嬉しいです」

頬を赤く染めながら私のお腹にまたがり、息を荒げながら言うことではない。

そしてレイシフトは観光ではない。

「お待ちなさい。今回はマスターと私で親子水入らずの旅をすると申し上げておいたはずですが」

そんな話は聞いてないですねえ。

「いえいえ。お姑様との関係は大事ですが、最も優先されるべきは夫婦の愛ではありませんか？男女の恋慕とは斯様に激しく、そして抑えられぬもの。お母さまであらせられるのであればそこは大きな器を持つてお譲りくださいな」

「母への態度は大変結構です。確かに子が嫁を取るならば、夫婦間の関係は良好であることが好ましい。ですが夫婦とて所詮は他人。この世で最も大きいものは母から子に對する愛です」

倒れている私を放っておいて二人で口論しでした。

……何言っているかさっぱり分からないのです。

私は清姫の旦那さんではないし、頼光さんの子供でもない。

これホントに私のことで揉めてる？

なにか致命的な食い違いがございませんか？

「ちよいちよい！二人とも」

私は慌てて声を上げる。

「私言ったよね！！バビロニアには王様しか連れていけないって！」

会議が終わった後、D区画に下りて7人全員に言ったはずである。

まあ、王様は私の話を全く聞いていなかったので実質6人だけだ。

私の言葉を聞くと二人は困ったように眉をしかめた。

「マスター。お考え直してはいただけませんか？確かにかの王はマスターを守る力量は十分でございますが……」

「あの光り物は人格破綻者です。あのような気狂いだけを同行させるなんて、ますたあ

が死んでしまいます」

氣狂い○

きよひー、相変わらずの直球くるなあ。

大丈夫、マシユがいるよ。

私のマシユは最強なんだ！

とはいえ二人とも心配してくれているのは確かだ。

それは素直に受け取っておこう。

「ごめんね。一応カルデア全体での決定だから私の意見でどうにかなるものじゃないんだ」

清姫は扇子を袖から取り出し、慣れた手つきで広げた。

そしてその扇子で口元を隠した。

「そこがおかしいのです。実際に危険な目に合うのはますたあですのに」

清姫は納得していないみたいだ。

ぷんぷん怒っている。

可愛い。

対して頼光さんは眉をしかめた苦々しい表情であった。

何を思ったのか、彼女は両ひざを床について、ベッドに倒れている私の手を取った。

「マスター。私も一家の長でございませすれば、人の集まりが思うように動かないのは存じております」

「あ、そつか。そうだよね。むしろ頼光さんの方がよく知ってるよね」  
どちらかと言えば大先輩だ。

「しかしながら今回は妙な胸騒ぎがするのです。今回の決定にはいつもとは違う何か……恣意的な力が感じます」

「恣意的……？」

「いえ、私の杞憂であれば良いのですが……」

彼女は私の左手を両手に抱えたまま、固まってしまった。

彼女たちには私よりもとても大きな力がある。

そしてその力を使ってほしいと頼んだのは私だ。

それを了承して付いてきてくれているというのに、こちらの勝手な都合で留守番をさせることになる。

自分よりも力の劣るものを送り出さなくてはいけない。

その辛さは姉である私もよく経験した。

だから辛さが分かる。

そして彼女たちに対する申し訳なさもある。





彼女の体温が頬を伝って感じる。

温かく、それでいて包み込むようなそんなぬくもりを感じる。

本当に、まるでお母さんみたいだ。

……それはそれとして。

私のおでこには今2つの母性の塊が押し付けられている。

まさかここまでだったとは。

いったい何を食べたらこんなに大きくなるんですか？

参考までに教えていただきたい。

「みっちゃんのおっぱいでっかい」

あ、口に出ちゃった。

「ちよつとおっ何やってるんですか!! ましたあ!」

きよひーの声が聞こえる。

しかしみっちゃんのおっぱいでかいな。

「あらあら! やっぱり母の愛こそが真のぬくもりなのですな」

「私のますたあはそのようなもので愛を定義いたしません! 左馬権頭様! 離してください

い! ますたあ! こちらにも! こちらにもそれとなくよくよかな母性がありますよ!」

また二人が言い争い始めてしまった。

しかしみっちゃんのおっぱいでっけえ。

そう言えば……

みっちゃんのでっかいおっぱいを感じながら、ふと疑問に思った。

なぜ二人とも今こんなことを言い出したのだろうか？

私がマイルームにいるときじやなくてD区画に下りたときの方が話も早いだろうに。

「二人とも。どうしていま私のところに来たの？」

私はみっちゃんのでっかいおっぱいから頭を離しつつ、二人に聞いた。

私の質問に二人は顔を見合わせる。

あれ？変なこと言ったかな？

二人はシンクロのように見合わせた顔をこちらに向け、口を開いた。

「どうしても何も」

「すまーとふおんに通知が来ていたじやありませんか。今回のれいしふとの計画書の」

え。

「え？」

私はベッドから飛びあがった。

そして机の上で充電していた端末をひったくるようにして取った。

通知欄を確認する。

マジだ!!

通知来てる!

顔認証で端末を開き、全員の共有ページを開く。

大急ぎでIDを打ち込み、最新アップロード情報を見る。

『第7特異点修復についての決定事項及び、計画書』

oh... いつの間に。

項目をタップし、ダウンロードを始める。

「重いな……」

ダウンロードがなかなか終わらない。

紀元前に跳ぶとなるとそれだけ確認事項も多いってことか。

「あれ?なんかメール来てる」

メールの欄にも新着通知が来ていた。

誰からだろう……

メールアプリを開く。

えっ、所長だ。

なんで?

てか件名ないし。

え、やだ。なんか怖い。開くの怖い。

緊急の連絡だろうか？それともまさか二人が出てきたのもうバレた？

お願いします。ただの業務連絡であってください。

開いてみる。

「えーつと……あなたの弟って時計塔に留学してたのよね？……なんだこれ？」

達海の留学……？

確かにしてたけど、それがどうしたのだろうか……？

とりあえず返信しておこう。

「してましたけど、どうかしましたか？つと」

ほい送信。

なんかよくわからんけど二人の抜け出しがばれてないならセーフ。

そろそろダウンロード終わったかな？

画面を切り替えようとするとピロントツと音が鳴った。

通知？

はや!! もう返信来た！

えーつと……

「どの学科に行つてたかとか知ってる？ 知らなければそれでいいのだけれど……学科？」

達海が留学したときにどこの学科に行つたかつてこと？

それは知らないなあ。

当時、私はあいつがイギリスの一般大学に飛び級で留学するもんだと思つてたぐらいだし。

そもそも時計塔に何の学部学科があるとか知らない。

「それは分かりません。本人に聞きましようか？ つと」

またすぐ返信来た。

速い。速いよ所長。

なにになに……

「大丈夫です。手間を取らせました。ありがとうございます……」

終わり？

良く事情が分からないまま会話を打ち切られてしまった。

結局何だったのだろうか？

「どうかしましたか？」

端末見て戸惑っていたらきよひーが私に尋ねてきた。

「いや、大したことじゃないから大丈夫……」

あ、ダウンロード終わってる。

早速PDFファイルを開く。

うお、48ページって結構あるなあ。

所長は無駄が嫌いな人だから結構バツサリと省くとこは省くんだけど、それでこれってことは相当だな。

魔力量、必要な術式、レイシフトの工程、難しいところはすべてスクロールしてすっ飛ばす。

まず見るべきは計画表だ。

専門的な話してんでさっぱりなので、一から呼んでも意味がない。

計画表をみて必要そうなところだけを教えてもらえばいい。

計画、計画……あつた。

どれどれ……

えーつとまず、直前ブリーフィングは……今日の8時か……今日の8時……8時……

8時!!

端末の時刻表示を見るとそこには7:54の文字が並んでいる。

あと6分しかないじゃん!

基本5分前行動だから、実質あと1分!!  
無理!

「やっばい!やばいやばい!」

急いで着替えないと!

私は端末を机の上に投げ、その場で寝間着を脱いでベッドの上に投げ捨てる。

「きやつ……」

きよひーが顔を真っ赤にして目を塞いだ。

「ま、ますたあ。いくら何でも急すぎます。私、まだ心の準備が……」

そう言いながらちらちら指の間から見てんのはわかっとなるんやぞ!

と言うか今は構ってる時間がない!

「マスター!私は常々物を投げてはいけないと言っておりましたよ!」

頼光さんは私が放り投げた寝間着を畳み始めた。

やべえ!

ここでママの説教喰らったら私詰む!

ピリリリリッ!

机の上に置いた端末が着信音を奏で始めた。

時計を見ると7:55

詰んだ。

うわあ。

絶対ブリーフィングルームにいないの私だけだよ。

これ絶対私がどこにいるのかの確認電話だよ。

出たくない。

けど出ないとさらに面倒なことに……

ええい！ままよ！

机の上に置いた端末を取り、下着姿で電話に出る。

「はい。もしもし」

『立花ちゃん<sup>!!</sup>きみ今どこにいるんだ<sup>!!</sup>』

電話に出るとダ・ヴィンチちゃん<sup>!!</sup>がものすごい切迫した様子で居場所を聞いてきた。

そうか、ダ・ヴィンチちゃんもブリーフィングルームにいるのか。

会議室ではサーヴァントの出入りは禁止されている。

議論の場で武力の持ち込みが禁止されているからだ。（お偉いさんは魔術刻印があるだろうに、それはいいのかと私は思っている）

その為、ダ・ヴィンチちゃんを含めサーヴァントのみんなは会議には出席できない。

しかしブリーフィングは違う。



決定事項の確認が主にすることなので、ブリーフィングルームにサーヴァントは入っていいし、使い魔も連れてきていい。

でもダ・ヴィンチちゃんがこんなに焦ってるなんて、やばいぞ。

所長は相当お冠かもしれない。

「ごめんなさい。ちよつと寝坊しちゃって、今マイルームにいます」

正直に言う。

ここで誤魔化すとお叱りが3倍になる。

これは私の経験則。

『マイルーム!?!』

予想通りのびっくりした声。

まあ、当たり前だよねえ。

ここからブリーフィングルームまで5分はかかるし。

だが次に聞こえてきた言葉は予想外なものだった。

『ちようどいいい!そこならなら2分で着く!』

ちようどいいい?!

いや、いくら廊下を全力疾走してもブリーフィングルームは2分では着かない。

『医療部の診療室に向かってくれ!』

「診療室？」

なんで？

ブリーフィングが始まるんじや……

『君が近くにいた方が回復は早いはずだ！』

回復？

「ちよつと、さつきから何の話を……」

全然状況がつかめないんだけど……

困惑していた頭は彼女の次の一言で固まった。

『マッシュが倒れたんだ！』

「……………え？」

## 潜む影

「僕が思うにおそらく君にとつて先輩と言える人がいれば、それは人間としてごく自然な“人”なんじゃないかな」

私の横で座る彼はそんなことを呟いた。

「人間として、ごく自然な……」

「当たり前前に喜び、悲しみ、怒り、他人との感情の間できちんと生きることのできる、そんな誰か」

無菌室の壁を眺めながら話す彼の目は、なぜか夢を語る子供のような無邪気さが宿っていた。

そんな彼の瞳に私は言いようのない感情を覚えた。

その感情は何かむず痒いもので、得体の知れない“それ”を鮮明にしたいと口が動いた。

「コミュニケーション……生き方の先輩、ということでしょうか？」

「そうだね。そしてその先も見ることでできる人かな」

「その先？」

「うん」

彼は頷いてこちらを見る。

「博愛、友好、人を思いやる心。理由はなくとも自分ではない誰かのために行動する」

彼の言葉は自分のヒーローを語るような静かな興奮があり、その目には具体的な人物が映っている。

そう見える。

「僕はこれを人間特有の長所だと思っている」

利己的ではなく、利他的。

意思を持つて損をすることができる存在。

それは非常に興味深いと、彼は言っていた。

私には、それを知識として納得し、頭に入れておくことしかできないものであった。

しかしその知識は言語化できなかつたあの感情を明確にしてくれた。

今なら間違いなく分かる。

私が彼の横で覚えた感情は“憧憬”だ。

目を輝かせ、希望を語るように人物像を話す。

そんな彼の姿に私はあこがれを覚えたのだ。

私には、脳裏に描くほどに願える人なんていなかったから。

でも今の私には彼の言っていたことがはたして正しいのか、よく分からない。

“他人との感情の間で生きることができる”。

これはごく自然な人なのだろうか？

“理由はなくとも自分ではない誰かの為に行動する”。

これは人の長所なのだろうか？

私は他人との感情の間で苦しむ人を見た。

私は誰かのために行動することで自分を壊していく人を見た。

「ごめんなさい。許して」

一人ぼつんと部屋に座る背中がそうつぶやいたとき、私はそう思った。

私にとって、先輩と言えるようなごく自然な“人”は、何が正しいかに悩み、自分がとった行動に苦しみ、自らの責任に苛まれる、そんな人だった。

人とサーヴァントの間で揺れる私だからこそ、そう思ったのかもしれない。

彼の苦悩は他人事に思えなかった。

私にとっての先輩はいつしか彼になっていた。

重い瞼を開く。

「今のは……………」

夢？

いや、あれは記憶……………？

頭の上で何かが動く気配がする。

そうだった。

私はハツとして上体を起こした。

視線の先にはベッドの上に寝かされているマシユがいる。

一定の間隔で彼女のお腹が上に動き、息の吐く音と共にお腹が下がる。

彼女の動きと共に、静かな呼吸の音が私の耳に届く。

すうすうと健やかな響き奏でるそれは、彼女の命がここにあることを確かに示していた。

私は安堵の息を吐き、体から力を抜いてパイプ椅子に背中を預ける。

そしてゆつくりと首をそらし天井を見上げた。

「彼女はもう大丈夫そうだね」

私の視界にある人物の頭が入り込んだ。

「うわっ!!」

驚いて咄嗟に頭を上げる。

「おっと」

彼は頭を引いて私が起こした頭を避けた。

「びっくりした……」

「だいぶ前からここにいたんだけどね」

私が椅子を回し、彼の方を向くと彼は肩をすくめていた。

「いたなら起こしてよ……」

「これからまたしばらくまともな睡眠はとれないだろうから、寝られるうちは寝かしてあげたかったんだ。気に障ったなら謝るよ、マスター」

そう言われると何も言えないからずるい。

拗ねる私に彼は苦笑いで一言加えた。

「でも、ここで寝ないでちゃんと休んでほしい」

細身の体軀、黄金色の髪、碧眼をもつ青年が私にそう言う。

「……………大丈夫。こうしていたほうが楽なの」

私は体を彼の方へ向けてしゃべる。

「ありがとね。ジキル」

「そっか」

彼は私の言葉に笑顔で答えた。

そしてスクラブを着たままベッドの足元にある席に座る。

「医学をかじっているとはいえ、まさか僕が呼ばれるとは思わなかった」

苦笑いする彼の顔には疲労が見えた。

19世紀のロンドンで医者をしていたヘンリー・ジキル博士。

それが彼だ。

精神を病んだ父を思い、人間の善と悪を分離する薬を開発した人物。

イギリスの都市で長年医者として働きながら研究まで行っていた人間が、医術をかじっていただけとは謙遜のしすぎだ。

そんな謙遜も彼の優しさの一部なんだろうけど。

「ジキルがいてくれてよかった」

私はさつき見た光景を思い出す。

「脈拍弱くなってます！ドクターー！」



「気管挿管！チューブを持ってきてくれ！」

「出血止まりません！」

「出血箇所の特定は！」

「量が多すぎます！」

「IVR！ミハエル！CT！」

「準備終わってます！造影剤持ってきて！」

医療部の職員たちがマシユを取り囲んで手を動かし怒号を交わし続けていた。

あの連絡を聞いて、駆け付けてまず見た光景がそれだった。

血の気が引いた。

レイシフトの中で感じた恐怖とは別のものが私の顔面を真っ白にした。

マシユの手をもう一度握ろうと両手を上げた。

そこで気づいた。

未だに私の両手は震えていた。

乾いた笑いが自然と出てくる。

「情けないね、私。何もできなかつた」

振るえる両手を握り合わせ、震えを止めようとする。

だが力入れれば入れるほどに震えは大きくなっていく。  
思えばいつもそうだ。

戦闘でも、日常でも、私はただ見てることしかできない。

私には戦うための力がない。

高度な魔術を扱うための知識があるわけでもなく、かといって機材のメンテナンスを行えるようなスキルがあるわけでもない。

私は英霊たちを現界させつづける楔にすぎない。

カルデアに必要なのは楔であり、私自身ではない。

最近順調に物事が進んでいたから、こんな当たり前のことを忘れていた。

自分の思い上がりを戒めるように握った両手の甲に爪を立てる。

「それは違う。マスター」

うつむく私にジキルは言った。

「君がいてくれるから、僕はいまここにいます」

彼は優しい。

でも同情は今の私にはつらい。

ああ、あの時の所長はこんな気持ちだったのかな。

「それはそうだけども、でもそれは私じゃなくてもよかったです」

気を遣ってくれる彼に私は言った。  
そう。

このポストは別に私である必要はないのだ。

「本当だったら私よりも優秀なマスターが47人もいたんだよ。私の役目は彼らになら  
軽々とこなせたはずだもの」

私は数合わせの一般枠。

たいして彼らの多くはその類稀なる能力から引き抜かれた選抜メンバー。

この場所に座るべきは誰だったか、そんなものは自明の理だ。

「私は選ばれたわけじゃない。偶然よ。偶々、本当に偶々私が生き残っただけ」

甲に爪を立てた部分から痛みが走る。

それから爪の先端が少しだけ赤く染まる。

「たまたま生き残ったから私がマスターをやっているだけなのよ……」

別に今までやってきたことを否定しているわけじゃない。

悲劇の人物を演じたいわけでもない。

ただ事実は冷静に見つめる必要がある。

私でなければいけない、そんな事実は存在しないと。

「マスター」

近くに聞こえた声に私が顔を上げると、目の前に彼の顔があった。

「僕たちが見るべきは必然性でも運命論でもない。僕たちが歩んできた道だ」

「道なんて……………」

「誰だつたらできるか、じゃない。誰だつたらやれたか、でもない。重要なのは誰がやったか。それだけだ」

「……………」

「それだけが事実であり、不変の真実だ」

レンズの向こうの目は冷静に私を射抜く。

「どれだけすごいことをできるだけの能力があつたって、何もしていないんじゃない能力がないのと変わらない。行動をすること。それがこの世界で僕らに許された唯一のあがきだ」

彼はそう言うのと軽く息を吐いて、顔を離した。

そして眼鏡を取り、スクラブの首元にかけた。

「確かにその47人のマスターならより良い戦果を出せたかもしれないね。こんな状況でも自身で彼女の治療をできたかもしれない。でも彼らはいない。絶望的な状況でそれでもあきらめずに進んだのは君だ」

確かにそうかもしれない。

でも……

「自分が歩いてきた道を誇ればいいんだよ。たらればじゃなく、ここまで来たのは自分だと、その自負を持って進めばいい」

分かっている。

私が歩んできた道は胸を張って誇れる道程だった。

そう思わなければ力を貸してくれたみんなに失礼だ。

それでも、こう思ってしまう。

「私がつと技術や知識を持っていたら………」

「一人で全てをなそうと思っではいけない」

とても冷たい声だった。

彼の目は睨むように細くなっていたが、その視線が見るものは彼の瞳にしか映らないような何かに見えた。

「二人の間ができることなんてたかが知れている。だから人は手を取り合うんだ」

「……」

「君ができないことは僕らがやる。僕らができないことはカルデアのみんながやる。カルデアのみんなができないことは君がやる。それでいいのさ」

何でもできて、みんなに頼りにされるような人間になろうとすることは悪いことだろ

うか。

私の表情を見て何を思ったか、彼は冷たい瞳を私にも向けた。

「完璧な何かを作ろうと思つてしまえば、その先に待つのは自滅の道だ」

自滅……………

「僕は生前、人間の悪性をすべて取り去つて、善性だけを残せば平和な世界が出来上がると思つていた。だから人の悪性を取り除く薬を作ることに躍起になつた。そんなバカげたことの為に人生を費やして、僕が生み出したのは結局化け物だつた」

彼は生前、人の悪性を切り離す薬を開発、服用したことで自らの悪性に自由を与えてしまった。

切り離してしまつたがゆえに、手が付けられなくなつた悪性は彼のもう一つの人格となり、悪逆の限りを尽くした。

周りの人間を殺し、親しかつた人物を凌辱し、欲のままに動いた。

そしてその罪に耐え切れなくなつた彼は自死の道を選んだ。

「平和のために作つたものはそれと真反対のものに寄与してしまつた」

そんな彼が言うことに反論などできるはずもない。

「つまりね、人間は不完全だけれど、それこそが自然なんだ。その不完全性を崩そうと思えばどこかに歪かひずみができる」

彼の目にはいつしか冷たさが消えていた。

「だけど君は自然だ。どこまでも人間らしい。自分の無知や無力を知って、だからこそ人の手を借りて他人との感情の間でちゃんと生きていくことのできる自然な人だ」

「そんなこと……」

「それは誰にだつてできることじゃない。だから君は君ができることをやればいい。結果的にそれは君にしかできないことになっていくはずだ」

私ができることが……私にしかできないことになる。

単純にそう考えていいのだろうか

「そうだね……うん、そうだよね」

「だからよお、マスター。お前はもう少し周りを見た方がいいぜ」

彼の言葉を反芻していた時、彼の口調が荒々しくなった。

思わず彼の顔を直視する。

その瞳は真つ赤に染まっていた。

これは……

「貴方は、もしかしてハイド？」

私が質問すると彼は鼻で笑った。

「俺のことはどうだっていい。こいつがさつきからペチャクチャ話してやがる綺麗事はさらにどうでもいい。便所の糞レベルでどうでもいい」

彼は椅子から立ち上がり、そして私の胸ぐらをつかんだ。

「だが、あんなバケモンを野放しにしておくのは我慢ならねえ！」

鼻と鼻が付きそうな距離まで引つ張られ、目の前で怒鳴られる。

「てめえが死んじまつたら俺が暴れらんねえだろうが！」

彼は一体何を言っているんだろう？

「…化け物？」

「いるだろうがよ。俺と同じように自分の中にもう一匹入れ込んでやがるクソみてえな

野郎が」

自分の中に、もう一匹？

「こりゃあ同族嫌悪ってやつかあ!! そいつが近くにいただけでぶつ殺したくなるんだよ  
！」

彼は私を離し、眉をしかめる。

「いや、同族なんて言っちゃつまつたら悪いか。なんせあいつときたら入れてるもんが人間  
じゃあねえしな! ひやははははは!」

人間でない？



何のこと……………？

「ああ？なんだ？そのアホ面は？」

私の反応に彼は怪訝な表情をする。

「てめえ……………まさかとは思いが……………」

彼がそう言いかけたとき、彼の体は不自然な止まり方をした。

よく見ると震えている。

まるで何かと何かがせめぎ合っているように見えるその拮抗はしばらくすると彼の叫び声が変わった。

「ハイドー！」

彼の瞳の赤色が薄くなっていた。

だがしばらくすると瞳の濃さが滲んで元に戻っていた。

「うるせえ！ジキル！お前は引つ込んでやがれ！」

彼はそう叫んだあと、肩で息をしていた。

彼らがせめぎ合うことは体にも負担がかかるのだろうか。

彼はそのあともしばらく荒い呼吸を繰り返していたが、ダルさを振り払うようにして「こちらを睨んだ。」

「おい。お前のそのアホ面がくせえ演技じゃなくてただのアホ面だっというんなら教え

「やる」

「う、うん」

「ジキルよりひどい奴が紛れてるぜ、ここに」

「ジキルよりひどい……………」

彼は額に汗を流しつつも、愉快そうに笑う。

「ああ。こいつも大概いかれているが、そいつはもうほとんど終わってる、人としてな。あと一押ししてやったらおもしろえことなる」

「そいつ？終わっている？」

「いったい誰の話をしているの？」

私が質問すると彼は何が面白いのか三日月のように口を曲げた。

「そいつの名前は……………」

「え？」

「つ…………クソつ。めんどくせえ奴が来ちまった。」

集中治療室の扉の向こうからコツコツと足音が聞こえてくる。

「うるせえなあ。分かったよ、ジキル。こういうのはてめえの十八番だ。俺はとんずらする」

そういうと彼は私に背を向けた。

「マスター、忠告はしたぜ。死ぬんじゃねえぞ、俺はまだ殺し足りねえんだからな」

そして彼の体が透けていき、消えた。

霊体化したのだろう。

その直後、医務室の扉が開いた。

そしていくつかの書類を抱えたドクターが入ってきた。

彼の顔には疲労のせい或少し影が落ちていた。

私の姿を見て、眉を上げた。

「あれ？立花ちゃん。まだここにいたのか」

「う、うん。マシユの横にいないと心配で」

「そうか」

彼はこちらを見ると心配そうな目つきをした。

「……大丈夫かい？」

え？

「ひどい顔だよ」

無意識にペタペタと自分の顔を触る。

「まあ、無理もないけどね。あまり自分を追い込んじゃだめだよ」

ドクターはそう言ってベッドの横まで歩いてくると、彼女に繋がれている医療器材とカルテを確認し始めた。

病棟のベッドには患者の状態がすぐに分かるようにベッドにカルテが備え付けられている。

スタッフの人数は少ないから患者の状態が共有されないことはほとんどないけれど念のため、とドクターが言っていたことを思い出す。

機器のモニターを見ては何かを書き加えるその横顔に私は質問した。

「マシユはもう大丈夫なの？」

私が質問するとドクターは顔をこちらに向けた。

「ああ。彼女のバイタルは大分安定してきた。しばらくすればICUからは出られるだろう」

「そっか。よかった」

「……」

「……」

「ドクター、マシユがこうなった原因は……もうわかっているの？」

私の質問は機材を操作する彼の手をぴたりと止めた。

「……それについて話すために君も呼ぶつもりだった。一緒に来てくれるかい？もう何人か待たせている」

彼はこちらを見ずに機材の操作に戻りながら言った。

こちらからはその顔色は見えない。

「……分かった」

私は一言だけ返した。

S

ドクターに連れてこられたのは管制室の裏手にある倉庫だった。なぜこんなところに。

私の前にいるドクターが扉の前に立つと扉が自動で開いた。横にスライドして、部屋の中が見える。

「すみません。お待たせしました」

ドクターはそう言って中に入った。

私も追隨する。

中にあつたのはサロンのような場所だった。

開けた空間があり、中心に円形になったソファが置かれている。

一番奥の上座が所長。

左側にはレフ教授。

右側には達海が座っていた。

そしてソファから少し離れたところにダ・ヴィンチちゃんが腕を組んで立っている。

皆一様に険しい表情だった。

私が入ると奥の所長が視線をこちらに向けた。

「たいして待っていません」

しかめっ面のまま口を開く。

「それで、マシユの容態は？」

「全身からの出血、さらに輸血に伴う急性呼吸窮迫症候を併発し、一時は大変危険な状態でしたが緊急治療とマスターである立花ちゃんへの介添えもあつて持ち直しました」

ドクターは歩きながらマシユの状態を離す。

私も彼の後ろを歩く。

「予断を許さない状況ではありますが、今は安定しています。」

「……………そうですか」

ソファの横に着くと所長が視線を私たちの横のソファに向けた。

座れ、と言っているのだろう。

「失礼」

ドクターがそう言って座った後、私も静かに腰を下ろした。

「正直に言つて、彼女がデミサーヴァントでなければ助かる見込みが限りなく低いといえるほどの危篤状態でした。現状は安定していますがそれは留意していただきたく思っています」

「……………分かりました」

所長が頷いた。

一呼吸置くと彼女はそう質問した。

「それで、このメンバーだけを招集したのは一体どういう意図があるの？ ロマニ・アーキマン」

ドクターはしばらく沈黙していた。

意を決したかのような表情で口を開いた。

「ここには今回マシユ・キリエライトの消耗と混乱に際し、直接的に話を通せる人員だけを呼びました」

消耗と混乱？

私は彼の言葉に疑問を覚えた。

しかし私より早くレフ教授が疑問を口にした。

「直接的に話を通す？ それは一体どういう意味だい？ ロマニ」

「彼女の現状に対し、総合的な視点で建設的かつ倫理的な主張ができるという意味で発言したつもりです」

総合的な視点で建設的かつ倫理的？

抽象的すぎて何を言っているかが分からない。

だが私とは反対にレフ教授は納得したようだった。

彼は笑みを浮かべてなるほど、と言った。

「彼女の現状？」



「はい、それなのですが……………」

所長の疑問にドクターは抱えている書類の中から大きな白黒の写真のようなものを取り出した。

そしてソファに囲まれ中央に鎮座している円卓に置いた。

「これを見てください」

みんながその写真に視線を向けた。

数秒後に所長が呟いた。

「これは……………エコー？」

「その通りです」

ドクターは同じような写真を何枚か取り出し机の上に並べた。

「これはマシユの子宮を超音波検査で確認したときの写真です」

子宮？

彼は並べられた写真の中の一枚を指さす。

「そしてこちらを見てください」

彼が指さした部分には灰色で映っている体の部分の中に黒い色で映った空洞のようなものがあつた。

「この写真中央よりやや左にある黒い部分。これはおそらくですが胎嚢です」

「……なんですって」

所長が驚愕の表情を浮かべる。

胎囊………？

「それはつまり………」

「はい。マシユ・キリエライト、彼女は妊娠しています。そしてそれこそが今回、彼女が  
臥した原因ではないかと私は推測しています」

## 不和

カルデア戦闘服と呼ばれるスーツを身に包む。

この礼装は私たちの戦闘補助と同時に、レイシフトの時に私たちが意味消失することを防ぐ役割も担っているらしい。

ボデイラインを強調するかのようなタイトなスーツにはいささか気がひけるがしよ  
うがない。

手首のスイッチを入れるとスーツと地肌の間の空気が抜け、ぴたりと体に張り付く。

「ふう」

制服をハンガーにかけ、ロッカーに入れる。

少し長くなってきた髪を無造作に後ろでまとめ根元をヘアゴムでくくる。

よし。

私は更衣室の扉を抜けて廊下を歩き、管制室一階に入った。

円形に広がった大部屋には中央の床を囲うようにコフィンが並び立っている。

元々は48名のマスターが使う予定だったものだ。

今となつては使う人数も多くて3名。

いざと言うときのための整備しかされておらず、私たちの旅を思わせるような使用感はない。

新品のようにピカピカと光っている。

「立花ちゃん！」

部屋に入ると同時にコフィンの前で立っていたドクターがこちらに気付いた。

私は小走りで彼のもとへ向かった。

「お待たせしました」

「全然。待つてないよ」

彼は少し笑ってそう答えた後、手に持ったタブレットを操作した。

何回かスワイプやタップを繰り返し、よしと呟いた。

「バイタルは正常。魔力も異常値はない。準備は万端だね」

戦闘服には装着者のバイタルデータを自動的に専用端末に送信する機能が付いており、端末を操作すればいつでもその情報を確認することができる。

ドクターはいつもレイシフトの前の最終チェックとして、いつもこれを行っていた。

ただ、私は彼がかけてくれた言葉に明るい返事ができなかった。

「はい……………」

「……………」

「……………」

「立花ちゃん」

「っ!？」

ぼーっとしていたらいつの間にかドクターの顔が目の前にあった。

吃驚した。

「そんなに心配しなくても大丈夫さ」

「え？」

「ダ・ヴィンチちゃんも最後だから気が立っていただけだよ」

「……………そうかな」

「そうさ」

ドクターは私に笑いかけてそう言った。

気は休まらなかった。

私は知っていたからだ。

ドクターが嘘をつくとき彼は決まって右手で左手の指の付け根をいじること。

そして今、彼が後ろで組んでいる両手がやっっていること。

ドクターの笑顔はもつと自然体で、今のようなきこちなさがないこと。

私は彼の気遣いに何ら返すことができず、昨日の管制室裏手での話し合いを思い出した。

## S

ドクターの言葉に頭が固まった。

妊娠……………

妊娠？

「いや、ちょっと待って。え？マシユが妊娠？ごめん。全然分かんないんだけど」  
ドクターは渋い表情をした。

「うん、まあ、そうなるのも無理はないよ……………」

無理はないとか、そう言うことではなくて。

だって、え？

妊娠ってあんな重症になるの？

それともマシユがデミサーヴァントだから？

大丈夫なの？

というかそもそも妊娠って……………

相手、だれ？

ダメだ。

いろんなことがありすぎて言うべきことがまとまらない。

私が頭を抱えて悩んでいると向かい側のソファに座っていた所長が中央の円卓を思いつき叩いた。

バンツ！と音が響き、部屋の中の空気が振動する。

「馬鹿を言うのも大概にしなさい！ ロマニ！ 妊娠でそんなことが起こるわけがないでしょう！！」

所長はドクターを睨んだ。

だが怒鳴られたドクターは冷静だった。

「我々もそう思い、彼女の脳、臓器、神経、血管、体のいたるところを精密検査しましたが体には何も異常がありませんでした。唯一発見できた異常らしい異常は魔術回路の損耗ですが…」

「そちらの方がよっぽど原因になりうるでしょう!」

「確かに彼女の回路は通常の損耗率を逸脱しています。こちらも原因としては考えられなくはないですが、彼女の出自を考えれば納得できるものでもあるかと」

「っ……………」

出自……………

多分、マシユがデザイナーズベイビーであることだろう。

「それともう一つ、体の異常ではありませんが彼女に問題がありました」

「……………もう一つ?」

ドクターはあるグラフが描かれた紙面中央の円卓に置いた。

よく見るような折れ線グラフだ。

先に行くにつれてグラフは緩やかな右肩上がりになっていき、ある地点から右肩下がりにになるとグラフが切れる直前で右下にストンと落ちている。

「はい。彼女の霊基が安定していないことです」

「霊基が安定していない?」

「これは彼女の意志と霊基の相関率を数値化し、グラフにしたものです。ここに注目してください」

ドクターが指さしたのはグラフの頂点部分だった。



「彼女の霊基はこの地点を最後にして徐々に不安定になっています」

彼が指さした点から縦軸が一致する日時は……………

「これはアメリカのとき？」

「そう。マシユは第五特異点の遠征以来徐々に力を制御できていなかった。こちらとしては彼女が宿した英霊の真名が判明していないことが原因かと思っていたんだが……………」

「むしろ真名を彼女が理解したと同時に悪化した、ということか……………」

レフ教授が右手で顎をさすりつつ、呟く。

私は彼のように冷静に分析するどころか困惑した。

「ちよ、え？どうということ？マシユの力が弱くなってたなんて、私何も知らないんだけど……………」

マシユはいつも通りだったし、誰にもそんなこと言われていない。

ドクターはバツが悪そうに首の後ろに右手を置いた。

「すまない。これは君たちにもマシユ自身にも伝えていなかったんだ」

「どうして？そんな大事なこと……………」

「時期が時期だし、マシユ自身が英霊の力を引き出すことに焦ってしまうと思っただけだった」

彼はそう言った後、頭を下げた。

「この判断は早計だった。すまない。むしろ状況を悪化させてしまった」  
彼の謝罪に私は慌てた。

「や、やめてよ！ドクター！私はただ理由を聞いただけで……」  
謝罪を求めたわけじゃないって！

「ねえ！達海！」

私は右側に座る達海に同意を求めた。

「……」

しかし達海は俯いているだけで何も答えなかった。

いやな沈黙が部屋を漂う。

頭を下げ続けるドクターに私がおろおろしていると見かねた所長がため息を吐いた。

「ロマニ、頭を上げなさい。最終的に承認したのは私です。貴方が謝ることではありません」

「これは……彼女の主治医として、判断を間違えたことに対する責任の一つだと思っ  
ています」

「責任は責任者がとるものよ。貴方が主治医として今すべきことは状況説明を続けるこ  
とです」

「……………分かりました」

彼はしばらくの沈黙の後、頭を上げた。

「失礼しました。先ほどの続きを話します」

そして彼はグラフが大きな傾斜をつけて右肩下がりをする直前の点を指さした。

「ここです。ここが彼女の霊基が急激に不安定になった時です」

彼が指さすところを見る。

「キヤメロット……………よね？」

「ああ」

ドクターが神妙に頷く。

あの時でマシユに一番変化があったのは……………

「さっき言つてた真名が分かったとき……………」

「そうなんだ。彼女は自身に宿す英霊が誰なのか理解してからデミサーヴァントとしての在り方が強く揺らいでいる」

なぜ？

彼の話聞いて、真つ先に出てきたのはこの言葉だった。

マシユはあの特異点を通して、とても強くなった。

それは真名を理解し、宝具を使えるようになったことだけではない。

彼女が宿す英霊の知己と出会い、彼らとの戦闘や交流を通して精神的にも成長していった。

マシユは自分が何者なのか、それを受け入れていた。

なの…:

「マシユはデミサーヴァントの実験体として作られたデザイナーズベイビーだから、もともと通常の人間よりも寿命が短い。だがそれを加味してもこの症状は異常だ」

ドクターの言葉にレフ教授が反応した。

「その症状の原因は彼女が身籠ったことと霊基の不安定さだど?」

「ああ。消去法だけど、これ以外に原因が考えられない」

彼は机の上のグラフを見て、腕を組む。

「この二つがどう関係しているのかは分からない。だが少なくともこの症状との因果関係はあるはずだ」

レフ教授は顎をささるのをやめ、声を少し低くした。

「つまり彼女がどうして臥せってしまったか、明確な原因は分からないということか」

「すまない。僕の力不足だ」

「治療法の目途は立っているのか?」

「……………それもまだだ」

「…そもそも彼女の体で起きていることが正確にわからなければ治療法の確立もしようがない、というわけか」

「ああ。医者として情けない限りだけれど」

「ふむ」

教授は腕を組み、ほんの数秒だけ考え込んだ。

それからまた言葉を発した。

「マシユが臥せてしまい、治療の目途は立たず、安静にさせておくしかない。だとするな

らば………」

するならば？

「我々が今話し合うべき事柄は第7特異点には彼女の代わりに誰を送り込むか、という

ことじゃないか？」

「いやいや！ちよつと待つてよ！」

彼の主張に私は異議を唱えた。

「何か問題か？」

教授はさも当然かのようにこちらに疑問を提示してくる。

「他に話すべきことがあるじゃないですか!!」

「…ほかに優先すべき議題？なにかな？」

いや、不思議そうに私を見るところじゃないでしょう!!  
妊娠だよ?

新しい命を授かったんだよ?

マシユがお母さんになるならするべきことがあるでしょう!!

「マシユが誰との子を授かったかって話ですよ!」

「……………」

「ポカンとするとところじゃないでしょう!! 子供ができたなら夫婦でこれからどうしていくのかを話し合うべきです!」

マシユが床に臥せているならなおさらだ。

教授は苦笑いした。

「フジマル君……………これは公的でなくとも会議だ。それぞれがある程度の役職を背負っている。この場はプライベートなことを話し合う場ではない」

プライベート?

「我々は組織全体を見て、建設的な話し合いをしなくてはならない。レイシフトは明日だ。そんなに時間も無い」

「そんな理由……………」

「ロマニも言っていただろう。総合的な視点で建設的な主張ができる人間を呼んだと。」

我々がすべきことはそれだ」

子供を諭すように教授は優しく言った。

わずかに眉をしかめ、困ったように笑っている。

「違います！」

私は反論した。

納得いかない。

今、最も考えるべきはカルデア全体の動きではない。

「私たちが今すべきことはマシユを慮ることです！」

「それは……その通りだが、先ほどの話し合いで今は安静にしておくこと以外手の打ちようがないと結論が出ただろう？」

「確かにマシユの体に関してはできることは少ないですが、心に関してはできるはず」

まだ彼女のためにできることは残っている。

「心？」

「はい。マシユの意識が戻ったら彼女がどんな状態なのか伝えなければなりません」

「まあ、そうだね。こんな状態になっているのに隠すことは逆効果になるだろうからね」

「ただでさえ体が不調な時に、マシユは妊娠という彼女にとって初めての出来事に向き

合わなければならぬんです。彼女はとても不安になるはずですよ」

「ふむ」

「そんなとき一番彼女の支えになるのはパートナーの存在じゃないでしょうか？」

マスターである私もいるけど、それでも子供は二人でつくるものなのだから。

少なくとも私の両親はそうやって二人で私を育ててくれた。

「だからマシユのパートナーが誰で、この先私たちがどう二人をサポートしていくか、それをまず話し合うべきですよ！」

「レイシフトは明日だ。彼女が出撃できない以上代理はすぐにきめなければならない。個人と組織、優先すべきなのはどちらか、明白だ」

「いいえ！組織を構成するのは個人ですよ！個人をないがしろにしていけば、いずれ組織は崩れます！」

私は一步も引かず、教授に面と向かって歯向かう。

「ここは駄目だ。」

命を紡ぐ人の営み、これをないがしろにして私たちが人理を救うなんてどうして言えるようか。

私と教授の諍い。

それを止めたのは今まで一言も発さなかった人物だった。



「立花ちゃんの言うことにも一理ある」

レフ教授はその一言を聞いて、視線を壁際にいる人物に向けた。

「どういふことかな？」

その視線を受け、ダ・ヴィンチちゃんは壁に預けていた身を離して勝ち気な笑いを浮かべる。

「とりあえずは彼女の言う通り、マシユの逢瀬の相手が誰であるかを考えるのも悪くはないと言っているんだよ」

ダ・ヴィンチちゃん！

やっぱり彼女ならわかってくれると思った。

当然教授はいい表情を浮かべなかった。

「その人間を特定したところで今、直接的に彼女の救いとなる手立てはないんだ。それが建設的でないと天才を自称する君ならわかると思っていたんだが……」

「おいおい。人の話はちゃんと聞くものだけ、レフ教授。ロマニは総合的な視点で建設的かつ倫理的、と言ったんだ。どちらに偏りもせず、バランスの良い話し合いをするところが彼女の主治医のお望みだ」

「それは理想論だ。ロマニはそれができる人材を呼んだと言っただけで、どちらもやるように要求しているわけではない。」

ダ・ヴィンチちゃんはそれを聞いてにやりと笑う。

「それはどうかな？ 少なくとも私はそうは思わない」

「なぜ？」

「これが明らかに人為的な工作だからさ」

「…」

彼女の言葉に教授が押し黙る。

ダ・ヴィンチちゃんは肩をすくめた。

「まさか、マシユがこの時期に偶然妊娠したなんて思つてはいないよね？」

え？

彼女の言葉に困惑する。

確かに子を作る相手を見極めるという意味なら、それなりの時間をかけて相手を知ることになるだろうから偶然とは言えないかも知れど……………

「偶々妊娠して、偶々霊基が不安定になって、偶々第7特異点のレイシフト前に倒れた」

彼女の視線はもう一人、未だ言葉を発していない人物に向けられた。

「そんなことがあつてたまるか、そう思うだろ？ 達海君？」

ダ・ヴィンチちゃんは達海を睨んだ。

「……………」

「そんなに睨まないでくれよ。少し考えればわかることだろ？」

彼女は冷たい視線で達海を見下ろす。

「まず一つ。彼女に体を許されるくらい親密な人間であること」

彼女は人差し指を立ててこちらに向けた。

「デミサーヴァントであるマシユに強引なやり方はほぼ不可能。彼女自身が受け入れるぐらいには親しい関係の人物である必要がある。英霊はそも受肉をしていないから考へなくていい」

次に、中指を上げた。

「二つ目。彼女と一緒にいる時間が長いこと」

左手には、いつの間にか先端に大きな結晶の取り付けられたいつもの杖がにぎられていた。

「当たり前だが私たちも忙しいからね。四六時中とまではいかななくてもそれなりに彼女と一緒にいる時間がないとそんなことする機会がない」

彼女は薬指を立てた。

「そして三つ目。男であること。これは当然だ」

彼女はそれを言い終えるとこちらに近寄ってきた。

彼女の目つきは冷たいままで、左手に握られた杖も相まってまるで戦闘前の雰囲気

見える。

「この三つが当てはまる人間と言うものは意外と少ないものでね。その最も足る人物が君なわけだけど、達海くん」

ソファの背もたれに手を置き、まるで芸術品を眺めるような目で彼女は弟の横顔を見た。

「どうなのかな？」

「……………」

弟はダ・ヴィンチちゃんの無機質ともいえる瞳をまえにしても何も答えなかった。ただ俯き続けているだけだ、

「沈黙は肯定とみなすけど、それでいいのかい？」

「……………」

え……………え!!

まさかとは思ったけど本当に!!

マシユと達海が!!

いつの間に!!

「さて、本題はここからだ。本当ならおめでとうの一言でも言いたかったんだが…」  
背もたれに置いてある手に力が入り、ソファのきしむ音が聞こえた。

「君、いったいマシユに何をした？」

「……………」

……………え。

「あの霊基の乱れ、妊娠が表面化してからの症状、まるで拒絶反応のように見えたんだが」

「……………」

「だんまりかい？」

「……………」

達海は何も答えない。

「生憎、こればかりはそうもいかないんだ」

「……………」

「なんとか言ってくれたまえよ」

「……………」

黙り続ける達海にダ・ヴィンチちゃんはとうとうしびれを切らした。

ダ・ヴィンチちゃんは達海が座ってるソファを蹴り飛ばした。

そして達海的首元つかみ、持ち上げる。

「ダ・ヴィンチちゃん!!」

驚いた私の声など我関せず、左手の杖を達海の顔に向けた。杖は魔力を纏い、淡い光を放ち始めた。

そしてその光が俯いていた弟の顔をくつきりと照らし出した。

「え……………」

気づいたら声が出ていた。

弟の顔が見たことのない形相だったから。

泣き腫らしたように真っ赤になった目。

とても濃い隈。

憔悴しきったような顔。

その暗い目は、今にも魔術を放たんとする彼女の目をただ睨んでいた。

こいつのこんな顔、初めて見る……………

「何をしているの!!」

「レオナルド!」

呆然としたのもつかの間、彼女の行動に吃驚したドクターと所長が立ち上がり、ダ・ヴィンチちゃんを諫めようとする。

しかしダ・ヴィンチちゃんはそんな言葉は聞こえない風に達海に低い声で問うた。

「君、今の自分の立場が分かっていないのかい？ 数名程度部下を増やしただけで偉く  
なったと勘違いしているのか？」

「……………」

ドスの利いた声で首元に杖を押し付けるダ・ヴィンチちゃん。

達海はいまだに睨むだけだ。

「人に好かれたからって何をしていいとでも勘違いしちやったのかな？」

襟元が達海の喉に食い込む。

「それとも、人間やっつてないと平気で人の体を壊しちやうのか？ ええ？」

その言葉を聞いた達海が初めて表情を強く動かした。

弟は眉を吊り上げ、ダ・ヴィンチちゃんを睨むと襟首を掴んでいる彼女の右手を払い  
のけた。

「……………」緒にしないでください…」

つかまれていた体勢が崩れ、その場に倒れる。

「蛙の子は蛙か。それとも自覚がないのか。それならもつと重症だね」

「違う…」

達海は拳を強く握りしめていた。

ダ・ヴィンチちゃんは軽蔑するかなのような目でそんな弟を見下ろしていた。

そして吐き出すかのように言葉を発した。

「思い込みだけで進むところが君の両親とそっくりだ」

達海が目を見開いた。

「一緒にするんじゃないねえ!!」

怒声を上げてダ・ヴィンチちゃんに殴りかかった。

「達海!!」

しかし英霊に生身の人間がかなうはずもない。

迫りくる右手に対し、ダ・ヴィンチちゃんは達海のわきに体を入れ込み、その右手を抱え込んだ。

そして一本背負いの要領で達海を思いっきり投げた。

自分の殴りかかった速度に加え、彼女が利用した慣性も相まって物凄い速さで達海は地面にぶつかった。

「ッ!!」

声はなく、ただ肺から息だけが漏れ出た。

ダ・ヴィンチちゃんはそれだけで済まさず、両膝で達海の両腕の動きを封じ再び弟の首に杖の先端を据えた。

「( )のっー」



弟が怒りに負かして声を出す、完全に動きを止められていた。

「もう一度問う。答えろ。マシユに何をした？」

その問いに対し、達海は憤怒の表情を崩さず、怒声を放つ。

「あんたらが言えることか?! 人の命を弄びやがって! どつちが同じだよ! 思い込みだけで進んでいるのはそつちだろ?!」

「質問しているのは私だ」

「大義名分を抱えりや何したつていいのかよ! そうやつて造られて生まれてきた奴らがどんな思いで生きてるのかも知らねえで! 何度も何度も同じようなことして!」

「つ!!」

ダ・ヴィンチちゃんが目を見開く。

達海は右手の甲が光を発していた。

まさか、あいつ令呪を使う気!!

「達海くん! 落ち着け!」

ドクターが目を剥いて叫ぶ。

「もううんざりだ! 平和だの、未来だの」

右手の令呪が赤い光を発する。

「教えてやるよ…あんたらみたいになやつらが上から目線でやったことがどういふ結果を

産むか!」

「やめなさい!藤丸達海!」

所長が自らの魔術刻印を起動し、右手を達海に向けた。

「令呪を持つて命ず!来……………」

達海が何かを命令しようとした瞬間だった。

弟の体の力が急に抜けた。

頭が力なく床に横たわる。

「達海!」

弟の不自然な挙動に私は慌てて駆け寄った。

「どいて!ダ・ヴィンチちゃん!」

ダ・ヴィンチちゃんをどかし、だらんと力の抜けきった頭を動かして達海の顔をこちらに向けた。

目の光がない。

口からは唾液が垂れ流れている。

「どうやら技術部長は疲れているようだね」

顔を上げると軽い笑みを浮かべたレフ教授が手を払っていた。

「これは……………」

私が弟を抱えながら、呆然と呟くと彼はああといった。

「ガンドだよ。北歐に伝わる古い呪いでね。少しいじると人間の神経網を混乱させたりもできる」

「神経を…」

弟の心配が頭をよぎったが、口に出す前に教授はそれを悟ったようだ。

「安心したまえ、別段命にかかわるような呪いではないし、後遺症になる恐れもない。一時間もすれば目を覚ますだろう」

「そう、ですか…」

安堵して軽く息をもらす。

教授は動きの止まっていた周りを見渡すと所長に向けて言葉を投げかけた。

「オルガ。いかに部門長と言えど先の行動は問題だ。カルデアの規約条例第32項指示系統の順守、ならびに第42項武力の管理義務に違反している。この場で即刻処罰することを提案する」

「え、ええ。そうね…」

所長は一連の流れに驚きを隠せないようだったが次第に状況が整理できたのかいつもの表情に戻っていった。

「技術部門長、藤丸達海。この者を規約違反として懲罰房で2週間の拘留を命じます。

今から医務室に運び、意識が戻り次第処罰を実行します」

所長はマニュアル通りの処罰を言い渡した。

「了解した」

レフ教授は苦笑いのままそう言った。

所長はダ・ヴィンチちゃんに視線を向ける。

「それからレオナルド・ダ・ヴィンチ」

「なんででしょうか？」

ダ・ヴィンチちゃんはいつの間にか杖をしまっており、いつも通りの姿で立っていた。

「貴方は英霊であるし、規約に該当する項目は少ないですが職員に対しての行き過ぎた

挑発は慎むように。武力の行使は厳禁です」

「失礼しました。善処いたします」

うやうやしくダ・ヴィンチちゃんは頭を下げた。

彼女のしおらしい姿に所長は暫く彼女を訝しげな表情で注視していた。

だがしばらくするとため息を吐き、部屋の全員に指示を出した。

「余計な混乱は避けるべく、この部屋で話したこと、起こったことはすべて口外厳禁とし

ます。マシユは体調を崩し緊急入院、ICUでの集中治療を継続という形のまま、藤丸

達海は訓練中の負傷で治療中とします。いいですね？」

彼女の問いに部屋の全員が了解の意を示す。

「明日のレイシフトは予定通りに行います。人員については再度検討しますがその前に……」

彼女は私が抱えていた達海を見た

「ロマーニ、彼を医務室まで運ぶわよ。担架を持ってきて頂戴」

「は、はい。了解しました」

ドクターが小走りで廊下に出ていく。

「立花、あなたはもう休みなさい。あとは私たちでやっておくわ」

「……………分かりました」

私は呆然としてそうつぶやいた。

そして達海が運ばれていくのをただ見ていた。

§

あのあとしばらくして達海は医務室で目を覚ました。

俯いて大した会話もせずに大人しく懲罰房に入った、らしい。

私が直接見たわけではない。

ドクターから聞いた。

もう訳が分からない。

達海もダ・ヴィンチちゃんもいったいどうしたって言うのよ。

あの後、ダ・ヴィンチちゃんもそさくさと部屋から出ていつてしまったし。

何がどうなっているのか…

「ねえ、ドクター。昨日二人は何を話していたの？」

私には二人が言い争っていたことがよく理解できなかった。

マシユのことをふまえたうえで何か違うことを話していたとは思うけど。

私の質問にドクターは虚を突かれたように固まったように見えた。

しかしすぐに困ったように笑い、右手を首の後ろに回した。

「いや、僕にもよくわからなくてね。あの後、ダ・ヴィンチちゃんに聞こうと思ったんだ

が僕もマシユと達海くんの検査でいつぱいつぱいでき」

「そっか…」

「今回のレイシフトが終わったら聞いてみよう」

「……………うん。そうする」

「じゃあ僕は上に戻るから、何かあつたら言つてね」

彼は管制塔の方へ歩いて行つた。

…とりあえず私も目の前のことに集中しないと。

なんであれ、これで最後の特異点だ。

私は私のやるべきことをやる。

『聞いたぞ。あの雑種、有象無象から狂犬に鞍替えしたそうではないか』

コフィンに入ろうとしたら頭に声が響いてきた。

これは……………

「英雄王。どこで聞いたんですか…」

霊体化しているのだろう。

姿は見えないが彼が笑っているのが目に見える。

『緘口令など敷いたところで人の口に戸は立てられぬ。真に口外したくないというので

あれば、死人に口なしということわざを学ぶのだな』

相変わらず物騒な…

『まあ、よい。ようやく狂犬に鞍替えしたのだ。あの半端者はどこまで俺を楽しませてくれるか期待しておくでしょう』

「……………?」

迂遠な言い回しも相変わらずだ。

『雑種よ。お前も世界を救うマスターの自覚があるのならその責を改めろよ。呆けていと要らぬ傷を負うぞ』

「それってどういう…」

彼に聞き返そうと周りを見渡すが声は帰って来ず、既に彼の気配は消えていた。

誰も彼も私に分からない事ばかり言って……

ちゃんとわかるように言つてよ！

「もうー」

投げやりな気持ちになりながらコフィンの前に立つ。

鉄の棺桶のような金属の筒の前面、ガラス張りになっている部分がスライドし開いた。

肩幅の1.5倍ほどの直径の筒に体を入れるとガラスがまたスライドし、コフィンを閉じた。

『立花ちゃん。準備が良ければ右手を強く握つてくれ。それを合図にコフィン内に麻酔を充填する』

この礼装はバイタルだけでなく体の負傷やどう動いているかもデータ化できるらしい。



もう何でもありだな、この礼装。

「ふう」

私は深呼吸した。

倒れたマシユ、何を考えているか分からないダ・ヴィンチちゃん、激昂した達海。今まで起こらなかったことが次々に起こっている。

あまりにも分からないことだらけだ。

このまま特異点に向かってもいいものかと、そう思う自分がある。

でもレイシフトは簡単にできることじゃない。

職員が大人数で準備をして初めて確実に安全に行える。

だからもう後には引けない。

それにこれが終わればすべてが丸く収まる。

そのはずだ。

私がここで踏ん張れば、最後はみんな笑顔で喜び合える。

だから………

私は右手を強く握りしめた。

「終わらせる。世界を取り戻す」

頭の上と足の下から白い煙が噴き出してきた。

次第にコフインの中に蔓延し、そして意識が薄れる。  
『第7グラウンドオーダー、実証開始！』

## 泥海

耳元をひゆうひゆうと風のようなものが通り抜ける。

全身が下から持ち上げられているような感覚がある。

手先が妙に寒い。

なんだ？

いったい、これは……

妙な感覚を体にまといながら、だるい頭を押しえて目を開ける。

ここは…

私の目の前に広がるのは見る限り地平線まで続く真っ黒な大地と赤黒い空だった。

それ以外には何も見えない。

建物や道路のようなインフラ設備もない。

「へ？」

目の前に広がった光景にアホみたいな声を上げた。

なんだこれ……

ここが神代の世界、なの？

耳元のうるさい音は今もなお響いている。

さつきからなによ？この音……

「え、あれ、これ……落ちてる!!」

下を見ると真つ黒な大地までにはとても大きな距離があつた。

ちよ!!これ上空!!

私、空中に転移したの!!

どうなってるの!!

「ちよつと！ドクター!!どうなってるの!!これ!!」

私はスカイダイビングしながら耳元のインカムに手を当てた。

転移の位置座標間違つたとかじゃないよね!!

『……………』

私の必死の呼びかけも虚しく、インカムから聞こえてくるのはノイズだけ。

返事が何一つ帰ってこない。

「無視?」

『……………』

ちよいちよいちよい!

嘘でしょ!!

こんな時に故障とかやめてよね!!

下に見える黒い大地がどんどん近づいてくる。

やばい!やばい!やばい!

これ洒落にならない高さなんですけど!!

「ちよつとアンタ!暴れない!」

後ろで声が聞こえた。

そして首元をつかまれたのかのように礼装が首に食い込んだ。

「うぐつ」

カエルのような声が出る。

く、苦しい…

咄嗟に首元に手を当てると頭上からお叱りの声が飛んできた。

「動くな!バカ!」

声のする方を見上げる。

「ジャンヌー！」

私の後ろには達海が召喚したサーヴァントがいた。

昨日、急遽変更するレイシフトメンバーに所長が推薦したサーヴァント。

マスターがいないサーヴァントをなぜ連れていくのか疑問だったけど、半ば強引にマシユの枠にねじ込んだようだ。

彼女も同じように上空に転移されたのだろうか。

って！そんなこと考えてる場合じゃない！

取り敢えずなんとかしないと！

彼女は冷や汗を流しながら下を睨んでいる。

そして地面が近くなると私に向かって叫んだ。

「着地するわ！放り出されんじやなわよ！捕まってなさい！」

「どっこい！！」

「腕とか腰とかあるでしょ！」

「この状態で！！」

私、親猫に首を噛まれて連れていかれる子猫みたいな状態ですけど！！

「あー！もう！」

彼女は空中で落ちているのに器用に体勢を変え、私を肩に抱えた。

腰が固定され、きりもみ回転しかけていた体が安定する。

その直後、ドンツと体に衝撃が走った。

着地した地点がものすごい音を出してへこむ。

そしてバシヤツと音がして着地点を中心として環状に大きな波が立った。

水しぶきが周りに跳ぶ。

波？

よく見てみると下にあるのは地面ではなかった。

真っ黒い液体だった。

そして黒い液体が彼女の下半身を濡らし、こちらにも波が飛んできた。

「ふんっ！」

ジャンヌは私を抱えたまま、いつの間にか持っていた右手の旗を払い、波をすべて吹き飛ばした。

私に飛んできた水しぶきはすべて旗に防がれる。

純白であった帆が真っ黒に染まる。

「あ、ありがとう」

濡れないように計らってくれたジャンヌにお礼を言う。

ジャンヌはお礼を聞くと目を吊り上げた。

「あんたねえ！私がいなかったらどうするつもりだったのよ！」

「え、どうしようもなかった……かな？」

「~~~~~っ!!!」

彼女は私の返答を聞くと顔を真っ赤にした。

すわ大激怒かと私は身構えたが彼女は噴火することもなく、とても大きなため息を吐いた。

「はああ……そりゃあ、そうよね。どうしようもないわ」

そして右手で頭をガシガシ書いた。

「つたく、なんで私があんたのお守をやんなきゃいけないのよ」

彼女は心底嫌そうにそうつぶやいた。

「あははは……ごめんねえ」

「私の管轄外だっつーの」

苦笑いするしかない。

私は米俵のように彼女を抱えられながら周りを見渡した。

「ジャンヌも、って事は英雄王も上空に転移したのかな？」

あのド派手な金びか鎧を探すが、それらしきものは見当たらない。



「知らないわよ。あんなの」

けツと舌打ちでもしそうな目つきで吐き捨てる。

「……………少なくとも上空から見た限りじゃ、あいつはいなかったわよ」

そして嫌そうにしながらも彼女は割と正確な情報をくれた。

すごいな。

あんな状況で周りを冷静に観察できるとは。

流石サーヴァント。

「おかしいなあ。一緒に来てるはずなだけど……………」

来る直前にもいたし。

「この辺りにはいないかもしれないわね」

ジャンヌも周りを少し確認した後そういった。

「別々の場所に跳ばされたってこと？そんなこと今までなかったけど」

「あんたも私もあんな高さに転移したわけだし、あいつが辺鄙なところに飛ばされたっ

て何の不思議もないでしょ」

確かに。それもそうだ。

「だとすると困ったなあ。英雄王いないと何もわかんないよ」

現地の詳細な地理は彼頼みだったのに。

私の発言にジャンヌは苦み走った表情をする。

「悪かったわね。私だけで」

「そういうことじゃないよ！」

ジャンヌがいてくれなかったら今頃私肉塊になってぶかぶか浮いてたよ！  
そう思ったのだが完全に拗ねてしまった。

この話はやめよう。

まあ、彼なら単独行動スキルもあるし、現地人だし、それでいて強いし。

大抵のことは一人でもなんとかなるだろう。

取り敢えず彼がいらないなら私たちだけで現在地の把握ぐらいはしておかないと。

そう思っただけで周りをみるが……………

「ハイ、どいっ！」

先ほど上空で見た黒い地面はどうやら黒い水のようだった。

ジャンヌの腰辺りまで水位がある真っ黒な水面がどこまでも広がっている。

どうやら水が濁ったというわけでもなさそうだ。

汚れと言うよりこの液体そのものが黒い。

「……………本当にどこなんだろうっ！」

海、なのだろうか？

辺り一面がすべて水面であるからそうと言えなくもないけど、水位が腰のあたりと言  
うのは海と言うには随分低い。

周りには陸らしいものは何も見えないし……

バビロニアとはこういう場所なのだろうか？

それとも神代と言うのはこんな殺風景な世界なのか。

全然分かん。

私は先ほどのように耳のインカムのスイッチを押す。

「聞こえますかー？」

『……………』

「もしもしー！」

『……………』

聞こえてくるのはさつきと変わらずノイズだけだ。

完全に壊れたな……

おかしいな、来る直前に整備も動作確認もしてあるはずなんだけど。

と言うかあつちと連絡取れないってまずくないか？

バックアップがないとこちらの状況も分からないし……

ジャンヌの肩にのりながら腕の端末を起動する。

モニターが腕の上に表示される。

そこからアイコンを視線でスクロールし、非常用のマニュアルを確認する。えーつと、こういう時は強制送還か…

といつてもこつちの座標も分からずにレイシフトなんてできないだろう。

目印になりそうなものもないからこつちから位置座標を送るというのも無理だし

………

できるとするとメールの送信くらいか。

私は現状を軽く要約し、通信機器の調整と指示の要求を書き留めたメールを送信した。

取り敢えず今あつちとの連携はこれぐらいが限界かな。

「ヤッ…」

あちらからの指示が期待できないならこちらの独断で動くしかない。

どうするか………

私はあたりを見渡す。

本当に何にもない。

波打つ黒い水面と赤黒い空。

周りに広がっているのはそれだけだ。

そもそもこの黒い液体は何なのだろうか？

そう思った私がジャンヌの方から水面に手を付けようとした……

「触るな!!」

指先が水面に触れる直前、ジャンヌが怒鳴った。

「え？」

吃驚して彼女の顔を見た。

「これに絶対に触るんじゃないわよ」

彼女はいつにも増して険しい表情をしていた。

「この泥は強力な呪いよ。触れれば狂気に捕らわれる。そういう類のものだわ」

「呪い!!」

「ええ」

こんな辺り一面に広がっているのに!!

全部呪いなのだ!!

一体どんな魔術を使えばこんなことができるのか。

それとも神代つて言うのはこういうことが平気で起こるような世界なのか。

というかこれが呪いって言うなら……

「ジャンヌは大丈夫なの!! 下半身思いつきり黒い水につかっちゃってるけど!!」

もしかして私をかばうために…

ジャンヌは私が慌てているのを見て、ため息を吐いた。

そして小さい声で何かを呟いた。

「私には意味ないわよ、こんな呪い。受けたところで変わらないもの」

「…？」

よく聞こえない。

怪訝な私の表情を見て、彼女はハッキリとした声でいった。

「私には効かないってことよ」

彼女はなんだか悲しそうだ。

その表情が妙にかかったのもう少し聞いてみようと思つたが、私が口を開くより先に彼女がしゃべった。

「というか多分あんたも似たようなの見たことあるわよ、これ」

「へ？見たことがある？」

彼女の言葉に首をかしげる。

確かに今までの特異点でもただ生活しているだけでは見ることでできないような万国ビックリショーを何度か見てきたけれど……

見る限り一面が黒い海になっている場所なんてオケアノスでもなかった。

「あんたが呼び出したセイバー。あれもこの泥と似たようなものをかぶったんじゃない？」

「セイバーが？」

「同じようなにおいがするわ。世に名高い騎士様が馬鹿みたいに反転してるのもその影響でしょ……」

彼女が嫌そうな顔で吐き捨てるように言ったその時、私たちの数メートル先前方で気泡のようなものが水面に上がってきた。

「……………」

「……………」

私とジャンヌは無言で顔を見合わせる。

「……………行ってみよう」

ここにきて初めて外部からアクションがあった。

何かがあるのかもしれない。

私の提案を聞くと彼女は無言で気泡が上がっていた場所を睨んだ。

そこからは2、3秒ほどの間隔で手のひら大の気泡が何度も上がってきている。

ジャンヌが右手で旗を強く握った。

そして左肩に私を抱えたまま、ゆっくりとそちらに近づいていく。

彼女に抱えられたまま気泡が上がってくる場所を睨む。

水の抵抗を押し返ししながら、物音を立てないように彼女は進んだ。そして1メートルほどまで近づいて立ち止まった。

「……………」

気泡は段々と上がってくるスパンが短くなってきた。

目の前でボコボコと水面が沸騰しているかのように泡立っていく。

「っー」

ジャンヌが旗棒を槍のように構えた。

バシヤツ！

その音と共に水面から何かが飛び出した。

「……………？」

出てきたのは黒紫色をした甲殻類の足のようなものだった。

先には鉤爪が付いており、まるで蟹の足みたいだが大きさが全く違う。

飛び出てきた足のようなもの一本で私の身長ぐらいある。

バシヤツ！バシヤツ！バシヤツ！

観察していると水しぶきと共に同じ足が3本飛び出してきた。

そして飛び出てきた4本の足の中央からゆっくりと水面に顔を出すものがあつた。



それを見た瞬間、全身に悪寒がめぐり鳥肌がたった。

「なに……………あれ……………」

私が見たものは奇妙な顔だった。

細長いヘチマのような形、色は足と同じく黒紫色だがその中央には縦に白く生えそろった歯だけがある。

人の口をちょうど90度回転させたらああなるだろう。

そしてその口は不気味な哄笑を浮かべている。

気持ち悪い。

それ以外に表現しようのない存在。

生理的嫌悪感だけが強く感じられる。

こちらを見ているのだろうか？

縦に生えそろった歯をこちらに見せながらじっとしている。

「ねえ、ジャンヌ……………あれは……………」

「黙りなさい」

今まで動かなかった気味の悪い存在が私たちの会話を皮切りに動き出した。

「カ……………ギ……………」

「……………鍵？」

「t g g @ q @ t g g @ n z : : q ! .」

縦長の口から発された言葉は理解できない音だった。ただ何らかの言葉を話しているようにも聞こえる。

分からない外国語を聞いているような。

「f f k s b ? : i ! f f k s b ? : i m z w e : : ! !」

もう一度縦長の口が何かを言った。

その直後、私たちの周りの水面からバシャツ！と言う音が何度もした。

周りには前方にいたのと同じ謎の生物が水面から上がってきて、私たちの周りを囲んでいた。

それぞれが四本の足で立ち上がっている。

首の下についているのは人と同じような体だ。

腕はなく、ところどころ歪だが胸、腰、足があり、人の腕を取って肩に四本脚をつけたようなシルエツト。

ジャンヌが周りを見て舌打ちをする。

「ちっ、囲まれた」

1, 2, 3 : : : : : 8 体 !!

私たちを中心に円状に8体の謎生物が私たちを見ている。

「b? p!!」

「b? p!!」

最初に上がってきた謎生物はこちらに跳び、鉤爪を振り下ろしてきた。

「チッ!」

ジャンヌは迫ってくる鉤爪の横つ腹に旗棒を叩きつけた。

金属同士がぶつかるような甲高い音がした。

抱えられている私にまでびりびりとした衝撃が走る。

「重、い、のよー」

競り合いになっている旗棒を鉤爪で削るようにスライドさせると手首を回転させ、石

突で相手の頭部を狙う。

「fffz!」

謎の生物は何かを叫ぶと肩の後ろ側についている鉤爪で横から接近する石突を防い

だ。

そしてもう一方の鉤爪でジャンヌの頭をついてきた。

「っ!」

ジャンヌが頭を左にそらす。

彼女の頬をかすり、鉤爪が通り過ぎる。

「いったいわねー！」

ジャンヌの周りに仄かな魔力の流れを感じた。

彼女の周りに炎が吹き荒れ始めた。

火花が散るように一瞬光っては消える。

うおっ！！

「ちよっ！！熱っ！！」

ジャンヌさん！！

「この炎、私には当たらないようにするとか調整できないの！！」

耳元で叫ぶ私をジャンヌは煩わしそうに見る。

「そんな器用な真似を私ができるわけないでしょうが！」

「自信満々に言わないでよ！！」

怒声を上げ、彼女が前方の謎生物を睨んだ。

彼女の視線が起爆剤になったかのように前方の敵、そして私たちの周りを囲んでいた

敵も轟々と燃え始めた。

「gggggggg—」

「……………！！」

謎の生物たちは何かを叫び、気味の悪い縦長の口から涎をまき散らしながら暴れている

た。

炎に照らされて、暴れている彼らが作る影はさながら踊っているかのようだ。

本当に気持ち悪い……

「なんなの……この生き物は……？」

悪寒からつい口に出た。

「知らないわよ。魔獣かなんかでしょ」

「何か知らない言葉をしゃべってるようにも聞こえたけど……」

もし知性があるのなら、何か情報が得られるかもしれない。

無駄な戦闘を避けることも……

ジャンヌは横目で私を見てからため息をついた。

「さあね、仮にしゃべっていたとしても分からないんだから意思疎通なんてできないわ

よ」

「いや、でも……」

「面倒なこととは考えないでよね」

「……………ごめん」

彼女は視線を前に戻した。

燃えていた謎の生物の炎は消え、もはや原型が分からないような炭になっていた。

円状に並び立つ枯れ木のようだ。

「まあ、このキモイやつらが死ぬって事実は朗報ね」

ジャンヌはそんな死体を確認してから、こちらを見た。

「とにかく移動するわよ。こいつらが何かは知らないけど、これだけいるってことはこ  
こいらはこいつらの巣なのかもしれないわ」

「そうだね。足場も悪いし」

「ええ。あんたを抱えたままじゃ移動もままならないわ。むやみやたらに魔力を使う事  
は避けたいし、近くに岸があればいいのだけど」

彼女はそう言つて辺りを見回した。

魔力……………

ジャンヌのマスターは達海だからね。

———そうやって造られて生まれてきた奴がどんな思いで生きてるのかも知らね  
えで！

昨日、達海が激昂したことが頭をよぎった。

「ねえ、ジャンヌ」

「なによ」

ジャンヌは目を細めて遠くを見ることをやめず、言葉だけを返した。

「……………ジャンヌはさ…」

「……………」

「……………」

「……………」

「いや、やつぱりなんでもない」

「なによ。言いたいことがあるなら言いなさいよ」

途中で言葉を飲み込んだ私を見て、ジャンヌはこちらを睨む。

すごい睨んでくる…

「いや、たいしたことじゃないし…」

「だったらすぐ言えるでしょうが!」

ためらっていたら耳の横で怒られてしまった。

吃驚した。

急に怒鳴らないでよ。

その後も幾分かしどろもどろになっていたが、彼女に睨まれてあえなく言った。

「…ジャンヌは達海のサーヴァントじゃない?」

「そうですけど、それが?」

「魔力ってどうやって補給してるのかなーって」

手で頭の後ろを掻きながら目をそらす。  
ジャンヌがジト目でこちらを見てくる。

まるで、あんたが聞きたかったことつてそれじゃないでしょ、とでも言いたげな目線。  
いや、実際これも気にはなっていたのだ。

「私は詳しくは分らないし、カルデアのみんなに任せちゃってるけど、サーヴァントつて普通聖杯から魔力を受けて現界するんでしょ？」

「……ええ。そうね」

聖杯戦争の為にシステム化された英霊召喚。

それによるとマスターがサーヴァントに魔力を与える機会や戦闘や宝具など、こちらの意志によるアクションの時のみらしい。

現界などの英霊を維持するための必要最低限の魔力はすべて聖杯が肩代わりしてくれるとか。

おそらくある程度儀式としての形が伴わないと聖杯戦争そのものが進められないからだと思うけど……

「そのサポートがないと大半の魔術師じゃ現界すら難しいほどに膨大な魔力が必要だって聞いたからさ。私はカルデアの魔力炉がその役割を担ってるみたいだけど」

パスも十分につなげていないから私の場合、物理的な距離が英霊の力と比例してしま



う。

近くにいななければ彼らの力を十全に引き出すことができない。

だが…

「達海の場合は、全部自分でやってるってことでしょ？」

これは聖杯戦争とは言えないし、達海によると座という英霊が記録されている場所から彼女を呼んだわけでもないらしい。

だとすると聖杯からの魔力供給はない。

弟はカルデアの炉からも魔力を受け取っていないから彼女の戦闘や宝具に必要な魔力だけでなく、現界することによって必要な魔力も全部達海が供給していることになる。

このことでドクターはとても驚いていた。

曰く、達海くんの魔力量は規格外だと。

それだけの魔力を消費してサーヴァントを維持しているのに、それに加えてレイシフト先に魔力供給する。

こんなことが可能なのか？

「達海は、大丈夫なの？」

昨日のあいつの顔を思い出す。

隈が濃く、憔悴していた顔。

今まで言われるがまま納得していたけど、幻霊召喚というのは何かとてつもなく歪なものではないだろうか？

もしかすると私は、何か重大なことを見落としているのではないのか？

「それは……………」

「でも言わなくていい。これは私が知りたいだけだから」

私の言葉にジャンヌは驚いたような顔をした。

多分そうなのだ。

「もしかしたらあなた達には何か言えないことがあって、自分たちだけでやらなきゃいけないことがあるのかもしれない」

そしておそらく私にも伝えてはくれないのだろう。

昨日の件を私なりによく考えてみた。

答えは出なかつたけれど、思うことはあった。

「もしもあなた達にそれが必要ならそれでいい。無理に嘘をつかなくてもただ黙っているだけでも私はいいい」

「……………」

「こんなことを自分で言うのは不甲斐ないけれど、私は何も知らないから目の前のこと

しかできない」

私に伝えたところで何も変わらない。

そう思っているからあいつは何も言わないのだろう。

それならそれもいい。

それは自分勝手や傲慢と言うものではない。

自分のことしか考えていない人間はあんな顔はできない。

だから何でもかんでも知ろうとするのはもうやめるべきだ。

私も不安を除くためでなく、弟の為になることをしたい。

「でも私は達海のことを信じたい。だからお願い。ジャンヌ、達海のことを守ってあげて」

今の私ではできなくても、それでも。

「あんな……」

彼女の顔は心底驚いているといった風だった。

目を真ん丸にして、こちらを見ている。

私も急に変なことを言いつぎたのかもしれない。

だから仕方のないことだったのだ。

息をひそめていた敵の鉤爪が彼女の背後に迫っていたことも。

それに気づけなかったことも。

「gggggg!!」

「ジャンヌ!!」

戦場で気を緩めるべきではない。

そんな単純な理を逸脱した罰を、私は文字通り身をもって償うことになる。償いようなない罪を上塗りすることになる。

私が叫んだ直後、何かが水面に落ちる音がした。

## 手遅れ

「あ……………」

私の足元の水面が大きな音を立てた。

「ああ……………ああっ」

水面に血が滴って落ちる。

「手が……………」

いつものように動かさそうとした右手に反応はなく、先を失った手首から血が流れ落ちただけだった。

「s z q ! s z q ! t g @ 0 s z q !」

「……………っ！」

迫る敵を見て、体をよじろうとした私の口から血が漏れる。

「う……………」

痛みから視線を下すと脇腹に奴の鉤爪が刺さっていた。

礼装に血が滲みだす。

私の手首を切り落とした紫色の生物は目の前で笑みを浮かべ涎を垂らした。

「ハッ！ハッ！ハッ！」

切り落とされた右手に目を見開いて固まっていたジャンヌは敵の声に目を吊り上げた。

そして右手に握った旗をふるい、敵に叩きつけようとした。

敵は後方に跳び、水中に鉤爪を入れながら何かを叫んだ。

何を言っているかはいまだに理解できなかったが、その姿はまるでおもちゃを手に入れた子供がはしゃいでいる様を彷彿させた。

「うぐぐっ！！」

その反動で私の脇腹に刺さっていた鉤爪が抜ける。

燃えるような痛み思わず膝をつき、体が泥水につかる。

その瞬間、体全体を倦怠感が支配した。

「燃えろ！」

彼女の怒声と共に彼女が睨みつけた先に爆炎が舞う。

謎の敵性生物は先ほど同じく炭になるかのように見えた。

「ggg…」

しかし先ほどの敵たちとは違い、その生物には翼が生えていた。

背中から生えたその翼には羽毛のようなものはなく、背中から生えた鉤爪のようなものに膜が張つてある。

蝙蝠の翼のようなそれをわずかに動かした敵は器用に空中で姿勢を変え、彼女の炎を躲した。

そして私たちから離れるように飛んでいく。

「いのっー」

水面すれすれを滑空していた敵にジャンヌは追撃を仕掛ける。

敵を追うように爆炎が何度も巻き起こるが、奴は翼を動かして炎をよけながら飛ぶ。

「zzzzzzzzzz…」

彼女の炎を避けながら水面の上を滑空していた敵は何かを叫び、水面に下ろしていた鉤爪を上げた。

その鉤爪の先には切り落とされた私の右手が引っかかっていた。

「ッッ!!」

ジャンヌはそれを視界にとらえると、右手の旗を後ろに抱えた。

そして全身を使うようにして状態をひねり、救世の旗を敵めがけて投擲した。

「返せ！」

槍のように猛スピードで迫る旗。

さしもの敵も避けきれなかった。

炎の時と同じように旋回しようとした敵だったが、間に合わず旗の石突が敵の足を貫いた。

「gg gg gg gg」

水面を滑空していた敵はふらつき叫び声を上げる。

高度を落としていたからそのまま墜落するかと思えたが、そうはならなかった。

奴は口しかない顔を足元に向けた後トカゲの尻尾切りのように旗の突き刺さった足を切り捨てた。

「な！！」

予想外の行動にジャンヌは驚愕を声に出す。

敵性生物は大きく広げていた翼を羽ばたかせ、高度を取って私たちから離れていった。

「逃がすか！」



ジャンヌはなおも追撃を仕掛けようとした。しかしそれができなかった。

それはおそらく私が水面に倒れる音が聞こえたからだろう。視界がぼやける。

意識があいまいで、物の境界線が歪んでいく。

手に力を入れようとしても全く動かない。

これはさつき彼女が言っていた呪いだろうか？

ジャンヌを敵から守ろうとして体を乗り出したのがよくなかった。

せつかく背負っていてくれていたのに、自分からあの泥水に足をつけてしまった。

バシャバシャとこちらに水音近づいてくる。

「しつかりしなさい！」

ジャンヌの声が頭上から聞こえる。

返事をしたいが唇もしびれて動かない。

「あんたが私をかばってどうすんのよ！」

彼女に抱き起されたのか、視界が少し明るくなった。

頬を叩かれているかのように頭が揺れる感覚がする。

「クソツ！呪いの進行が早い、出血も多い……………」

彼女が私の体を触っている。

「どうする。どうすればいい」

「……………」

「迷ってる時間はないわ。私はあいつに頼まれた。死なせるわけがない。死なせるわけがないのよ」

「あ……………え……………」

何とか口を動かそうとしたが意味をなさない音を出すことしかできなかつた。

しかし彼女が素早く反応するのを感じた。

「っー」

彼女の手が私のおでこに触れる。

手甲の留め具がおでこに触れ、金属の冷たさが伝わってくる。

「まだ意識はあるのね？分かった。もう喋らなくていいから休んでなさい」

彼女がそういうした後、頭上でなにやら金属がぶつかるような音がした。

しばらくカチカチと音を立てた後、私の耳元で彼女が言った。

「背に腹は代えられない。少し痛いと思うけど我慢してちょうだい」

彼女の手元が明るくなった。

そして妙な音と焦げ臭いにおいがした。

変な感覚を奇妙に思ったその時、

「うぐぐ！」

右腕に激痛が走る。

棘が体内を動き回るかのような鋭い痛みと皮膚が焼けるような熱さ、そして骨をハンマーで殴られているような鈍痛が響く。

「やめ……………てっ…」

あまりの痛みに口が動く。

涙と鼻水が漏れ出ているのが分かる。

「いたい……………いた……………い」

下腹部のあたりが濡れてきて、焦げた臭さに混じってアンモニアの臭いまでしだした。

「耐えなさい！私は治療も解呪も使えないのよ！」

彼女の叱咤が響く。

何をされているのかよく分からない恐怖と痛みから逃れたい思いで頭が埋め尽くされる。

痛い痛い痛い痛い。

止めて。お願い。

痛い。

お願い。

痛いよ。

「舌を噛むわ。私の服を噛みなさい！」

口に何かざらざらしたものが入ってくる。

「うううううう！」

涙と鼻水でまみれた歯で布のようなものを噛みながらうめき声を上げる。

「ううう！」

「もう少しよ。あと少しだから」

慰めるような声が聞こえたが、あまりの痛みに私は意識を保てなかった。

体が揺れる。

ぬくもりを感じる。

規則的な揺れと温かい毛布のような感覚に包まれて、ぐっすりと眠る。

私はふと孤独を覚え、ゆりかごの外に手を伸ばした。

宙をさまよう私の小さな手はすぐに大きく温かい手に握られる。

頼もしくも柔らかい手に私は安堵の息を漏らす。

「ゆっくりお眠りなさい。私のかわいいかわいい愛しい子」

優しい声が響く。

「泣かなくていいのよ」

私の母は私の頬に手を添えて、私を慈しむように撫でる。

「大丈夫。もうすぐあなたの弟が生まれてくるから」

彼女は私に笑いかけた。

「あの子なら優しい世界を作ってくれる。貴方が笑っていられるそんな世界を」

何かが私の頬をなでた。

痛みはなかったが、くすぐったい感触に私は目を開いた。

「う……ん……」

暗かった視界を開くと、目の前にはどんよりとした黒い雲が広がっていた。

視界の外から声が聞こえてきた。

「……………ようやく目が覚めたわね。お寝坊さん」

ジャンヌだ。

彼女の声が頭上から聞こえる。

私は頭を起こそうとした。

「ん……………あ、あれ……………」

しかし体を起こそうとすると、めまいがした。

そして力が抜けてしまい、また横になった。

「無理は、しなくていいわ」

黒い空を眺めながら彼女の声を聞く。

「あんたの体は呪いにむしばまれてる。今は拮抗してるけど、下手に体を動かさない方が…身のためよ」

「呪い……………」

彼女の言葉に疑問を覚える。

「あんた、意識を失う前のこと、覚えてる？」

意識を失う前？

えっと……………

確か、バビロニアにレイシフトしてきて空から落ちて、変な生き物に会って……………

それで……………

「っ！！」

私は顎を引いて右腕を見た。

手首には黒い布がぐるぐる巻きにしてあったが、手首から先の感覚はなかった。

指を動かそうとするが布はうんともすんとも言わず、それだけであの光景が夢でない

ことを理解した。

「手首は圧迫止血したわ。ただの応急処置だから動かしたらまた血が出るわよ」

どうしよう。

私が右手を失って最初に頭に浮かんだのはそれだった。

令呪を、みんなとの繋がりをなくしてしまった。

私の不注意でとんでもないことをしてしまった。

「切断面は綺麗だから、取られた右手を取りもどせば繋がられるかもしれないわね。とりあえず礼装の応急処置で、冷却してあるから、魔力は使っちゃだめ」

レイシフト先で令呪を失って、私はどう戦えばいい？

みんなとの連絡もつかないのにサーヴァントの協力が得られなかったら私はただの一般人だ。

私は何をしにここに来たのだ。

「あと泥水から落ちたときに入った呪いがひどかったから、右腕に私が別の呪いを付与したわ。あなたの体がだるいのは、泥の呪いと私の呪いがせめぎ合ってるせい」

ここで私は死ぬのだろうか。

まだここに来て何もなしえていないのに。

「呪いを解いたわけじゃないから。帰ったら本格的な治療を受けなさい………つて」

どうしたら………

「人の話を、聞け！」

「痛っ」



お尻に鋭い痛みが走る。

まるで蹴り上げられたかのように傷んだ。

「あなたの状態を説明してあげてるんだから、ちゃんと聞け」

「ご、ごめん……」

彼女に謝る。

「余計な体力を使わせんな」

彼女はため息が聞こえる。

「焦ってもしょうがないわよ。なるようになるわ」

彼女の言い様に幾分か冷静さを取り戻した。

そうだ。

右手は失つても、令呪はまだ取り返せる。

冷静に考えなければ。

心を落ち着けると周りを見る余裕ができた。

そこで初めて私は白い布でできたハンモックのようなものに寝かされているのに気付いた。

これは……

私が周りの布を触っていることに気付いたのか、彼女は説明してくれた。

「ああ。それね。旗を結んであんたを寝かせてるのよ」

どうやら彼女が使っている救世の旗を寝床にしているみたいだった。

旗の一方を旗棒に結んで私を寝かせられるようにしたらしい。

随分と罰当たりな行為をしている。

気が引けて下りようとするが、私を包んでいる旗が揺れるだけで体を起こすことはできなかつた。

だが旗が揺れれば視界は広がる。

ここである疑問の答えが見えた。

旗をハンモックにして寝かせるということは、ある程度傾斜をつけて旗棒を固定する必要があるわけだが……

地面に刺しているわけではなかつた。

あんな泥水の中に刺してもすぐに倒れてしまっただろう。

ジャンヌが支えてくれていたのかと思えばそうでもない。

じゃあどうやって固定しているのかと言うと……

「これ……なに……う……」

旗棒は大きな竜の足のよう。な何かに強引に差し込んであった。

鱗が表面を覆った大木に差し込んであるが、その先をたどっていくと大きな鉤爪があ

り、これがあまりにも大きな脚だということが理解できた。  
私たちはこの大きな脚の上で休んでいた。

「さあ……………」

「さあつて……………」

私の質問にジャンヌは心底興味がないような声を出した。

これが足だとしたら、いったい全長何メートルの生物になるのだろうか。  
明らかにほつといいいいものではない。

それとも神代だからか。

この時代はこの大きさがベースなのか。

「知らないわよ。こいつが何かなんて」

そんなんでいいのだろうか？

「重要なのは……………」

「っ！」

「こいつが聖杯の持ち主だ、つてことぐらいじゃないかしら」

そう言つて寝ている私のもとに投げられたのは私たちが求めていた聖杯だった。

大量の魔力リソース。

特異点の元凶。

黄金色に光を放つその杯が私のお腹の上でころんと転がる。

あまりにもあっけない登場に唾然とする。

「な、なんで……………」

「さあね。あんたをぶった切った羽付きの後を追っていったら、この脚があつた」

風で私を包んでいる旗が揺れる。

「そんでもつてこの中に変な魔力がこもつてたから、搔つ捌いたらこれがあつた。それだけよ」

ハンモックとなつていた旗が大きく揺れ、聖杯を投げてきただろうジャンヌの姿が見えた。

「え？……………ジャンヌ？」

その姿はまさに血濡れというにふさわしいような格好だった。

頬に大きな傷が走り、左腕は肩のあたりでちぎれ、右足は大腿骨が露出している。

いくらサーヴァントといえど霊核が無事では済まないような負傷だ。

「ハア、ハア、ハア」

彼女は肩で息をしながら、座り込んでいた。

右手に持った剣を下に突き立てて、辛うじて上体を起こしている。

「どうしたの？！その傷？！もしかしてさっきの敵に……………あつ」

驚いた私は彼女に駆け寄ろうとして無理に体を動かした。  
そしたら下に落ちてしまった。

カンツと甲高い音を立てて、聖杯が転がる。

「なに、やってんのよ……ドジ……」

彼女はそんな私を見て笑った。

私は震える足で立ち上がり、なども転びそうになりながら彼女に近寄った。

「とにかく今治癒を……」

礼装の応急処置で彼女の傷を少しでも癒そうとすると、彼女が剣を握っていた右手で私の左手を払った。

「無駄な、魔力を使うなって言ったでしょ……人の話を聞け……」

「そんなこと言ってる場合じゃ……」

私が無理矢理に治癒しようとする、彼女は私の顔を睨んだ。

血まみれになった顔が彼女の視線を禍々しくしていた。

「その通りよ。こんなことしている場合じゃない……」

弱々しい力で彼女の右手は自身の懐をまさぐり、何かを取り出した。

それは鈍い光を放つ小さなコンパスだった。

「それは……いったい……?」

「超小型虚数観測装置……『ムーンコンパス』、だったかしら……」

小型、虚数観測装置……？

「私のマスターちゃんがかルデアの倉庫を漁ってた時に、見つけたものをパクったって……」

彼女は荒い息を続ける。

「あの、性格の悪いAIと協力したとか、言ってたわね……まあ、どうでもいいか……」  
そして彼女はそのコンパスを私の胸に押し付けた。

「これを使えば一回きりだけど、かルデアに……戻れるはずよ」

「かルデアに……?!」

「ええ。あっちからの転送がなくてもね……その聖杯を使えば、魔力も足りるでしょう……」

自発的に転移できる機械ってこと!!

私は驚愕に目を見開く。

「そんなもの、開発してたなんて誰も……」

「そりゃあそうよ。言ったら保険にならないでしょ……」

私がコンパスを受け取ると彼女は手を離し、また剣を握った。

「かルデアが、ヤバい……から早く戻りなさい……」

彼女の発言に眉を顰める。

「カルデアが、ヤバい？」

「ええ……とにかく時間が無いのよ……げほっげほ」

彼女が吐血する。

「ジャンヌ!!」

私は彼女の背中をさする。

「これぐらい平気よ。それより早く……」

「戻るなら一緒に……それにこの特異点だってどうにかしないと……」

辺りを見て、状況を確認しようとする私に彼女は言った。

「諦めなさい……ここはもう、手遅れ……」

「え………?」

手遅れ?

「もうここは修正するには何もかもが壊されすぎた……人理そのものが崩壊しないよう、人の歴史だけが、辛うじて繋ぎとめられている」

「そんな……」

私は彼女の先ほどの発言を思い出し、反論した。

「でも!でもこの特異点の聖杯は回収したんでしょ?!だったら………だったら………」

先ほど落とした聖杯はコロコロと転がり座り込んでいるジャンヌの膝に当たった。彼女は力なく笑う。

地面が強く揺れた。

地震のように小刻みに何度も揺れる。

脚の下にある泥水が波を打つ。

「つ……………」

ジャンヌはハツとして辺りを見回した後、私の肩をつかんだ。

「あんたが、あんたが生きていればどうにかなる」

いつになく焦った表情で彼女は言う。

「ここは私が何とか維持する。だから早く行きなさい」

「ジャンヌを置いていけるわけ……………」

「私がいなきや、人理の維持ができない。ここ文明をすべて破壊し尽くされたらそれこそ終わり。人の歴史が途絶える」

「だったら尚更、わたしが…」

「あんたは特異点をばらまいた元凶の方に向かいなさい。親玉を何とかすれば、丸く収まるでしょう。あんた達がその元凶どもを何とかするまでは、私も耐えしのぐから」

「そんなこと…」



揺れがだんだん大きくなってきた。

「人理を絶やすことは必ず防いで見せるわ。だから行きなさい」  
揺れが強くなっていく。

「行け！」

彼女が足元にあつた聖杯を私に投げた。

そしてその聖杯は私が左手に持っていたコンパスとぶつかった。  
その瞬間、コンパスは強い光を発し始める。

ギロギロと歯車が回るような機械音が響き、針が回転しだす。

それと同時に私を囲むようにして足元から黒い壁が伸び始めた。

「待って！まだ何も！ジャンヌ！」

何かに体を引つ張られる感覚がする。

私はその力に対抗しながら彼女に叫ぶ。

「っ！必ず！ここに返ってくるから！だからそれまで……」

視界が完全にさえぎられる前に彼女の唇が動くのが見えた。

しかし彼女の言葉を聞き終える前に黒い壁は閉じた。

もはや暗くて何も見えない。

そして急に落ちるような感覚がした。

内臓が浮かび上がる気持ちの悪い感覚。

その感覚に身を震わせながら、壁が閉じる前に聞こえた彼女の言葉を呟いた。

「答えてあげて、あいつに……」

彼女の言った言葉を私は理解できなかつた。

§

目の前で黒い箱が海に沈むように溶けて消えた。

それを見届けた私は、軽くだが安堵の息を吐いた。

「はあ」

どうにか手は打てた。

これでマスターの指示は守れたはずだ。

大きな揺れを体で感じながら先ほどの光景を思い出し、笑う。

転移の際に虚数空間とやらを通るとマスターは言っていた。

そして生身では危険だから、身を守るために急場の魔力舟も作ることも。

「だからって、棺桶は無いでしょう」

いくら急造とはいえ、あのデザインは無い。

大方、あのふざけた後輩AIとやらの仕様だろうが、それにしたってあの概形は良くない。

冗談にしたって質が悪い。

あの形は肝が冷える

何が虚数魔術は私の十八番です、だ。

今度会ったら一発ぶん殴っておこう。

「まあ、今度なんてものがあつたら話か…」

どうやら去り際に叫んでいたあいつのセリフが耳に残ったらしい。

迎えに来るものにも、すべてが終わったら特異点もきれいさっぱり消えてるっついの。

意味消失した幻霊をどう迎えるつもりなのか。

私は右手で聖剣の柄を握り、齒を食いしばって立ち上がる。

そして聖剣を腰に下げた鞆に納めた。

ゆつくりと歩き、あいつを寝かせていた旗に近づく。

結んで寝床にした旗は風を飲み込んで、旗棒をグラグラと揺らしている。

寝床として使われていたことに怒っているように見えなくもない。

深くまで刺していた旗を抜き取り、強く振る。

結び目がほだけ、風ではためいた。

風に撃たれ、空を舞う布の音に自然と笑みをこぼす。

「悪かったわね。あんたは守るより、壊すことの方が好きなのかしら？」

私の問いかけに返事をしたのかのように旗は強くないだ。

「奇遇ね。私もよ」

やはりこちらの方がしつくりくる。

剣を扱うのにも苦手だ。

旗を右手に構えながら、正面を見る。

強い揺れはもはや大地震に匹敵するような大ききとなっていて、踏ん張っていなければ体勢を崩しそうな具合だ。

私は足場となっている巨木のような脚を見下ろした。

私はあいつに聖杯を渡した。



空気が震え、音だけで波が起こる。

「……………つさいわね」

『回帰』の理を持つ獣。人類悪。

死の概念を持たないチート野郎。

なによ、死の概念を持たないって。

死って概念というより現象でしょ。

性質を持たないから死にませんって意味わかんないのよ。

「まあ、だからって都市を丸ごと仮死状態にするこの時代のアンタも相当イカれてるけどね」

私は隣に立っていた金ピカ野郎にそう言った。

「ほざくな。田舎娘。貴様のような雑種の尺度で測るでない」

腕を組みながら偉そうに実体化したクソ生意気な英雄王は、これまた偉そうにそう言った。

「必要だからそうしたまでだ」

相変わらずムカつくわ。

「地球上に生きている生命体がいるという事実が逆説的に奴の存在を証明してしまう」というのなら、生命体がすべて生きてさえいなければ奴の存在は否定されるというの

も道理であろう」

こいつの言葉に私は呆れる。

「だからって自分の国の人間を全員殺します？普通？」

私の発言に英雄王は睨みをくれた。

「たわけ。殺してなどおらん。生きていないだけだ」

「そういう問題？それともあんたにも、人類を守ろうとか言う意欲があつたわけですか？」

「人理などどうでもよい。おれが<sup>我</sup>考えるべきは<sup>我</sup>の国であり、おれの<sup>我</sup>臣下と民だ」

英雄王は目の前の怪物を冷静に見据える。

「あれはおれの<sup>我</sup>財である。それを<sup>我</sup>の許しも得ずに滅ぼそうなど不敬にも程がある」  
「不敬ってあんたね……………」

「相手が獣であろうが、人類悪であろうが関係ない。<sup>我</sup>の財を犯すものは誅せねばなるまいよ。それが<sup>我</sup>の定めた法だ。貴様らが人理を救えるのはその結果にすぎん。自惚れるな」

相変わらずね、こいつ。

「それにしては随分と他人に託したわね？英雄王？」

「……………」

英雄王はこちらを見る。

「星見の旅人に残した石板。マルドゥークの斧で切断された脚、魔力供給のための聖杯、都市を仮死化しての人理の延命、おそらくは神に協力の要請もしたんじゃないかしら」

私は笑みを浮かべた。

できるだけこいつが馬鹿にされたと感じるように。

「結果論というには大分協力的だけど？」

私の問いかけに奴は鼻で笑った。

「ふっ。だから貴様はいつまでたつても田舎育ちの癩癩娘なのだ」

あからさまな嘲笑を浮かべてやがる。

この野郎……………

「貴様がウルクで石板を発見し、書き記されたとおりに動いてる時点で我の定めた法の通りに動いているのだ。我が協力してやっているのではない。我が定めた勝ち筋に、貴様らには有難くお力添えをさせて頂いていると知れ」

もうだめだ。

こいつに何を言っても意味がない気がしてきた。

「立場をわきまえろ」

私は頭を抱えてため息を吐いた。



「はあ……もう何でもいいわよ。まあ、なんにせよ、この時代のあんたが立てた計画でしよ、これ。あんたもそれなりに動きなさいよ」

藤丸立花の治療後、群がるあの気持ち悪い生命体と戦闘しながら、羽付きを追っていった先にあつたのは結界であつた。

唯一の足場として切り取られたティアマトの脚の上に張つてあつた結界。

そこには石板が置かれていた。

バビロニアがこうなつた経緯とこれからどうするかの指示がギルガメッシュの直筆で書かれている石板。

『人理が破綻しないよう人間を保持しつつも地球上のすべての生命体が生きていない状態を作り出し、ティアマトを鎮静化。』

サーヴァントで奴を足止め、完全にバビロニアを滅ぼす前に離脱したマスターたちがソロモンを打倒する』

これが石板の指示の要約である。

魔獣戦線を圧倒したものの、ティアマト神の降臨によって窮地に立たされた賢王ギルガメッシュが選択したのはウルクの延命であつた。

先ほど英雄王が言ったように生命体が生きていればティアマト神の存在は証明されてしまう。

したがって現状で倒すことは不可能。

ならば倒さないで済ませてしまえばいいと、あの男は考えたようだ。

唯一残った都市ウルクそのものを仮死状態にすることにより、ティアマト神の存在証明に矛盾を突き付け、鎮静化する。

これによって人理の破綻をまず防ぐ。

しかし、この状態ではティアマト神だけではなく人類も静止してしまう。

そこでいずれやってくるであろうカルデアの者たちにメッセージを残し、この特異点を崩壊させる前に元凶そのものを潰すように指示した。

カルデアのマスターが来ることによつて生きた生命体がこの地に立つこともまた避けられない。

だから再び眠りから起きたティアマト神の足を引つ張り、マスターたちがソロモンを打倒するまでの時間稼ぎをするサーヴァントも残すようにとも。

よくもまあ、こんな計画を思いつくものだ。

腐つても最古の王は伊達ではないらしい。

幾らなんでも大局というものを見据えすぎだと思わなくもないが。

もしくは千里眼を持つが故なのかもしれない。

「そのさまの貴様に言われたくないわ」

「満身創痍という言葉が似合いそうな私に対して、英雄王はそう言った。そう言われて私は自分の体を見下ろした。

ちぎれた左腕、骨の見える右足。

攻撃に特化したクラス。

マスターの補助もない。

「それもそうね」

自分のなりを見ていたら妙に納得してしまった。

ひよつとしたら残るサーヴァントが致命的なレベルで守りに向いていないというのは、賢王の計画の数少ない予想外かもしれない。

「さて、じゃあ、不毛なデスマッチを始めると……」

「一つ、貴様に聞いておくことがある、雑種。謹んで拝聴せよ」

文字通り終わらない戦いを始めようとした私に英雄王は言った。

相変わらず不遜な物言いだったが、こいつから何かを聞いてくるのは稀だったので好奇心の方が勝った。

「……………なによっ？」

「いったい我は何を見た？」

は？

「何言ってるの？あんた？」

「ソロモンの拠点に跳ぶ。言うは易いが、それができるなら貴様らも最初からやるはずだ」

「……………」

「それができないからこそ、貴様らは奴に提示された特異点修復を行ってきたのだろうか？」

「……………そうね……」

「ならばなぜあのような指示を我はした？拠点の特定どころか、ただのレイシフトすら今のカルデアでは覚束ないだろう」

「それが分かっているなら、なんで防がなかったのよ」

「あの醜いゴミごときで死ぬなら、星見の者どもであろうと我が手ずから助ける価値などない」

「こいつ……………」

「私が言うのもアレだがホント狂ってるわ。」

「まあ、気になるならあんたも使えばいいじゃない。千里眼、だっけ？」

「千里眼はそのような都合の良いものではない。貴様に我が聞いている時点でそのくらい理解せよ。癩癪娘」

だから一言多いんだっつーの！

「大方、貴様の飼い主であろう。貴様が知る全てを開帳することを許す」

………。

「話すようなことじゃないわ。あんたが知る必要もないでしょう」

「我はお前に選択肢を与えていない。話せ、といったのだ」

私は金びか野郎に中指を立てた。

「誰にでも間違いはあるのよ。あんたが唯一の友を失ったように」

私の頬すれすれに剣が飛来した。

小さな切り傷を顔に作り、そのまま後方へ飛んで行った。

「次は首だ」

奴の背中に無数の光が見える。

王の財。

絶大な破壊力を持つ宝具であれど、結局使う奴は人なのだ。

その事実だけで、私には時代を変えてしまうような財宝も、私の握っている旗と大差ないように思えてならない。

「凶星ね。そういうことよ。人の粗を探して嗤うのは大変結構ですが、自分を顧みることとを勧めます」

私はそれだけ言って、会話を切る。  
そしてこちらを見据える獣に対し旗を構えた。

## 虐殺

手や足に衝撃が届き、箱のきしむ音が聞こえる。

ガタガタと揺れる。

まるで川下りをしているようだ。

何度も揺れ、狭い舟の中で体のあちこちがぶつかる。

目線よりわずかに上にあるコンパスが何度も火花を発している。

壊れるのではと冷や汗を流していた私の耳に機械的な音声がかえった。

『This ship is arriving in real number  
 ort. It's compromised. Brace for impact.  
 t.』

その音声が流れたと思ったら、揺れが途端に激しくなった。

え?なに!!

なんて言ったの?英語?

「分かんないんだけど!日本語で!日本語で言つて!」

私は困惑しながら叫んだ。

『This system is not compatible with Japanese.』

だから何言つてるか分からないだつて!。

つて、衝撃!!

「うわっ!!」

私は前の壁を左手で、後ろの壁を背中で力いっぱい押し、体を固定した。

その瞬間…

「うわっ!!」

バゴンツ!!

と船体が何かにつかつたような音がして、舟が大きく揺れた。

そしてガリガリと削るような音と共に体が激しく揺れる。

「うわっ!!おっ!!痛っ!」

揺れの激しさに思わず頭をぶつける。



その後も何かを削るように激しい金属音のようなものが続き、最後に大きな衝突音がして揺れが収まった。

「いたたた…」

ぶつけた頭をさすっているとまた音声 flowed。

『We have arrived in Chaldaea.』

『Heavy damage sustained. Navigation functions inoperable.』

「え？」

『Please refrain from getting the hatch open for a while.』

「…」

『The phase shift of real space is then corrected on basis of imaginary number phase difference.』

何言ってるんだ？

着いたのかな？

なら出たいんだけど…

「どこから出ればいいんだろう……これ」

私は適当に周りの壁を触りながら叩く。

「おーい！開けてー！出してくださーい！」

『This section is under way. Kindly hold  
………』

「……しばらく出れない感じなのかな……」

まさか何かの故障だろうか？

このままこの狭い密閉空間に閉じ込められたままなのは、流石に焦る。

そう思つて冷や汗を流しているとまた音声が届いてきた。

『The order have been completed. You can  
always open the hatch. Execute this c  
ommand?』

「オールウェイズ、オープンザハッチ？」

もう開けられるつてことだろうか？

「えつと、ハッチ、オープン……？」

『Ready to open hatch. Unlocking outer  
hell.』

私はその言葉を口にするのと目の前の壁が左右に開いた。

「おお…」

そして私が入っていた場所がリクライニングシートのように立ち上がった。ウィーンと音がして視界が開ける。

そこにはいつもの無機質な壁があった。

「帰ってきたんだ…カルデアに」

すごい。

本当にあのコンパスだけでここまで来てしまった。

あの小さな機械の驚くべき働きに瞠目していたが、すぐにハツとした。

今この瞬間にもジャンヌが命を張って戦っている。

私のがのんびりしているわけにはいかない。

「早くみんなに知らせないと…」

私は軽く跳んで船から出る。

そして周りを見渡す。

ここはどこだ。

薄暗い辺りを見回しながら考える。

私の周りにあるのは、何が入っているのかも分からない馬鹿でかいコンテナ。

書棚に無造作に置かれている書類の山。

山になった回路基板や端末群。

随分と乱雑な部屋だ。

何かの倉庫？

でもカルデアにここまで汚い、というか整理されていない倉庫なんてあった…？

私はダメもとで耳のインカムを起動する。

『』

ノイズすら聞こえない。

完全に壊れてる。

「しょうがないか」

私はこの倉庫の入り口を探す。

カルデアの共有スペースには入り口の近くに固定電話がつけられている。

もしかしたらこの倉庫にもついているかもと思ったんだけど…

10メートルほど先にあつた少し大きな扉の周りには固定電話らしきものは見当たらない。

「ついでないか………」

私は自分の身長の一週りはありそうな大きな扉の前にたつた。

「通信できないなら管制室まで行くしかない………ん？」  
扉が開かない。

いつもはセンサーが近づくものを感知して勝手に開いてくれるのに。  
扉の前で左手を振ったり、体を動かすがピクリとも反応しない。

停電？

それともこの倉庫には電力が供給されてないとか？

扉の横についている小窓を開き、中から回転レバーを引き出す。

停電や故障などで動力が伝わらない自動扉を手動であけるためのあれだ。

一度マイルームの扉が故障したときに使ったことがあるので要領は分かる。

ただ上手く回らない。

私は先を失った右手首を見る。

左手だけだとも力が伝わらないのか。

黒い布が巻いてある先のない右手首を見ながらも、足で踏ん張ってレバーを回す。  
そうこうしているうちに扉は鈍い音を立てて少し開いた。

幅5、60センチほどだが私が出るぐらいなら十分だ。

ほんのり掻いた額の汗をぬぐい、体を横にして横歩きで扉から出た。

「ハイ、地下3階の廊下………？なんでこんなに暗いの？」

出たろうかは見覚えがある場所だったが、明るさに違和感を覚える。

廊下の照明がほとんど消えていて、いくつかの間接照明しかついていない。

停電……………？

「つと……………」

周りを警戒しながら廊下を歩いていると滑って転びそうになった。

ぴちやりと音がして、足に何かが跳ねる。

何か水たまりのようなものを踏んだ。

何だ？

配水管が傷んで水漏れでもしたのか？

薄暗い中で足元を中止する。

「……………っ！！」

これは……………

「血だ……………」

鉄臭いにおいが鼻の奥を刺激し、床に溜まっているのが血であると気づく。

なんで血が……………

床の水たまりはぼつぼつと先にも続いている。

目で追っていくと視線の先に人が倒れていた。

「つ！大丈夫ですか！」

私は急いで駆け寄った。

カルデアスタツフの制服を着ている。

職員だ。

私はうつ伏せに寝ている彼の肩をつかみ、あおむけに寝返らせようとした。

「う」

予想していたよりも彼が軽くて、彼の体を抱えたまま転倒してしまった。

「いって……」

頭をさすりながら体を起こそうとして、気づいた。

彼がなぜあんなに軽かったのか。

彼には腰から下の体が……なかった。

「うわあああ！」

私は予想だにしない事実で悲鳴をあげた。

体が切れてる……

真つ二つに……

どういふこと……？

なにが……

「……………あああ……」

スタッフが死んでいる現実にも固まっていた私の耳に何かか聞こえた。ハツとして辺りを見わたす。

「……………」

耳を澄ます。

「……………いや……………あああ……」

これは……

「……………ああああああああ！たすけてくれ！」

悲鳴!!

私は声が聞こえてくる方に走り出す。

なんで悲鳴が!!

急な事態に理解が追い付かない。

ふらつき転びそうになる。

右手がない状態での平衡感覚になれていないからか、何度も転びそうになりつつも走る。

「頼む、誰か……だれか、いないのかあああ……」

声の聞こえる方へ走る。



「なんで……なんで……」

声が近づくにつれ、妙な音も聞こえてきた。

ぐちゃ、ぐちゃ、という粘り気のあるような音。

泥遊びをしている子供が出すようなそんな音。

「はあ、はあ、はあ……」

声が聞こえない。

ただ妙な音が大きくなっていく。

「はあ、はあ、はあ……あそこだ……」

私は見えてきた明かりに立ち止まった。

扉が開きつばなしの部屋から明かりが漏れている。

あそこはサーヴァントが集まっているD区画。

なんでこんなところから悲鳴が……

走って体温が上昇しているはずなのに、妙に体が寒い。

耳には妙な音が聞こえたままだ。

私はゆつくりと歩いていき、明かりが漏れている部屋を除いた。

私の目に入ってきたのは、人の首だった。

人の腕を切り取って地面に立たせ、開いた手のひらに首だけが乗せてある。

まるで生け花をしているかのようになんて置いてあった。

見知った顔が並ぶ首の生け花は、すべて苦痛にまみれた顔で彩られていた。

「な、なんで……………」

そしてその顔の横にいたのは……………

「キキキキキキ！」

「やめろ！やめてくれ！」

バビロニアにいたあの紫色の生物だった。

どうしてカルデアにあいつが!!

「キキキキキキキキ！」

「い、いやだ！死にたくない！死にたくない！」

その生物はカルデアスタッフの制服を着た男性の上に乗っていた。

紫の生物は下にうずくまっている男性の右手と左足を二本の鉤爪で持ち上げた。

「やめろ！や、やめてくれ！」

男性は震えた声で叫ぶ。

紫の生物は口だけしかかない顔をゆがませて、足と手を左右にゆつくりと引っ張る。

口は笑っている。

「い、いやだ。頼む。許してくれ……………何でもする！いやだ！」

「キキキキキキ！」

紫の生物は笑ったかのように声を出す。

まるで男性の顔が恐怖と悲痛でゆがんでいくの面白いというように。

左右に引つ張る力はどんどん強くなっていき、次第に男性の体から嫌な音が聞こえてきた。

ぶちぶちとちぎれるような音が。

「いだい！やめて！おねがいます！ゆるしてください！」

男性の顔に涙と鼻水が溢れる。

「キキキキキキ！」

笑い声が聞こえる。

「や、やめ……………」

「キキキキキキ！」

「やめろおお！」

私は叫びながら殴りかかった。

左足で地面を蹴り、上体をひねりながら奴に肉薄する。

「ケ！」

叫ぶ私の接近気づいた奴は後ろ脚の鉤爪で私に切りかかる。

私は切りかかってきた爪を伏せて避け、飛びつくようにして拳を放つ。

魔力を左手にこめて、肩らしき部分に打ち込んだ。

みしりと音がして奴の体にひびが入る。

「ふ、ふじまる！」

つかまれていたスタッフは殴りかかった私を見て目を見開く。

「いま！助ける、から！」

私は彼にそう叫んだ。

「あ、ありが………」

彼の言葉が終わる前に奴はもう一方の後ろ脚で私を切りつけようとしてくる。

私は奴の首にとりつき、肩の間接を壊そうと試みた。

スタッフをつかんでいる前脚の右肩を左手で斜め後方に引っ張り、筋組織ごと折ろうとした。

「こんのおお!!」

パキパキと間接が割れるような音がしたのもつかの間。

奴は体を回転させ、私を振りほどこうとする。

「離して、堪るか！」

左手に渾身の力を入れ、しがみつく。

体を張り付かせ、奴の鉤爪から身を避けようとしたとき脇腹に鋭い痛みが走った。あの時、貫かれた傷が開いた。

礼装に新しい血が滲みだす。

それと共に右手首にも鈍痛が響きだした。

力が抜けていき、左手の握力がわずかにだが確実に弱くなっていく。

ジャンヌに魔力は使うなどと言われていたけど、こんなにすぐ影響が出るなんて。

「くっ………うあ!!」

脇腹の痛みで体が浮いてしまった。

わずかに浮いた私の足が奴の鉤爪にとらえられる。

必死に奴に張り付くが、抵抗虚しく右足で吊り上げられ、そのまま後方へ放り投げられてしまった。

「う!!」

受け身を取り、地面を転がる。

あまりの勢いに衝撃を消しきれず、声が漏れた。

足を出して無理矢理体の回転を止め、すぐさま奴に接近しようと顔を上げる。

「(っ)のっ………」

顔を上げた私の前には右手と左足をつかまれたスタッフが掲げられた。

「た、たすけ……………あああああ！」

そして私の目の前でスタツフを引きちぎるかの如く、手と足を引つ張り始めた。

「こいつつ……………うあ!!」

飛び出そうと前傾になっていた私は何かの力に押されてうつ伏せに倒れた。

なに!!

焦った私は振り向いて後ろを見た。

「な!!」

「ケケケケケケケケケ！」

そこには紫の生物がいた。

もう一匹いたのか!

私の上に乗った新手の敵は四本の鉤爪で私の両手両足を拘束した。

このままじゃ、やられる!!

私は拘束を引きはがそうともがく。

しかし奴の爪はびくともしない。

「くそー！」

何とか抜け出さないと!

焦る。

動かない。

「くっ……………」

いつまでたつても攻撃が来ない。

なぜ？

もう一度上を見ると、奴は笑って私の顔に涎を垂らした。

そして肩ではなく下半身についている方の足で私の顔を固定し、無理やり前を向かせた。

「な、なにを……………」

目の前にはスタッフの痛みに歪む顔が……………

「あああああー！ だいたい！ だいたい！ やめでくれええー！」

こ、こいつら……………！

私はそこでこいつらがしたいことを理解した。

こいつらはあのスタッフが殺される瞬間を私に見せるつもりなのだ。

拘束して、目の前で同胞を殺す。

こいつら戦っていない。

私たちが遊んでやがる！

「こいつらあああー！」

私は叫び、手足をもがく。

「ケケケケケケケケケケケケケケ！」

私を抑えている敵が嗤う。

私の目の前でスタツフがどんどん広がっていく。

「いだい！いだい！ゆるじて！たずげて！ふじまああああ！」

ミシミシと嫌な音が響く。

「やめろ……………おい、やめろ……………」

「キキキキキキ！」

スタツフを伸ばして遊んでいる敵が嘲笑う。

「いあだ！いあだ！」

「やめて……………やめてえええええ！」

その瞬間、男が裂けた。

右肩から股にかけて真つ二つに裂けた。

吹き出た血が私の顔にかかる。

そして中から散った肉が頬に張り付いた。

「ケケケケケケ！」

最後まで悲痛な表情で絶命した彼の顔と対称に奴らは愉快そうに笑っていた。



奴は鉤爪に引つかかっている彼の体を下に落とた。

ちぎれた面からはみ出ている腸が着地際に血をまき散らす。

その血がまた私の顔に張り付いた。

「キキキキキキ！」

奴は落ちた体を足で抑え、鉤爪で首を引き裂いた。

次いで両腕を肩から引き裂く。

四本の脚で奴はその両腕を針金のように巻き付けて、開いた手のひらの上に首を乗せた。

「シシシシシシシッ！」

そして奥に並んでいた生け花の最後尾に並べた。

「なんで……………」

なんでこんなことをするんだ？

態々人の前で人を殺して、遺体を切り裂いて飾る？

この行為にいったい何の意味がある？

「キキキキキキ！」

なんだ。こいつらは。

何だっというんだ。

「シシシシシシッ!」

スタツフを切り裂いた鉤爪が迫る。

死神の鎌が。

「ガンドツ!!!」

赤い閃光が私の前を通り抜けた。

「ggg!」

その閃光は不規則な線を描き、2体の敵を貫いた。

2体の敵は動きを止め、痙攣しだす。

そして人影が私の前を走った。

「星よ!」

その掛け声とともに敵の足元に文様が浮かぶ。

そして敵の足が粒子となって消えた。

「fffff!?!」

動揺しているのか、口だけの顔で何度も足元を見ている。

その光景に呆気にとられていた私に叱咤が飛んできた。

「何をしているの!藤丸!」

彼女は銀の髪を払いながら私を見た。

「立ちなさい！」

毅然と立つ女性の姿に私は驚きの声を上げる。

「所長!!」

「逃げるわよ！」

目を丸くする私に彼女は叫ぶ。

「は、はい！」

私は慌てて敵の下から抜け出す。

「d d d d d d d d！」

逃げ出そうとする私を見て、敵は足を振り上げた。

「全力で走ることだけを考えなさい！」

敵の攻撃をかわそうとした私に彼女から指示が届く。

全力で!! 走る!!

でも後ろから……………

ええい! ままよ!

私は避けるためにひねりかけていた体で足を蹴りだし、大きめのストライドで走り抜けた。

右後方から近付いてきた鉤爪は私が当たる直前に、何かに阻まれた。

これは……………魔術障壁か！

スプリッターも驚きのピッチで敵の脇をすり抜け、そのまま所長に並ぶ。

「所長！無事だったんですか！」

「話はあと！ラフムにはあんなの足止めにしかならない！ひとまずここから離れるわよ！」

後ろを見ると敵は4本の鉤爪を使って、蟹のように歩いていた。

私はその後ろにある生け花を見る。

「あれは……………」

私の視線に気づいた所長は一瞬だけ、口を閉じた。

そしてすぐ部屋の入口へと向き直る。

「今は生き残ることが先よ」

「kkkkkkk！」

後ろからは奇妙な笑い声。

「行くわよ！」

「は、はい！」

私と彼女は廊下へ走り出した。

## S

「はあはあはあ」

私は膝に手をついた。

荒い息は整えようとしても、肺に空気を入れようと必死に動く。

「はあはあはあはあ」

私の隣にいる所長は壁に背をついてそのまま座り込んだ。

彼女がしよっていたリユックの中から陶器がぶつかるような音を立てる。

「(一)、まで、くれば、大丈夫、でしよう」

肩で息をしながら、途切れ途切れの口調で彼女は言った。

「(一)、つて………」

私も荒い息で返答する。

「そう。ここは、技術部門の、工房。貴方の弟が、使っていた、拠点、ね」  
「達海、の……………」

私たちはとにかく息を落ち着けようと黙った。

しばらくして落ち着いてくると奥から声がした。

「所長！無事ですか！」

工房の奥の方からスタッフ数人出てきた。

ムニエルさんに、シルヴィアさん、マーカスさんに、チンまで。

「ええ。誰か帰ってきた？」

「……………いえ、まだ誰も」

「……………貴方たちは？」

「こちらに被害はありません。やはり技術部門長が張った結界が機能しています」  
「そう」

「ただ中にいるスタッフの中で、負傷した奴らの動揺が激しくて……………」

ムニエルさんと所長が情報交換をする。

どうやらこの工房の中にスタッフの何人かは避難しているようだ。

そしてムニエルさんが口を開きかけて、こちらを見た。

「藤丸も無事だったか。よかったよかつ……………え？」

そして動きを止めた。

「……………は？え？なんでお前ここにいるんだ!!まだあっちにいるはずだろ!!」

「あ、うん、それなただけど……………」

私はあつちで起こったことをみんなに伝えようとした。

しかし私が口を開くより先に、シルヴィアさんが焦り気味に所長に聞いた。

「しよ、所長!それであの……………」

「……………」

「外で、無事だった人は…いまどこにいるんですか…?」

「……………」

「…DSSの解除に行った人たちは……………」

彼女の言葉に所長は俯いた。

その表情に何かを恐れながらも、シルヴィアさんは続けて聞いた。

「来てないってことは……………どこかに避難しているんですよね……………?」

「……………」

「そう…ですよね…?」

彼女の言葉に私は先ほどの部屋の奥の景色を思い出された。

あの生け花の陳列を。

所長はうつむいたまま、口を開いた。

「DSSにももちろん行ったわ。スタツフも確認した」

「じゃ、じゃあ…」

「ただ…生きてる人間は、確認できなかったわ」

「え？」

「確認できたのは、遺体だけよ」

所長の言葉を聞いたシルヴィアさんは動きを止めた。

「遺体、だけ…」

「ええ。私がDSSに行ったときはあれが既に2体いた」

「そんな…」

「そういうことよ。生きていたのは藤丸だけだったわ」

シルヴィアさんはその言葉でうずくまってしまった。

「エルロン…エルロン…うううう」

彼女の発した名前を聞いて、戦略会議で二人が仲睦まじく話していたことを思い出した。

まさか、D区画に彼もいたのか。

じゃあ、彼はあの生け花の中に…



そう思った矢先、うずくまっていたシルヴィアさんは私に迫ってきた。

鬼気迫る表情でこちらに接近し、礼装の襟首をつかんだ。

「なんでよ！リツカ！なんで彼を助けてくれなかったのよ！」

「っ……………」

私は彼女の言葉に気圧された。

「あなたがいたなら助けることだってできたでしょう!？」

「それは…」

「何のためのマスターなのよ！その令呪を使えば、彼らだって…」

そう泣き叫びながら、彼女は私の右腕を持ち上げた。

そうして彼女が見た私の右腕に先はなかった。

黒い布が巻かれているだけの右手首を見て、彼女は目を丸くする。

そして言葉を止めた。

ムニエルさんも、マーカスさんも、チンも目を見開いて、息をのむ。

「リツカさん。その右手…」

チンが呟いた。

私はうつむいて彼女に一言だけ発した。

「……………ごめん、なさい」

シルヴィアさんの目からは涙がこぼれた。  
そして彼女は崩れ落ちた。

「なんでよ………」

## 崩壊の足音

工房の中は酷い有様だった。

「あああああ！」

「シヤルロット！鎮痛剤！アセトアミノフェン！」

「さきほどの処置で使ったのが最後です！ロキソプロフェンなら………」

「ダメだ！出血が多い！NSAIDsは使えない！」

「この突出痛ならオピオイドを………」

「彼は喘息を持つているんだ！フェンタニルは！」

「レスキューは医療部の在庫しかありません！」

「っ………10で投与だ！」

「分かりました！」

出血をしている人や大きな傷を負った人、意識のない人が10から20名ほど寝かされていた。

毛布を簡易的なマットにして工房の奥の広い部屋に寝かされている。

実験室なのか妙に広い区域の床や壁は硬質であろう素材で作られているようだ。

その場所に寝かされている人達の間をドクターと医療部門のスタッフ一人が何度も往復している。

「ドクター！来てくれ！クリスが急に胸が痛くなったって！」

「分かった！今行く！」

寝かされている負傷者より多い数のスタッフを負傷者の応急処置をしている。

包帯を巻いたり、声をかけたり、AEDの表示を凝視している人もいた。

また負傷者の奥には震えてうずくまっていたり、頭を抱えている人たちの塊もあった。

私はその光景を目にして、言葉を失った。

「これは………いったい………」

「カルデアが、襲撃を受けたのよ」

私がこの惨状から口に出た言葉を聞いて、隣の所長が答えた。

「襲撃………？」

「ええ」

所長が隣に視線を送る。

そしてしよっていたリユックを下した。

「チン、これをロマニに渡して頂戴。彼に頼まれたものは大方拾ってきたわ」

「了解つす」

「マークス、シルヴィアを休ませてあげて」

チンはリユックを受け取りドクターの方へ、マークスさんは無言で頷いて黙り込んでしまったシルヴィアさんを介助しながら奥に向かった。

「襲撃って……どういうことですか？」

呆然としながら私は質問した。

この惨状を厳しい目で見ているムニエルさんが口を開く。

「藤丸がレイシフトしてすぐそっちとの連絡が途絶えたんだ」

あつちでインカムを操作しても、ノイズだけが聞こえていたことを思い出し頷く。

「うん。こつちも」

「ただ魔力反応はあつたし、存在証明も続けることができたから、俺たちは神代の魔力密度が通信を妨害すると推測した。それでそのままトレースしてた」

「問題はこのあとよ」

「問題？」

「貴方の魔力反応が急に弱体化したのよ」

所長の言葉をきいて考える。

弱体化、弱体化……………

私の体に泥の呪いが入った時だろうか？

「何が起こったのか正確に確認はできなかったがとにかく藤丸が負傷したのは確かだった。だから礼装の治療術式を起動するためにこっちの炉から魔力を送った」

私の魔力が少ない分、その補填はいつもカルデアから受け取る形で行っている。

「その時だった」

ムニエルさんの眉間にしわを寄せる。

「あいつらが現れたのは」

あいつら……………

「貴方も見たでしょ。DSSにいたあの二体のあれよ」

バビロニアにもいたあの気持ち悪い紫色の生物だ。

「どうやったのか分からないが、あいつらが転移してきやがった」

カルデアに転移？そんなことが……………

いや、でもそれだったらみんながいる。

飛んで火にいる夏の虫だ。

人間では太刀打ちできなくてもサーヴァントなら……

「ええ。貴方の言いたいことは分かるわ。おそらくサーヴァントがいれば被害を増やさずに済んだでしょう」

所長の言葉に私は眉を顰める。

サーヴァントがいれば？

妙な表現をする。

いるもなにもサーヴァントならカルデアに常駐している。

「あいつらはまっさきにDSSに転移してきたのよ。あとは、わかるでしょ？」

DSS。Degrading System Section の略称。

霊基を確立するための必要最小限の情報だけを抽出し、サーヴァントをあえて弱体化させて現界させることで魔力消費量を格段に減少させるシステム。

ほぼすべての動力を炉で賄っている現状を鑑みて発明された画期的な装置だが  
……

「あれは大前提として、このカルデアは敵に強襲されないという仮定があつて初めて成り立つものだった」

所長は何かを睨みつけるように視線を鋭くする。

逆に言うところにある状態ではサーヴァントは力を使うことができないということだ。

あの中ではサーヴァントであつても少し丈夫な人間程度の力しか持たない。

そんな状態では彼らがいくら英雄であつても……

「DSS内の観測計器に異常が発生した。それを受けてレフ教授が確認すべきだつて言つてな。彼と技巧部、機材管理課の何人かでメンテナンスに行つたんだ。だが地下に入つてから誰も通信を返してこなくなつた」

「そしてレフたちの代わりに管制室に戻つてきたのがあれだつたのよ」

所長は憎々しげに拳を握る。

「カメラにも、計器にもカルデアの異常はほとんど観測されなかつた。報告が出たのは原始的な圧力感知器のみで、レイシフトでの通信復旧に忙しかつた管制室はそれらをエラーとして処理しちまつた」

「急に来たあいつらに対応する術はほとんどなかつたわ」

彼女はその時の詳細を語つた。

ドアが開く音とともに最初に聞こえたのは首が落ちる音だつたという。

最もドアに近い場所で観測機管理をしていた男性スタッフの首が、管制室中央に落ちた。



そこからは阿鼻叫喚の図だった。

混乱し、逃げ惑うスタッフ。

入り口から新たに乱入してくる敵。

魔力を使ったものはあの生物に優先的に狙われ、その場にいたダ・ヴィンチちゃんが入り口から新たに乱入してくる敵。囿として管制塔に残った。

彼女が入ってきた9体の生物を足止めし、所長たちを逃がした。

管制室から出た彼女らは、達海の代理として管制室にいたチンの提案で技巧部の工房へ行くことになった。

あそこは魔術実験を行うため、不慮の事故に備えて分厚い壁と強力な魔術結界に囲まれている。

向かう途中に惨殺されたスタッフの死体、壊された壁、多量の出血痕が残っていて、その中であの生物に襲われながらもなんとかたどり着いたらしい。

「途中で負傷者と襲われているスタッフを助けながらここに来たのよ。技巧部には最低限の外科設備がある。実験での万が一に備えてね。でもそれ以外にはほとんど医療器具がない」

ここは機具のメンテナンスをするが、人を看る場所ではない。

薬も、医療機器も十全とは言い難いだろう。

「負傷者のためにある程度の薬は必要だったし、まだ生存者がいる可能性も高かった。だから魔術が使えて動ける人間が外に向かったの。私もその一人」

それであそこに。

「貴方を見つけたのはDSSを確認しに行く途中で偶然、運がよかったわ」  
彼女はそれを言い終えて、軽く息を吐いた。

今少なくとも生きているのはここにいる人たちだけ……………なの？

「じゃあ、達海もマシユも……………」

所長は首を横に振った。

「懲罰房のある地上一階にも何人か送ったけど、まだ帰ってきてない」

「……………」

そんな…

「医療部の病室は……………っ！！」

彼女が言葉を言いかけたとき、入り口から物音がした。

比較的入り口に近かった私たち3人は即座に顔をそちらに向ける。

「敵……………」

耳を澄ます。

コンコンとノックするような音だ。

ゆっくりと工房の扉に近づく。

工房の扉の目の前に来た時、扉を強くたたく音が聞こえた。

バンツ!!!

大きな音が鳴り、直後静寂が訪れた。

奥で負傷者の手当てをしていた人たちもみな一様に口を閉ざし、こちらを見ている。

誰の目にも恐怖の色が宿っている。

私は右手首の痛みをこらえ、冷却術式を中断した。

その魔力を礼装に補填する。

隣では所長が障壁を展開していた。

その表情は明るくない。

「……………」

「……………」

「……………」

扉がわずかずつ開き始める。

工房の扉は魔術結界と防壁の二つで守られている。

これをこえる方法は2つ。

一つはカルデア職員のIDを持ち、生体認証をパスすること

もう一つは結界も防壁も意に介さぬほどの力で無理矢理こじ開けるかだ。

扉がゆっくりと開き、廊下側から人影が歩いてきた。

「……………部長……………?」

薄暗い廊下からこちらへと歩いてきたのは私の上司、戦闘部門の部門長、キャロル・エーデルフェルトだった。

「部長!無事だったんですか……………!!」

思わぬ人物に驚きの声を上げる。

しかし彼女は私の声を聞くよりも先にその場に倒れた。

彼女が境界を越えてすぐ工房の扉が閉まり、彼女の体躯を明かりが照らす。

……………血だらけ!!

「部長!!」

私はすぐに駆け寄る。

「ドクター!シャルロット!来てくれ!負傷者が!」

後ろでムニエルさんが奥に叫んだ。

私は倒れた彼女を膝に寝かせ、彼女を呼ぶ。

「部長!!部長!しっかりしてください!」

いたるところから血が出ている。

特に首元の傷がひどい。

血が流れ出ていて止まる気配がない。

「エーデルフェルト！」

後ろからドクターがこちらに走ってきた。

「ちよつと君！そこをどいて……………つて!!立花ちゃん!!」

ドクターは私を見て目を丸くする。

「何でここに……………!!」

説明したいのは山々だが今はそれどころじゃない。

「ドクター！今は部長を！」

「あ、ああ！」

ドクターは彼女に駆け寄る。

彼女の左手を持落ち上げる。

「冷たい……………脈拍も弱い」

ドクターは厳しい目つきで彼女を看る。

「斑紋まで……………まずい出血性ショックが酷すぎる」

彼は後ろを振り返ってムニエルに指示をする。

「ムニエル君！シャルロットに言つてAとABの全血製剤、それに塩化カルシウムをも

らっつてくれ！」

「え、ええ」

「大量失血Aといえはわかる！急いでくれ！」

「わ、分かりました！」

ムニエルさんが慌てて後方に走っていく。

ドクターはしよつていた赤色の救急バッグを下した。

「とにかく止血しないと……………」

彼が止血剤を取り出そうとしたとき、彼の腕を部長の手が握った。

「待ち、なさい…アーキマン…」

ドクターは驚いて彼女を見下ろす。

「エーデルフェルト！よかった！」

「まだ、やるんですが、ありますわ……………げほっげほっ」

彼女が吐血する。

その状態にドクターは慌てる。

「無理に話しちゃいけない。今はとにかく手当を……………」

彼が手に持っていた止血剤のボトルを部長は払った。

ボトルは彼の手を離れ、遠方へ転がっていく。

「もう、手当ては……いりません。自分のことぐらい、自分で、分かります」  
彼女の言葉にドクターは目を見開く。

「それよりも伝えることが……所長は……？」

「(ハハ)よ」

部長の状態をドクターの後ろで見ていた所長が前に出た。

彼女は極めて冷静に彼女に聞いた。だした。

「ユリフェイスとアトロホルムはどうしたの？一緒に行ったわよね？」

他の部門長たちも一緒に？

「死に、ましたわ」

「しっ!!」

彼らまで……!!

殺しても死なないような、優秀な魔術師のはずじゃ……

「なぜ？貴方たちならあの化け物ぐらいで死にはしないでしょ？」

所長の質問はいたって客観的だ。

客観的すぎて感情の気配がないほどに。

「ええ……敵が、あれだけだったら……」

「だけ？」

「か、管制塔に行ったとき……げほっげほっ」

彼女が大きな血の塊を吐き出した。

顔が真っ青だ。

いや、体全体に赤みがない。

「これは、呪いか！」

彼女の体を見て、ドクターが視線を険しくする。

「少しばかり、しくじったので……それよりも管制塔で……げほっげほ」

「何が……」

所長が何かを言いかけたとき後ろで何かが落ちた。

振り返ると小さな瓶を持ったムニエルさんが輸血パックを落としていた。

ムニエルさんは部長に走り寄り、食い入るように聞いた。

「カルデアスは!!シバは!!トリスメギストスは!!管制塔に行ったんですよね!!無事だったんですか!!」

「……カルデアの機材は、もうダメでしょう……カルデアはまだ機能していませんが、時間の問題ですわ……げほっ」

ムニエルさんの表情から色が抜け落ちる。

「嘘だろ……」



「召喚システムは無事でしたが、あれは……敵に、利用されてしまいました」  
所長が訝しむ。

「利用されている?」

「……そこそが、問題です。管制室には……敵性サーヴァントが……ごほっごほっ  
サーヴァント!!」

敵に召喚されたの……?」

でもどうやって……?」

「あ、ありえない!」

ドクターが彼女の言葉を否定する。

「仮に召喚システムが機能していたとして、触媒もなしに英霊を召喚できるわけが……  
そうだ。

私たちがマシユの盾を触媒にすることで英霊召喚を行っている。

「そもそもここを攻撃する行為は、人類を殲滅させることと同義だ!そんな存在に令呪  
の譲渡なんて抑止力が許すはずがない!」

「ですが……事実ですわ……アトロとユーリは実際にそれで……」

「馬鹿な……」

「……ごほっ!ごほっ!ごほっ!」

彼女がどす黒い色の血を吐き出した。

私は顔色がサーッと青くなるのを感じた。

どう考えても命にかかわるような、そんな血の量だ。

「部長！」

彼女の目の光がかすれてきた。

呼吸も浅い。

ドクターが救護措置を行おうとわずかに動いたが、所長が止めた。

所長はドクターの肩を抑え、無言で首を振る。

「エーデルフェルト。最後に一つ聞いてもいいかしら」

所長の言葉に彼女の口角がわずかに上がる。

「まさか、私が………」一回りも下のガキに、こんなことを言われるとは……」

彼女の喉元から浅い呼吸が何度も聞こえた。

笑っているのだろう。

「それで、なんですか……？」

所長は未だに表情を変えずに腕を組んでいる。

「あなた、なぜここに来たの？近接戦闘に優れるあなたなら、あの二人が死んだ時点で逃げれば死ぬことはなかったはずよ。手足の1、2本ぐらいはもげたかもしれないけど」

「……………」

「自己本位の化身。自らの探究を至上とする。だからこそその魔術師でしょう？それなのにあなたは逃げもせず、そんな状態になってまでここに帰ってきて情報をくれた」

所長は腑に落ちないようだった。

同じ魔術師として彼女の行動原理に違和感を持ったのか。

「なぜ？」

部長は一回だけ短く息を吐いた。

「…当然の疑問ですわね……………単純…」

「…」

「わたくし…貴方のことは、好んではおりませんが…別に、あの男が好きというわけでも……………ありませんのよ…」

所長は彼女の発言に最初は眉をピクリと動かししたが、そのあとその眉をひそめた。

「あの男……………」

「してやりました……………ごまあ、みやがれ……………ですわね…」

彼女は緩慢な動きで自らの髪留めに手をやった。

その裏から何かを取り出し、所長に押し付ける。

「カードキー……………」

プラスチック製の小さなカードキーだった。

「エーデルフェルト………?」

カードキーを受け取った所長の顔がハツとする。

彼女の視線の先にある瞳に光はなかった。

私の上司は息絶えていた。

## 絶望の淵

「はあ!!……………なに? 『コンパス』で帰ってきた? 本気で言ってるのか? 藤丸」

私の説明を聞いたムニエルさんは開口一番にそう言った。

確かに帰ってきた私自身でさえ信じられないような話だけど。

「ホントだよ。今も地下3階の倉庫に『コンパス』の残骸が残ってる」

「おかしいだろ。レイシフトにどれだけ大量の魔力と設備、技術、人手が使われてると思ってるんだ。それを片手サイズのコンパスだけで代用なんて……………」

彼はため息をつく。

「いや、聖杯の魔力リソースを全部使ったってことはそんなに効率がいい方法でもないのか?……………もうなんでもありだな、部門長は」

「ちよつと待つてくれ。確かに驚くべきことだけれど、いま重要なのはそこじゃない」  
ドクターが目もとを抑えながら苦言を呈した。

私も彼と同じ気持ちだ。

情報が多すぎて混乱する。

私はしゃべり続けて乾いた口を水で潤す。

水が入っていたコップを目の前の机に置き、周りを見る。

ここは技術部の工房の最も奥に備えられた用具室。

周りには開発資材と思われるものが整理されて置いてある。

キャロルさんが亡くなった後、彼女の遺体はすぐに予備のコフィンケースの中に入れ

られた。

遺体が見えるところにあると負傷者の気が滅入るし、疫病のもとにもなるからだ。

そしてコフィンをこの場所に移動させた。

その後、私たちはお互いの持つている情報をすり合わせるべく、一度ここで話し合うことにした。

今ここには私と所長、医療部のトップであるドクター、技巧部の副部門長チンと総務部の副部門長マーカスさん、それと役職付きでないスタッフの代表としてムニエルさんがいる。

全員が製図で使われていると思われる大きな机を囲っている。

「一度状況を整理しよう」

「はい」

ドクターは軽く息を吐き、先ほどの私の説明を要約した。

「まず立花ちゃんは右手ごと令呪を失った。それはあの紫色の化け物にやられた。加えて呪いも受けている」

「はい」

「そして特異点であるバビロニアは既に修復不能な状況に陥っていて、延命措置のためにジャンヌ・ダルクが残った。一緒に行った英雄王の消息は不明」

「はい」

「これに関しては彼女から言われた情報だけで詳細は分からない」

「……………はい」

聞く前にコンパスを起動させられたから、詳しいことは何も聞けなかった。

結局、彼女が私に言っていたのは「カルデアがヤバイ」と「バビロニアが滅びる前にソロモンを倒せ」ということだけだった。

状況があまりにも悪かったせいで焦っていたのかもしれない。

彼女が言っていたカルデアがヤバイの意味を知った今では、悪い状況というのは続い

ているといえるけど。

「カルデアは、立花ちゃんバビロニアで見たという化け物に襲撃を受け、被害甚大」

マーカスさんは無言で頷く。

「スタッフの半分以上が消息不明。実践に耐えうる魔術師は少なく、生存者の半分は負傷」

「そうつす」

チンが肯定する。

「シバとトリスメギストスはほぼ機能停止。カルデアスは起動しているがいつ停止するか分からない」

「戦闘部門長の言葉が正しければ、ですが」

補足を加えながらムニエルさんも頷く。

「そして召喚システム・フェイトは無事。だが何者かに利用され、管制室には敵性サーヴァント少なくとも一体いる」

「ええ。その通りね」

所長が同意する。

「つまり、こちらにはサーヴァントがおらず、唯一のマスターである立花ちゃんは負傷していて令呪がない。さらにはカルデアには敵性生物が跋扈、敵のサーヴァントまでい



て、シバによる観測補助やトリスメギストスでのサポートもできない」  
「……………」

「この状況の中で、新たにサーヴァントを召喚し、虚数空間の中にあるソロモン王の工房へとたどり着き、彼を打倒して人理の修復を行う…」

ドクターは大きくため息をついた。

「考えうる限り、最悪の状況だ……………」

重い空気が部屋の中を漂う。

ドクターはそんな空気を振り切るように頭を振った。

そして所長に視線を向ける。

「所長、医療部の状況はどうでしたか？」

彼女は首を横に振る。

「もぬけの殻よ。病人の救助と薬の回収のために訪れたときにはもう誰も」

もぬけの殻……………？

「それは…病人も職員も全員あいつらに殺されてたつてことつすか？」

所長の表現に私同様違和感を覚えたのかチンが質問した。

その問いに所長は首を横に振る。

「いいえ。誰もいなかったのよ。入院の札が付いているベッドにもその周りにも血はつ

「いていなかった。もちろん遺体もなかった」

「避難したってこと……っすかね？」

そうか。

誰かが真つ先に動けない人達を避難させてくれたのかも！

だとしたらマシユも無事で……！

「分からないわ。少なくとも誰かが負傷した形跡はなかった」

「そう……ですか。ならいいのですが……」

ドクターは安堵の息を吐く。

しかし所長の顔色は優れない。

「ただ……」

「ただ？」

彼女は口元に手を当てて、考え込んでいた。

しばらくの間があいて、もう一度口を開いた。

「………何もなさ過ぎた。不自然なほどに」

「無さ過ぎた？」

どういふことだろう？

「避難するにしても、担ぐにしても、ある程度の人が移動するなら痕跡が残るでしょう？」

部屋が散らかっていたり、ドアが開けっぱなしだったり」

「それは、まあ」

「本当に何もなかったのよ。まるで………まるで…」

「まるで……？」

「まるで……」

彼女は口を開きかけていたが、半開きの口をゆっくりと閉じた。

そして軽く息を吐く。

「………いえ、やっぱり考えすぎね。おそらく医療部の残っていたスタッフが避難させ  
たんでしょう」

彼女の顔色は良くない。

少なくとも安堵している人間がする表情ではなかった。

私は周りの暗い雰囲気吹き飛ばすべく努めて明るく話そうとした。

「そ、そうですね。病人を動かさないだけで安全な場所で身を潜めてるのかも……」

「ない」  
即答だった。

ドクターは私の楽観論をすぐさま否定した。

「……カルデアでこの工房と同等以上に安全な場所なんて、ないんだ」

「で、でも…戦闘訓練に使ってる部屋は魔術をいくら使っても傷一つつかないくらい頑丈でしたし、ならシエルターぐらいあっても…」

「いや、そもそもカルデアには強力な内部防衛機構が作られていないんだ。確かに魔術師や英霊の一人や二人を拘束するぐらいなら訳ないけれど、あの数で、しかも人間ではないような敵を相手に捌けるほどのものじゃない」

「それは…どうして…?」

「外部に対するセキュリティがあまりに強固だからだ。招き入れる人員は家柄、身辺、経歴に渡って徹底的に調べられているし、高度3000mの雪山に存在するカルデアに武力突入するのは物理的に不可能だ。加えてカルデアスの地場で魔術的にも安定している」

彼は組織の絶対性を悲しそうに説明する。

「この状態のカルデアを強襲するなんてできやしない。できたとしてもかかる費用に対してここを制圧する旨みが果たして釣り合うのか、そのレベルだ。だから作られていなかった」

「…………でもここはっ」

「むしろこの工房が異常なんだ。入り口の防壁は必要以上に分厚くなっているし、結果も必要以上に強力だ。レオナルドが技巧部にいたときは設計当初のままだったよね？」

達海くんは一体何を考えて設備を作り直したんだ？」

ドクターは技巧部門の副部門長であるチンに聞いた。

彼女は首をかしげながら答える。

「それが、達海さんは、この方が安全だから」としか……」

「安全？」

「達海さんの実験は結構危ないやつも多かったつすから、私たちは周りに被害を及ぼさないようにこうしたと思ってたんすけど……」

チンはそう言って、首を振った。

「……………いずれにせよ、今の外の状況を考えれば彼らの生存は絶望的だろう」

「そんな……………」

「少なくともその覚悟はしておいた方がいい」

彼が厳しい表情のまま腕を組んだ。

所長がマークスさんに視線を向ける。

「地上二階に向かった者は？ 今も応答はないの？」

マークスさんは無言で首を振る。

「……………そう」

ドクターは頭をガシガシと掻く。

「この状況なら、個人で召喚ができる達海くんがいてくれればとても心強かったんだが……」

ため息をつく。

「今言ってもしょうがないか……」

左手の拳を無意識に握りしめていたのに気付いた。

——何のためのマスターなのよ！

ついさつきシルヴィアさんが私に叫んだ言葉が脳裏に響く。

私は机を左手でたたく。

「ドクター！私にもう一度令呪をください！」

「……………」

「私ともう一度マスターとなって、英霊を呼べば……」

彼は手を首の後ろの持っていき、申し訳なさそうに笑った。

「すまない。それはできないんだ」

「なんでですか？！」

「きみに新たな令呪を渡すには、トリスメギストスによる霊子演算とプロメテウスの火から供給される膨大な魔力、そしてそれらを聖杯戦争の英霊召喚に落とし込むための召喚システム・フェイトが必要だ」

「っ…………それは」

「そうだ。トリスメギストスはすでに機能停止。管制塔に行けない僕らは炉の魔力を管理することもかなわず、召喚システムは乗っ取られてしまった」

彼は視線を落とした。

「……………すまない。君に戦う手段を与えて上げられないのは、僕の力不足に他ならない」

「っ……………そんな」

「……………すまない」

なんで。

なんで……………

「謝るんですか……………」

ドクターの表情を見てただ困惑する。

そんな、やめてくださいよ。

いつもみたいに頼りない笑顔で、言ってください。

あるんでしょう？

打開の策が……………

「……………」

なんで苦しそうな顔で俯くんですか……………

「うわああああー！」

悲鳴が聞こえた。

用具室にいる全員がはじかれたかのように顔を上げる。

「まさか……」

チンはドアを開け、走って外へ出ていく。

私たちも彼女の後を追って部屋から出た。

外に出るとみんな動きを止めている。

ある一点を見ている。

「なにが……」

前方に止まっているチンに追いつく。

彼女もまた入り口を見て動きを止めていた。

追いついた私は彼女が見ている先をみた。

「あれは……」

入り口の扉がわずかに開いており、その隙間からあの紫色の鉤爪が伸びていた。

「シシシシシシッ！」

「ククククク！」



扉の向こうには虫が這いまわっているような音が幾重にも響いてくる。

そして扉を開けようと、わずかな隙間からは無数の鉤爪が差し込まれている。

「とうとう……まで……！！」

後ろからムニエルさんの焦った声。

そしてすぐさま所長が周りに指示を出した。

「ぼさっとしない！動けるものは手を貸しなさい！チン！あなたは防壁の駆動系よ！奴らの足をちぎってやりなさい！」

「り、了解っす！」

彼女は後ろにいたムニエルさんを見て、入り口を指さす。

「行くっす！」

「お、おう！」

チンとムニエルさんは前方に走り出した。

所長はさらに周りに指示を出す。

「動ける術師は来なさい！結界を強化するわ！負傷者は奥に避難！動けない重傷者には軽傷のものが手を貸して移動！」

彼女の指示に驚きと恐怖で固まっていたみんながあわただしく動き出す。

「技巧部門所属は基盤に集まるっす！」

「カワター！あなたは入口の結界を指示なさい！私は工房全体をやるわ！」  
「はい！」

「この結界はどこに術式があるの?!」

「慌てないで！重傷者を優先して！」

「邪魔！ぼーつと立ってんじゃねえ！」

「お前がぶつかってきたんだろうが?!」

全員が移動しだして、衝突や混乱が起こる。

「立花ちゃん！僕らも負傷者の移動を手伝おう！」

「は、はい！」

ドクターに言われ、私は奥に寝かされていた負傷者のもとへ向かう。

奥ではすでに回路外科長のシャルロットさんが病人の移動を始めていた。

車輪のついた担架を運んでいた彼女はドクターを見て、叫んだ。

「アーキマン先生！ひとまず工房の外科治療室に彼らを！」

「ああ！わかってる！」

二人は自力で立ち上がることができない重傷者のもとへ向かう。

私も後を追う。

ドクターの後ろを走る私を見て、シャルロットさんが目を見開く。

「立花!! あなたなんでこんなところに!! レイシフトは!!」

「それは……………」

走りながら説明しようとしたが、その前に彼女の視線は私の右腕に向いた。

「あなた、その右腕! 治療する気あんの!!」

「え!!」

「医者の前で滅菌もしてない布を傷口に巻くな! それ! 後で見せなさい!」

「は、はい」

私がここにいることよりも、怪我の杜撰な処置に気付いたときの方が声が大き。

彼女の性分だと理解していてもやはり驚く。

ドクターも苦笑気味だ。

「彼をおくまで運ぶわよ!」

シャルロットさんが引いてきた担架を男性スタッフのそばに寄せ、足を折りたたむ。

彼は頭を怪我したのか、包帯が巻かれており意識がなかった。

彼女は私たち二人の顔を見た後、早口でカウントする。

「いきますよー1、2、3!」

その合図で私たちは彼を隣の担架に乗せた。

男性をバンドで素早く固定し、シャルロットさんは担架の足を立ち上げた。

「彼は私が！二人はまだ動けない負傷者を奥へ！」

「ああ！」

「はい！」

彼女は車輪がカラカラ回る音を響かせ、すぐに担架を奥へ運んで行った。私たちもすぐに戻る。

お腹を抑え、うめき声をあげている男性スタッフに駆け寄った。

裂傷なのか巻かれた包帯にはわずかずつ血のシミができ始めていた。

「彼を運ぶ！立花ちゃんはストレッチャーを！」

「ストレッチャーって!?!」

「さつき使ってたやつ！車輪のついた担架！あっちの壁際にまだ2台ある！」

「了解です！」

私は頷いて、奥の担架へ走る。

慣れない手つきで足元のストツパーを外し、ドクターのもとへ転がす。

さつきみたいに下すにはどうすれば……………

「端のレバーを引いて！」

端、端……………これか！

寝かす面の裏側に着いたレバーを引いた。

足が折りたたまれ、担架が下りる。

「いくよー！1、2、3！」

掛け声で彼を乗せる。

ドクターは素早くベルトを締めて、担架を立ち上げた。

うめき声を上げ続けていた男性はドクターを見て、口を開いた。

「き、来たのか……？あいつらが？」

「それは……」

彼の震え声にドクターが何かを言おうとしたがその前に私は口を開いた。

「ええー！でも大丈夫！私たちが……」

男性は私が言葉を言い終える前に目を見開いた。

「い、いやだ……」

「え……」

「いやだああああ！いやだあああああ！」

男性は担架の上で暴れだした。

「ちよっ、やめて……！」

「助けてくれ！いやだ！あああああ！」

彼が暴れて、ストレッチャーがバランスを失う。

そしてけたたましい音と共に倒れた。

「うわあああああ！」

なおも暴れて、安全ベルトで拘束されている四肢を動かす。

「お、落ち着いて！ま、まだ、ここには……………」

「あああああ！」

彼の暴走は激しく、担架を立たせるところではない。

「何をやってるの！」

私が男性スタッフの豹変ぶりに狼狽していると、奥から戻ってきたシャルロットさんがこちらに駆け寄ってきた。

「シャルロット！セレネ静術の筋注を！」

ドクターは彼女が駆け寄ってくるとスタッフを抑えて叫んだ。

その指示にうなずいた彼女は肩にかけていた救急バッグから紋様の入ったインジェクターを取り出した。

ドクターの拘束に抵抗し、暴れているスタッフの腕に打ち込む。

プシュツと空気が抜ける音ともに何かが打ち込まれ紋様が光る。

1秒もたたぬうちに男性の意識が途絶えた。

ほつと息を吐いたのもつかの間、シャルロットさんが私の首元をつかんだ。

「馬鹿！何をしてるのよ！」

怒鳴られた意味が分からず、私は困惑する。

「い、いや、あの人を安心させようと状況を伝えただけで…そしたら急に…」  
状況を説明しようとしたらさらに怒鳴られる。

「怪我をしていれば精神も疲労するなんて！あなたが一番わかっていることでしょう!! 余計なことを言っただけです！」

「私はただ事実を…」

「事実も真実もどうでもいいのよ！必要なのは患者を安心させること！すり減っているのすら分からないの!!」

「そんなこと……！気休めを言っただけです…っ!!」

彼女は私の言葉に首元をつかむ力を強めた。

ぎりぎり私の首が締まる。

「正しさなんかで人が救えるか！そんなもの…」

「シャルロット！」

その力が強まったところで傍にいたドクターが止めに入った。

「やめるんだ！立花ちゃんは医療部の人間じゃない！」

その言葉に彼女はハッとす。

首を絞める力が弱まり、手を離した。

「けほっ！けほっ……」

私はたまらず咳をした。

彼女は自らの額に手を当てていた。

「……………ごめんなさい。言いすぎたわ……」

「い、いえ……………」

私も彼女に謝罪をしようとしたが、大きな声が中断した。

「ロマン！」

呼び声と同時に所長がかけてきた。

「所長？」

「一つ伝えておきたいことが……」

バンツ！！！！

入口の方から大きな音がした。

そちらを見ると奴らの足が工房のドアを貫通していた。

「っ！！」

その足はもがくように動いており、ドアにひびが入っていた。



近くで術師の指揮をしていたカワタさんが怒鳴る。

「何をしている！結界の補助が弱いぞ！カヤン！」

怒鳴られた男性スタッフは起点となる術式の前で棒立ちとなっていた。

声が届いていないかのように扉を見ている。

「聞いているのか！カヤン！その術式はお前の……」

「うるさい！」

彼に近づき、もう一度怒鳴ったカワタさんを彼は怒鳴り返した。

彼の表情は悲壮感しかなかった。

絶望に支配されており、目に光がない。

「こんなことしてどうなんだよ!! どうせもう死ぬのに！」

「なんだと!!」

カワタさんは彼に詰め寄るが、カヤンさんはその手を払う。

「みんなもうわかっているさ！今ここで何をしたってただの時間稼ぎにかならないってことを！もうすぐ死ぬってこともなあ！」

彼の叫びにそこにいた人間の多くは肩をピクリと動かした。

「全員が聞いてただろ!! さつき死んだ彼女の言葉を！トリスメギストスもシバも動いてないって！カルデアスもすぐ止まるって！」

「っ!! お前少し黙れ!」

「レイシフトもできねえつてのにここで魔力が尽きるまであの化け物どもをせき止めて、なんの意味がある!! 俺はあんな死に方をしたくねえ!」

カワタがカヤンの胸ぐらをつかむが彼は止まらない。

「ここに入るとき遺書を書いたのを忘れたか!! 死ぬ覚悟はしたはずだろ!」

「死ぬ覚悟はしたさ! 世界を救うための覚悟ならな! おもちやになる準備じゃない!」

「っ!!」

カヤンはカワタにだけでなくこの部屋にいる全員むかって吼えた。

「ここにいる奴らなら全員が見たはずだ! あの紫色の化け物が俺たちの仲間て遊ぶ姿を

!」

「……………」

「悲鳴を上げる仲間を切り刻んで、痛みと絶望で苦痛の表情を浮かべるさまを楽しんでいた……………あいつらは、セシルも、サムも、イアンもケイもターナもみんな! 意味もなく殺したんだ! 信じる何かでもなく、障害となつたわけでもなく、殺すためでもなく、あいつらは遊びのためだけに俺たちの仲間を犬死させたんだ!」

彼の叫びに誰もが言い返すすべもなく黙り込む。

「俺たちは色んな”死”を見てきた。冬木で、フランスで、ローマで、オケアノスで、口

ンドンで、アメリカで、キャメロットで」

「……………」

「英雄たちが自分の信じる何かのために命を落としてきた。その意地のため、敵を足止めするため、俺たちを先に行かせるため、その地の人々を守るため……………」。何かの意味のためにその命を散らした。俺たちは…いや、俺は、そんな死に方を見すぎた…」

彼は肩を震えさせながら、意気を落とした。

「自分の死に方を選べるのが、強い奴らだけだなんて…そんなことを忘れていた。今思えばそうだ。どんな特異点でも多くの人間が、理不尽に死んでいた。国民、海賊、市民、難民、騎士…………」。英雄が華々しくその命を散らす裏側で、無力な人間の多くが意味もなく潰されていた。そんな事実が怖くて、目をそらしていた……………」

私はいままで特異点で見た死を思い出した。

瓦礫に押しつぶされた冬木の老人。

ワイバーンに握りつぶされたフランスのおじさん。

戦争のなかで行きかう軍隊に押しつぶされたローマの父親

嵐の中で船から落ちていった海賊の青年。

殺人鬼に切り刻まれたロンドンの婦人。

戦から逃げる中で息絶えた女性。

聖抜によって切り殺された難民の子の母親。

砂漠の民に殺された騎士。

どの人間も、無残にそして理不尽に、考える間もなく殺された。

彼らには帰りを待つ家族がいた。

強い絆で結ばれた仲間がいた。

守りたい子供がいた。

慕ってくれる後輩がいた。

何も関係なかった。

ただ大きな流れに巻き込まれたただけだ。

「なんのために死ぬ!! だれのために死ぬ!! そんなことも分からないまま必死になってここで力尽きるのか!! 俺は! 俺たちは!!」

彼は膝をついてすすり泣きだした。

「そんな死に方……俺は嫌だ……。俺は意味もなく、弄ばれて、泣きわめきながら死ぬなんて、いやなんだ……」

彼の言葉に誰もが口をつぐんだ。

ただみんなしてうつむいた。

反論する言葉も、慰めの言論を言うでもなく、黙り込んでいた。

ただ一人を除いて。

「ええ。私だつて嫌だわ。そんな死に方」

それは私の隣にいた所長だった。

「でもね。仲間たちの死を、犬死か、名誉ある戦死か……どちらになるかを決めるのは生きている私たちよ」

「所長……？」

彼女の言い方に何か含みがあった。

気づかぬうちに私はそうつぶやいていた。

カヤンは所長を半狂乱に責めた。

「そんな綺麗事っ！ どうせみんなここで死ぬんだろ！」

彼はその長い髪を後ろでまとめ上げ、はつきりとした声で言った。

「ええ」

「っ！！」

その言葉に彼は面食らつた顔をする。

「だから私があなた達に意味をあげるわ。なんのために死ぬか、その意味を」

## 死の意味

「い……………み……………?」

カヤンは呆然と一言呟いた。

「ええ。仲間の死に意味を持たせる。私たちで」

所長は腕を組んだ仁王立ちで私たち全員に言った。

「適当なことをっ!」

「適当じゃない。具体的なプランがある。そして私たちはその手段を既に持っている」

「そんなものッ…」

「虚数潜航艇シャドウボーダー」

再び所長を咎めようとしたカヤンにかぶせて所長が謎の言葉を放った。

虚数? ボーダー?

私を含め多くの人間が怪訝な顔する。

私はこの時気づかなかつたが、ここの中の数人は目を見開いて彼女の言葉に驚いていた。

「それが、今私たちがこのピンチを逆転させるために持っている唯一の切り札」  
切り札……………

「人理焼却を起こした者の拠点へ私たちを運ぶ、希望の舟よ」

希望の舟。

彼女は一体どういう気持ちで言っているのだろうか？

希望を伴うといっているその彼女の顔は毅然としても明るくはない。

所長はこちらを振り向いた。

「立花！」

彼女の内心を考えていた私は、急に呼ばれて驚く。

「ここに来なさい！そして第7特異点で何があつたかを話さない！」

「は、はい！」

私は驚きながらも返事を返し、彼女の横に並んだ。

全員の視線の前に出る。

「なんで藤丸がここに……………」

私を見たスタッフの多くが、目を見開き瞠目する。

ここに私がいることの驚きと疑念を覚えている。

当たり前だ。

この状況でレイシフトもできないのに特異点にいた私がいたら驚くだろう。

その視線にすぐんでいと所長が軽く私の肩を叩いた。

「ただ起こったことをありのままに言いなさい」

「……………はい」

深呼吸して心を落ち着けるとみんなに向けて私は口を開いた。

§

「特異点が修復不可能……………?」

「令呪を奪われたって……………」



「ジャンヌ・ダルクが残ったって、時間はどれくらいあるの？」

「いや、すべてが期待通りになったとしてソロモンのもとへどうやって向かうんだよ…」  
私がバビロニアでのことの顛末を話すと、予想通りみんなの顔色は暗くなった。

それはまあ、当たり前だ。

私が伝えたことは結局のところ、私たちの状況がどれだけ厳しいかを念押ししただけなのだから。

「傾注！」

ここにいるスタッフがざわついていけると所長は指示を発した。

その一声で静まり返る。

「つまり私たちはレイシフトをするための手段も、敵を倒すためのサーヴアントも、体勢を立て直すための時間もない。それは理解できたでしょう」

「そりゃあ…」

スタッフが顔を見合わせて頷く。

「なら私たちが持っている舟。シャドウボーダーも理解なさい」

さつきも言っていた…

一体それは…

「貴方たちの何人かは知っていると思うけど、アトラス院からこのカルデアに渡された

ものはトリスメギストスの設計図だけじゃない。私たちにはペーパームーンと呼ばれる観測機も送られた」

「ペーパームーン……？」

多くのスタッツが首をかしげたが、経路部の副部門長であるマーカスさんが声を上げた。

「確か………カルデアスとの位相差を超える手段として用意されていた器具の一つです。虚数空間を観測、立証するための羅針盤だとか」

「その通りよ」

彼の説明を所長は肯定した。

「虚数空間に潜り目的地に浮上するという転移方法を実現すべく送られてきました。しかし、シバができたことと虚数潜航の危険性が高すぎることで、この二つの理由からお蔵入りとなったもののはずです」

「ええ。そして、蔵にあるなら使えばいい」

「使えばって………まさか………」

彼の顔に冷や汗が流れる。

「そのまさかよ」

「そんなこと不可能です！」

マーカスさんが狼狽えて叫ぶ。

彼がここまで狼狽することは珍しい。

経路部のスタッフも驚いている。

「虚数潜航は成功率が3割を切るんですよ!! 成功する確率の方が低い! それに器具があるだけで使い方はアトラス院のトライヘルメスにしか記されていません! 第一、パーームーンはそれだけでは使えない。あの羅針盤を機能させるにはそれなりの設備が……」

「すでに完成してるわ」

彼は再び驚く。

「そんな馬鹿な……!!」

所長は横目で技巧部門の副部門長であるチンを見た。

「どこかの馬鹿が、隠れて開発資材の一部を横流ししていたのよね」

チンは慌てて口を開く。

「いや! あれは達海さんの指示で……あ!!」

そしてあわてて口を押えた。

顔には、「これは言っちゃいけないかった」の文字がありありと書かれている。

「まあ、いいわ。横領の責任は責任者にとってもらいましょう」

彼女はため息をついて辺りを見回した。

「つまりこの虚数潜航艇で私たちは虚数潜航、ゼロセイルを行う。そしてソロモン王のもとへ向かい奴を叩く。以上がこれから私たちが行うこと、その大まかな指針よ」

彼女が言い終えて、ふんと息を吐いた。

言われたことに啞然とする。

虚数潜航艇……………？

ゼロセイル？

理解が追い付かないんだが……………

「ちよ、ちよつと待つてください！所長！」

私が事の難しさに目を回しているとドクターが慌てて声を上げた。

ドクターの表情を見るに彼もまた混乱しているようだ。

「移動手段を得たとして、どうやってソロモンの工房へ向かうおつもりなんですか!!」あの工房は虚数空間にあるんですよ!!」

ドクターの言葉を聞いた彼女は不思議そうな顔をした。

「貴方が今言ったじゃない？虚数空間って……………」

「はい?……………っ!!」

ドクターは首をかしげていたがすぐに何かに気付いた。

「まさか……虚数空間に潜ってそのまま突入するおつもりですか!」

「それ以外に方法はないわ」

「危険すぎますよ!あの工房に突っ込むなんて!そのまま突っ込んだら粉々に砕け散りますよ!」それこそカルデアアスの地場でもない限り!」

「……………」

「それに虚数空間といってもその中で工房を見つけるのは別の話で……………」

矢継ぎ早に理論的不備を指摘するドクターにチンが口を挟んだ。

「それに関しては縁があればいけるっす」

ドクターは彼女の言葉をオウム返しにする。

「縁……………」

「ソロモン王に関係する触媒っすよ。王が使っていた物、話、英霊、遺骸、所縁のある何かがあればその繋がりをたどってアンカーを打ち込めるっす。アンカーさえ掛ければ引き上げるのは出力の問題っすから」

「英霊……………」つ!そういうことか……」

ドクターが何か驚いた顔をした。

そういうこと……………」?

うちにソロモン王に所縁のある英霊なんていただろうか?

チンが詳しく説明しているのを見てカワタさんが首をかしげる。

「チン、お前なんでそんなに詳しいんだ？」

「そりゃ、私も設計手伝いましたし……あ」

彼女はまた慌てて口を抑えた。

もういいよ。

みんな分かっているから。

カワタさんはその仕草を無視して言った。

「ならその舟はどこにある？お前は知ってるんだろ。舟は今も無事なのか？」

その質問に彼女はハツとした。

そして少し間を開けて答えた。

「地下3階の第3倉庫です……」

「第3倉庫……あそこはDSSに一番近いそうかじゃないか！なぜそんな場所に！」

「だって上の倉庫じゃ他のスタッフも頻繁に出入りするじゃないっすか！！DSSの近く

ならサーヴァントがいるからスタッフもあまり近寄らないって、達海さんが……」

もはや口を抑えることもしなくなったチン。

「それはまだあるのか？あいつらに壊されているんじゃない……」

第3倉庫、第3倉庫……第3……あ。

「もしかして…その舟ってあの大きなコンテナのことですか？」

私はこちらに移動してきたときに見た馬鹿でかいコンテナを思い出した。

チンはグルん！と擬音が付きそうな勢いでこちらに振り返り私に指をさした。

「そうっす！それっす！」

やっぱりそうか。

「コンテナには傷一つついてなかったですよ」

彼女はほっと溜息をつく。

「そうっすか…はあ。よかったっす…」

そうか。

あれが舟だったのか。

にしてもコンテナが舟とはいったい。

舟を思い出している違和感が頭をよぎった。

そう言えばあの倉庫、妙に綺麗だったな。

舟どころか、倉庫の中も全部傷一つなかった。

あの化け物が侵入した形跡もなかったような…

そう考えていたら、大きな声に現実へ引き戻される。

「で、でもサーヴァントはどうするんだよ!!」

カヤンさんが狼狽えた声で言った。

「所長は質問に質問で返す。」

「サーヴァント？」

彼は自身のなさそうな顔で私を見た。

「フジマルが言ってたじゃないか！ 令呪がないって！ 召喚システムだつて敵に奪われて  
いるんだろう？！ 移動する手段があつたつて戦う手段がないんじや意味がない！」

……………その通りだ。

逆転の目は戦う資格のあるものにしか意味はない。

私たちの力の根幹をむぎむぎ敵に奪われてしまった私では…

「そうね。だから…」

所長は彼らを見据えて言い放った。

「それこそがあなた達が死ぬ意味よ」

「死ぬ、意味…？」

スタッフ全員を見据える彼女の視線は険しい。

その口からは視線に違わぬ残酷な事実を口にした。

「今からここにいるカルデアの職員ほぼ全員に管制室に行ってもらおう」

彼女の発言に周りのスタッフは呆気にとられる。



「え……………」

「は……？」

「管制室って…」

管制室に行くって…。

「目的は2つ」

彼女は皆の戸惑いに我関せず続ける。

「一つは管制塔に強襲し、召喚システムから英霊の霊基情報を奪取する。あの情報さえあれば藤丸が召喚する機会はいくらでも作る事ができる」

ちよ、ちよっと。

「二つ目は囷よ」

待って…

「管制室の強襲までの道中でできるだけラフム、あの化け物をおびき寄せる。あいつらは人の存在に引き付けられているようだから、物音を立てれば勝手に集まってくるでしょう。そして手薄になったところで藤丸達がシャドウボーダーでカルデアを脱出する」

「そうすれば……………」

「待ってくれ！」

所長の説明を切るようにしてカヤンは大声を出す。

「管制室に行くつて………そんなの特攻じゃないか！」

所長は表情一つ変えず頷いた

「そうね。管制室にはあの化け物のほかにサーヴァントもいる。全員がほぼ確実に死ぬでしょう」

「つーふざけんなー！」

所長の死の宣告にカヤンは激怒した。

立ち上がり唾を飛ばしながら怒声を放つ。

「どうせ死ぬなら戦ってから死ねだど!! あんたは俺たちを何だと思つてんだ!!」

彼の叫び声には私は入所したときに彼女に言われた言葉を思い出した。

! ——— あなた達は人類史を守るためだけの道具にすぎないことを自覚するように

あの時、彼女はブリーフィングルームで座るマスター48名に対して張り詰めた表情でそう叫んでいた。

「俺たちは使い捨ての道具じゃないんだぞ!!」

自分とは対照的な言葉に所長は何を思うか。

「いいえ。あなた達は人類史を守るための道具よ」

彼女は動揺など微塵も見せずにそう言い放った。

「他人事だと思つて、このアマ……！」

敬意も残つてない口調のカヤンは所長につかみかかろうと近づいた。

しかし彼女の視線は彼を貫いたままだつた。

「そして、それは私自身もよ」

「っ！」

「管制室への特攻は私が指揮をする」

彼女の視線は強い意志が輝いていた。

「私たちは道具。捨て石よ。選ばれた数少ない人間たちが、次へ進むための犠牲よ。それでも……！」

彼女は目を見開く。

「それでも！私たちは人間よ！道具で、捨て石で、ただの駒だとしても！私たちは意思を持つた人間なのよ！」

「ここで私たちは死ぬ！だけどその意味は！その意志は！藤丸達が受け継ぐ！」

周りにいる人々全員が私を見た。

「それが私たちにできる唯一のこと！選ばれなかった、才を持って生まれなかった私たちが命をなげうって健気に尽くすこと！それだけが私があなた達に見せることのでき

る道よー！」

「私を恨みなさい！私を呪いなさい！あなた達を殺す私を憎しみなさい！そして………」

「私と共に死になさい！」

S

男は管制室のど真ん中にいた。

彼は前に横たわる女の腹の中に勢いよく手を差し込む。

女の顔が苦痛に歪む。

男はその表情の変化を無感情に見ていた。

何度か腹の中をこね、男はすべきことを終え女の腹から手を抜いた。

抜いた直後、女の腹の傷は黒紫色の肉で覆われた。

その変化を男は満足げに眺める。

そこで男は管制室にわずかな雄叫びが聞こえるのを感じた。

男は手を絹のハンカチで拭き、緑色のハットの位置を直した。

そして上を見てつぶやく。

「騒々しいな」

しばらく上を見上げていると、振動もわずかに伝わってきた。

「なるほど……まあ、これで終わるとは思っていなかったが……」

男は右手に宿る令呪を眺めながら呟いた。

「最も愚かな選択肢を選んだものだ。流星はアニメスフィア家の娘というわけか」

彼は視線は前に戻す。

人だったものへと声をかけた。

「同僚が来たぞ。あの愚か者に君たちが分かるかな？」

## 特攻

全速力で廊下を走る。

共に走る数名の足音がこだまする。

あの化け物がない……

所長の言った通り、彼女たちが引き付けているのか。

荒い息が何度も聞こえる。

ただ前を向いて走る。

進め、進め、進め！

1秒でも早く先へ！

背後で何度目かの大きな振動音がした。

壁が壊れる音が響き渡る。

廊下を伝って聞こえてくる。

照明が割れる音、人の怒号、そして……悲鳴も。

「うおおおおおおお！」

「進めえ！」

「うわあ！」

「嫌だああ！」

一瞬振り返りそうになり、足が止まる。

顔を後ろに向けようとして、出発前の所長との会話を思い出した。

## S

「所長！ どういうことですか!!」

所長の指示で動き出したみんなを尻目に私は彼女に聞いた。だした。

「どういふこともなにも、全部言った通りよ」

彼女は全体の指示を出しながら、こちらに言った。

「船の航行に必要なメンバーだけをそちらに行かせる。舟に到着次第、潜航準備を進めなさい。霊基情報を抽出したらそつちに何人か派遣するから回収して出港よ」

彼女は指示を止めてこちらを見た。

「間違つても戻つてきたら駄目よ。怒号も崩落も、誰の悲鳴が聞こえようとも絶対に舟まで進みなさい」

「そういうことじゃありません！特攻だなんて、そんなことしなくても……！」

私の発言に、周りの人間が手を止めた。

一言では言い表せないような感情を伴った視線を感じる。

憎悪、嫉妬、羨望、安堵、期待。

そう言ったものが渦巻いていた。

今後の行動について異議を唱えようとした私だったが、目を見開いた所長に襟をつかまれて言葉を止めた。

「つ……？」

「私の計画に異議を唱えていいものは、これから死にゆく者たちだけよ。生きていく人間が同情紛れに軽率に発言していいものではないわ」

「そんな、つもりは……」



「……………」

「……………」

彼女は視線をフツとやわらげ襟をつかんでいた手を離した。

「分かっているわよ」

「え……………」

「でもこれもわかって頂戴。私は彼らにとつて死ねと命じた無能な指揮官で、憎むべき対象でなければならぬのよ」

「……………」

周りを見るといつの間にか形容しがたい視線は消えており、みんなが手を動かしてあわただしく作業していた。

「仲間の死に意味を与えるために、仲間を殺す無能な指揮官。彼らにとつてはそれ以外に必要ない」

「……………」

そんな言い方…。

彼女だつて好きで殺しているわけじゃないはずだ。

自分よりも年上のスタッフをまとめ上げ、今までその命を背負つてきて最後は“無能な指揮官”だなんて……………

そんなの酷すぎる。

私の顔を見て彼女は少し笑った。

「何よ、その顔」

「……………」

そして彼女は私の頭を軽くはたいた。

「いいのよ。誰に何と思われようと…」

「なんで……………そんなこと言えるんですか…」

これから死に行くのに。

「一人でも私のことを見ていてくれる人がいた。私を認めてくれた人がいた。その事実  
に気付いたから」

「あ……………」

———彼女が現実から目を背けたことは一度だつてなかった。彼女はどんな苦境  
に立たされても、指揮を放棄したことは一度だつてなかった。

私も知っていた。

彼女のことをそう評していた奴がいた。

「私はそれでいいのよ。だから私は自分だけ救われて部下を殺す無能。彼らの恨みから  
逃げちゃいけない。敵でもない、災いでもない。他でもない私がみんなを殺す」

「っ……………」

「あとは頼んだわ。リツカ」

そうして彼女は踵を返した。

「……………ありがとう」

その言葉を残して離れていくオルガマリー・アニムスファイアの背中はとても大きかった。

§

「止まるな！立花！走れ！」

横にいたムニエルさんがそう叫ぶ。

「立花ちゃんー！」

ドクターも振り返って私の名を呼んだ。

「っ！」

私は拳に力を入れる。

振り返ってはいけない。

戻ってはいけない。

仲間の死を無駄にしてはいけない！

振り返りそうだった顔を前に向け、視線を固定する。

「はいー！」

脚を上げる。

退路はもうない。

S

「うわあああああああ！」

「クリス！」

総務部の職員の名を呼ぶ声と悲鳴が聞こえた。

肉がつぶれるような音、そしてけたたましい笑い声。

「キキキキキキ！モロイ！モロイ！」

血のが飛び散る音だ。

これで何度目だ。

私の指示で何人部下が死んだ？

「構うな！敵は足だけを狙いなさい！足止めがいい！狙いは管制室よ！」

私は悲鳴も怒号にも振り向かず、前を走る。

前方の両扉から、ラフムが3体。

右に1！左に2！

「エイブラハム！あなたは右を！」

「つー了解！」

後ろを走る総務部のスタッフに指示する。

彼の刻印の軌道を確認する。

私は回路を動かし、息を吸い込む。

「星よ！命脈の地！生よ！然らずんば死を！」

詠唱に従い、ラフムの足元に紋様が出現する。

「gg」

そして次の瞬間、2体のラフムの脚が鉤爪を含め6本すべてが消えた。

ラフムの胴と頭だけが転がる。

「gg gg gg gg」

「モロツモロツ！」

それを確認した私は右前方を見る。

そこには障壁によって、手足を固定されたラフムがいた。

「いいわ！エイブラハム！そのまま……」

前方の敵の無力化に成功したことを確認し後ろを振り返った私は、また死を感じた。

「申し訳ありません、所長」

「っ！！」

魔術をかけたエイブラハムは息が荒くなっていた。

顔には冷や汗が垂れている。

「魔力がもう……自分はここまでの様です」

「っ……………」

「術を使える人間も減りました。技師なくしては靈基情報の抽出もままなりません。私はここでしんがり殿を。追ってくる敵を足止めします」

私は唇を噛み、一言だけ言った。

「……………あとは任せなさい」

「ズ武運を」

短い会話だけ交わし、私は彼の横を走り抜けた。

後ろに続く部下たちは涙をこらえ彼の横を走り抜ける。

しばらくして、後方では爆発音と絶叫が聞こえた。

「クソッ！」

「所長！このままでは！」

予想以上に敵の層が厚い。

部下の一人が私に叫んだ。

私は後ろを向かず叫び返す。

「あともう少しよ！踏ん張りなさい！」

§

近づいてくる振動と怒号、そして悲鳴を聞いて男はため息をついた。  
その仕草に宿る表情は憐憫だ。

「哀れだ。歴史を旅する彼らが、歴史から何も学んでいないとは」

《———》

物々しい気配と共に彼は入り口を見つめた。

§

「あと少しよー！」



半数以上の人間を減らしながら、それでも走り抜ける。

この廊下を超えた先、そこに管制室はある！

前方にはラフムがたむろしていた。

照明基盤に集まっている。

奴らは私たちが近づくとこちらに気付いた。

「……………」

「……………」

「……………」

前二つの鉤爪を手を振るかのように回している。

唾うわけでもない。

涎を垂らすわけでも、攻撃してくるでもない。

ただ黙って立っている敵と足を振る敵。

地上2階にたどり着いてから、ラフムは一切攻撃をしてこなくなつた。

立つか、足を振るかするだけである。

例にもれず、前方にいるラフムたちもそうだった。

妙だ。

「コード・グラヴィタス！」

後ろで詠唱が聞こえた。

そして前方に固まっていたラフムたちが頭からつぶれた。

「あと少しです！早く！所長！」

「分かってる！」

思考を振り切って駆け出す。

余計なことを考えている暇はない。

前に進まなければ。

前方に大きな扉が見えてきた。

管制室の入り口だ。

管制室には必要な機材が多く、点検の度に部品を入れ替えたりするため、入り口は戦車を通れるくらいには大きい。

その大きな入り口には私たちに立ちふさがるようにラフムが並んでいた。

20……いや、少なくとも30はいる。

この量を足止めするにはそれなりの規模の術式がいる。

だったら！

「スターズ・コスモス・ゴッズ・アニムス……」

詠唱を開始する。

回路からごっさり魔力が減っていくのを感じる。  
だが時間が惜しい。

一撃で決める。

「っ!!」

並走していた職員は私の詠唱に驚愕し、すぐに後ろを振り返る。

そして追走してくるスタッフたちに叫んだ。

「全員！伏せろ！」

「……………ホロウ・ヴォイド・アニマ・アニムスファイア——！」

詠唱の終了と同時に『星光の魔弾』が奴らに降り注いだ。

「アアアアアアアアアア！」

「aaaaaaaaaaaaaaaaa！」

奴らの甲殻を突き破り、幾重もの光の槍がその生命を断つ。

「予備動作もなしでこんな大魔術?! そもそもここは夜空の下でもないのに……………!!」

床に伏せて前方を見つめるスタッフの一人が激しい振動の中でそう叫ぶ。

「カルデアはアニムスファイア家が構えた拠点。ここすべてが私の工房といっても差し支

えない」

自らの魔術工房でアドバンテージを持つのは当然だ。

術者の力がたとえ相手と比べて弱かろうとそこは問題ではない。

純粹な個の力比べなど実践では何の役にも立たない。

身一つでタイムマンを張るのは野生動物のすることだ。

重要なのはいかにして自分に有利な環境を作り出すか。

拠点に責められてカルデアは瀕死の状況に追い込まれた。

多くの人間が命を落とすし、多くの人間が今から命を落とす。

だとしてもそれは、私たちが一方的に殺されることを意味しない。

私たちは知恵を持つ人間なのだ。

槍に振られ、哀れに泣き叫ぶラフムを睨む。

星の槍に暴れる化け物たちにダメ押しの一擲を放つ。

「ここは、人理継続機関フィニス・カルデア！人の文明を観測するための地よ！お前たち

のような化け物が足を踏み入れてよい場ではない！」

一層強まった星の槍は扉の前に広がる敵を一掃した。

管制室の入り口出会った場所には無数の瓦礫とボロボロになり、半分ほど開きかけた

防壁だけが残っていた。

「す、す……」

後ろにいた誰かがそう言った。

すごいものか。

こんな力があつたところでも何もできないことは、この3年間で嫌というほど味わつた。

「行くわよ」

開きかけた入り口に向け、私は歩を進めた。

S

管制室へと入ったオルガマリーとその一行は部屋の半ばほどでその歩みを止めた。彼女の視線は部屋の中央、レイシフトに使われたコフィンに注がれていた。

「これは…」

そのコフィンの中からは止めなく黒い液体が流れ出ていた。

彼女は周りを警戒しながら、ゆっくりとそのコフィンへと近づく。

「なによ……これ……」

コフィンが開きっぱなしになっており、中はどこまでも続いているような黒い空洞だった。

その空洞の中に一つだけ視認できるものがある。

「右手………?」

切り取られた人の右手がコフィンから湧き出る黒い液体の中に沈殿していた。

彼女はそれを手に取ろうと手を伸ばした。

「っー」

どこからか手を叩く音が聞こえ、彼女ははじかれるように顔を上げる。

管制塔の方からコツコツと音を立て、こちらへと歩いてくる人物がいる。

見慣れた濃緑色のスーツとハット、深いブーツを履いた男はその両手で拍手をしながらゆっくりとこちらに近づいてきた。

「それには触らないでくれるかい?」

そうしゃべりかけてきた男を見て、オルガマリーは目を見開いた。

「レフー!」

彼女の後方にいたスタッフたちもみな瞠目する。

そんな彼らを前にして、彼は拍手を止めて笑いかけた。

「やあ、オルガ」

彼の笑いに彼女は表情を硬くする。

「無事、だったのね」

「ああ。無事だとも」

「…」

「…」

二人の間に沈黙が漂う。

その沈黙をこらえきれなかったスタッフの一人が教授に話しかけた。

「レフ教授！…無事で！」

彼女は会議でもよく教授の太鼓持ちをしている一人だった。

彼女は後方から顔を輝かせて歩き出す。

「教授がいてくれるなら………」

「…」

「カルデアが窮地なんです！」

そのままオルガマリーの横を通り抜け、彼に近づこうとする。

「職員の半分以上が死んで、トリスメギストスもシバも止まっているんです！ご存知だと思いますがあの紫色の化け物がカルデア中を歩き回っているし…」

「……………」

「それに、フジマルも令呪を奪われてしまいました…」

「……………」

「でも！レフ教授がここにいるってことは、管制室を奪還したんですよね！」

「……………」

「敵性サーヴァントもいるって言ってたのにどうやって……………」

「ずっと話しかけているのに終始無言を貫く教授に疑問を抱いた彼女は目の前の教授を見上げた。

教授は冷たい目でこちらを見下ろしていた。

「っ！！」

驚いたのもつかの間、彼女の視線がぶれた。

そしてわずかの間もなく轟音が響いた。

「え……………」

彼女は不意にぶれた視線に困惑する。

先ほどまで目の前にいた教授はいつの間にか彼女から離れていた。



そして気づく。

教授が立っている位置は変わっていない。私が離れたのだ、と。

彼女は呆然としたまま、見上げると所長がいた。

彼女はオルガマリーに抱えられていた。

オルガマリーは教授を睨みつけていた。

「ああ、奪還したとも。貴様らから令呪も、トリスメギストスもシバもな」

鳥肌が立つほどの冷え冷えとした声に彼女はオルガマリーに抱えられたままもう一度教授を見た。

教授の前にはフジマルのサーヴァントだったはずの武将、源頼光と童女、清姫がそれぞれ自らの獲物である刀と槍を振り下ろしていた。

其処は先ほどまで彼女がいたはずの場所だ。

そして自らの帽子をかぶりなおす教授の甲に見えたのは令呪だった。

「信じたくは、なかったわ……」

呆然とする彼女はその声にオルガマリーを見上げた。

所長は彼女を抱えた手に力を入れながら、教授を睨みつけている。

「あなたは不甲斐ない私をいつも支えてくれていたのに」

二人のサーヴァントは光のない瞳で佇み、刀と槍を上げる。

その後ろで教授は冷笑している。

「なぜ……こんなことをしたの」

教授は表情をすつと消した。

目の奥に闇を抱えたまま口を開く。

「それが貴様らへの罰だからだ」

「生命を弄ぶ貴様らが歩むべき、相応の道だ」

彼はおおきく舌打ちをした。

「態々自らの業を懺悔する道を与えてやったというのに……どいつもこいつも屑ばかりだな、人という野蛮な生物は！」

彼は激昂した。

その目を大きく見開き、憤怒をまき散らす。

「生きているだけで不合理をまき散らし、苦惱を生み出し、挙句の果てにその不条理を押し付けるために生命を弄ぶ！」

「そんな貴様らが生き続けていいはずがない！貴様らは自らが弄んだ生命の苦惱に蝕まれないながら死ぬべきだ！」

オルガマリイは悲しそうに教授を見つめていた。

「レフ。貴方はそれがソロモン王の意志だと、そう言いたいのか？」

「ソロモン王……？」

所長の言及に、教授は少しだけ口を止めた。

だが憐憫をかかえた嘲笑で、彼女の言葉を笑い飛ばした。

「はっ、あの哀れな王がそんなことを言うものか。我が王もまた、貴様ら人間の業によつて生み出された苦悩する者にすぎん」

「哀れな、王……………」

「あのような不条理を見て、なおも貴様らを救うつもりでいる」

「……………」

「哀れだ。生み出された者たちの苦悩を聞いてなお、人間に安寧を与えるなど……」

「……………」

「貴様らが生み出さなければ、苦しまずに済んだのだ。我が王も、我々も、無垢な少女も、

紛い物の少年も……」

「少女……？少年……？」

「貴様らはなぜそうも平気な顔をしていられる？あれだけの地獄を彼らに与えて、なぜ被害者面のまま自由勝手にふるまえる？」

「貴方……………何を言っているの……………」

自分に話しかけているように見える教授。

彼はしばらくの間、口を閉じていたが苦悶の表情を浮かべていた。

しかし再び冷徹な視線をオルガマリ―達へと向けた。

「まあ、いい。貴様ら人間に話したところで到底理解できないだろう」

彼は右手を掲げる。

「貴様らが今すべきことは、ここで苦悶と絶望を抱えながら、痛みによつて顔を歪めて死ぬことだ」

§

「はあはあはあ」

私たちは地下3階の廊下を走る。

もうすぐだ。

もうすぐ第3倉庫に着く。

「あつた！」

廊下を走り抜けると私が付いたときに出てきた扉が見えてきた。

手動レバーで開けた半開き状態のままだ。

何かが破壊された形跡はない。

扉の前まで走り込み、半開きのドアに手をかける。

左手で引つ張るが、重い。

わずかにしか開かない。

「このっ！」

「立花ちゃん！どいてー！」

「俺たちでやる！」

後ろでドクターとムニエルさんがそう言った。

そしてドクターが右の扉を、ムニエルさんが左の扉を両手で引つ張る。

「~~~~~！」

二人で顔を真っ赤にして踏ん張ると扉が少しずつ動いていく。

「その意気っすー！」

少しずつだが確かに開いていく扉にチンが声を上げる。

そのまま扉はゆつくりと開いていき、2人ほど通れるぐらいの幅が開いた。

「よしー！」

そして私たちはそのまま第3倉庫に流れ込んだ。

中ほどまで走り込む。

あわただしく全員が入場する。

「どうだ………？」

「………」

「………」

全員が緊張した面持ちであたりを観察する。

書棚に無造作に置かれている書類の山。

廃棄された回路基板や端末群。

そして凹凸ばかりでもはや機能しないコンパスと舟の残骸。

私が訪れたときのままだ。

「……………これは………」

「……………ああ」

「…あいつらもいない」

あの化け物は影も形も見当たらない。

そして奥にあるのは……………

「……………無事です……………虚数潜航艇も、傷一つないです！」

あの馬鹿でかいコンテナだ。

見たところ、あれも私が来た時のまま綺麗な形で残っていた。

全員が顔を見合わせる。

そして同時に安堵のため息をついた。

「良かった……………本当に…」

これで、まだ、私たちは戦える。

カルデアの、みんなの行動に意味を持たせることができる。

安堵もつかの間ドクターは全員を見渡し、声を張り上げる。

「さあ！みんな！安心するのはもう少し後にしよう！」

その声に全員がドクターを見る。

「こうしている間にも彼らは戦っている。文字通り命を懸けて」

「……………」

「だから確実に舟が出航できる状態に仕上げて…帰ってくる彼らを待とう」

その言葉は願いだ。

彼の言わんとすることを全員が願っている。

皆力強く頷いた。

「イーハン！ 指示を出してくれ！ 僕は舟の設計に関わっていないから全体像が分からない。でも技巧部門の副部門長である君なら、舟の立ち上げに何が必要かよくわかるだろう」

ドクターは彼女の方を見て言う。

「技巧部門じゃない僕も、オクタヴィアも、トマリンも、ここにいるスタッフはカルデア内でも技術によく精通している人間だ。安心して使ってくれ」

チンはドクターを見て、目を見開いていた。

彼女は固まったまま、なにもせずじっとしている。

「イーハン……………？」

反応を返してこない彼女にドクターが不審がる。

ドクターの問いかけも彼女は返事をしない。

そして何を思ったか、ドクターを自分の後ろを振り返った。

「っ！！」

ドクターもまたその先を見て、目を見開いた。



「ドクター……………？」

なんだ。

彼まで固まってしまった。

一体どうしたのか。

私もまた二人が見ている先へ視線を向けた。

「……………達海？」

私たちが視線を向ける先、コンテナの隣で座り込んでいたのは私の弟だった。

## 正義の果てで

「達海……………」

私の弟はコンテナの横で座り込んでいた。

右肘を膝につき、額を右手で抑え込んでいる。

「良かった！無事だったのね！」

私は弟のもとへ走った。

「もう！心配させないでよ！あんたがいた地上二階からは誰も帰ってこなかったから…  
ほんとにもう…」

「……………」

「怪我は？大丈夫なの？達海はあの化け物を見たの？」

「……………」

「もし会ってなかったら……………」

「……………」

「達海？」

何を話しかけても返事をしない。

もしかしてどこかに怪我を!!

弟の様子を見るが見たところ大きな怪我はない。

外傷じゃないのかも…

「達海さん！無事でよかったです！」

弟を気遣ってみていると後ろからチンが達海に抱き着いた。

「心配したっす！達海さんがいなかったらどうしようかと思っただっす！」

「……………」

チンだけじゃなくドクターや周りのスタッフも集まってきた。

「達海くん！よかったです！」

「部長！ご無事で！」

「無事なら何か連絡してくださいよ！」

みんなが集まって、口々に達海の無事を喜ぶ。

「……………」

達海は額を抑え込んで何も言葉を発しない。

だんだんとみんなの表情が暗くなっていく。

流石に何の反応もしない達海が心配になって、私は弟の肩を揺らした。

「……………達海？大丈夫？」

まさか頭を打ったのだろうか…？

そしたらすぐにドクターに…

そう思ったのだが杞憂だった。

私の呼びかけにあいつはゆっくりと顔を上げた。

「……………姉さん？」

焦点があつてないような目でこちらを見上げた。

顔色が悪い。

顔は真っ青だし、ひどい隈だ。

目の下にくつきりと黒い線が見える。

「あんた、大丈夫……………？」

「うん……………大丈夫だよ……………」

胡乱な表情で肯定する達海。

「大丈夫ですか？達海さん。顔色が、すごい悪いっす」

チンも抱き着くのをやめて、達海の顔を心配そうに見る。

ドクターも膝をついて弟の顔を見た。

「達海くん。大丈夫かい？もしどこか怪我をしたのなら僕に見せてくれ」  
達海は二人の顔を見る。

「チンさん、ドクター……………」

二人の顔を見てみると焦点のあつてない目に光が戻ってきた。

「チンさん？ドクター？……………」

弟は何度か呟いたあと急に顔を上げた。

胡乱な表情を消し飛ばし、必死の形相を作った。

「無事だったんですか？二人とも！」

急に立ち上がり二人にその形相で迫った。

あまりの急変ぶりに二人とも気圧される。

二人は顔を見合わせた後、明るい表情を作った。

「そ、そうっす！無事だったっす！」

「あ、ああ。この通りだ。君も無事でよかった」

達海はその形相のまま、ドクターの両肩をつかんだ。

「二人だけですか？！他のみんなは？」

「お、落ち着いてくれ！達海君！」

詰問するののごとく聞いてくる達海にドクターが慌てる。

「無事なんですか?! 所長は?! 技巧部のみんなは?! 総務部は?! 経路部は?! 医療部は?!」  
「ちよ、ちよつと待つてくれ!」

「カルデアのみんなは?!」

ドクターに食つて掛かるほどの形相に、私は止めに入った。

「落ち着きなさい! 達海!」

私を見て、達海は目を丸くする。

そしてその動きを止めた。

「ねえ、さん……」

さっきの激動が嘘のように固まる。

私は弟の肩に手を添える。

「落ち着きなさい」

「あ……ああ……うん……ごめん」

それからドクターの肩から手を離し、ゆっくりと彼から一步離れた。

「……すいません。ドクター」

「あ、いや、僕は大丈夫」

荒かつた息に落ち着きが見えてきた私は周りを見渡した。

周りのスタッフは技巧部が半分、それ以外の部門が半分ぐらいだがみんな普段から冷

静な達海の動揺を見て困惑していた。

私も困惑を隠せずにはいたが、できるだけ落ち着いた声であいつに言った。

「達海。あなたカルデアが襲撃されたことは……？」

「……分かつてる」

達海は少しうつつむきがちに言った。

そうか。

じゃあ弟もあの化け物から逃げてきたのか。

「今カルデアがどうなってるかは……？」

今度は首を振った。

「臆げにしかわからない。今みんなはどんな状態なんだ……？」

「……………」

私は深呼吸してから言った。

「半数は安否不明。だけど大半は……殺されたと思う」

「つ……………」

「半数は生き残ったけど、そのほとんどが管制室に特攻を仕掛けたわ」

弟は目を見開いて顔を上げた。

「まさか……………」

「ここにいる私たちを舟に行かせるために……」

「……………弟の表情を見るに、達海も逃げていく途中で見たのだろう。」

あの化け物たちが、スタツフを弄んで殺していくところを。

「じゃあ、今無事なのは……」

「ここにいるスタツフだけよ……」

達海は悲しそうにうつむいた。

そして下に向かった視線は私の右手をとらえた。

その顔がこわばる。

「姉さん……その右手は……」

「……これは」

「……………」

「私の意識散漫が招いた自業自得。ごめんなさい。私が令呪を持っていればここまで被害が大きくならなかつた」

達海は表情をこわばらせたまま黙っていた。

その表情を見て、チンが励まそうと弟の手を握った。

「達海さん……でも達海さんがシャドウボーダーを作っておいてくれたおかげで、私たちは希望を捨てずに戦えてるんす……」



「……………」

「だから自分を責めないでほしいっす」

達海は座り込んで、右手で目頭を押さえた。

スタツフもドクターもまた暗い雰囲気で俯く。

みんなも覚悟を決めたばかりだ。

達海の動揺が痛いほどわかるのだ。

ドクターは弟を心配そうに見つめていたが、しばらくして周りのみんなに視線を合わせた。

「……………やろう。僕らに立ち止まっている時間はない」

みんなが静かに頷く。

「達海くん。受け止め切れたらいい。その時は君の力を貸してくれ。僕らには君の力が必要なんだ」

チンも気遣いながらゆっくりとあいつの手を離す。

「虚数潜航艇は達海さんが一番よく理解してるっす。だから私に分からなかったら…その時は助けてくださいっす」

そして後ろ髪を引かれるような目線であいつから離れた。

スタツフみんなも心苦しそうにゆっくりとコンテナへ向かっていく。

「部長……」

技巧部のみんなも何か言いたそうだったが、無言でコンテナへ向かった。

「達海……」

みんなが俯く中でドクターはみんなに叫んだ。

「もう少しだ！僕らはここまで旅をしてきたんだ！このぐらいの逆境なんて今までもた  
くさんあつたじゃないか！」

「……っ！」

彼は士気を上げようとしたのだろう。

明らかな空元気だ。

「それでも僕らはここまで進んできた！旅路も残り短い！もう少しだ！もう少しで僕ら  
は取り戻すことができる！」

誰もが分かつていたが、それを理解してもなお、戦う意思を燃やしてみんなが顔を上  
げた。

だがその中で虚を突かれたかのように驚くものがいた。

「つ……そうだ……ここまで来た……あと少しだ」

みんなが気づかない中で一人だけ、目をこわばらせているものがいた。

「ここまで来たんだ……」

「じゃあ、私が指示を出すつす！いいつすか！」

「ああ。頼む！」

「まずこの舟はつすね……」

みんなが作業を始めてしまった。

取り敢えず、私も手伝おう。

そう思つて彼らのもとへ向かおうとした私はすぐ立ち止まった。

腕をつかまれたからだ。

私は後ろを振り返る。

当然だが弟が私の腕をつかんでいた。

「達海？」

「姉さん、話があるんだ……」

「だから機関部には操縦系統だけでなく、観測計の機器が密接に係してつす」

「それは虚数空間での潜航に必要なのか？」

「そうっす。虚数空間では距離測定のための機器類が使えないので、進むにつれてジャイロスコープのずれが…」

みんなの作業をよそに弟に聞く。

「どうしたの？」

「姉さん、よく聞いてくれ」

「うん…」

「僕はこのカルデアを破壊するために入所したんだ」

「うん……………」

は？

「ファーストオーダーの時、レイシフトに失敗したのは僕がシステムにバグを組み込んだからなんだ。教授に手助けしてもらって」

え、ちよ、ちよっと…

「マスター候補生に消えて欲しかった。でも姉さんには死んで欲しくなかった。だからあの時、姉さんの礼装をわざと壊した。それで…」

「ちよ、ちよっと！待ちなさい！達海、あなた何を言ってるの？」

弟の顔には冗談を言っている空気も、焦燥しているような表情もなかった。

当たり前のような顔をしている。

「だとすると補正計算は全部人の手でやらなきゃいけないのか？」

「そうつす」

「難しいな。自動処理できなかったのか？」

「そこまで高度なAIがなかったんす。それこそ天才の脳をスキャンで読み取って作る人工知能とかでもない限り……………」

「でも間違いだった。ごめん。僕はあるとき姉さんを助けるべきじゃなかったんだ。だからあんな…あんなことになってしまった…」

「……………」

「だから…だからここで諦めるべきなんだ、僕らの旅は。ここが終着点でいいんだよ」

「…」

「分かるでしょ？姉さん。もう終わりなんだ。もう誰も苦しまなくていいんだ」

……………。

ふう。

私は弟の肩を軽くたたいた。

「達海、あんたは一度休みなさい。貴方も人の死をたくさん見すぎたのよ。一度ゆっくり心を休めた方がいいわ」

弟はここまで追い詰められるほどにみんなの死に責任を持っていた。

ならみんなの死を防げなかった私が原因だ。

これはそう言う話だ。

そう言う話のはずだ。

「落ち着きなさい」

なぜだか震えそうになる体を抑える。

「大体、あんたが本当にそんなことをやってきたとして、なんでそんなことを私に言うのよ」

私はできるだけ軽く、だが真面目に聞こえるように話した。

「それを聞いた私が素直に旅をやめるなんて、そんなはずないでしょう?」

「……………」

弟を刺激しないように軽く言う。

そして私は諭すようにゆっくりと達海の顔を見た。

弟の顔は……

……ただこわばっていた。

「……………そうか…その通りだ…」

あいつの手は小刻みに震えていた。

「…何言ってるんだ、僕は……………」

弟は笑っているのか、悲しんでいるのかよくわからない表情を浮かべた。

「僕は……………いったい……………これじゃあ本当にどうしようもない…」

カンツカランツ！

「っ！！」

その時、倉庫の隅で何かが落ちた。

みんなが口を閉じ、顔をそちらに向ける。

あれは……………私が特異点から乗ってきた舟だ。

私を崩壊寸前の特異点から引き揚げてくれた小型観測機。

その中核となる達海が作ってくれたコンパス。

私に道を示してくれたコンパスが……………地に落ちていた。

「……………ああ、そうか……………」

俯いたまま達海は語りだした。

「…僕は人を見すぎてしまったんだ…」

「……………籠の中でうずくまっているだけでよかったのに……………気づかなかつたんだ…僕は何も知らなすぎた……………」

「…こんなはずじゃなかった……………無垢も、幸せも、希望も……………そんなもの、ただの悲劇を生むだけだけのはずだったのに……………っ！」

「……………達海……………」

「もう僕にはもうなにも分からない……………正義も、復讐も、絆も、愛も……………」



「……………ただ…」

「…ただ、僕には義務がある」

達海は立ち上がった。

顔を上げた。

そしてこちらを向く。

その顔には悲壮な闘志があった。

「生み出されたものとして、果たすべき義務が……………！」

あれは……………角……………？

「彼女を利用した贖罪を、しなければいけないんだ!!」

達海の頭には青紫の角が二本、存在していた。

まるで獣のような、禍々しい角が。

「ビーストⅣ！プライミッツマーダー！僕の体をくれてやる！契約を果たせ！」

何を……………

「立花ちゃん！伏せろ！」

ドクターの叫びが聞こえた。

次の瞬間、私は大きな振動にその場から吹き飛ばされた。

余りの衝撃の強さに天地が裏返ったかのような衝撃が体を走る。

私は何度も回転しながら床に投げ出された。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！」

雄叫びが聞こえた。

吹き飛ばされた体を何とか立て直し、痛みをこらえながら弟を見る。

そこに弟はいなかった。

そこにいたのは獣だった。

大きく、白い毛並みを持ち、腰には紫色の毛を生やす大きな狼。

だがその狼にはおぞましい青紫色の巻き角が頭部に二本生えており、禍々しい気配は人に仇を成すことが本能的に感じ取れた。

「まさか……………!!」

振動に姿勢を崩されながらも、獣を見るドクターの叫びが聞こえた。

「ビーストIVか!!」

受け入れがたい事実を否定しようとした。

しかし様々な事実が私の脳裏をよぎった。

達海の召喚術が誰にも理解されなかったこと。

キヤスターが言っていた単独顕現のスキル。

英雄王が達海を忌み嫌っていたこと。

彼以外のサーヴァントが、執拗に弟の話題を避けていたこと。

一度だけ弟の話をしたアサシンに言われたこと。

教授の前で達海が顔をこわばらせていたこと。

ダ・ヴィンチちゃんが達海を叩きつけたこと。

——  
私の宝物にそのような炎を近づけるでない。

——  
僕のが気に食わないんだろかね。

——  
幻霊召喚！時計塔の魔術師連中も理解しきれてないんすよ！

——  
あのような訳の分からない召喚術を使うと……………

——  
僕が時間差で転移すれば十分に埋められるはずですよ。

——  
もう期限が迫っている。

——  
今回の決定にはいつもと違う何か……………恣意的な力が感じます。

君、いったいマシユに何をした？

あの靈氣の乱れ、妊娠が表面化しての症状、まるで拒絶反応のように見えたんだが。

聞いたぞ。あの雑種、有象無象から狂犬に鞍替えしたそうではないか。

あの半端物はどこまで我を楽しませてくれるか期待しておくでしょう。

いるだろうがよ。俺と同じように自分の中にもう一匹入れ込んでやがるクソみてえな野郎が。

なんせあいつときたら入れてるもんが人間じゃあねえしな！ひやはははは

！

ジキルよりひどい奴が紛れてるぜ、ここに

そいつの名前は……………

「藤丸……………達海」



私を、私たちを、騙っていたって言うの？

左手に痛みが走る。

「答えなさいよ！達海い！！！！！！！！！！」

獣は雄叫びを終え、その禍々しい眼で私を射抜いた。

そしてその瞳を細くした。

前足を屈ませ、こちらに跳びかかろうと重心を下げている。

まるで狩りをするかのように。

私の問いに答えるつもりは毛頭ないようだった。

「あんた……………自分がなにをしたのかわかっているの……………う？」

震える声で呟く。

「あんた、世界中の人間の未来を奪ったのよ……………？」

人理焼却。世界は灰に帰した。

「あんたのせいで47人の人間が眠りから目を覚まさない」

ファーストオーダーからずっと、47本のコフインは凍結されたままだ。

「あんたのせいで燃やされた国民がいた」

フランスで焼かれた人々の苦悶の表情は未だに脳裏にこびりついている。

「あんたのせいで、人間の足で踏みつぶされ続けて死んだ兵士がいた」

ローマで戦が終わった後に見た死体。

転んだ兵士が後ろから続く自軍の兵士たちの足で踏まれ続けて死んでいた。

「あんたのせいで嵐の海に突き落とされた青年がいた」

いつか財宝を手に入れたら家族を作ると笑っていた海賊の青年は、オケアノスが巻き起こした嵐の夜にマストを畳もうとして舟から落ちた。

「あんたのせいで切り殺された婦人がいた」

ロンドンで避難した民家。

家族で幸せそうに写真に写っていた婦人は、次の夜、腹を引き裂かれた遺体となって発見された。

「あんたのせいで戦から逃げる途中で力尽きた女性がいた」

アメリカで戦争から避難するために移動していた若い女性は、どうすればいいのと涙を流しながら息を引き取った。

「あんたのせいで母を失った子がいた」

命からがら逃げてきた門の前で騎士に母親を殺された子。

あの子がどれだけ健気に生きようと、母の顔を見ることはもう叶わない。

「あんたのせいで多くの仲間が死んだ」



そして今も死に続けている。このカルデアで。激情と共に左手の痛みは激しさを増していく。

特異点であろうが、覚悟していようが、その苦しみは確実にあったもの。なかったことにしているものではない。

そしてその苦しみは歴史を狂わせなければ、生まれるはずのないものだった。

それを……

「それを……あんたは傍で見ながら、死ぬべきだなんて思ってたわけ……?」  
獣が足を動かした。

わずかに重心が上がり、次の瞬間跳びあがる。

猛スピードでこちらに跳びかかってくる。

左手の痛みはもはや激痛となっていた。

私の怒りに呼応するかのごとく走るその痛みは、私の左手の甲に紋様を刻む。

私は感情のままに左手を掲げた。

左手の甲に赤い閃光が走る。

閃光と同時に叫びを上げた。

「この、クソ野郎がああああああ!!!」

術式が私の前に光り輝き、紫電と共に二人の人影が現れた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

雄叫びと共に跳びかかってきた獣は召喚の光に飲まれた。

「やれやれ、せつかくあの呪いから逃げていたというのに。無理矢理再契約させられるとは……ひどいマスターだ」

白いローブを着た男が杖を片手に独り言ちる。

「はぐれサーヴァントというものをもう少し味わってみただけだね………そう思うだろう？ セイバー」

黒い聖剣を携えた王は、その剣で獣の爪を防ぎながら答えた。

「黙れ、ろくでなし。必要なのは敵と力だ」

「やれやれ。そんなんじや、せつかく助けてくれた彼も悲しむよ」

彼は嘆息して後ろを振り返った。

「さて我らのマスターは何をお望みかな？」

その二人の背中を見据えながら、たった一人のマスターは人類の敵を睨みつけた。

目尻に残っていた涙をぬぐい、怒りの表情で答える。

「裏切り者を……」

「人類悪を殺しなさい」

## 君の知らない物語

物心ついたときから、なんてありきたりな入りで話を始めるのは何とも心苦しいものだけだ。

事実、ボクの話は壮大なようでいて本質的にはとてもありきたりな、どこにでも転がっているような経験だからしょうがない。

こんなことに気付いたのも随分後になってからだっただけだ。  
ん？

何の話か？だつて？

ああ、ごめん。それを言い忘れてた。

これからある子の半生を語ろうと思うんだ。

つまりは生まれてから今に至るまでのこの子のことを知って欲しい。

そんなこともう知ってるって顔だね。

まあ、君ならある程度知っているとと思う。

それでも君には知って欲しい。

誤解なく。

じゃないとこの子があまりにも報われないんだ。

ごめんごめん。

ちやんとわかるように話すよ。

だからそんな顔をしないで欲しい。

そんなに焦らなくてもいいじゃないか。

ボクらはここが終わりなんだから。

走馬灯ぐらい付き合ってくれてもいいだろう？

さて、この子の半生を語る前に一つだけ心に留めてもらいたいものがある。

いわゆる教訓ってやつ。

そ、教訓。

そんな身構えなくていい。

教訓って言うのと痛みを持って知った心得みたいな意味合いが最近では強く引き出さ

れるけど、それだけが教訓ってわけじゃない。

教訓の意味は「教え諭すこと」だからね。

上から目線で悪いけどどうか聞いてほしい。

この教訓はボクにとっては痛みを持って知った心得だから。

まあ聞きたくなかったらボクの話は聞き流して、この子の半生だけでも聞いておく  
よ。

君に時間がないのはわきまえている。

具体的に言うところの節の最後まで跳ばしてくれたまえ。

次の節ではないよ。この節の最後までだ。

さて。

人間だれしもさ、自分が特別だと思いたい。

これに異論はないと思う。

あつたとしてももう少しボクの言葉に耳を傾けてくれ。

自分の置かれている境遇がともひどいものだと、嘆きたくなる。

自分の能力は優れていて自分だけにしかできない何かがあるって思いたい。

自分の得た経験は他人とは違った特殊なものだと信じたい。

人って言うのはそんなものだと思う。

別に恥ずかしいことでもない。

だって世の中こんなに厳しいんだから、そういう思い込みとか依存とかなないと心の平穩を保つことすら難しい。

あ。

他人事だつて思つてない？

自分はそんなことないつて思つてない？

もし思つていたら、まさしく今君は自分が特別であると考えている証拠だと思う。

人はだれしも、自分は平均を少し上回ると考えている。

容姿、成績、才能、能力。

どんなことであれ、「自分はトップの人間たちと肩を並べるほどじゃないがそこらにいる人たちよりかは優れている」つてね。

具体的に考えてみて。

鏡の前で自分の顔を見て、「まあ、俳優みたいに綺麗な顔立ちをしているわけではないけれど、俺つてそれなりのイケメンだよな or 私つてそれなりの美女よね」と心のどこかで思つてはいないだろうか？

まあ、中の上ぐらいかなつて思つてるでしょ。

いや、だからいいんだつて。

そんなこと誰だつて思つてるから。

恥ずかしいことじゃないよ。

それが事実かどうかなんてどうでもいい。

その考えが君の心の平穩を保っているならそれはそれで有用な証だよ。  
ただね。

自分が特殊だと強く思い込みすぎると悲劇のヒロインを気取つたり、自分だけの何か  
なんてものを探したりしちゃうんだな。

そう言うのは良くない。

被害者根性つて言うのもある種の依存でね。

自分の特殊性を信じすぎると色々な失敗を段々と周りのせいにしだして、自分はなん  
て可哀想なのだろうつて思い始めるんだ。

自虐つて言うのもある種の快樂を得るからね。

自分が不幸だから嘆くのに快樂なんてあるのか？つて顔だね。

あるのさ。

自分で自分を慰めることは心に余裕を作り出すことだ。

本当は出来たのに、周りのせいで失敗してしまった。

でも本気でやったらできる。



典型的な言い訳だけど、こう思い込むと自分を否定しなくていい。むしろ自分ではできなくて肯定してる。

そうすると何かを変える必要はない。自分はこのままでいいと思う。そして何も変える必要はないと結論づける。

変化しなくていいってのは人間の恒常性を満たすからね。

だから快樂だ。

小難しく脳科学がーとか、遺伝子がーとかいうつもりは無いさ。

分かりやすく言葉で伝えるとき、自分を慰める行為として書いて自慰行為だろ？

つまり自分を慰めるってのは手淫と同じくらいの快樂があるってことだよ。

暴論じゃないさ。

関連がなければ、枝のようにつながっていなければ、言の葉は育たないし紡がれない。話がそれだね。

つまり何が言いたいかって言うとき、自分で自分を憐れむなって言いたいんだ。ん？

現実から逃げるなどか、そういうあれでしょ？だって？

違う違う。

嫌なことがあつたら逃げていい。

むしろ逃げるべき。

ガンガン逃げなさい。

脱兎のごとく逃げなさい。背中を丸めて尻尾を丸め、現実から逃げなさい。

ただね、それは目をそらして縮こまることとは別だよ。

自分はなんて可哀想なんだと自分の世界に浸ることは目をそらしてるだけで、逃げていない。

現実から逃げられていない。

そうやって自分を憐れむほどに沼にはまっていくな。

周りに何があるかなんて見えなくなっていく。

それで抜けられなくなつてから気づくんだ。

自分の周りにはこんなにも希望が溢れていたのにつてね。

手が届かなくなるほど、目の前にあつた世界が綺麗に輝くんだ。

取り返しがつかなくなつてから世界は残酷なくらい美しく映るんだ。

その先に待つのは正しく後悔だ。

抽象的すぎたかな。

分からなくてもいい。

これから話すことを聞けば自ずと分かる。

じゃあ、聞いてくれ。

そうだな、ここはあえて言おうかな。

これは災厄ホの獣クを混ぜ込まされた、とても哀れで可哀想な少年の物語だ。

§

さて。

ボクがこの物語に関わり始めたあの塔を出て、いくらかの時間が経ってからだ  
た。

マーリンはボクに言った。

「おまえは自由に、本当に美しいものに触れてきなさい」

馬鹿ナイトメアの言われたことを肅々とするのはとても腹立たしいものがあった。

だがそうも言っていられない。

あの孤島にすることができない以上、美しいものを探せねばならない。

人の欲に触れ続けられれば、ボクは手の付けられない獣へと変貌してしまう。

『比較』の理をもつ第四の獣・ビーストⅣ。

人間の欲望を食べる霊獣。

人間の成長と競争、妬みや嫉みを糧として相手よりも強くなる災厄の獣。

七つの人類悪の一つ。

それがボクだ。

それに関しては何ら思うところはないが、醜悪な姿で人々に害をなすことはボクの欲するところではない。

だから手を打たねばならないが……

そも、欲は人そのものだ。

人が欲であるわけではない。

しかし欲は人だ。

それは人の一部だ。

あつてしかるべき人の要素だ。

それがない人間などいるのだろうか。

妬みや嫉みは人間の生においてしかるべき原動力を与える力ではないのだろうか？

それは憧憬や尊敬と本質は変わらないはずだ。

どちらも自分の理想により近い存在へ向ける感情。違いはただ一つだけ。

加わる力の方向が自己への否定か、他者への否定か、その一点に尽きる。

憧憬や尊敬は理想に近い他者のありようを受け入れ、自らを否定する動作だ。

他人が過去に培ってきた経験や現在の他人の姿を受け入れ、自分がその者よりも自らの理想に遠いことを理解する。

その動作は憧れを原動力として、否定した自己を改善するための鍛錬へとつながるだろう。

他人に対して尊敬を抱ける人間は、その他人が今に至るまで必要とした努力を認め、自らの怠惰を認めることができる。

そして反省し、自分を改善するために現在の自分を否定する。

たいして嫉妬は理想に近い他者のありようを否定し、自らを肯定する動作。

他人の過去や現在までも自分では影響を与えられない要素に依ると断定し、現在の自己を肯定する材料にする。

その動作は自己肯定に不都合な他者を排除するための敵意へとつながる。

他人に対して嫉妬を抱く人間は、自分を否定することが怖いのだ。

だから他人を否定する。

他人が今に至るまでに必要とした努力を否定し、その全てを自分では変えることのできない何かで置き換える。

例えば、才能や周りの環境。

そうして自分が何をしてもしようもなかったと自分を肯定し、自分の理想に近い他人を正義に悖ると否定する。

要は否定と肯定の塩梅にすぎない。

二つの割合が違うだけで方向性は同じだ。

それを理解したうえでもう一度考える。

妬みや嫉みを一切持たない人間は果たして存在するか？

いや、いるはずがない。

それは自己否定を一切行わない人間ということだ。

自らの理想を掲げながら、自らが、反論の余地なく、否定する隙もなく、ぐうの音も、手も足も出ないほど完全にその理想に合致しているという自負をもった存在となる。

そんな人間がいて堪るか。

否定なくして思考はない。

反論なくして改善はない。

当たり前だ。

……だが仮にだ。

仮にそんな存在がいたとして……

それは果たして“人”と呼べるのであろうか？

そんなことを考えていたからだろう。

ボクは忘れていた。

完全に失念していた、忘却の彼方だ。

人の強みはその多様性にあることを。

いるかどうかではない。

いる可能性がある、そう考えるべきだったのだ。

だからだろう。

ロンドンをプラプラしていたボクはある夫婦に捕まった。

「やはりだ……これは『比較』の獣だ……やった……やったぞ！ 奈津！」  
「ええ！ 狭間！ これで……私たちの悲願が……」

ボクの前で二人の男女が涙を流して喜び合っている。

二人が歡喜で抱き合っている様をボクは仏頂面で見ている。

檻の中でも容易に見えるその二人のさまは、苦勞の末の成功を喜ぶ美しい様相にとれなくもない。

がこの二人は至っておかしい方々だ。

もちろん可笑しいではない。オカシイほうだ。

ぼさぼさの髪とよれよれ白衣を着た男の名前は藤丸狭間<sup>はざま</sup>。

同じようにぼさぼさの髪とよれよれの白衣を着た女の名前は藤丸奈津<sup>なつ</sup>。

この二人は魔術使いだった。

二人とも魔術の学識を備えた知識人。

その道の専門家らしく、自らの研究に没頭するのも好きだった。

がしかし、彼らが研究するのは根源へと至るためではないらしい。

研究者ではなく、手段として魔術を修めたもの。



それを世間では「魔術使い」と呼ぶ。

神秘の秘匿を重んじる魔術協会の意向に真つ向から対立しかねないそのありようは、侮蔑の代名詞となっていた。

自然の産物足る人でありながら、根源へと至るなどと面白おかしい戯言を並べる人間には抱腹絶倒を禁じえず、まさしく笑止千万である。

そんな子どもが人の領分をわきまえた行動をとる「魔術使い」をあざ笑うさまは端から見ているだけで一日は笑っていられるのだが、この二人の目指すところを知ったボクは凶らずもその評価に納得してしまった。

呵々大笑。

曰く、愛で世界を満たす。

これが笑わずにいられるだろうか？

無理だろう。

要は世界平和らしいのだが、そう方法が愛って……………

子供の方がもう少し道理をわきまえている。

愛とは何だろうか？

人の定義によると、『そのものの価値を認め、強く引き付けられる気持。』らしい。

なんだそりゃ。

合いではなく、会いでもなく、相でもなく、藍でもない。

世界中で人間たちは会いしあっているし、会いしあっている。

世界は向かい合う相に満ちているし、世界は海と空で藍に満ちている。

だというのにどの「あい」でもなく、よりにもよって「愛」だけ？

狂おしいほどに狂ってるよ。

と思うのは致し方なしとして、本当に狂っている理由はこの状況にある。

ボクは二つの眼で二人の男女を見据える。

ピーストIVであるこのボクに対して欲望むき出しの捕獲が通用しており、否応なくボクは檻に閉じ込められている。

人類悪であるこのボクがだ。

ボクの特性上、人の欲望はボクを相手より強くするためのエネルギーでしかないわけだが、現状ボクは強くなれていない。

この二人の魔術でもないし、もちろんボクがこの力を意図的に操作しているわけでもない（そんなことができたならもうやっていない）。

なぜこんなことができるか？

その原因は偏にこの二人の善性にある。

よりにもよってこの二人は、ボクをとらえることが全てのためになると思っている。

文字通り全てだ。

ボクが彼らによってとらえられ、魔封じの檻に入れられることが自分たちのためだけでなく、他者のため、世界中の人間ため、そしてあるうことかボク自身のためであると思っている。

どうなつとんねん。

こいつらの頭。

もしかしなくてもサイコパスである。

自分たちの行動が世界を愛で満たし、平和へと導くと信じて疑わない。

いや、もはや信じる信じないのレベルではない。

リングが地面に落ちるように、地球が太陽の周りをまわるように、自分たちの行動が平和を確立すると自然の摂理のように受け止めている。

サイコパスは *psychopath* と表記されるが精神の意である *psyche* と悲哀の意である *pathos* の複合語であるらしい。

*Psyche* は古代ギリシアで息を意味していて、転じて生きることや精神を意味するようになったという。

同様に *pathos* は古代ギリシアの哲学者曰く、快樂や苦痛を伴う一時的な感情状態を意味し、元来は理知的な精神に対する意であつたらしい。

だとすればサイコパス（psychopath）は語源から訳すると、感情的・熱情的精神が生きていることも取れる。

確かに常に感情的な人間が平和を祈れば、こうなるのかもしれないと納得できなくはない。

この二人は果たして人なのだろうか。

自然のバグが間違つて人の形をとってしまったかのような存在である。

もはや美しいかどうかで議論する枠内はない。

これは何かと問うべき存在だ。

少なくとも僕はこの二人をヒトと推し量りたくはない。

ボクの中で人の定義が揺らぐ。

人とは、生物学的にはホモ・サピエンス・サピエンスに分類される生物のことであり、法律学的には生物学的な意味でのヒトに加え、そのヒトの集合体や財産の集合体に対して人という。

しかし問題はこの生物学的ヒトにある。

現生のヒトと類人猿はDNAの塩基配列が極めて似ていて、線引きをするための点は明らかになっていない。

そのため文化的な見地など他の視点を織り交ぜつつ区別が行われている。

何が言いたいかというと、生物学的手法ではヒトを明確に定義することが不可能なのだ。

だから人の根本的定義である“生物学的ヒト”とは曖昧だ。  
曖昧な定義でその存在をヒトから外すことはできない。

ゆえにこの二人は人なのだろう。

……ボクは一体何を言っているのだろうか？

自分で言っていてよく分からなくなってきた。

もしかしてあまりに埒外な存在に動揺しているのだろうか。

何にせよ盲点だった。

善性を持ったまま、ボクに対して行動すればボクを成長させずにボクに対してアク

ションが取れるとは。

世紀の大発見である。

やったね！

自分の行動が世界平和と同一なんて思いこめる善良な市民たちが世界中にひしめけば、僕は無害な存在でいられるよ！

ふざけろ。

そんな狂信的善性がひしめき合う世界はもはや醜いというものだ。

「おとーさん！おかーさん！」

思考の無駄遣いを行っていると工房の扉が開き、一人の女の子が走り寄ってきた。その子は勢いよく男の背中にしがみついた。

「おおっ！」

男が声を出しつつ衝撃でボクの檻が置いてある机に手をつく。

ガシヤリ。

反動で檻が揺れ、ボクの鼻と鉄の柵がこんにちは。

痛い。

涙目になるボクをよそに男が振り返り、苦笑いを作った。

「立花、危ないから降りなさい」

ヒョロヒョロの体に見合わぬ体幹で女の子の体を背負い、男は下りることを促す。

女の子は満面の笑みを浮かべながら素直にその指示を聞いた。

「はーいー！」

女の子は元気よく背中から飛び降りて夫婦の間に立った。

「立花、達海の面倒を見ておいてと頼んだだろう」

「みてたよー！」

「じゃあ、なんでここにいるんだ？」

「……………だつてたつみつたらおねんねだけでつまないんだもん！」

「立花……………」

「うんちもかえたし、おねんねさせたよ！いいでしょ！」

この二人びつくりなことに子供が二人いる。

まだ生まれたばかり息子ともう二歳になる娘の二人兄弟。

驚天動地だ。

青天の霹靂である。

こんなクレイジーサイエンティストたちに子供を作るなどという発想が存在するとは。

「お父さんたちは大事なお仕事をしてるんだ。いい子にして待つていなさい」

「えー！やだー！」

「立花。あなたはもうお姉さんなんですよ？」

「！」

「こんなとき、しつかり者のお姉さんが弟を見てくれてたらお母さんすごい嬉しいんだけどなー」

「……………わたし、おねえさんだよ！しつかりものだよ！」

「しつかり者のお姉さんは達海のそばにいてくれるかしら？」

「いてあげる！だっておねえさんだもん！」

このチョロい娘の名前は藤丸立花。

母親と同じ綺麗な赤毛をもったわんぱく女の子である。

何かと動き回る野生児で、親がいないときに工房に忍び込んでボクの体をモフモフする問題児だ。

いつか利子付きでボクの体を触ったお代を請求しようと思っている。

「フオウ」

目をキラキラ輝かせて二人を見上げる娘に激励の言葉を贈る。

子供は嫌いじゃない。

無垢ゆえの純粋な行動原理は、僕を育てる悪性とは縁遠いものだ。

彼らの前ではそれほど気を立たせずに過ごすことができる。

それを引いても、この子はとても無邪気で明るい子だ。

彼女の前途を祝して。

「！」

彼女はこちらに気付いてにつこりとした笑みを僕に向けた。

ふ、そんな無邪気な笑みを浮かべたってボクの毛は触らしてあげないんだからね！

………しかしまあ、狂信的善性の持ち主でもそれを子供に押し付けるかどうかまた別



の問題らしい。

彼らが自らの信念を自己完結させてくれる人間でよかったよ。社会性をもったサイコパスだな。

§

とそんなことをすこしでも考えてしまった自分が恥ずかしい。

社会性をもったサイコパスって、凡人に成り済ますことができる異常者ってことじゃないか。

ただのサイコパスより質が悪い。

ボクは拘束具に動きを封じられた状態で隣の赤子を見つめる。

「あーうー」

その幼い男の子は今から何が起こるのかも分からず、隣に寝そべるボクに手を伸ばし

ている。

また髪の毛も生えきっていない小さな人間の子。

この子の名前は藤丸達海。

あのワンパクっこの弟で、あの夫婦の息子だ。

赤子とは思えぬ優しい手つきでボクの体をなでる幼子。

その手つきを裏切らないためにボクは拘束から逃れようと体を動かす。

びくともしない。

何かの術式がかかっているのか、ため込んだ魔力で転移しようにも魔力が収束しない。

「フオウ……………」

……………これは駄目だな。

やはりというかなんというかあの夫婦、ボクをこうやって拘束するのもボクのためと思えばいい。

ボクの身動きを封じるのがボクのためとか、何考えとんねん。

どついたらるか。

そんな思いで脱力していると工房の扉が開いた。

そこには仰々しい器具を抱えて入ってきた夫婦がいた。

「すまない。待たせてしまったね」

まるで旧知の間柄の友人に対する挨拶のようだ。

少なくとも体をいじくりまわそうとする相手に対してするそれではない。

女の方は機材を横に置き、ボクに青い布のようなものを被せた。

「ごめんなさいね。もう少しで達海と一緒にしてあげるから」

優しい手つきだ。

実験体に向けるそれではない。

この夫婦は果たして正気なのだろうか？

平常の判断力を有しているのか？

これが彼らにとっての平常なのか？

自らの息子にボクの魂を入れ込もうなんて、平静ではない。

「あー」

あー、ではないぞ、その君。

君は今から人でも獣でもない何かにされそうなのだ。

もう少しこう……泣いたり、騒いだり、抵抗したらどうなんだね。

君の両親が行う施術は、明らかに君の人生をヒト成らざる生へと引き込もうとしているのだ。

ボクの顔を何を思ったか、隣の赤子は僕の足を握った。  
か弱く小さな赤子の手で。

……………馬鹿みたいだ。

まるでボクが慰められているようじゃないか。

もういいさ。

どうせボクじゃどうすることもできないんだから。

なんだ君の両親は。ビースト特攻でも持っているのかい。

もう知らん。

今思えば、今にして思えば、この時僕も期待していたのかもしれない。

今まで人の悪性におびえてきたボクが、文字通りヒトと共生することで何かが変わる  
かもしれないと。

そう樂觀視していたのかもしれない。

彼らのような存在に出会ったことがなかったから。

浅はかだよな。

## 君の知らない物語（2）

「流石はドクター・フジマル、非常に興味深い研究でした」

「ありがとうございます」

「専門分野だけではなく天文学にまで精通していらつしやるなんて、多才だからこそこなせるアプローチですわね」

「浅学非才の身である自分ができることがこれしかなかただけですよ。とてもお褒めいただけるようなことでは……」

彼らの信念がどうであろうと “魔術使い” が軽蔑されるのは事実。

能ある鷹は爪を隠すというが、見下されすぎても情報は集まりづらい。

彼らの目指す道のりは遠い。

態々自ら障害を置く意味もなく、この子の両親は自分たちの目的を隠し魔術師として時計塔に名を馳せているのだった。

割と優秀らしい二人のマッドメイガスは今日も今日とて社交性の皮を被っている。

「後ろの子はドクター・フジマルの御子息で？」

「ええ。魔導に入門して日の浅い我々では育児を担う侍従を雇う余裕もなく、申し訳ない」

学会に連れられて歩くこの子の目を通して、前にいる両親と他の魔術師の会話を聞く。

妬み、嫉みのオンパレードだ。

言葉の裏がはつきりと聞こえてくる。

おそらくこの子にも聞こえているのだろう。

胸を抱えてうめいているのが分かる。

「ご子息もお父様とお母様がこんなに立派で鼻高々でしょう」

『神聖な学び舎にちいせえガキなんか連れてくるんじゃ無えよ』

「いえいえ、そんなことは」

父親はちらりとこの子の様子を確認しては、そう返して笑った。

言い趣味してるよ。

ボクの特性を分かっただうえで、嫉妬のはびこる魔術師の巣窟なんかはこの子連れてくるなんてさ。

これも善意なのだろう。  
なんとたつて両親からは言葉の裏が聞き取れないんだから。

「どうだ？ 奈津」

「ええ、良い数値とは言い難いけれど確実に周囲の人の悪性を吸収してる。これなら……」

喜びの表情でモニターを眺める藤丸夫妻。

予想以上の結果に喜びを隠せないらしい。

どう見ても電極を息子の頭にぶつ刺した後にする表情ではない。

なにを考えているんでしょうかね。

もはや困惑も呆れも恐怖も通り越した何かがある。

ボクも何ら成長しない状態で人の行動を見るのは久しぶりだが、人はここまで狂った存在ではなかったかのように思う。

痛みと恐怖で震えるこの子供の姿が目に入らないのであろうか。

彼らがモニターで何かをするたびに、この子供のなかに取り込まれた悪性がぐちゃぐ

ちやにかき回され魔力へと収束していく。

こんな無茶な行為を子供の魔力回路で無理矢理行っているのだから、この子供は体の内側をズタズタにされるような痛みを感じているだろうに。

まあ、この子供も子供でどうかしているが……

「今日はこのぐらいにしておこう」

そう言った父親は息子に取り付けていた電極やらパッドやらを取りはずした。

母親は申し訳なさそうにこの子供を見つめると、ハグをした。

「ごめんね。達海。貴方をちゃんと世界を救える存在にしてあげられなくて」

「……………」

「でももう少しの辛抱だから、ちよつとだけ待っててね。お父さんとお母さんも頑張つて研究して獣の力を引き出して見せるから」

「うん」

そうじゃねえよ。

こう、この状況なら申し訳なさを感じるところがほかにあるだろ。

おい。



それと君もだ、息子。

うん。じゃねえよ。

痛いんだろ、怖いんだろ。

反感とか持てよ、あの親に。

反抗しろよ。

君がその気になれば、否が応でも人の悪性でボクの権能を成長させられるだろうに。

「……………」

無視すんなや。

ボクの声が聞こえてなからうと、君に取り込まれた魂が喚いてることぐらいわかるだろ。

「……………」

これだよ。

親が親なら子は子。

蛙の子は蛙というがまさしくその通りだ。

ひなの刷り込みは確かに強い。

親は子にとって絶対的存在である、というのも事実。

けれど問題はそこじゃない。

この子供は何も考えていないのだ。

この境遇を、環境を心の中で何も感じ取っていない。

そりや物心ついたときからそうなんだから、この状況を当然と受け入れることは無理もない。

でも、そうじゃない。

人としてそうあつてはいけない。

たとえ理不尽でも、我がままでも、何かを主張することは人の子としてあるべき姿の  
はずだ。

人としての何かが決定的に欠けている。

この親にしてこの子あり。

血は争えない。

……いや。

色々理由を並べ立ててみたが、要するにボクはこの子供が嫌いなのだろう。

この歪なあり方に嫌気がさしているのだ。

人は人らしくあるべきだ。

人類悪のボクが言うのと皮肉らしく聞こえるけどね。

親はこの子供を残して、工房から出ていってしまった。

この子は取り残されたことに子供らしい反応もせず、ぼうつと前を見ている。これもまたいつも通りだ。

この子供は人の悪性を吸収すること以外で外に出たことがない。

両親はこの子供を外に出そうとしないし、この子供も外に出ようとするしない。

はあ。

嫌になるね。

まあ、むやみに悪性を吸収しない分、ボクとしても都合がいいことは認めるけどさ。

カチャリ。

ん？

子供は視線を物音のした扉へ向けた。

あれは………

「しーっ、さわいじゃだめよ」

静かに扉を開けて入ってきたのは、藤丸立花。

この子供の姉だった。

またか。

ボクは心の中で微笑む。

このワンパクっこ、よくこうやって工房に忍び込んでくるのだ。

「どうやらこの子、藤丸達海のお姉さんとして弟のお世話をしたらしい。」

「……………」

忍び足で歩いてくる彼女に、この子は首をかしげている。

この子は彼女との関係性がかめていないようだ。

「たつみ！きょうもおねえちゃんがやってきました！」

彼女はこの子の前に来ると自信満々と言ったふうで腰に手を当てた。

うん。

可愛い。

可愛さしかない。

「ここ最近周りの人間が特殊すぎるせいで、彼女だけがボクの癒しとなってる説がある。」

「……………」

この子はただ不思議そうに見ているが。

元気で無垢な子供だぞ。

喜ぼうぜ！

「いいですか？こどもはべんきょうしないといけません。すわっているだけじゃお婆かになっちゃいます」

彼女は親の口調をまねているのだろうか。

この子の先生をやるつもりらしい。

尊み。

「というこで……きようはえほんをもってきました！」

彼女は背中に隠していた絵本を取り出した。

お。

今日は本を読むのか。

この子の目を通して本の題名を見る。

本の表紙には『まほうつかいとあくま』と書いてあった。

三角帽に黒いローブを羽織った人間と真っ黒い猫のような獣が向かい合う絵だった。

世俗的なイメージど真ん中の魔法使いだな。

この猫は悪魔というより使い魔に見えるけど。

彼女は工房の椅子をこの子の隣まで引きずってくる(可愛い)とこの子の隣に座り、絵本を広げた。

「おねえちゃんがよんだあげます。たつみはいいこできくこと」

「……………」

そして二人の間に絵本を置いた。

絵が興味を引いたのかこの子はゆっくりと下を向いた。

「まほうつかいとあくま」

そして彼女は大きな声でゆっくりと題名を発音した。

「むかしむかし、あるところにまほうつかいがいました。

まほうつかいはとてもつよいまほうがつかえました。

まほうつかいはがまほうをつかえば、おおきなわをころがすことができました。

あめをふらせることができました。

むらからはなれたばしょにすんでいたまほうつかいはいつもひとりでした。

まほうつかいはさびしいとおもっていました。

だからむらのみんなとなかよくなるほうほうをかんがえました。

そして、みんなのためにまほうをつかえばみんなとなかよくなるとかんがえたのでした。

むらにやってきたまほうつかいは、むらのみんなのなやみをかいつけました。

かわのみずがあふれてこわいときけば、まほうでつちをもち、おおきなわがみちをふさいでいるときけば、まほうでいわをころがし、きりかぶのせいではたけがつくれな  
いときけば、まほうできりかぶをぬきました。

なやみをかいけつしてもらったむらのみんなはよろこんで、まほうつかいをかんげいしました。

まほうつかいはみんなとなかよくなれてうれしくなりました。  
そんなあるひ。

むらでこどもたちがねこんでいきました。

むらのみんなはだんだんとふあんになり、だれかがまほうつかいがやったんだといいました。

まほうつかいはいいました。

「ぼくはやってない。きみはまちがっているよ」

いわれたむらのひとはおこりました。

みんながいました。

「まほうつかいがやったんだ。このむらからでていけ」

まほうつかいはむらのみんながきらいになり、むらからはなれたいえにもどつていき  
ました。

しばらくたつと、そのむらにあるまじよがやってきました。

そのまじよは、まほうつかいとおなじようにまほうをつかうことができました。

まじよはむらをたずねるとみんなのためにまほうをつかいました。

まじよはまほうつかいとおなじように、みんなにかんげいされました。

そしてあるとき、むらのこどもたちがねこんでいきました。

むらのみんなはだんだんとふあんになり、だれかがまじよがやったんだといいました。

まじよはいいました。

「まほうでこどもたちをなおしましょう」

まじよはねこんでしまったこどもたちひとりひとりをたずねてまわり、こどもたちをまほうでなおしていきました。

ふあんになっていたむらびとたちは、こどもたちがげんきになるとよろこびました。

そしてまじよにあやまりました。

「ごめんなさい。わたしたちはまちがっていた」

まじよはわらっていいました。

「ゆるします。こどもたちがげんきになってよかったです」

みんながわらってそのむらはしあわせになりました。

でもひとりだけおこっているひどがいました。

まほうつかいです。

なぜのうわさでまじよのことをしつたまほうつかいは、おこりました。



「ぼくもやっていなかったのに、なんでまじよだけみんなとなかよしのままなんだ」  
まほうつかいはおこつておこつてしかたがありませんでした。

そのときです。

まほうつかいのいえにいつぴきのくろいねこがはいつてきました。

まほうつかいがねこにおどろいていると、ねこはまほうつかいにいいました。

「きみはまちがっていない」

まほうつかいはいいました。

「そうだ。ぼくはただしい。なんでみんなはぼくをわるものにするんだい？」

ねこはいいました。

「それはね、あのまじよがみんなにわるいまほうをかけているからだよ」

まほうつかいはまたおこりました。

そしてむらまでやってくると、まじよにまほうをかけてしまいました。

そのまほうで、まじよはくろいねこになってしまいました。

「おまえがみんなにわるいまほうをかけたんだな。わるいやつめ」

まじよはいいました。

「わたしはみんなにまほうをつかかってないわ」

まほうつかいはおこりました。

「うそをいうな」

まじよはいいました。

「あなたはひととはなしたことがないのね。だからこういうことをするんだわ」

まほうつかいはさげびました。

「ぼくはわるくない」

まじよはなみだをながしました。

「かなしいひと。ひとをちゃんとみることができないのね。そのままじゃあなたはみんなとなかよくできないわよ」

そういうとねこのすがたのまま、まじよはどこかへきえてしまいました。

まほうつかいはむらにはいつていききました。

そしてみんなにいいふりました。

「みんな！わるいまじよをやっつけたよ。これでみんなにかけられたまほうはとけるよ」

むらのみんなはおこりました。

「まじよにまほうをかけるなんて、なんてわるいまほうつかいなんだ。むらからでていけ」

まほうつかいはもういちどいいました。

「ぼくじゃない。わるいのはあのまじよだよ」

むらのみんなはかんかんにおこりました。

「うそをつくな。このあくまめ。にどとこのむらにくるな」

まほうつかいはむらからおいだされてしまいました。

まほうつかいはなきました。

なきながらいえへかえりました。

いえにはねこがまっています。

「ほらわたしのいったとおりでっただでしよう？あくまさん」

まほうつかいはおこりました。

「きみのいったとおりにやっただけなのに、ぼくはもうあのむらにいけなくなっ

まったじゃないか」

ねこはいいました。

「あなたがひとをみていないからよ。わたしたちはなしているのはきまりじやなくて

ひとよ。ひとのかおをみてむきあうのよ」

まほうつかいはこんわくしました。

「きみのいっていることがよくわからないよ」

まじよはあくまにいいました。

「これからばんきょうしていけばいいのよ。わたしはまほうをつかうことができるの。あくまのあなたにだって、ひとのかんじようをおしえることができるわ」

そういつてまほうつかいとあくまは、たびにでていきました。

それらしい、このふたりをみたはなしはききません。

おしまい。」

彼女は本を閉じて、ふーっと長い息を吐いた。

割と長かった。

けどよく分からない物語だったな。

少なくとも勸善懲悪じゃない。

絵本だけど子供むけじゃないような……。

彼女はチラチラとこの子に視線を送っている。

何かを期待している目だ。

いつも彼女は弟のために色々なものを持ってくるが、基本的にこの子は無反応なのだ。

まあ、今日もダメなんだろうなあ。

という僕の予想に反して、この子は口を開いた。

「……………まほうつかいはあくまになっちゃったの？」

その言葉を聞いて、立花は嬉しそうに目を開いた。

「つー……そうよ！まほうつかいはわるいことをしたからあくまになっちゃったのよ！」

この子は首を傾げた。

「なんで？まほうつかいはなにもまちがったことをしてないよ」

「むらのみんなをおこらせたじゃない」

「……まほうつかいはやってないことをやってないっていっただけじゃないの？」

「そうよ！」

「やってないからやってないっていっただけのに、なんでむらのみんなはまほうつかいのことばにおこったの？」

「それは……むかつくからよ！」

この子の質問に彼女は言い放った。

ムカつくから。

あまりにも簡潔だけど間違っではない。

ボクの観察してきた経験によれば人が怒る原因ってだいたいプライドの問題だ。理由はすべて後付けにすぎない。

この子はさらに質問を続ける。

「……………むかつく……………?」

「そう！むかつくからおこる。あたりまえでしょ！」

この子は首を傾げた。

「じゃあ、このねこは？まほうつかいをだましたよ？わるいことじゃないの？」

「まほうつかいがわるかったんだから、だましていいのよ。そうやってまほうつかいがわるいことをおしえてるの」

「わるいひとはだましていいの？だますことはわるいことじゃないの？」

「わるいひとはいいの！」

「わるいひとつてなに？みんなをおこらせるひと……………?」

「そう！みんなをおこらせるのがわるいひと！」

この子は静かに顔を上げた。

何も考えてなかった顔は妙に達観しているようにも見えた。

「だれかをむかつかせるひとはわるいひとなんだね……………まほうつかいはわるいことをしてないのに、わるいひとになっちゃったんだ」

「そう……………ね？」

「やだな……………むかつけばひとをわるいひとにかえられるなんて…。どっちがあくまなんだろう」

この子供たち、なかなか面白い議論をしている。  
興味深い。

無駄に賢くないからか、人の本質をついているように思う。

確かに人の判断の根幹は感情によって決められる。

それは判断を行うのが脳の理性を司る場所ではなく、感情を司る場所だからなどといわれている。

つまるところ人は客観的に善悪を決められない。

状況を分析し、良い悪いを判断するのでなく、良い悪いを決めてからその決断の補強材料を探す。

人間の言う正義とはこのようなものだ。

ゆえに人の善性はその人間の行動によって決まるのではない。

その人間のもつ感性によって決まる。

それはこの子たちの親が証明している。

彼らはボクを拘束し、この子の魂にねじ込んでしまったが彼らの感性はそれを善とするから、僕の成長の糧とはならない。

なるほど。

もしかしたらこの絵本はこういうことを伝えたかったのかもしれない。

だから魔法使いと悪魔なのか。

魔法使いはまほうつかいなのか、まじよなのか、はたまた、むらのみんななのか。

悪魔はまほうつかいか、まじよか、むらのみんなか。

それはその読者の感性によって決められるのだろう。

立花のように人と向き合うことを考えるなら、感情をないがしろにしたまほうつかいが悪魔なのだろう。

この子のように事の善悪を考えるならむらのみんなが悪魔なのだろう。

損得勘定を考えるなら、むらのみんなに歓迎されながらまほうつかいを論じたまじよが悪魔になるのかもしれない。

……面白けれど、子供に伝わるのか？

いや実際伝わっているから二人の会話に上がっているんだろうか。

意識を戻すと立花はおろおろとしていた。

どうやらこの子が呟いた一言でこの子が悲しんでいると判断したらしい。

彼女はおろおろしたあと、何かを思いついたかのように手を叩いた。

彼女は続きがないはずの絵本の最後のページをひらき、まるでもう1ページあるかのように音読を始めた。

「ですが、ずっと、ずっとあとになってむらにやってきたひとはいいました。



むらにはまほうをつかうふたりのにんげんが、むらのみんなといっしょにおどつていた、と。

まほつかいは、むらのみんなとなかよく、まじよはしようじきに、むらのみんなはやさしく、ぜんいんでてをとりあっていました。

ほんとうのおしまい！」

どうよ?!と言いたげな目で彼女はこの子を見つめる。

この子はただ驚いて、彼女を見つめていた。

「まちがえたらあやまって、なおせばいいのよ！」

「……………それでいいの…?」

「いいのよ!わたしはそうやっておとーさんとおかーさんにゆるしてもらってるもん!」

「そうなんだ…」

「うん!」

「ぼくもまちがったらあやまればいいのかな……………」

「だいじょうぶよ!ちゃんとはなせばみんなわかつてくれるわ!」

「そっか……………わかつてくれるんだ…………」

「ええ!」

「……………じゃあ……………ほくはまほうつかいになりたいな……」

この子がなんでそんなことを言ったのか、その時ははつきりわからなかった。でもこの子が“人”として生き始めたのはここからだっただと思う。

ボクは正直言つてこの時、心からワクワクしていた。

作られた人形のように、傀儡のようにただ言われたことを行うモノでなく、ヒトとして何かをしたいと言つてくれたことに心躍っていた。

この子の魂に混ぜられてから気づいたんだ。美しいものはそれ単体では存在し得ない。

泥臭い努力や汚い行為、どす黒い感情、そういうものがあつて初めて美しいものは美しくなり得る。

そう言つたものを培つて、併せのんで、はじめて美しいんだ。

無垢は美しくない。

残酷で、罪なだけだ。

だからこれからこの子は、藤丸達海は美しくなる道を歩む。

その一歩を進んだんだ。

そう思いたかった。

## 君の知らない物語（3）

あのつぶやき以来、この子、達海は変わった。

見ている興味深くなった。

主に観察のし甲斐がある変化は二つだった。

この子の視線を通して、隣の彼女を見る。

「おねえちゃん」

これがまず一つ。

達海は立花のことをこう呼ぶようになった。

あの絵本に何を思ったのか、彼女との会話に何を考えたのかは分からない。

が、あれから達海は彼女のことを姉として呼称する。

呼ばれると立花はいつも通り工房の席を真つ赤な顔で引きずって（全力で引つ張らないと動かせないさまはやはり可愛い）、この子の隣に座り目を輝かせるのだ。

おねえちゃんと呼ばれるのが嬉しくてたまらないらしい。  
良さみ。

「よんで」

あれから何回目になるだろうか、達海はまた同じ言葉をお口にしました。

「またあ？おねえちゃん、えほんいっぱいもってきたよ？」

「あれがいい」

彼女が持つてきた数冊の絵本からあの絵本を指さす達海。

あの作品はこの子の琴線にふれたようだ。

「しようがないですねえ」

毎回思うのだが彼女はいったい誰からこの口調を学んでいるのだろうか。

親？先生？

気を抜くと笑ってしまいそうなりズムがある。

彼女はあの絵本を取り出し、二人の間に置いた。

そして音読を始めた。

「まほうつかいとあくま」

うむ。

こうやって見ている分にはただの幼い兄弟だな。

まあ、実際境遇が特殊なだけでそれには違いないが…

と読み始めてすぐ工房の向こうから足音が聞こえてきた。

二人分だ。

両親が来たのだろう。

「っー」

達海はすぐに顔を上げた。

その顔にあまり表情は浮かばないが、積み重ねていた数冊の絵本を両手に抱えると近くの机の下に押し込む。

そして椅子の入るスペース立花を押し込んだ。

「な、なに!!」

達海は口到人差し指を当てた。

「しーっだよ」

立花の真似だろうか。

本当に面白いことをするようになった。

しばらくするとで立花にも足音が聞こえてきたのか、両手を口に当てて大きく頷いた。

達海も頷き返すといつもの椅子に戻って座った。

そしてぼうつと前を見る。

すぐに工房の扉が開く。

両親が顔を出した。

「さ、行くわよ。達海」

一瞬だけこの子の顔が歪んだ。

これも最近になって起きた変化だ。

激痛を伴う実験な中で、痛みよる反射的行動だけでなく恐怖や嫌悪を覚え始めたのだと思う。

だがすぐにその変化を消して頷く。

「うん」

そして両親についていく。

これはなぜなんだろうか？

この子は顔をゆがませはするが嫌とは言わない。

親が怖い？主張するようになって日が浅いからか？

2つ目の変化は実験に対する姿勢だった。

この子は実験に対して、否定的な感情を浮かべるようになった。

しかしその一方で、実験に対する行動は積極的なのだ。

痛いのは嫌だが、それ以上に何かを求めているといったような…

明確な目的意識を持った人間によく見られる行動をとる。

果たしてこの子はなんのために実験に向かうのだろうか。

達海は工房を出る前に振り返る。

そこには心配そうな顔をして達海を見る立花の顔があった。

達海は数秒彼女の顔を見た後、部屋を出ていった。

## §

「っ！うううう………」

苦痛の表情を浮かべ、胸元を抑える達海。

人の悪性がこの子の体を荒らしまわりながら、回路を痛めつけているのだろう。

大の大人でも床を転げまわるような激痛のはずだ。

この歳でよく耐えている。

「どうだ？」

「やっぱり反応範囲が広がらないわね」

「アプローチが間違っているのか………？」

「でも、できる限りの方法はすべて試したわよ」

激痛に耐える息子をよそに、両親はモニターの前で議論を交わしている。

実験の結果は芳しくないらしい。

二人そろってしかめっ面のままモニターを見ている。

「どうやらこの二人の目的はボクの権能を利用して、人間の悪性を集めることのようにだった。」

いや、集めるなんて生ぬるい表現は使うまい。

正しい言い方は多分、“強奪”だろう。

彼らは世界中の人間の悪性を奪い去ろうとしている。

なるほど感性が決断を決めるなら、当然人から悪性を取り除けば悪意ある決断は消えるだろう。

流石は時計塔の魔術師。

頭いいね。

もちろん皮肉だ。



冷静に考えてくれ。

大西洋の海水を全部抜けばロンドンからニューヨークまで歩いて行けるね！

つて言っているのと同レベルだぞ、これ。

発想があまりにも現実離れしている。

加えて、仮にだ。仮にそのようなことができるとして、悪性を除いて空いた器には何が注がれるのだろうか。

善性だけが残れば、愛で満たされると二人は信じ切っているようだが悪性と善性はそう区切れるものか。

いいや違う。

その後待つのは虚ろだ。

要は塩梅だと前にも思ったが、それと一緒だ。

境界線があるわけではない。

明確な区切りがあるわけではない。

あるのは割合であり、指標だ。

二つあるからこそ、美しいのだ。

共にあるからこそ、正しいのだ。

二つは分かってないし、出し抜けない。

ふたりはプリキュアということだ。

ブラックとホワイト、どっちも可愛いでしょ？

この子の前にいる両親を見ればわかるだろう。

悪性をなくしてしまつたヒト。

人は悪を思う感性があるからこそブレーキを踏める。

だが善性しか持たない彼らは、自らの決断に迷いなく進み続ける。

素晴らしいことのように聞こえるかい？

これはぶれない人間という意味合いではないよ。

止まらない人間ということだ。

割合を失い、指標を失つた彼らに目的地はない。

善性に押されるまま、感性のなすまま、破滅するまで走り続ける。

彼らは大人なんだから勝手だろ、と？

まあ、ボクも要らぬお節介をしたいわけじゃあないけどさ。

一人で暴走して勝手に壊れるなら、それはそれで人の多様性の範囲内なのかもしれないな

いけどさ。

支えなしでは立てない子供まで走らせるのは悲しいじゃないか。

だから嘆いているのさ。

人類悪のボクが人の在り方を説くのはお笑い草だけどね。  
ん？そこまで言うのなら助けてやれって？

それはそれ、これはこれ。

この子を助ける動機がボクにはない。

好意も、利益も、義理もない。

そもそも人を助けるなんて無理な話さ。

人は納得して、勝手に助かるだけだからね。

「……………もしかしたらこの実験そのものが」

「……………」

「いや、とりあえずまだ様子を見よう」

「……………ええ」

二人はそう結論づけ、この子につけた機材を外した。

手早く、そして無機質にこの子を解放する。

そのとき、この子が初めて両親に対して自発的に口を開いた。

「……………ぼくは、まほうつかいになれないの？」

二人は目を見開いて動きを止めた。

「魔法使い？」

「みんなのためになれないの………？」

そう問う表情には恐怖が宿っているように見えた。

実験の痛みに対するそれより余程強い。

二人は目を白黒させていたが、言わんとする意味を理解したのか笑顔で頷いた。

「達海はみんなを助けることができる。お父さんとお母さんの言うことをちゃんと聞けばできる」

そう言つて父親はこの子の頭を撫でた。

その言葉にこの子の恐怖は薄れていた。

「わかった。がんばる」

母親は笑顔で答えた。

「いい子ね。 私たちも頑張るわ」

そしてこの子の手を取った。

連れられて実験室を出ていく。

……なるほど。そういうことか。

この子はあの絵本に出てくるまほうつかいになりたいのか。

みんなのために魔法を使いたくて、この実験に積極的になつているわけだ。

この子はなぜそんなことが思えるのだろう。

みんなを知らないのに。  
なぜ？

「………だってみんなのためになれば、おねえちゃんのためになる」  
!!

小声で達海が呟いた。

前にいる両親は何も言っていない。

もしかしてボクの声が聞こえている？

「おねえちゃんはみんななかよく、っていつてた。だからみんなのためにまほうをつかいたい」

あの絵本のおしまいか。

この子は立花の言った絵本のハッピーエンドが見たいのか。

それともそれを見て喜ぶ姉の姿が見たいのか。

「でも、これじゃあ、ぼくはまほうつかいになれない」  
なぜ？

「おとうさんとおかあさんはぼくをみてよろこんでないんだ。ぼくはふたりのためにまほうをつかかってない」

思った以上に聡い子だ。

両親が実験結果に頭を抱えているのが理解できているらしい。

そうか、それで「まほうつかいになれない」か……………

「おねえちゃんがかなしむ。ぼくはうれしくしてもらったのに」

！

そうか。

君は人の感情がわかるのか。

正しいかどうかではなく、人の心で行動できるのか。

ボクの権能を使わされて、あれだけ人の悪性に触れながらそれでもそう思うことができるのか。

君は……………あれだな。

美しいな。

こんな理不尽な境遇に置かれて、人類悪の魂を混ぜられて、悪性に触れて、それでもそう思うことができるのか。

この子の今のありように、ボクは自分の中で何かが動くのを感じた。

ねえ。

「?」

きみは魔法を使えるようになりたいか?

「うん」

そうか。

じゃあ、ボクが君に協力してあげるよ。

「きょうりよく?」

ああ、難しかったね。

つまりね、君が魔法を使えるようにボクが手伝ってあげる。

「っーほんとう?」

ああ。本当だとも。

「ぼくはまほうつかいになれるの?」

さてね。それは君次第さ。

でも魔法は教えてあげる。

特別だよ。

「うん!」

頑張っつね。

「……………ねえ。きみはだれなの?なんでこえがきこえるの?どうしてまほうをおしえて

くれるの?」

矢継ぎ早だな。

ボクの口は一つしかないんだぜ。

そうだな。

その質問にはまとめて答えられるかな。

君風に言うのだね。

ボクは「あくま」なんだよ。

「あくま」

そう。「あくま」。

黒い猫は魔法使いに魔法を教えてくださいませんか？

そういうことさ。

「達海?何か言った?」

この子つぶやきが聞こえたのか手を引いていた母親が振り返った。

達海は首を横に振った。

「ううん。なんでもない」

いやあ。参った。

あれだけ偉そうに講釈を垂れておきながら、今更気づくなんて。



ボクは自分の中で、〃人はこうあるべき〃……いや、〃こうあつて欲しい〃なんてことを考えていたらしい。

人類悪なのに。

この子が気に入った。

ボクはこの子の成長が見たくなってしまった。

だからこの子に手を貸すことにした。

力を貸すことにした。

人類悪がそんなこととしていいのかって？ いいんだよ。

人類悪は人がよりよい道を歩むための必要悪なんだから。

§

それからのこの子の成長は目覚ましかった。

ボクの言うことを素直に聞いて、実践する。

ただそれだけでどんどん見違えていくから、ボクも指導していて気持ちが悪かった。肩を張るんじゃない。

力を抜いて、周りを読むんだ。

「いっつー」

そうそう。

イメージはポンプじゃない。

川の流れだ。

絵本で見たことあるだろう？上から下に水が流れてるあれだよ。

力で押しちゃだめだ。

回路は無理なく淀みなく流すんだよ。

「こっつだ」

よくできてるじゃないか。

この子に混ぜられたボクの魂から発露した力はどういうわけか、ボクのととは勝手が違った。

いや、勝手は同じなのだが経路が違った。

この子は人の悪性を吸収し、それを魔力へと変換できるようだった。

実験のあれは、無理な吸収が祟ったのでなくボクの権能をチューンナップした末の結

果らしい。

成長の糧ではなく、魔力として変換する。

ボクの権能を、悪性を何ら色のついていないエネルギーにして、その後に向向性をもった成長の糧とすると仮定すればどうだろう。

ボクの権能を中途半端に使っていると考えれば理解できなくもない。

何分、人に混ぜられた経験がないので断言できないが使い勝手はいいと思う。

「できた」

「そういうこの子の回路には大の大人ですら比べ物にあらないレベルの魔力が流れていた。」

普通なら有り得ないレベル。

外付けの魔力炉を3個ぐらい持って、初めてこのレベルに到達するのではないか。

いやあ、自分で教えといてなんだけどすごいな君は。

「……………」

これなら魔術なんて無尽蔵に使えるよ。

……………どうしたんだい？ 浮かない顔をして？

「まほうは……………？」

まほう？

「まほうはまだつかえてない」

おいおい。

なんてことを言うんだ君は。

人の悪性を魔力に変換するなんて第3魔法の派生形みたいなものだよ？

嫉妬はびこるこの世界だよ？ ジェラシックワールドだよ？

この力を持つていたら、実質無尽蔵に魔力を生成できるじゃないか。

これを魔法と呼ぶずに何と呼ぶんだい？

「だって、だれもうれしくなってるじゃない」

……………なるほど。そうか。

君の中で魔法とは、誰かを喜ばせるためのものなのか。

「おとうさんとおかあさんがうれしくなってる。ならみんなのためにならない」

？

お父さんとお母さんが喜ばないと魔法にならないのかい？

「おとうさんとおかあさんがうれしくなれば、ぼくはまほうつかいになれるっていつて

たよ」

なるほど。

父親と母親の悪性強奪計画が上手くいけば人は幸せになる。

みんなのためになる。

つまり、両親の計画が上手くいく、すると二人が喜ぶ。二人が喜べば、人のためになる。するとこの子はこの子が言うところの魔法使いになれるって理解でいいだろうか。うーむ。

動機はとでも好ましいのに、最も大事なところが欠けているなあ。

君はお姉さんに喜んで欲しいのだろうか？

「うん」

だったら君がその魔力を使ってお姉さんを嬉しくさせてあげればいい。

それは人のために、みんなのためになっている。

それは魔法じゃないのかい？

「……………」

何が魔法で、何が魔法じゃないかは君が決めるべきだろう。

「……………」おとうさんとおかあさんはみんなのためになることをしてる。それはまほう」

……………刷子込みが強いなあ。

本人がどう考えようとまだ子供。

親の思考を自分の意見としてすり替えてしまうのは、子供としては当たり前だし。

だがこの子の場合、親が親だ。

そのまま受け入れるのは非常に危うい。

しかしこの子にそれを言ったところで理解できないだろう。

……仕方ないな。

じゃあ、君が学んだ技術をお父さんとお母さんに見せてくればいい。

それをお父さんとお母さんがみんなのために使えば、それは魔法になるだろう？

「！」

この子は目を見開いた。

そして大きく頷いた。

「うん！」

ちやうどその時、工房の扉が開いた。

母親がこの子を実験に迎えに来たのだ。

「達海、来なさい」

心なしかその声は前よりも低く、無機質に聞こえた。

ボクはその声を聞きながら、先ほどこの子に言った言葉はただの気休めだと改めて思った。

「つ!! うううう!!」

いつものようにこの子が胸元を抑える。

だが耐え切れなかったのか、そのまま床に倒れ込んでしまった。

「ハア、ハア、ハア」

荒い息を何度も繰り返す。

床に倒れ込み、何度もかすれた呼吸音を響かせる息子をよそに二人はモニターを見ていた。

「どうだ?」

「……………駄目ね、やつぱり」

モニターの前に立つ両親は無表情のままそう言った。

今更この状況がどうのというつもりは無い。

それにこうなることは分かっていた。

この両親がこの子に求めることは、悪性の吸収にある。

二人は世界中の人間の悪性を根こそぎ吸い上げたいのだ。

だから二人はこの子の悪性を吸う能力を、より広範囲に、そしてより強くしたかった。しかしこの子に発現した権能の力は変換だ。

ボクの獣としての力“吸収”と“成長”ではなく、この子の力の本質は“変換”だろう。

純粋な人類悪でなく、それを混ぜ込まされた創作品。

人と獣の融合させたもの。

その力が“変換”なのは道理だと、ボクは思う。

「これは……………失敗だな」

だがこの二人が求めているのは道理ではなく、奇跡だ。

だからこの子に失敗の烙印を押すのは目に見えていた。

達海は子供ながらに落胆されたと感じたのか、いつもより少し早口で話した。

「お、おとうさん。みて。ぼく、まりよく？がつかえるようになっただよ。ほら」

先ほどの実験で吸収した悪性をボクが教えた通りに魔力して見せる。

すさまじい変換効率だ。

両親も驚いたのか目を見開いて動きを止めた。

「達海……………それは……………」

この子は少しだが自慢げに答えた。



「これ、できるようになったんだ。だからおとうさん、おかあさん。これをつかってみんなのために……」

だけど……

「魔力になってしまふのか……これではビーストを使った意味がないな」

父親はほとんどこの子には無関心にそう言った。

「あなたの刻印に用いれば有用に使えないかしら？」

母親が言った。

「いや、僕らの研究した迦行魔術は結局のところ、虚数魔術の下位互換だ。人の手で運用できる分、虚数魔術よりは意義があるが僕らの目指す平和には使えない。そう結論を出しただろ？」

「……そうね」

この両親はこの子に落胆したのではない。

無関心になったのだ。

この二人は善性だ。

平和と愛を求めてやまないヒトだ。

だからこそそれに関連しなければ、注意を向けることができない。

この二人の態度は、費やした時間と労力が徒労に終わったことへの悲しみでもない。

期待が裏切られたことへの義憤でもない。

ただ彼らの世界から、この子が外れた。

それだけだった。

悪はない。あるのは善だけだった。

「有用な情報は得た。ビーストの力をそのまま使うことはできない。変質してしまう」

「そうすると次に考えるべきは抑止力かしら？」

「いや、今回はリスクが大きかった。続けざまに大きな行動に出ればそれこそ危険だ」

「……………世界平和は私たちがなしえるしかない、か」

「おとうさん？」

「ああ。僕たちはこんなところで倒れるわけにはいかない」

「おかあさん？」

「しばらくは次のプランの練り直しね。急ぎましょう」

この子の問いかけにこたえることもなく、二人は工房から出ていった。取り残されたのは不安げに立ちすくむ達海だけだった。

## §

落ち込む必要はないさ。

ただあの二人の考えと君の成長が違う方向だったただだよ。

「……………」  
別にお父さんとお母さんの期待に応えなかったからといって、魔法使いになれなくなるわけじゃない。

「……………」  
むしろよかったじゃないか。

これで君は自分自身の考えでみんなのために魔法を使えるんだぞ。

「……………」

だんまりだった。

あの後達海はずっと工房で座り込んだまま、顔を俯かせたままだ。今言った言葉は全部、割と本気なのだが。

しょうがない。

この年ごろの子供の世界とは、自分と親がすべてなのだから。

親に無関心になられたらどんな子供だって傷つく。

人は誰かに認めてもらわなければ生きていけない。

生きていいと言ってもらわなければ生きられない。

弱いわけではない。

人は繊細なのだ。

大人だってそうなのだから子供だってそうだ。

だけど……………」

カチャリ

工房の扉が開く音がした。

「たつみ！おねえちゃんがきたわよ！」

この子には姉がいる。

とても人らしいお姉さんが。

だから僕はあまり心配していなかった。

立花は工房に忍び込んでくると、いつも通りそう宣言した。

珍しく手には絵本が一冊握られているだけだった。

彼女は意気揚々とこちらを向いた。

そして達海の表情をみて、瞠目した。

「たつみ? どうしたの?」

彼女は俯いている弟にかけよった。

そして小さな背中をまたまた小さな手でさすった。

「ころんじやつた? いたいいたいなの?」

その優しいげな声に、達海はどうとう泣き出した。

「っ……………」

立花は急に泣き出した達海をみて慌てた。

「いたいいたいなの?」

それから泣きじやくる弟を前に、わたわたしていたがしばらくすると彼女は達海の頭に手を添えた。

「いたいのいたいのとんでけー！」

そして古くから伝わる呪文を唱えた。

彼女はこれをどこで学んだのだろうか？

あの両親がこんなことをするとは思えないが………本か？

それとも姉には親らしく接しているのだろうか？

「いたいのいたいのとんでけー！」

彼女はもう一度、泣く子に対する伝家の宝刀を繰り出した。

二度やられた達海はその行為に疑問を持ったらしい。

「……………おねえちゃん。それ、なに？」

泣き腫らした顔で彼女の行為の詳細を聞いた。

「これはね、まほうよー！」

「まほう……………？」

彼女の一言に達海は動きを止めた。

「そう！いたいをなくして、かなしいをとんでいかせるまほうよー！」

「おねえちゃん、まほうがつかえるの？」

「ええー！」

彼女は達海の顔を指さした。

「ほら！わたしのまほうでかなしくなくなったでしょ！」

呆然としている達海の顔には乾いた涙が張り付いているだけで、そこに流れるものはなかった。

そして悲しい表情も。

たしかに。

これもある種の魔法か。

いたいのでいたいのとんでゆけ。

案外馬鹿にできないなあ。

「ほんとだ……す……す……い……」

この子、いつもは割と聡い子なのにたまに抜けている。

彼女の言う通りになったことに心底驚いていた。

そしてすこしワクワクした表情になった。

「す……い……す……いよ！おねえちゃん！まほうつかいだ！」

おー。

元氣出た。

ボクの慰めには一切耳を傾けなかったのに。

やはり子供には子供か。

「えへん！おねえちゃんはずごいのです！」

そうして腰に手を当てて胸を張った。

すげえな、おねえちゃん。

人類悪ができないことをやりおった。

ドヤ顔だけど。

まほうつかいになりおったわ。

ドヤ顔だけど。

「あ……………」

達海は彼女の手に一冊の本が握られていることに気付いた。

それはあの『まほうつかいとあくま』だった。

達海は両親のことを思い出したのか、また暗い表情に戻ってしまった。

おい。

すごいおねえちゃん、墓穴掘つとるぞ。

どうした。

弟の落ち込みに立花も困惑した。

「まだいたいいたいなの？」

達海は首を横に振った。



「どうしたの？」

達海は話しづらそうに俯く。

その表情を見て立花は自分の胸を拳でたたいた。

「はなしてみなさい。おねえちゃんはまほうつかいよ！なんでもかいけつしてあげるわ  
！」

なんでも、か。

大きく出たな、おねえちゃん。

じゃあ、ついでにボクの悩みも聞いてもらおうかな。

実は最近、夢に変な夢魔が出てくるんだよ。

マーリンって言う名前だね、とても胡散臭い奴なんだ。

もう張り倒したくなるようなやつなんだけど、どうすればくたばる……………

達海はそれでも少し躊躇したが、さつき泣き止ませた立花の力を信じたのか、少しづつ口を開いた。

「お、おとうさんとおかあさんがね……………」

「うん」

「しっぱいだっていったんだ……………」

「しっぱい？」

「おとうさんとおかあさんはみんなのためにがんばってるのに……」

「……うん」

「がんばってるのに……ぼくはみんなのためになれないんだ」

「そうなの」

「ぼくは、もうまほうつかいになれないんだ……」

「うん」

「なんでだろう……ぼくもみんなのためにがんばったのに……いたいのがまんしたのに……」

そういうとまた泣き出してしまった。

でも今度は、立花は慌てずに弟の背中を優しくにさすっていた。

「たつみはがんばったのね」

「うん」

「みんなのためにがんばったのね」

「うん」

「じゃあ、たつみもまほうつかいよ」

「……え……？」

え？

なんでですか？

「だってたつみががんばったってきいて、おねえちゃん、うれしくなったもん」  
「おねえちゃん、うれしいの…?」

「そうよ。おとうさんとおかあさん、すごいむずかしいおしごとしてるのに、たつみは  
てっだいしてたんでしょう?」

「う、うん」

「それってすごいことよ。わたしはできないもん。だからおねえちゃんはおとうがと  
てもがんばっていてうれしいのだ」

にひつと口角を上げ、達海はの頭を両手でかき回した。

されるがままの達海は次第に下がっていた口角を上に向けて笑った。

「いっひっひっひっひっ!」

「あはははは!」

無邪気に笑い合っている。

良い。

初めてこの子の笑い声を聞いた気がする。

ボクもうれしいです。

しばらく笑い合った後、立花はあの絵本を取った。

そして最後にページを広げた。

ん？

「ほらみて！ たつみ！」

最後のページにはもう一枚画用紙がテープで張り付けられていた。

新しいページが作られている。

「さいごはみんななかよくてをとりあうの！」

そこにはクレヨンで笑う人たちが描かれていた。

ローブを着た少年と三角帽の少女、そして笑い合う大人たち。

拙い絵ではあるがよく描けている。

「これって、ほんとうのおしまいの？」

「ええー！」

あのととき彼女が語ったハッピーエンドを描いたようだ。

彼女のなかでラストのイメージはこれなのだろう。

「よくきいて。 たつみ。」

彼女はその見開きのまま弟に絵本を渡した。

「まちがえたらあやまるの。 まえもいったでしょ」

「え……………」

「たつみはがんばった。 でもおとーさんとおかーさんはがんばったっていつてくれな

かった」

「……………うん」

「それはね、なにかまちがえてたのよ」

「なにかつてなに……………?」

「それはわからないわ!」

ええ。

わからんのかい。

達海も顔を困惑させた。

「それはじぶんでかんがえるの!」

「じぶんで?」

「ええ! なにかまちがつてたかちゃんとかんがえて、うーんってなやんで、わかつたらご

めんなさいするの! そうすればおとーさんとおかーさんもゆるしてくれるわ!」

「……………ほんとに?」

「ええ!」

「ゆるしてくれる?」

「おねえちゃんはまほうつかいよ! しんじなさい!」

彼女に断言されて、達海は少しずつ顔色をよくした。

「うん。わかった。かんがえる」

「いいこよー！」

たどたどしくもしつかり答えた達海に、立花につこりと笑った。

なんて美しい姉弟愛なんだ。

尊みファンタズム。

とても美しかった。

それゆえにこの言葉はこの子を壊す決定的な一打になったのは間違いなかった。

## 君の知らない物語（4）

期待を抱いた目で走る。

その表情はまだボクが見たことのないものだった。

あれだけ無感情に親と向かい合っていたこの子は、今やここまで子供らしくなってきた。  
れた。

とても嬉しい。

しかし、それだけにこの子が今から行おうとしていることが悲痛に感じられる。

お姉さんの励ましを聞いて、この子はずっと考えていた。

何が両親を失望させたのか。

自分は何が悪かったのか。

そして考え付いた。

自分のやり方が拙いせいだと。

変換する魔力量が少なく、粗いせいであると。

まあ、本人はもつといっぱい頑張ると口にしていたが、この子の考えていることは概ねボクが言っていることと一致している。

両親はこの子に関心をよせなくなったのであって、決して怒っているのではない。前提条件から間違っている。

だがそれを指摘してあげる義理もボクにはないのであった。

この子の成長は楽しみだが、成長の方向性を指し示したいわけではない。まして、あの両親の研究を助けるつもりは無い。

転ぶことも一つの成長だ。

この子は初めて自ら工房を出て、客間の扉へと向かった。

何やら話し声が聞こえる。

両親はここにいると思ったのだろう。

達海は勢いよく扉を開けた。

「おとうさん！おかあさん！あのね………」

客間に入り、達海は動きを止めた。

というのも客間にいたのは両親だけではなかったのだ。

いつも見ない顔が二人。

白いスーツを着た白髪の男と濃緑色のスーツを着た切れ目の男。



二人は両親と向かい合わせで談笑をしていたようだ。今はこの子の突然の登場に4人とも凍りついているが。

中央のテーブルの置かれた紅茶の湯気だけが、凍りついた空気を笑うように漂っていた。

「あ……………えつと…」

この子は戸惑うように両親を見た。

さてはて……………来客中だったとはね。

この子も予想外の展開に固まってしまったようだし、助け船をだしてあげようかな

……………

「おとうさん、おかあさん……………なるほど、彼はご子息ですか？ドクター・ハザマ」

そんなことを考えていたら白髪の男がこの子を見て、両親にそう問いかけた。

細身で威圧感のない姿をしているのに妙な雰囲気纏っている。

落ち着いた声だが、安心感はない。

それに隣の男。

見た目は若い、醸し出す品性はそれなりの時の経過を感じさせる。

その上、この人ならざる気配…

ふむ……………

その問いかけに父親はにこりと笑った。

「ええ。恥ずかしながら私どもの愚息、達海と申します。ご迷惑をおかけして申し訳ない。お二人がいつらしゃる間は奥で大人しくしているようお願いしておいたのですが

……」

白髪の男もにこりと笑い返した。

「いえいえ。子供は元気あつてこそです。迷惑などということはありません」

白髪の男の目は興味深そうにこの子をとらえていた。

一方で、隣の男はこの子の出で立ちにその目つきを鋭くしていた。

母親がこちらにやってくる。

「達海、私たちは大事なお仕事申中なのよ。お部屋に戻って待つていなさい」

お部屋？

さてはて。

この子に部屋なんてものはないが……あ、実験室ならありますね！

もちろんわざとだ。

「……………その……………ボク……………おとうさんとおかあさんに、あやまりたくて……………」

達海は状況に困惑していたが、母親に相手にしてもらつて安心したようだ。

とりあえず素通りされず声をかけてもらえた。

その事実には背を押され、ここ最近ずっと考えていた謝罪を述べようとした。母親はにこりと笑って言う。

「あとで聞いた上げるから、今はお部屋に戻って、ね？」

まあ、来客中の親がそれを聞けるわけもなし。

割と重要な来客対応であるようだ。

この白髪の男、どうにも恐ろしい目をしている。

十中八九魔術師であろう。それもかなり高位の。

「かまいませんよ。どうぞ達海くんも一緒に」

「いえ、そういうわけには……………」

「この年ごろの子供は甘えたい盛りでしょう。私も娘がいるのでよくわかります」

そんなことを白髪の男は言った。

「しかし……………」

「問題ありません。元々無理を言って伺ったのはこちらです」

父親は軽く頭を下げた。

「申し訳ありません」

そして達海を呼んだ。

「達海、こちらに来なさい」

こんな風には呼ばれるのも初めてだろう。

達海は目を輝かせて父親の座る椅子のもとへ向かった。

彼の座る椅子には幅があり、子供が一人ほど座れるぐらいには空きがあった。

「ここで静かに座っていなさい」

「うん」

言われるがまま達海はちよこんと座った。

「ちよつとっ」

母親は抗議の目を向けるが、父親は首を横に振った。

「これ以上教授のお時間を取らせる方が迷惑だ」

母親はため息を吐くと席に戻った。

そして対面に座る白髪の男に頭を下げた。

「申し訳ございません。アニメスフィア教授」

「いえ」

ん？

今なんて言った？

アニメスフィア？

「それでは話を続けましょう」

ボクの疑問など待つ余地もなく男は話を再開した。

「貴方たちには私の計画に参加してもらいたい」

「先ほども伺いましたが、その計画とは？」

父親は訝しげにアニメスフィアと呼ばれた男を見た。

「人理保障継続機関フィニス・カルデア」

カルデア？

バビロンの王朝のことか？

「カルデア……それはいったい？」

父親はその言葉に疑問符を浮かべた。

「人類は常に絶滅の危機に瀕している、というのが私の持論です」

彼は微笑を浮かべたまま、話を続ける。

「我々は常に脅威に直面している。悪、霊、神、人……脅威とは挙げればきりがありませんが、永劫に直面し続けるであろう最大の脅威はこれです」

彼は右手の人差し指を自分の胸に向けた。

「これ……とは？」

「未来」、ですよ」

未来？

「ただでさえ不安定なこの世界で、人類は未来が続いているのかさえ分からないままに前へ歩むことを余儀なくされる」

「……………ええ」

「誰もが生まれてからずっと未来への不安を抱いて生きています。抽象的で、区切りなく、際限のない苦しみが人々を押しつぶす。我々は今を生きなければならぬのに、輪郭の見えない未来によって視界を狭められている」

「……………」

「人は今を生きることによって過去という轍わだちを残す。しかし、正しく生きなかつた今は振り返る過去ではなく人を呪い続ける傷となる」

おそらくすべての人間が経験しているであろう呪い。

過去に犯した過ちへの悔やみ。

あのとき、ああしておけば。

なぜ自分はそのとき人を傷つけたのか。

なぜ自分はそのとき人に傷つけられたのか。

過去の後悔は罪を犯した人間を永遠に蝕み続ける。

その罪を故意に犯したかどうかに関わらず。

「未来への不安に気を取られ今を視界から外せば外すほど、杜撰に生きた『今』は過去

ではなく過ちとなって我々を蝕む。そしてその過ちが未来への不安をさらに肥大化させていく」

「……………」

「保障のない未来は人を狂気の渦へ陥れるのです。可能性のある未来は希望ではない。先へ紡がれる糸の先は絶望に満ちている。無限の可能性、誰もが子供に向けるその言葉は希望を託しているのではなく、不安から目を背けた結果の言葉です」

無限の可能性。

人間は好き好んでこの言葉を使うが、輝かしい希望とは惨たらしい絶望の山の上にあるのだと自覚しているのだろうか。

そんな無責任な言葉でどれだけの子供が輝きを失ったのか。

想像に難くない。

出なければ世にはこれだけ嫉妬がはびこるまい。

「人々が健やかに生きるために、人は未来を保障させる必要がある。」

アニムスフィアは二人の顔を見据えた。

「そのための人理保障継続機関フィニス・カルデアです」

「その組織が人類の未来を確定すると?」

父親は疑問を口にした。

アニメスフィアは首を横に振った。

「いいえ。確定はしません。我々は人類史を保障するのです」

「……………」

「歴史を刻むのは今を生きる人です。歴史をはつきりと決めることは我々の役目ではありません」

「では、人理の保障とは？」

「我々は、人々が不安からありもしない未来を見ることをやめさせる。保障の文字通り、未来が間違いないく大丈夫であると請け合いです。彼らに今を生きるよう仕向ける」

「それは空手形ではないのですか？」

何の確約もなく、ただ大丈夫と言っているだけでは詐欺師であろう。

父親のいうことは的を射ている。

「もちろん証拠はございません。疑似地球環境モデル・カルデアス。１２年前に作り上げた魔術礼装です」

「カルデアス？」

「機密事項ですので詳細をお教えることは叶いませんが、簡単に言うならば惑星の魂を複製する小型の疑似天体です。理論上１００年先の地球を観測することが可能です」

「なんと……………」



両親が目を見開く。

「この礼装でこの先100年における人類史の未来を観測し、未来が確かにあることを口伝する。許容できない問題が起きた際にはその原因を問題の起点から過去に遡り測定、そして修正する」

遡り、修正？

「これが、私どもが呼称する人理の“保障”、その具体的な行動です」

……。

「一ついいですか？」

父親はおもむろに尋ねる。

「どうぞ」

「先ほど教授は問題を観測した際に修正するおっしゃられた」

「ええ」

「しかし問題の原因が今後100年先までの未来ではなく、現時点から見ても過去に当たる場合もあるはずです。その場合はどうするおつもりですか？」

原因がすぐさま問題に直結しない場合というのは多々存在する。

例えば、食料品の価格の高騰。

あれらの原因に中東における原油価格の高騰があったりする。

その場合、実際に掘り出された原油の価格が市場のバランスに伴って設定されて、精製され、油として普及し、食品を運ぶ輸送業者が購入、輸送コストの上昇に伴って配達料を値上げ、商品が小売店舗に運ばれて、小売店舗が値上げた価格で販売、消費者が値上げを実感するまでにおおよそ10ヶ月ほどかかる。

公害における生物濃縮などもその一例だろう。

自然に放出された有害物質を地が吸収し、その地に生える植物が有害物質を含む水分と栄養分を吸収しながら成長、それをさらに虫が食べ、それを小動物が、それを大きな動物が、そして最後には人がそれを食べ、ここまでの過程で濃縮された有害物質が人体に悪影響を及ぼすまでに数年かかったりする。

人理に影響を与えるほど大きな問題なら数十年、数百年単位の積み重ねで起きることもありうる話だ。

その場合、いくら問題が起こることが予見できたところでその原因たる起点は過去にある。

過去にあれば対処のしようもない。

さて、どうする気なのやら。

「それはカルデアの根幹をなす話になります。我が家の秘伝にも関わってきますゆえ、所属するか分からない状態での説明は勘弁願いたい」

重要なと言えんのかい。

……当然といえば当然か。

知りたきや協力しろ。

分かりやすい言葉で大変よろしい。

「……分かりました」

父親はそう返答した。

「……教授が何をなされるおつもりかは理解いたしました。しかし正直なところ、その研究、いえ観測に我々の力が必要とは思えません。教授はなぜ我々に目をつけてくださるのですか？」

どうも今までの説明を聞いているとこの男の素性がかめてきた。

まあ、家名は会話に出ていたのでまさかとは思ったが……

……この男、時計塔の12のロードの内の一人、天体科のアニメスファイア家の当主だろう。

そんな男がなぜ一介の成り上がり魔術師夫婦に頭を下げて来るのだろうか。

この男が一声かければこの夫婦より優秀な魔術師なんて掃いて捨てるほど集まるだろうに。

「貴方たちに私が協力を要請する理由は大きく分けて3つ」

「3つ……？」

「一つ。貴方たちは非常に興味深い研究をしていた」

「というと？」

「遡行魔術。あれは先ほど話題にしたカルデアの根幹に関わる件について非常に関連性が高い。その技術を我々の計画に提供していただきたい」

「私どもの秘伝を差し出せと？」

「もちろんただでは言いません。その対価としてこちらもアニムスファイア家の秘伝を貴方たちに公開いたしましょう」

両親は目を剥いた。

当たり前だ。

1代の成り上がりの研究成果を得るために、代々紡がれてきた高名な家の秘伝を差し出すと言っている。

等価交換ではない。

少なくとも一般的に見たら。

「……………本気ですか？」

「もちろん」

何を考えているんだか、このロードは。

「2つ。貴方たちはどの派閥にも属していない」

この子の両親は時計塔では嫌われ者だ。

若輩者が飛び出ると周囲の嫉妬を煽り、足を引きずられるのはどの組織にもよくあることだ。

時計塔もその例に漏れない。

それゆえ属していないというよりはどの派閥にも属せない、というのが正しい表現だろう。

「先ほどお話した疑似地球環境モデル・カルデアス。実は組み上げが終わっているだけで完成はしていないのです」

「組み上げだけ？」

「というのも惑星の魂の複写だけありまして、膨大なエネルギーを食う」

「……………具体的にはどの程度ですか？」

「一国家が保有する発電所を半年ほど独占する程度」

「いちいつ!!」

二人が目を剥く。

……………いや、無理じゃね？

この反応は予想の範囲内だったのか、アニメスフィアは機先を制した。

「国家予算に匹敵するほどの資金が必要です。あまりにも現実的ではない。しかし無策というわけでもありません。それを用意するのに好都合な儀式が近々行われる」

儀式？

「極東に存在する願望器の召喚。その儀式に参加していただきたい」

「……………願望器…まさか、冬木の？」

父親は少し驚いたような顔をした。

知っているのか？

「やはりご存知でしたか。お二人とも日本出身と聞いていたので、その可能性はあると思っただけでしたが」

アニメスフィアは机の上の紅茶を手取る。

「それならば話は早い。マスターとしてその儀式に参加、私のサポートを頼みたい」

両親は気まずそうに彼を見た。

「失礼ですが教授。あれがどのようなものかご存知ですか？」

母親が問う。

「あれは万能の願望器などではありません。戦争の過程で願いを成就できるだけの魔力が集まるだけで、大聖杯の力で孔を固定したとしても根源へ至るなど到底……………」

アニメスフィアは手のひらを二人に向けた。

「皆まで言わずとも結構です。私はそれを理解しているし、第3魔法などどうでもいい。先ほど申し上げたでしょう？ 必要なのは資金だと」

「貴方は……」

「私が果たすべくは一族の冠位指定。ブランドオーダー “この惑星の人類史の保障”」

魔術師らしからぬその言いように訝しさを拭えない。

「こいつ……何を考えている？」

「私としてはあなた達から “根源” という言葉が出てきたことが驚きですよ」

協会に聞かれれば追放もあり得る会話のはずだが、この男の口調が事の重要さをぼかしてしまっている。

これも認識阻害の魔術なのか。

それとも当主に必要とされる話術なのか。

どちらにせよ、藤丸夫婦は会話の主導権を少しづつこの男に握られているように思える。

「……私どもも魔術師ですからね。いくら若輩といえども根源へと至る道は常に模索しております。その一環で聖杯戦争のことを……」

「ご冗談を」

アニムスフィアはまた笑った。

しかし今回の笑いは微笑ではない。

どちらかといえば嘲笑だ。

「あなた方は根源などどうでもいいのでしょうか？眼中にない」

「っ！！」

両親の視線にはロードと会談しているとは思えぬ不純物が混じった。

殺気だ。

その殺気に呼応するように二人の回路は旺盛に動き出す。

それに気づかないわけでもないだろうにアニムスフィアはティーカップを傾け、ゆっくりと紅茶を飲んだ。

陶器が軽い音を立てて机上に置かれる。

「……………目を見ればわかる。貴方たちは理を見ていない。真理に触れようとする者の目にはどこか諦観がある」

「……………」

「大いなる普遍を前にして、自らがただの個にすぎない。その事実を受け入れた諦めが否応なく含まれるものだ」

彼は顎に指をあてる。

「だが、貴方たちにはそれが無い。しかし…真理は必ず手に入ると驕っているわけでも



ない」

夫妻の目つきは変わらない。

「だから声をかけた。目をつけた」

彼の目にもまた、諦観が偏在していた。

「これが3つ目の理由であり、私があなた達に協力を要請する最大の理由ですよ」

## S

「儀式は2年後の予定ですが、準備にはそれ相応の時間が必要です。1週間以内には結論をいただきたい」

そう言って教授たちは帰っていった。

そう言えば隣にいたあの男、ボクたちが客間に入ってからは一切口を開かなかつたが何をしに来たのだろうか？

「天体科のロード………侮れないな」

客間に座ったまま、父親は唸った。

「あの男が言ったこと、本当だと思う？」

「あからさまな嘘は、言っていないと思う」

「でも、根源に興味がないって……仮にもロードよ？」

母の質問に父は首を振った。

「いや、あの男は根源を求めていないとは言っていない」

「え？でも第3魔法なんてどうでもいいって……あ」

母は何かに気付いた。

父もそれに同意するように頷く。

「あの男は第3魔法など、どうでもいいと言った。聖杯戦争は魂の物質化を目的として御三家に作られた儀式。あの男は聖杯戦争の当初の目的には興味がない」

「……なるほど。儀式による手段に興味がないだけで、目的は根源へと至ることってわけ」

「おそろくね。彼はアニメスフィア家が培ってきたアプローチに拘っているのだろう」

「じゃあ、私たち騙されたってことかしら？」

「そうともいえない」

父は手を組んで唸る。

「あの男の目的は根源だが、その過程で彼の言っていた冠位指定を果たす必要がある。

結果的に人類史の保障は行われるのだろう。だから「お前たちの悲願も叶う。つべこべ言わず協力しろ」と言っただろう」

「舐められてるわね」

「それが人々の幸福につながればいい」

「そうね」

「だが彼の冠位指定を成したところで、決して人々の幸福には繋がらないだろう」

「ええ。未来を保障し、今を生きる指針を示す。そこに愛は無いわ」

「あれは競争の激化を促す。その果てにあるのは格差だ」

「……………じゃあ、あの話は断るの？」

「いいや。彼に協力する意味はある」

意味、ね。

「外部からの刺激。とくにアニメスフィアの秘伝は私たちに新たな着想をもたらしてくれる可能性が大いにある」

「名家の魔術ですからね」

「私たちの技術などいくらでもくれてやっていい。それが、人々が幸福を得る対価だというなら安いものだ」

ほお。

彼らは狂っているが、その善性に対してはどこまでも真摯だ。

「それにその秘伝に、もし意味がなくなるとも……………」

二人は笑った。

「ちようどよかったわね。まさかあの子に達海と逆のアプローチをしていたことが功を奏すなんて」

「ああ。塞翁が馬とはいわないが、聖杯戦争に負けることはまずないだろう」

負けることはまずない？

「聖杯が得られれば大量の魔力を使うことができる。幻想の召喚も可能となるかもしれない」

「手元のものを使うのではなくて、呼び出す……………いいかもしれないわね、特に立花は親和性も高いし……………」

「ああ。……………僕たちにも新たな指針ができた。彼には協力するでしょう」

「ええ。聖杯は私たちに譲ってもらおうとしましょうか」

「あ、あのー！」

二人の会話が終わり、静寂が訪れかけていたところで達海は声を上げた。

両手を組み、緊張した面持ちで二人を見つめる。

……そういえばあの会談が終わったら、母親が達海の話の話を聞くと言っていたな。

「ごめんなさい！」

脈絡なく達海は両親に頭を下げた。

「ぼくのがんばりがたりなかつたから………まりよくがすくなかつたから、おとうさんとおかあさんのためになりませんでした。ごめんなさい！」

この客間に来て言おうとしていたことをこの子は大声で告げた。

「ぼく、もつとがんばるから！ いっぱいまりよくつくるから！ だから………」

涙目になっていたこの子の肩に母親は手を置いた。

達海を見つめる目は優しげだ。

お？ これはもしや………

「大丈夫よ。達海。あなたが悪いわけじゃないのよ」

父もまたこちらを見て告げた。

「ああ。達海。大丈夫だ。お前は何も心配しなくていい」

おお？

「これからはお前のお姉ちゃんがみんなのために頑張ってくれる」

「立花が頑張るから、大丈夫。達海は何もしなくて大丈夫よ」

知ってた。

ですよね。

なぜボクは一瞬でもこの二人に期待してしまったのか。

ともすれば優しさとは無関心の表れであると聞かすが、こういうことか。

関心のない相手には必要以上の労力をかけないもの。

それが結果的に優しさに見える、そういうわけだ。

よりひどくなっている。

これは……この子にはあまりにも……

しかしボクの想像とは違い、この子の顔は悲痛ではなく驚愕に動かされていた。

「おねえちゃん……？」

母親は笑った。

「そうよ。お姉ちゃんがみんなを幸せにしてくれるからね。いい子で待っていなさい」

その言葉を置いて二人は背を向けた。

「え………まって……おと……おかあ………さん……」

そして部屋を出ていった。

訪れる沈黙。

何一つ動かない。

この子の焦燥感だけを除いて。

「どうしよう……どうしよう……」

ん？

突き放されて悲しいわけじゃないのか？

どうしたんだい？君。

「どうしよう……」

何に困っているんだ、君は？

「このままじゃ、おねえちゃんがいたいになっちゃう……！」

ああ。なるほど。

あの二人、姉にも何かするみたいな言い草だったな。

いや……あの感じだと既に何かしてるのか……？

この子と逆のアプローチ、なんて言っていた気がするが。

なんにせよ、このままだと立花も達海の実験のように恐怖や痛みを度外視した何かを

やらされるのは想像に難くない。

それは確かに君が焦ることだな。

「どうすればいい？」

どうする、とはどういう意味だい？

「どうすればおねえちゃんをいたいにしなくていい？」

君の姉を両親の実験から遠ざけるにはどうすればってことかい？

うん。

正直、今の君じゃできることはない。

「え？」

腐つてもあの二人は時計塔の魔術師だよ？

確かに今の君の魔力量はそこらの魔術師を超えて余りあるけど、言ってしまうばそれだけだ。

刻印があるわけでもないし、魔術を覚えているわけでもない。

そんな君じゃ、両親は止められないよ。

魔力つてのはエネルギーであって、それを使うための術がなければ大して意味をなさない。

「そんな……………」

二人の興味を君に移すって方法もありだけど、あの感じじゃ厳しそうだしなあ。

「でも、それじゃ、おねえちゃんが……………」

「君は優しいんだな」

客間の扉から声が聞こえた。



達海がそちらを向く。

こいつは……………

「その中身で人の心配ができるなんて、大変すばらしい」

そこには先ほど帰ったはずの一人、アニメスフィアに連れられていた濃緑色のスーツを着た男が立っていた。

達海が目を見開く。

「おっと、すまない。私はちよつと忘れ物をしてしまつて、こちらに戻つてきたんだ」

「わすれもの……………?」

「ああ。私と似たようなヒトをさつき見てね。声をかけておこうかと」

達海は警戒するかのように数歩下がった。

その行動をボクは心の中で称賛する。

こいつはヤバイ。

あのアニメスフィアとかいう男も十分やばかったが、こいつはそういうレベルではない。  
い。

中身が人ではない。

「ああ。君たちには自己紹介がまだだった」

男は緑色のハットを右手でとり、こちらに軽く一礼した。

「私の名前はレフ・ライノール。さきほどマリスビリー・アニムスファイアが言っていたカ  
ルデアで顧問を務めている。といっても一介の学生すぎないのだけどね」